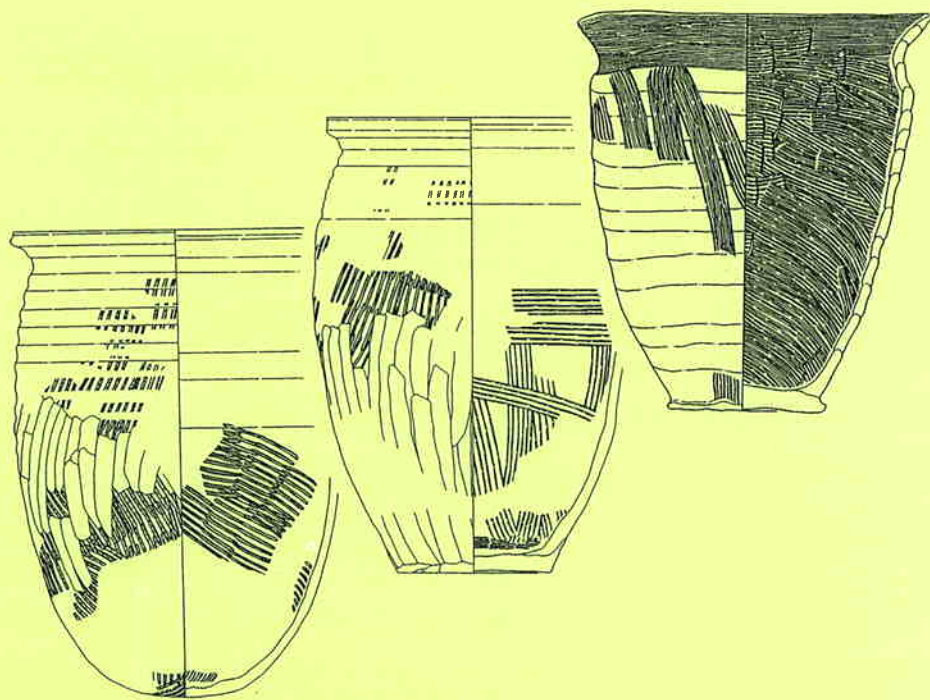


前野遺跡

— 浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ —



1999. 3

盛岡市・盛岡市教育委員会

前 野 遺 跡

— 浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ —

1999. 3

盛岡市・盛岡市教育委員会

前野遺跡－浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ－正誤表

頁・行	誤	正
79頁第62図右上	RD505(セクション図)	RD508
91頁34行	53は煙管の・・・	44は煙管の・・・
106頁29行	告褐色土を主体・・・	黒褐色土を主体・・・
125頁第91図	RI001・002	RI501・502
134頁第95図	ラサクマイ	ウサクマイ
135・136頁	北陸形甕・陸奥形甕	北陸型甕・陸奥型甕
第15図版(中段)	RB501掘立柱建物跡全景	RE501竪穴跡
第15図版(下段)	RB502掘立柱建物跡全景	RE502竪穴跡
第16図版(上段)	RB503掘立柱建物跡全景	RE503竪穴跡
第16図版(中段)	RB504	RE504
第16図版(下段)	RB506	RE506
第17図版(下段)	RE504	RD504



卷頭写真 1 RA106豎穴住居跡出土土器



卷頭写真 2 RA108豎穴住居跡出土土器

例 言

1. 本書は、盛岡市浅岸字前野に所在する前野遺跡平成7・8・9年度の発掘調査報告書である。
2. 本書は遺構および遺物の実測図など多くの資料の呈示を意図して、編集は盛岡市教育委員会文化課八木光則、似内啓邦、室野秀文、菊池与志和、津嶋知弘、三浦陽一、神原雄一郎、黒須靖之、藤村茂克、佐々木真史、平澤祐子が協議して行い、神原、八木、室野、藤村が執筆を担当した。なお、考察については個人の見解が含まれるため、末尾に執筆者名を明記した。
3. 遺構の平面位置は、平面直角座標X系を座標変換した調査座標で表示した。
4. 高さは標高値をそのまま使用している。
5. 土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1967小山正忠・竹原秀雄）を参考にした。
6. 遺構記号は次のとおりである。なお、奈良・平安時代の遺構番号は101～より、中・近世の遺構番号は501～としている。

	遺 構	記号	遺 構	記号	遺 構	記号	番 号
記 号	竪穴住居跡	RA	土 坑	RD	配石・集石	RH	古 代 101～
	建 物 跡	RB	竪 穴	RE	井 戸 跡	RI	
	柱 列 跡	RC	溝 跡	RG	遺物集中区	RP	中・近世 501～

7. 古代の土器の区分は、須恵器・あかやき土器・土師器にわけた。
8. 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市教育委員会で保管してある。

目 次

例	言
目	次
図	版 目 次
挿	図 目 次
表	目 次

I 調査経過

1. 調査経過	1
2. 前野遺跡の地形・地質	2
3. 周辺の遺跡	3
4. 調査体制	5

II 調査の内容

1. 平成7・8年度調査（第1・2・5次）	9
(1) 奈良・平安時代の遺構と遺物	10
(2) 中・近世の遺構と遺物	60
(3) 包含層および表土・攪乱の遺物	90
(4) まとめ	99
2. 平成9年度調査（第3・4・6次）	100
(1) 縄文時代・古代の遺構	103
(2) 中・近世の遺構	104
(3) まとめ	131

III 考 察

1. 古代の遺構・遺物	132
(1) 竪穴住居跡の検討	132
(2) 出土土器の検討	133
2. 中・近世の浅岸地区と遺跡	137
(1) 周辺の中世遺跡	137
(2) 中世の浅岸地区	140

報告書抄録

図版目次

- 第1図版 浅岸遺跡群全景
- 第2図版 第1・2次発掘調査区全景、第1・2次発掘調査区南西部全景
- 第3図版 RE101・102・103 竪穴跡全景
- 第4図版 RE105 竪穴跡、RA106 竪穴住居跡、かまど全景
- 第5図版 RA106 竪穴住居跡かまど煙道全景、かまど近景、かまど煙道遺物出土状況
- 第6図版 RA106 竪穴住居跡かまど上層断面、RA107 竪穴住居跡全景、かまど近景
- 第7図版 RA107 竪穴住居跡かまど検出状況、RA108 竪穴住居跡全景、かまど近景
- 第8図版 RA109 竪穴住居跡全景、土層断面、かまど検出状況
- 第9図版 RA109 竪穴住居跡かまど側面、かまど近景、かまど基底部検出状況
- 第10図版 RE110 竪穴跡全景、RA112 竪穴住居全景、かまど近景
- 第11図版 RE113・114 竪穴跡、RA115 竪穴住居全景
- 第12図版 RA116 竪穴住居跡全景、かまど近景、かまど断面
- 第13図版 RA116 竪穴住居跡かまど断面2、RB501 掘立柱建物跡全景
- 第14図版 RB501 掘立柱建物跡周溝土層断面、RB502・503 全景
- 第15図版 RB504 掘立柱建物跡、RE501・502 竪穴跡全景
- 第16図版 RE503・504・506 竪穴跡全景
- 第17図版 RE507・508 竪穴跡、RD504 土坑全景
- 第18図版 RD509・516 土坑、RG504・505 溝跡全景
- 第19図版 RG506 溝跡全景、南端・河道跡、調査区中央部ピット群
- 第20図版 RA106・108 竪穴住居跡出土遺物
- 第21図版 RA109・115 竪穴住居跡出土遺物
- 第22図版 RD516 土坑出土遺物
- 第23図版 第3次発掘調査区西部・北部全景
- 第24図版 第3次発掘調査区北西部全景
- 第25図版 第4次発掘調査区全景
- 第26図版 第6次発掘調査区全景
- 第27図版 第6次発掘調査区東部全景
- 第28図版 RG509 溝跡群全景
- 第29図版 RI501・502 井戸跡全景

挿図目次

第1図	前野遺跡の位置（1：50,000）	1
第2図	地形分類と周辺の遺跡分布	4
第3図	前野遺跡全体図	7・8
第4図	前野遺跡第1・2・5次調査区全体図	11・12
第5図	RE101 竪穴跡	13
第6図	RD101 土坑	14
第7図	RE101 竪穴跡、RD101 土坑出土土器	14
第8図	RE102 竪穴跡	16
第9図	RE102 竪穴跡出土遺物（1）	17
第10図	RE102 竪穴跡出土遺物（2）	18
第11図	RE103 竪穴跡	19
第12図	RE103 竪穴跡出土遺物	19
第13図	RE104 竪穴跡	20
第14図	RE105 竪穴跡	21
第15図	RE105 竪穴出土遺物	21
第16図	RA106 竪穴住居跡	24
第17図	RA106 竪穴住居跡土層断面	25
第18図	RA106 竪穴住居跡出土遺物（1）	26
第19図	RA106 竪穴住居跡出土遺物（2）	27
第20図	RA106 竪穴住居跡出土遺物（3）	28
第21図	RA106 竪穴住居跡出土遺物（4）	29
第22図	RA106 竪穴住居跡出土遺物（5）	30
第23図	RA106 竪穴住居跡出土遺物（6）	31
第24図	RA107 竪穴住居跡	32
第25図	RA107 竪穴住居跡出土遺物	33
第26図	RA108 竪穴住居跡	35
第27図	RA108 竪穴住居跡出土遺物（1）	37
第28図	RA108 竪穴住居跡出土遺物（2）	38
第29図	RA108 竪穴住居跡出土遺物（3）	39
第30図	RA108 竪穴住居跡出土遺物（4）	40
第31図	RA108 竪穴住居跡出土遺物（5）	41
第32図	RA109 竪穴住居跡	43
第33図	RA109 竪穴住居跡	44
第34図	RA109 竪穴住居跡出土遺物	45
第35図	RE110 竪穴跡	46

第36図	RE 1 1 1 豎穴跡	47
第37図	RE 1 1 1 豎穴跡出土遺物	48
第38図	RA 1 1 2 豎穴住居跡	49
第39図	RA 1 1 2 豎穴住居跡出土遺物	49
第40図	RE 1 1 3・1 1 4 豎穴跡	50
第41図	RE 1 1 3・1 1 4 豎穴跡出土遺物	51
第42図	RA 1 1 5 豎穴住居跡	53
第43図	RA 1 1 5 豎穴住居跡出土遺物(1)	54
第44図	RA 1 1 5 豎穴住居跡出土遺物(2)	55
第45図	RA 1 1 6 豎穴住居跡	57
第46図	RA 1 1 6 豎穴住居跡出土遺物	58
第47図	RA 1 1 7 豎穴住居跡	59
第48図	RB 5 0 1 掘立柱建物跡・周溝、RG 5 0 1 溝跡	61
第49図	RB 5 0 1 掘立柱建物跡・周溝、RG 5 0 1 溝跡土層断面	62
第50図	RB 5 0 1 掘立柱建物跡・周溝出土遺物	62
第51図	RB 5 0 2 掘立柱建物跡	63
第52図	RB 5 0 3 掘立柱建物跡	64
第53図	RB 5 0 4・5 0 5 掘立柱建物跡、RC 5 0 1 柱列跡	66
第54図	RE 5 0 1 豎穴跡	67
第55図	RE 5 0 2 豎穴跡	69
第56図	RE 5 0 3・5 0 4 豎穴跡、RD 5 0 1 土坑	71
第57図	RE 5 0 5 豎穴跡	72
第58図	RE 5 0 6 豎穴跡、RD 5 0 2 土坑	73
第59図	RE 5 0 7 豎穴跡、RD 5 0 3 土坑	75
第60図	RE 5 0 7 豎穴跡・ピット、RD 5 0 3 土坑土層断面	76
第61図	RE 5 0 8 豎穴跡、RD 5 0 4 土坑	77
第62図	RD 5 0 5・5 0 6・5 0 7・5 0 8・5 0 9・5 1 0 土坑	79
第63図	RD 5 1 1・5 1 2・5 1 3・5 1 4・5 1 5・5 1 6・5 1 7・5 1 8 土坑	81
第64図	RD 5 1 5・5 1 6 土坑出土遺物	82
第65図	RG 5 0 2・5 0 3 溝跡	84
第66図	RG 5 0 4・5 0 5 溝跡	85
第67図	RG 5 0 6 溝跡	86
第68図	RG 5 0 7・5 0 8 溝跡	87
第69図	ピット土層断面	89
第70図	遺物包含層・遺構外出土遺物(1)	92
第71図	遺物包含層・遺構外出土遺物(2)	93
第72図	遺物包含層・遺構外出土遺物(3)	94
第73図	前野遺跡第3・4・6次発掘調査全体図	101・102

第74図	RD 0 0 1 土坑	103
第75図	RG 5 0 9 ・ 5 1 0 溝跡群	104
第76図	RB 5 0 6 掘立柱建物跡	105
第77図	RB 5 0 7 掘立柱建物跡	107
第78図	RB 5 0 6 ・ 5 0 7 掘立柱建物跡出土遺物	107
第79図	RB 5 0 8 掘立柱建物跡	109
第80図	RB 5 0 8 掘立柱建物跡出土遺物	109
第81図	RB 5 0 9 ・ 5 1 0 掘立柱建物跡	111
第82図	RB 5 1 1 掘立柱建物跡	112
第83図	RB 5 1 2 掘立柱建物跡	113
第84図	RB 5 1 2 掘立柱建物跡出土遺物	114
第85図	RB 5 1 3 ・ 5 1 4 掘立柱建物跡、RC 5 0 2 ・ 5 0 3 柱列跡	116
第86図	RB 5 1 3 掘立柱建物跡、RC 5 0 2 柱列跡出土遺物	116
第87図	RD 5 1 9 ・ 5 2 0 ・ 5 2 1 ・ 5 2 2 ・ 5 2 3 ・ 5 2 4 ・ 5 2 5 土坑	119
第88図	RD 5 2 6 ・ 5 2 7 ・ 5 2 8 ・ 5 2 9 ・ 5 3 0 ・ 5 3 1 ・ 5 3 2 ・ 5 3 3 土坑	121
第89図	RD 5 3 4 ・ 5 3 5 ・ 5 3 6 ・ 5 3 7 土坑	124
第90図	RG 5 1 1 ・ 5 1 2 溝跡	124
第91図	RI 5 0 1 ・ 5 0 2 井戸跡	125
第92図	RD 5 2 3 ・ 5 2 6 ・ 5 2 7 土坑、RI 5 0 2 井戸跡出土遺物	126
第93図	第3・4・6次調査区ピット土層断面図	129
第94図	ピット出土遺物	130
第95図	土師器の地域差（9世紀）	134
第96図	落合遺跡の中世村落（中心部分）	138
第97図	浅岸周辺の中世遺跡	139

表 目 次

第1表	出土土器観察表（1）	95
第2表	出土土器観察表（2）	96
第3表	出土土器観察表（3）	97
第4表	出土土器観察表（4）	98

《遺物の表現について》

1. 土器

- a. 古代・中世の土器実測図は1／3スケールとし、鉄製品については1／2スケールとした。
- b. 挿図の配列については、器種ごととし、さらに須恵器・あかやき土器・土師器の順でまとめた。

☆遺構外出土遺物の挿図中の記号・番号は、出土地点及び出土層位を表す。

(例) I 4 - A 1, A₁

↓ ↓ ↓
※ 1 ※ 2 ※ 3

※ 1 調査座標原点 RX±0 RY±0 を起点として、X・Y 両軸を50m毎に区切る大グリットを設定し、X軸線上を西から東へA・B・C…W・X・Y、Y軸線上を北から南へ1・2・3…23・24・25と付し、北西隅のこれらアルファベットとアラビア数字の組合せを、大グリットの呼称とした(第3・4図)。

※ 2 大グリットを2m毎に細分割し、小グリットを設定し大グリットの呼称を再び用いた。よって、大グリット-小グリットという組合せで、遺物の平面出土地点を2m毎に表示した。

(例) I 4 - A 1 は RX-150 RY-100を北西隅とする2mグリットからの出土を示す。

※ 3 遺物の出土層位を表す。

が多数確認されたことから、周囲の微高地全域と平成8年度からの一部継続分を含む4,750㎡を4月7日～9月29日まで発掘調査を実施した（第3～6次調査）。検出された遺構は、中・近世の掘立柱建物跡9棟、土坑13基、井戸跡2基である。また、近代（昭和?）の墓坑が5基検出されている。

2. 前野遺跡周辺の地形・地質

地 形 盛岡市東部は地質構造上、北上山地の主要な境界となる早池峰構造体の西縁部にあたる。盛岡東部の早池峰構造体に属する山地は、高森山（626m）を中心とする高森山山地と、朝島山（607m）を中心とする朝島山山地の中起伏山地、さらに西に続く大日向山山地、岩山（341m）や大森山（381m）を含む建石山山地などの小起伏山地および四十四田丘陵で構成される。

地 質 基盤岩は輝緑凝灰岩からなる古生層が相当し、中野・川目地域を含む周辺地域では古生層に貫入する花崗閃緑岩が基盤岩となる。この地域においては風化した花崗閃緑岩（マサ土）や節理に沿って崩壊した花崗閃緑岩が切り通し・露頭などで見られる。

中津川上流域は、輝緑凝灰岩など所謂「グリーンタフ」地帯にあり、縞状のチャートを介在させている。小貝沢地区付近ではどのような地層に含まれるのか明らかではないが頁岩が採集されている。中津川・米内川合流点付近に位置する薬師山・浅岸山（八木沢山）・永福寺山では局地的に蛇紋岩・チャートの分布がみられ、「ノロキ石」と地元で呼ばれる軟質の蛇紋岩が山麓及び斜面で多数採集することができる。なお、柿ノ木平遺跡第21次発掘調査（平成10年度）では縄文時代中期の竪穴住居跡が数十棟確認され、内1棟の床面・埋土より軟質の蛇紋岩の原石・石製品の半加工品が出土している。

中津川・米内川の合流点付近から北上川との合流点に至る下流域には狭い沖積段丘が形成される。中津川・米内川合流点付近においては幾度となく河道が移動したために、段丘が削られて中州状の微高地が形成される。落合・大塚・前野遺跡は前記した微高地上に立地し、柿ノ木平遺跡・薬師社脇遺跡はさらに古い中位段丘面上に立地する。柿ノ木平遺跡が立地する段丘面は地表下約1m程まで礫層が厚く堆積し、礫層上には秋田駒ヶ岳噴出起源の火山灰（小岩井浮石）が薄く堆積する。火山灰上にはスコリア粒を含む暗褐色土が堆積し、さらに上部に黒褐色土が堆積する。

前野遺跡が立地する微高地では、砂礫・シルトが交互に堆積する層が地表下約8mまで達していることが確認され、最下層の砂礫層より多量の縄文土器が出土している。出土した土器は、縄文中期の大木8a～8b式で、他の時期の土器は含まないことから縄文中期中葉～後葉にかけてのほぼ単独時期の層であることが確認された。

これらの遺物は、過去における中津川の氾濫によって、東に接する柿ノ木平遺跡より流出したものと考えられる。このことから当時、中津川・米内川合流点付近においては中位段丘から見下ろされる氾濫源が広がっていたものと想定される。

3. 周辺の遺跡

米内川流域 前野遺跡を含む中津川流域・小起伏山地末端の丘陵地には数多くの遺跡が分布している。中津川に合流する米内川は濁川とも呼ばれ、流域の大志田、畑、盲沢、上米内、中米内、豆門地区には流路に沿う小規模な沖積段丘が見られる。

米内川流域には多数の縄文～近世遺跡がある。縄文時代早期前葉の遺跡では、盲沢・向館・一本松熊ノ沢遺跡があり、少量ではあるが上記した遺跡において日計式押型文土器が出土している。

一本松熊ノ沢遺跡は1967年に発掘調査が実施されており（草間、吉田、武田1968年）、押型文土器の他に白浜式・寺ノ沢式に類似する貝殻文土器が出土している。

縄文時代前期の遺跡では、米内川上流域に位置する畑遺跡で、大木2式を伴う堅穴住居跡が確認されている。遺構を伴うものではないが、上米内遺跡に隣接する向館遺跡より大木4式が、畑井野遺跡で大木6式が出土している。

中期になると遺跡数が増加し、規模が大きくなる傾向がある。代表的な遺跡として、畑井野遺跡・上米内遺跡・盲沢遺跡・大豆門遺跡があり、中期初頭～前葉を主体とする遺跡として畑井野遺跡・大豆門遺跡があり、中葉～末葉にかけての遺跡として上米内遺跡・盲沢遺跡がある。立地の面から見て特徴的なのは、中期初頭～前葉の遺跡が丘陵頂部に立地することに対し、中葉～末葉にかけての遺跡は前述した米内川に沿う小規模な沖積段丘上に立地することが多い。

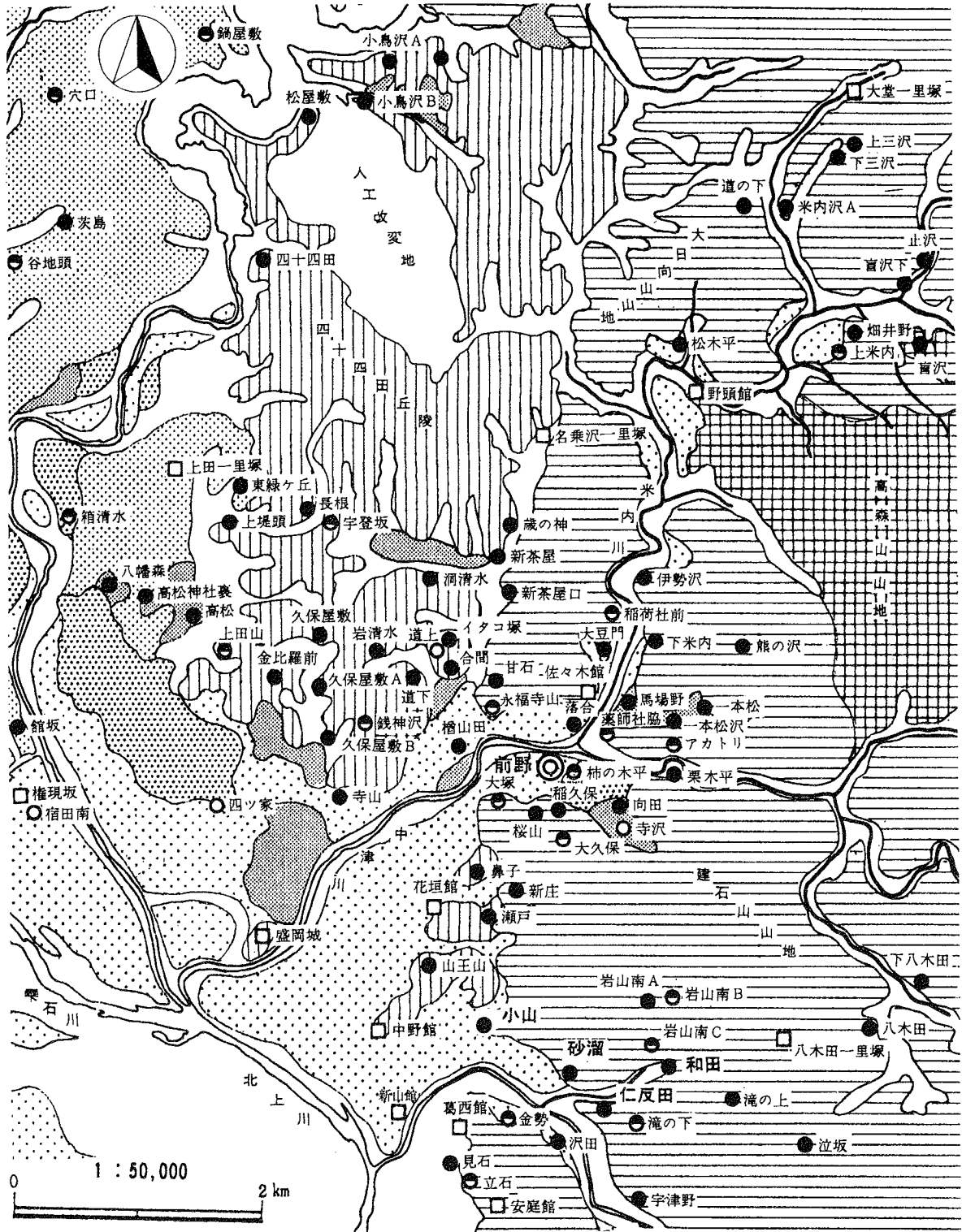
中津川流域 中津川は澄川とも呼ばれ、米内川と合流するまで溪谷が続き、浅岸、矢倉、小貝沢、滝の沢、綱取に小規模な沖積段丘を形成するのみである。一方で、中津川上流域では激しい水流によって岩塊が浸食され、小規模な洞穴・岩陰が多数形成されている。主な洞穴・岩陰遺跡として中津川岩陰・バクチ穴洞穴があり、中津川岩陰遺跡からは縄文時代の土器片が採集されている。その他にも急崖の斜面に洞口が確認されており、未確認の洞穴・岩陰遺跡が多数存在するものと思われる。









中津川流域において遺跡が増加するのは、米内川との合流点付近からであり、主な遺跡として柿ノ木平遺跡・前野遺跡・大塚遺跡・薬師社脇遺跡・落合遺跡・稲久保遺跡がある。

薬師社脇遺跡からは縄文時代早期～後期、平安時代の遺構・遺物が確認されており、縄文時代早期中葉の寺ノ沢式、中～後葉にかけての大寺式などの貝殻文土器群、9世紀の須恵器・あかやき土器・土師器が多量に出土している。特に、9世紀の所産と思われる在地土器に伴い、北陸型の長胴甕片が出土していることが興味深い。前野遺跡との関連性を考えるうえで重要である。

柿ノ木平遺跡は中津川、米内川の合流点を望む段丘上に位置し、縄文時代早期～近世にかけての大規模遺跡である。昭和50年以降、宅地造成・個人住宅建設に伴う発掘調査が断続的に実施され、平成8年度より、浅岸地区区画整理事業に伴う事前の発掘調査が継続して実施されている。

大塚遺跡は、浅岸地区区画整理事業に伴い平成元年から平成5年にかけて調査を実施した。調査の結果、縄文時代晩期（大洞C₂～A式）の小規模集落、古代～近世に至る遺構・遺物が検出されている。



- | | | | | | | |
|---|-------|---|------------------|---|-----------------|-----------|
|  | 中起伏山地 |  | 扇状地および
崖錐性扇状地 |  | 砂礫段丘Ⅲ
(低位段丘) | ● 縄文時代 |
|  | 小起伏山地 |  | 火山灰砂台地 |  | 谷底平野および
氾濫平野 | ● 縄文時代～古代 |
|  | 丘陵地Ⅰ |  | 砂礫段丘Ⅱ
(中位段丘) | | | ○ 古代 |
| | | | | | | □ 中世・近世 |
| | | | | | | ◎ 古代～近世 |

第2図 地形分類と周辺の遺跡分布

4. 調査体制

調査体制 浅岸地区区画整理事業に関連する発掘調査は、文化課、区画整理課の両課で対応した。調査に関連する予算事務に関しては区画整理課業務係、地権者交渉・調査日程の調整については同課補償係、調査と造成に係る工程の調整は同課工務係が文化課との協議を持って行い、埋蔵文化財発掘調査、調査報告書の作成・刊行については文化課が担当した。

発掘調査体制については次のとおりである。

<盛岡市開発部区画整理課>

向井田昌志、金子 均、藤原 利博（～9年度）、工藤 精一、中村 稔、吉田 薫、西舘 哲夫（8年度）、石川 雅章、国久 重徳、吉田 一彦、岩崎 祐幸、太田 博、高橋みどり、佐藤 明彦、近藤 春彦、北田 雅浩、川島 明、畠山 俊明（～8年度）、百岡 貴彦、大志田 博

<盛岡市教育委員会文化課>

佐藤 勝征（～9年度）、照井 紀典（10年度）、大崎 琢夫、菊地 誠、阿部 光雄（8年度）、亀山 助正、佐藤 和男（～7年度）、八木 光則、千田 和文、似内 啓邦、室野 秀文、三浦 光男、菊池与志和、津嶋 知弘、三浦 陽一、神原雄一郎、黒須 靖之、藤村 茂克、阿部 徳乃、野口 律子、武田 良夫、仁杉 幸子、佐々木真史、平澤 祐子

また、調査の実施及び整理にあたり下記の方々より多大な御援助と御協力を賜った。記して謝意を表する（五十音順、敬称略）。

<地権者・調査協力者>

阿部 和平、上村 喜藏、上村 清、上村 平吉、上村 仁藏、小野寺好江、大森 卓、大森 達、川原初五郎、川原 圭三、小林 博、小林 興藏、佐々木市太郎、齊藤 幸夫、鈴木 春雄、高瀬 賢悦、長岡勘次郎、長岡 敏、長岡 晴治、長岡 弘、長岡文次郎、長岡 守、堀田 憲治、村井 ウメ、吉村 栄吉、吉村 勇、吉田 博

<発掘調査・室内整理作業>

芦垣 直樹、池田 正子、伊藤 大助、岩根 陽子、上村百合子、内山 陽子、遠藤ユキエ、大久保町子、大鹿ミヨ子、大森 サナ、片島智恵子、鹿野奈保美、加納 和子、鎌田アエ子、川村久美子、菊地 幸子、菊池 泰乃、菊池 武、菊池美枝子、菊池 玲子、北口 智里、北村 尚江、久慈 玲子、蔵本ヤエ子、小林 英子、小林 勢子、小林 ヤヲ、小平 信子、小松 愛子、斎藤 正二、佐々木幸子、佐々木紀子、佐々木泰子、佐藤 和子、佐藤 弘、佐藤美智子、沢田 紹男、四戸 孝丸、柴田久美子、柴内美智子、下平喜代美、庄治 民子、須賀とよ子、千田 瑞子、高橋 弘子、武田美智恵、館野 民子、玉井真由美、千葉留理子、栃澤 等、長岡 ミエ、中澤 暁子、永沼 光子、中野 ケイ、中島 京子、新村 勝雄、引木 宇吉、日野杉節子、平野 淑子、平野 祐子、深野 章、藤澤 明子、藤田 友子、

藤村まゆみ、藤原 政人、細田 省三、前島多栄子、三浦千鶴子、水野 彰子、村山伊津子、
百岡 峰子、明通 スミ、矢羽々妙子、山口 祐樹、山崎 吉見、結城ひろみ、吉田 叶子、
吉田 貴美、吉田 君子、吉田小太郎、吉田さへ子、吉田 寿吉、吉田 フミ、吉田ミツエ、
吉田 雄助、渡辺 博子、渡辺美智子

〔富山大学学生〕佐々木亮二〔岩手大学学生〕門嶋 知二、安藤稀環子、加賀谷祐子
〔北見工業大学学生〕級木 幸雄〔南山大学学生〕久保田敦子

<御指導・御助言>

相原 康二（岩手県立博物館）、井上 雅孝（滝沢村教育委員会）、宇部 則保（八戸市教育委員会）、及川 司（平泉町教育委員会）、鎌田 勉（岩手県埋蔵文化財センター）、桐生 正一（滝沢村教育委員会）、日下 和寿（岩手県立博物館）、工藤 雅樹（福島大学）、坂井 秀弥（文化庁）、杉本 良（北上市教育委員会）、高木 晃（岩手県埋蔵文化財センター）、高瀬 克範（北海道大学）、竹下 将男（宮古市教育委員会）、西野 修（矢巾町教育委員会）、樋口 知志（岩手大学）、星 雅之（岩手県埋蔵文化財センター）、本澤 慎輔（平泉町教育委員会）、三浦 謙一（岩手県立博物館）、宮 宏明（北海学園大学）、八重樫忠郎（平泉町教育委員会）



第3図 前野遺跡全体図

Ⅱ. 調査の内容

1. 平成7・8年度調査(第1・2・5次)

位 置 平成7・8年度調査区は、平成7年度に範囲確認された遺跡全域を含む。遺跡南・西部については範囲確認以前に区画整理事業に伴う造成工事によって削平されており、正確な遺跡範囲は不明である。調査面積は6,600㎡で、平成7年度は11月14日～12月21日にかけて遺跡南西部1,100㎡を調査し、平成8年度は平成7年度調査区を含む5,770㎡の調査を実施した。調査期間は4月8日～9月9日・12月19～21日である。また、大グリッドI4区南半部については平成9年度まで調査を継続したが、遺構の相互関係を重視し、事実報告は平成7・8年度調査分に含ませた。

検出遺構 検出された遺構は、奈良時代の竪穴1棟(RE101)、土坑1基(RD101)、平安時代の竪穴住居跡8棟(RA106～109, 112, 115～117)、竪穴8棟(RE102～105, 110, 111, 113, 114)、中世の掘立柱建物跡5棟(RB501～505)、柱列跡1条(RC501)、竪穴7棟(RE501～507)、中・近世の土坑18基(RD501～518)、溝跡8条(RG501～508)、ピット246口(P1～)である。

検出状況 前野遺跡は、表土が円礫を多量に含む黒～褐色土(Ia層)、表土下に水成堆積による円礫層(A層)、砂礫シルト層(B層)、褐色シルト(C層)、粘質のある褐色シルト層(D層)が堆積しており、部分的ではあるが、B・C層間に薄い黒色土層が介在する箇所も確認されている。遺構検出については褐色シルト層上面(C層)で行われた。

奈良・平安時代の竪穴住居跡、竪穴であるRA107～RE114、116の内部にはA・B層に相当する円礫・砂礫シルトが純粋な層として堆積している。遺構内外の砂礫シルト層(B層)、褐色シルト層(C層)からは多くの須恵器・あかやき土器・土師器などの土器片が混入しており、河川の氾濫・増水によって奈良・平安時代の生活面が流され、生成された層である可能性がある。上記した礫層の年代であるが、RA106・107・112・116竪穴住居では、床面付近まで到達し、壁際の崩壊土以外の堆積土が見られないことから、居住時もしくは廃絶後まもなく水害にあったことが考えられる。また、上記した遺構埋土上部中央には転石と考えられる0.6cm前後の円礫が多量に混入していることがあることから、住居が掘り込まれていた面の窪地が幾度か河床面となっていたことが考えられる。

中世の遺構内には礫が混入する黒色土が堆積しており、B層上面より掘り込まれたものが大部分と考えられる。中世(12～13世紀)の建物跡であるRB501の周溝内にも自然堆積による黒色土が堆積しているが、検出面では円礫を含む砂礫層で覆われた箇所が見られた。

なお、褐色シルト層(C層)下はシルト層・礫層による互層が続き、地表下約8m付近では多量の縄文時代中期土器片が混入する礫層が確認されている。

(1) 奈良・平安時代の遺構と遺物

縄文・弥生・続縄文時代

遺物 縄文時代の遺物は調査区全域より出土しているが全て磨滅しているものである。出土層位も一定したものではない。しかし、地表下約8mの砂礫層にも縄文時代の遺物が含まれることから、前野地区に集落が形成される以前から水害が多発する場所であったのであろう。前野遺跡に東接する柿ノ木平遺跡は、昭和50年以來からの調査によって中津川・米内川の合流点を望む段丘上に縄文時代中期～後期にかけて大規模な集落を形成していたことが明らかになっている。遺構群は、現在の段丘崖まで広がっており、崖線上にある遺構の多くは河川による浸食によって削られており、遺物などは、おそらく前野遺跡の立地する沖積地に流出したのであろう。

弥生時代・続縄文時代の遺物は極めて僅少ではあるが出土している。全て磨滅しており、流出してきた遺物であることが推測される。出土している遺物は、弥生時代前期の砂沢式・後期の赤穴式、続縄文時代の後北C₂式土器である。

奈良時代

遺構・遺物 奈良時代と思われる遺構はRE101 堅穴、RD101 土坑である。また、遺構外ではあるがI3-E・Fグリッド周辺より集中して当該時期の土師器が出土している。遺物は主にC層より出土したもので、I3-E・Fグリッド周辺において入念な遺構検出作業をおこなったものの明確な遺構は発見されなかった。しかし、過去において堅穴住居などの遺構が本来は存在していたが、増水など自然災害により破壊され床面のみ残存していた可能性はある。

平安時代

堅穴住居 奈良・平安時代の遺構は北東-南西にかけて延びる微高地上に分布し、特に調査区中央部付近に堅穴住居・堅穴が集中する住居域が形成される。検出された堅穴住居のかまどは石組みによるものが多く、かまどの位置はRA106・107・116が南東壁、RA109・112・115が東壁、RA117が北壁、RA108が南壁に設けられる。

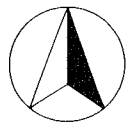
柱穴をもつ住居はRA106・109・116、RE110の4棟で、これらの堅穴住居は一辺が4.5m以上あり、前野遺跡では大形の部類に入る住居にのみ確認された。柱間は一間×一間の正方形で、上部構造物を支える支柱穴と考えられる。

小鍛冶 住居域から約30m隔てた南西部ではRE102～105 堅穴が位置し、RE102・105からは多量の碗形滓・鍛造剥片が出土しており、小鍛冶を行う施設であった可能性が考えられる。

RE102・105 堅穴の床面は粗い砂層であるため、小鍛冶に関連する明確な地床炉は確認できなかった。

床面には40cm前後の礫が置かれ、礫の周囲より多量の鍛造剥片が出土している。ファイゴの羽口、碗形滓も出土するが、出土状況に規則性は見られない。

H 3



I 3

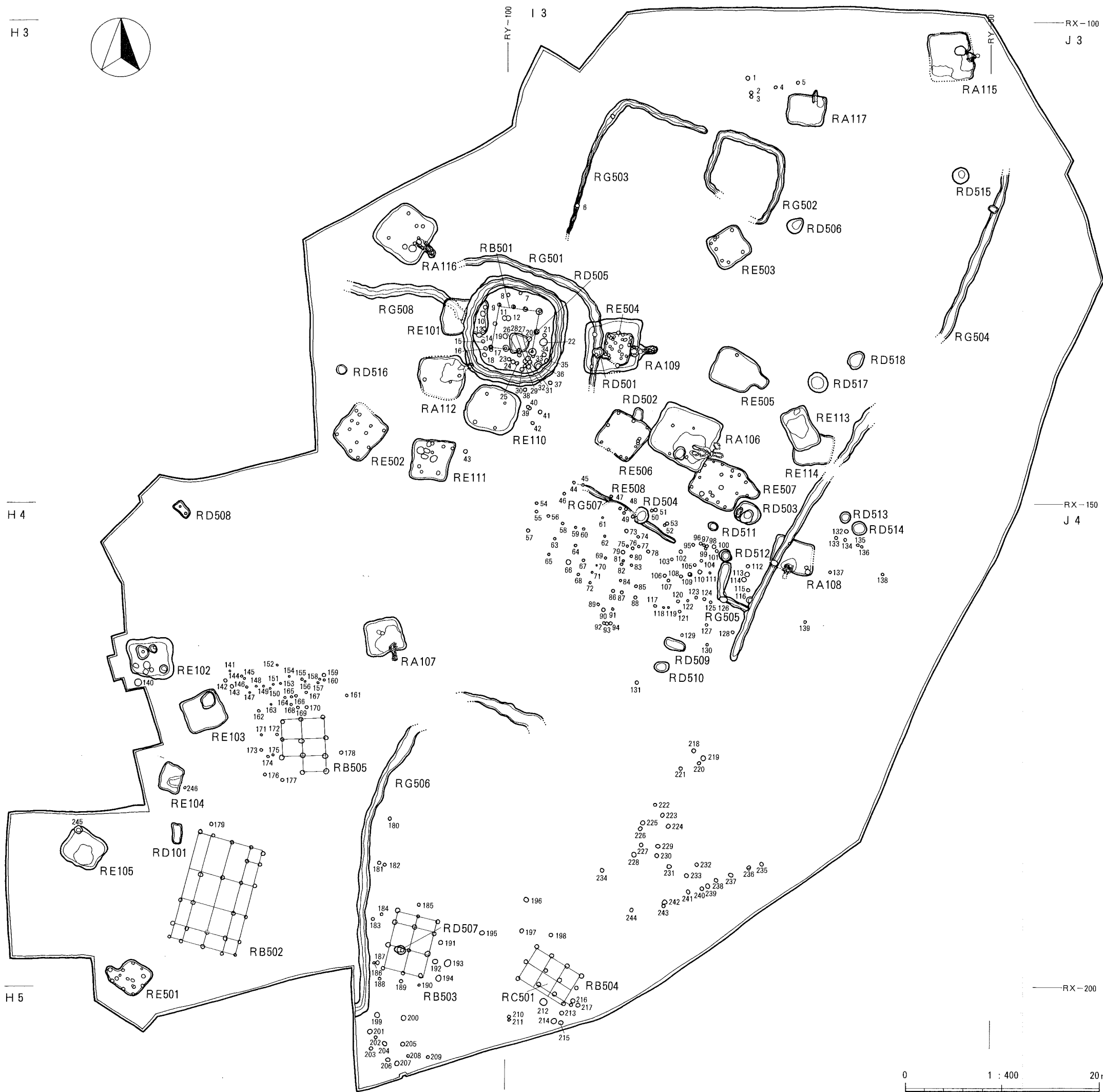
RX-100
J 3

H 4

RX-150
J 4

H 5

RX-200



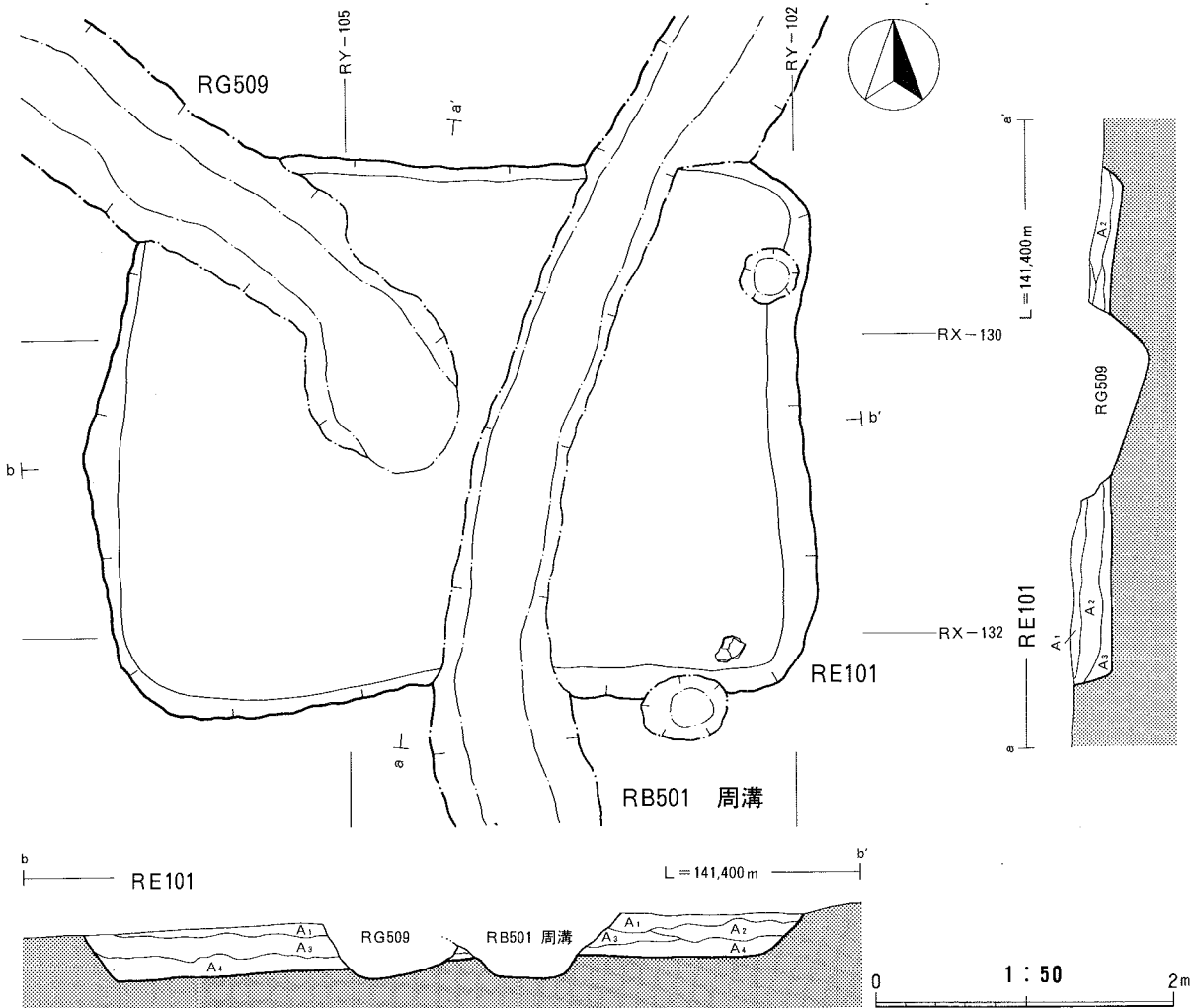
第4図 前野遺跡第1・2・5次調査区全体図

RE101 竖穴跡 (第5・7図)

位置 調査区中央 平面形 方形 主軸方向 N2°W
 規模 東-西 上端4.81m・下端4.31m、南-北 上端3.46m・下端3.25m
 重複関係 RG509溝跡、RB501建物跡周溝、P9・14に切られる。
 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層
 埋土 埋土はシルトを主体とする自然堆積層(A層)である。A層は4層に細分され、A₁層は粗い砂粒・小円礫を、A₄層には少量の炭化物が含まれる。
 壁の状態 検出面から床面までの深さは0.20~0.25mで、外傾して立ち上がる。
 床の状態 ほぼ平坦
 遺物の出土状況 竖穴床面南東隅より土師器甕(第7図1)が出土している。

出土遺物(第7図1)

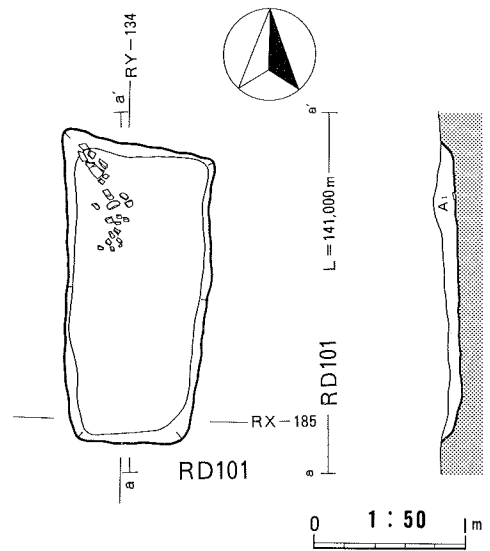
1は床面より出土した土師器甕である。口縁部から体部上半を欠損しており、残存高16.1cm、体部最大径15.8cm、底径6.5cmをはかる。器面調整は体部外面がヘラミガキ調整、体部下端から底面にかけてヘラケズリ調整を施す。内面はヘラナデを施す。



第5図 RE101 竖穴跡

RD101土坑 (第6・7図)

位置 調査区南西
 平面形 長方形
 規模 南-北 上端1.98m・下端1.81m、
 東-西 上端0.98m・下端0.84m
 重複関係 なし
 掘込面 削平
 主軸方向 N2°W
 検出面 円礫を含む褐色シルト層
 埋土 シルトによる単層 (A1層) である。
 壁の状態 検出面から底面までの深さは0.09~0.12mで、
 外傾して立ち上がる。

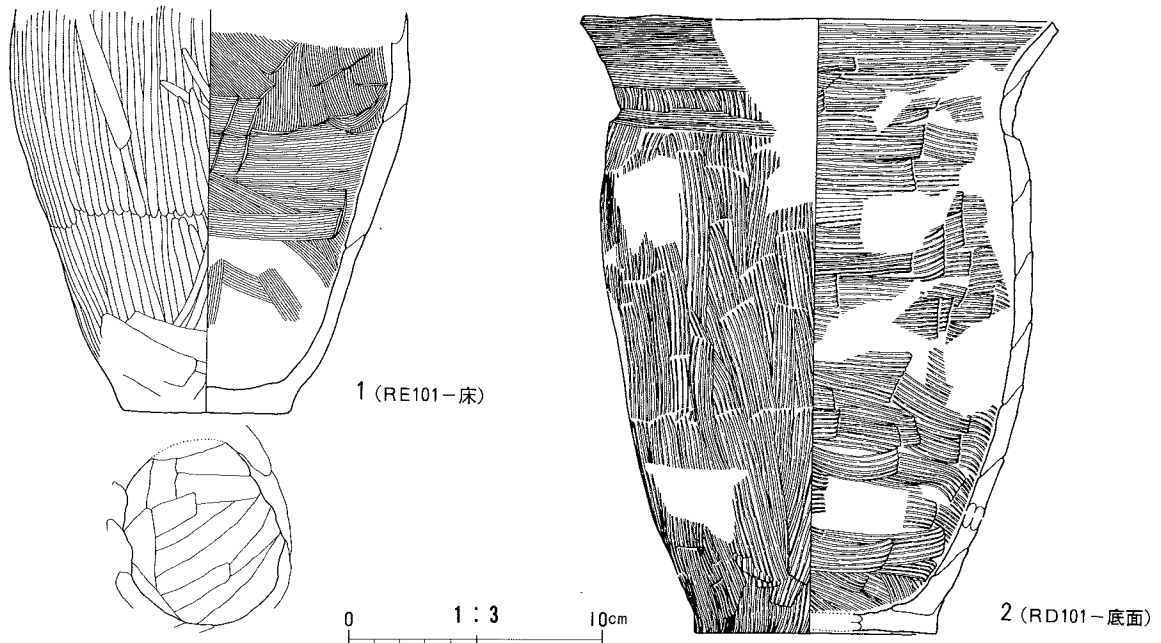


第6図 RD101土坑

底の状態 ほぼ平坦
 遺物の出土状況 土坑北西隅より土師器甕 (第7図2) が
 出土している。

出土遺物 (第7図2)

2は土師器甕である。器高24.4cm、口径18.9cm、底径9.6cmをはかり、最大径を口縁部に持つ。口縁部は外反しながら大きく開き、頸部に段を有する。器面調整は、内外面ともにハケメを施した後、口縁部にヨコナデを施す。



第7図 RE101 堅穴跡・RD101土坑出土土器

RE102 竪穴跡 (第8・9・10図)

位置 調査区南西 平面形 不整形 主軸方向 W2°S
規模 南-北 上端3.31~4.25m・下端2.98~3.34m、東-西 上端4.53~4.38m・下端3.65~3.79m
重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 褐色シルト層

埋土 埋土はA~F層の6層に大別され、各層はさらに細分される。A層-黒褐色土を主体に2層に細分される。B層-白色火山灰を多量に含む黒褐色土。白色火山灰の含有量によって3層に細分され、B₁層に最も多量に白色火山灰が含まれる。C層-シルト・砂礫を多量に含む黒褐色土、D層(P2埋土)-焼土を含むシルトと黒褐色土の混合土、E層-黒褐色土、F層-焼土・炭化物・シルトを含む褐色土である。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.33~0.21mで、壁の立ち上がりは一定せず、西壁・南壁西辺は直立ぎみに外傾するが、北壁・東壁・南壁東辺は緩やかに外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦。南西壁下付近に堅く締まる面(褐色シルト)が2.70m×1.54mの範囲で広がるが、その他は砂層を直接床面としており、締まりがなく軟らかな面である。床面全体に薄く焼土粒・炭化物が分布し、焼成された粘土塊が集中する部分もあった。

ピット P1~6が検出されている。P1・2は柱痕跡?を残すピットで、P2の埋土からは少量の鉄滓が出土しているほか、細片となったファイゴ片が出土している。

焼土 南壁下中央付近より焼土が確認されている。規模は0.50m前後で、不整形な形状である。焼土内からは鍛造剥片が集中して検出されている。地床炉の可能性を持つ。

遺物の出土状況 竪穴中央よりやや東から平坦な面を持つ礫が検出されており、周囲からは鍛造剥片が検出されたほか、平面図に図示されなかったが刀子(第9図4)が礫の西側から接した状態で出土している。

出土遺物(第9図1~4、第10図5)

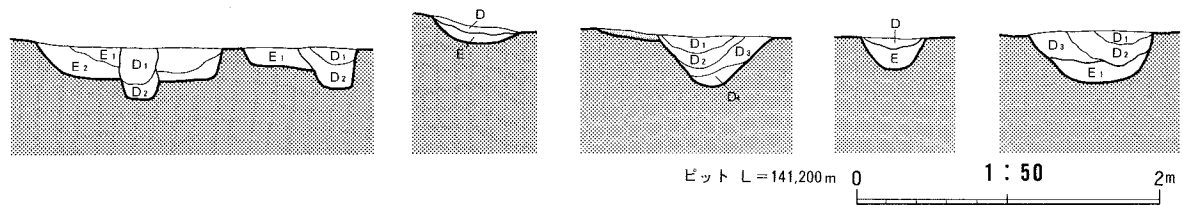
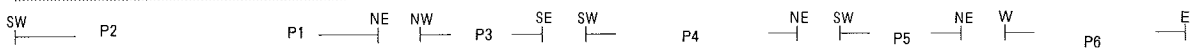
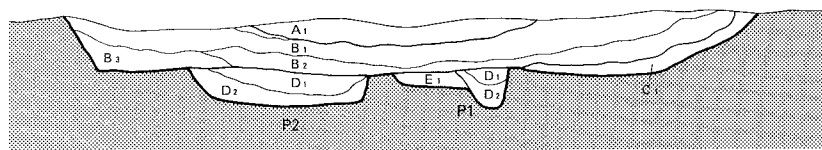
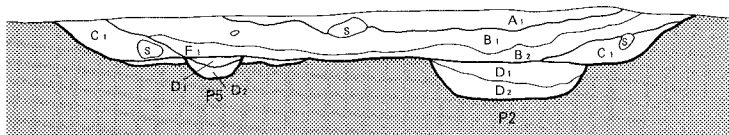
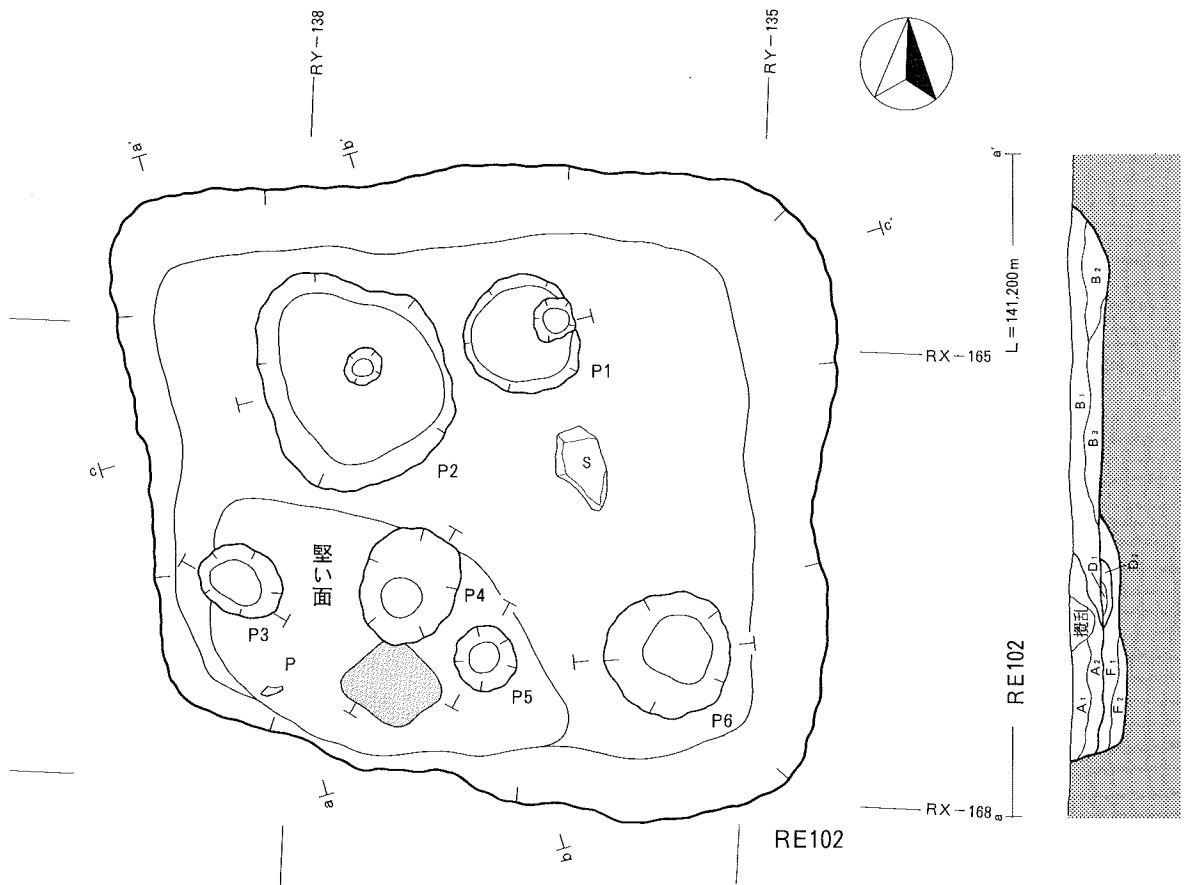
杯 1は口縁部を欠損したあかやき土器杯である。底部は、回転糸切後に体部下端から底面に手持ちのヘラケズリ調整を施すものである。2は体部下半から底部を欠損した土師器小形甕である。器面調整は口縁部が内外面ともヨコナデ、体部は外面がヘラケズリ調整、内面がヘラナデを施す。

羽口 3は一端が欠損するファイゴの羽口である。残存長11.7cm、幅6.1~7.5cm、孔径2.0~2.7cmをはかる。胎土には5mm程の砂礫が多量に含まれており、焼成は不良で全体的に脆い。

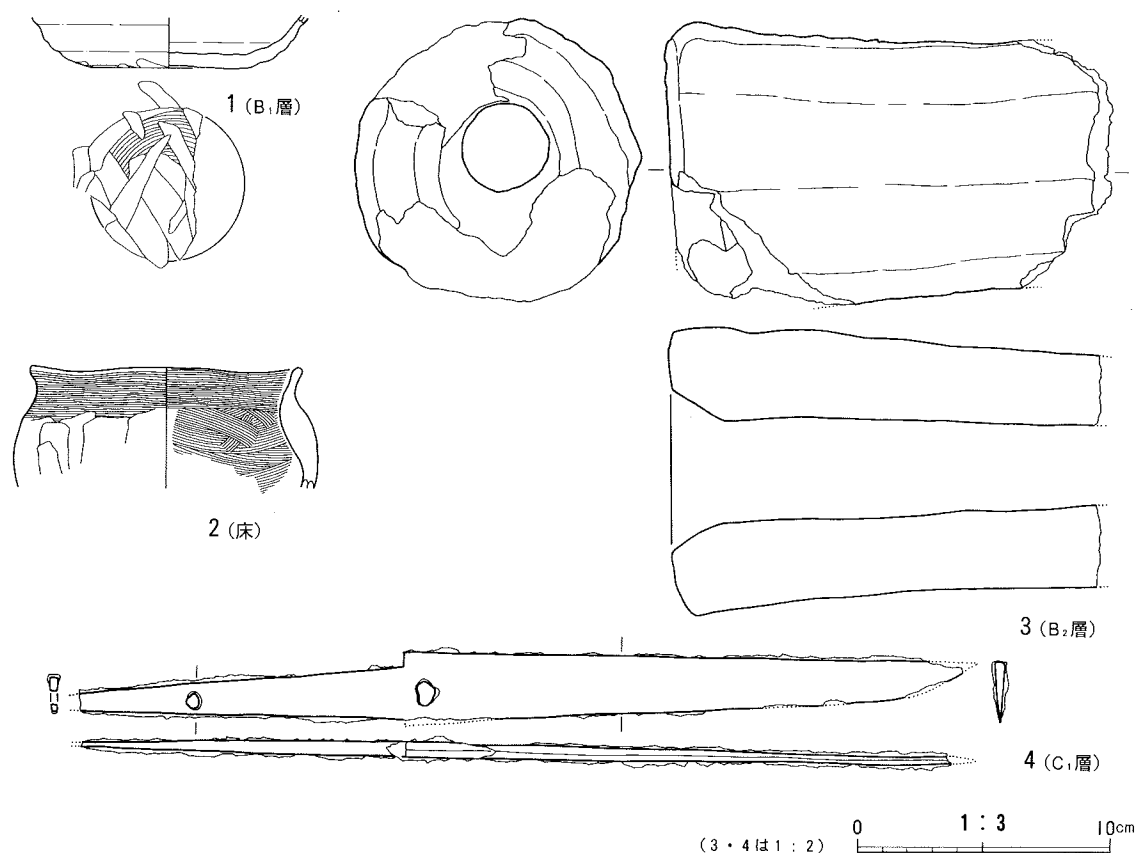
鉄製品 4は刀子で、残存長23.0cm、厚さ0.1~0.4cmをはかり、茎に目釘穴が2つ空いている。切先と茎の先端が欠損する。

石製品 5は溶岩質安山岩製の砥石で、4面に使用が認められ、深い切創痕と磨面が観察される。P4埋土より出土している。

鉄滓 図示されていないが、床面および埋土下位、特に焼土付近より多量の鉄滓が出土している。直径約12cm前後の碗形滓が3点出土しているほか、不整形な形状を呈した鉄滓が多量に出土している。



第8図 RE102 竪穴跡



第9図 RE 102 竪穴跡出土遺物 (1)

RE 103 竪穴跡 (第11・12図)

位置 調査区南西 平面形 方形

主軸方向 N23° W

規模 南-北 上端3.54~3.87m・下端3.31~3.50m、東-西 上端3.98~4.10m・下端3.58~3.82m

重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 砂礫を含むシルト層上面

埋土 A・B層に大別され、B層は2層に細別される。A層-円礫を多量に含むシルト、B層-炭化物を少量含むシルトである。

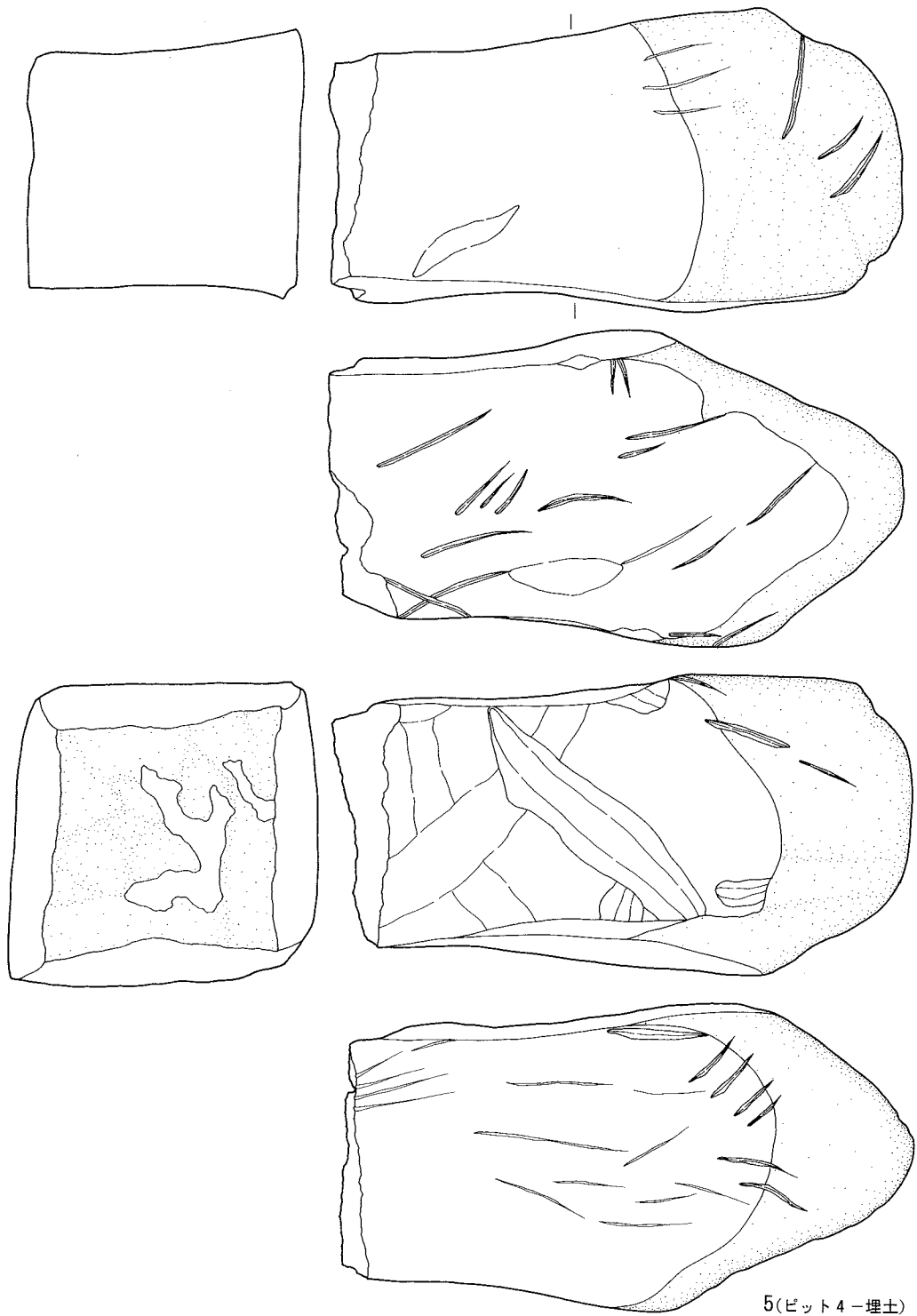
壁の状態 検出面から床面までの深さは0.08~0.12mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦

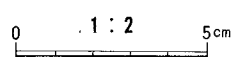
ピット P1が検出されている。深さ0.11mをはかる。

遺物の出土状況 竪穴中央付近より正立した状態で須恵器坏 (第11図1) が床面より出土している。

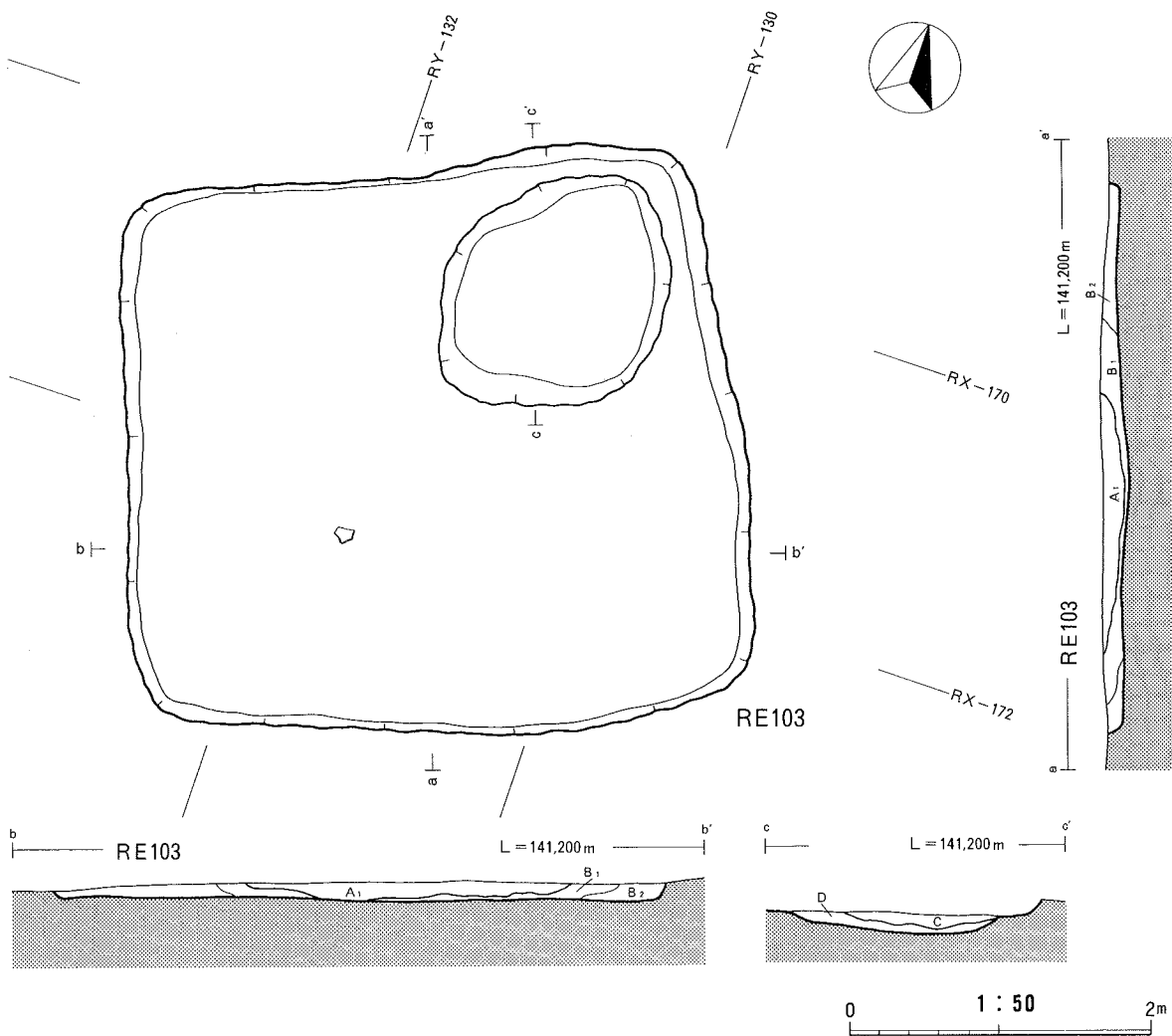
出土遺物 (第12図1) 1は糸切無調整の須恵器坏である。



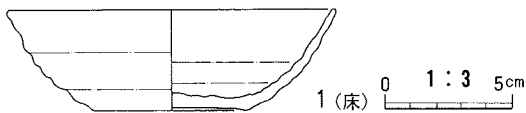
5(ビット4-埋土)



第10図 RE102 竪穴跡・出土遺物(2)



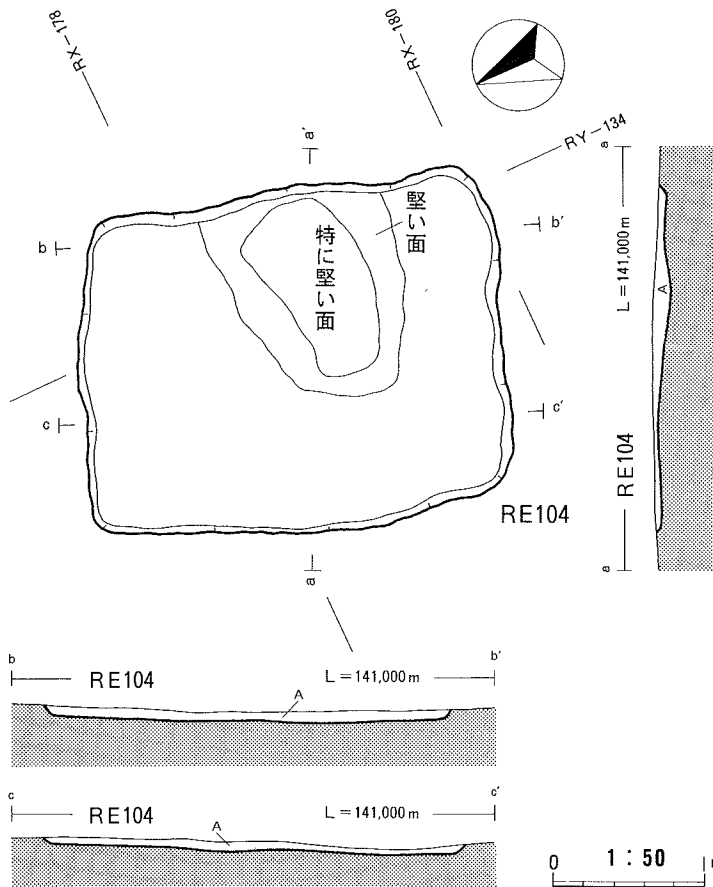
第11図 RE103 竪穴跡



第12図 RE103 竪穴跡出土遺物

RE104 竪穴跡 (第13図)

位置 調査区南西 平面形 方形 主軸方向 N19° E
 規模 南-北 上端2.82m・下端2.61m、東-西 上端2.32m・下端2.14m
 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 砂礫を含むシルト層上面
 埋土 白色火山灰を含む黒褐色土
 壁の状態 深さは0.06~0.10mをはかり、外傾して立ち上がる。
 床の状態 ほぼ平坦で、東壁中央付近に堅い面が1.31m×1.12mの範囲で拡がる。
 出土遺物 図示していないが土師器甕小片、鉄滓が少量出土している。



第13図 RE104 堅穴跡

RE105 堅穴跡 (第14・15図)

位置 調査区南西
 平面形 方形
 主軸方向 N32° E
 規模 北東-南西 上端3.52m・
 下端・3.11m、北西-南東
 上端4.02m・3.53m
 重複関係 P245に切られる
 掘込面 削平
 検出面 褐色シルト層上面
 埋土 A・B層に大別され、さら
 さらに各層は2層に細別される。

A層-粒~塊状の白色火山
 灰を含む黒褐色土。
 B層-微量の白色火山灰・
 炭化物を含む黒褐色土。

壁の状態 深さは0.22~0.25mをは
 かり、緩やかに外傾して立
 ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦で、中央南側に
 堅い面が広がる。床面中央
 付近で0.41×0.21mの角礫
 が検出されている。

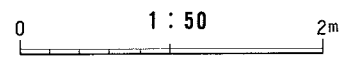
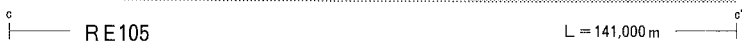
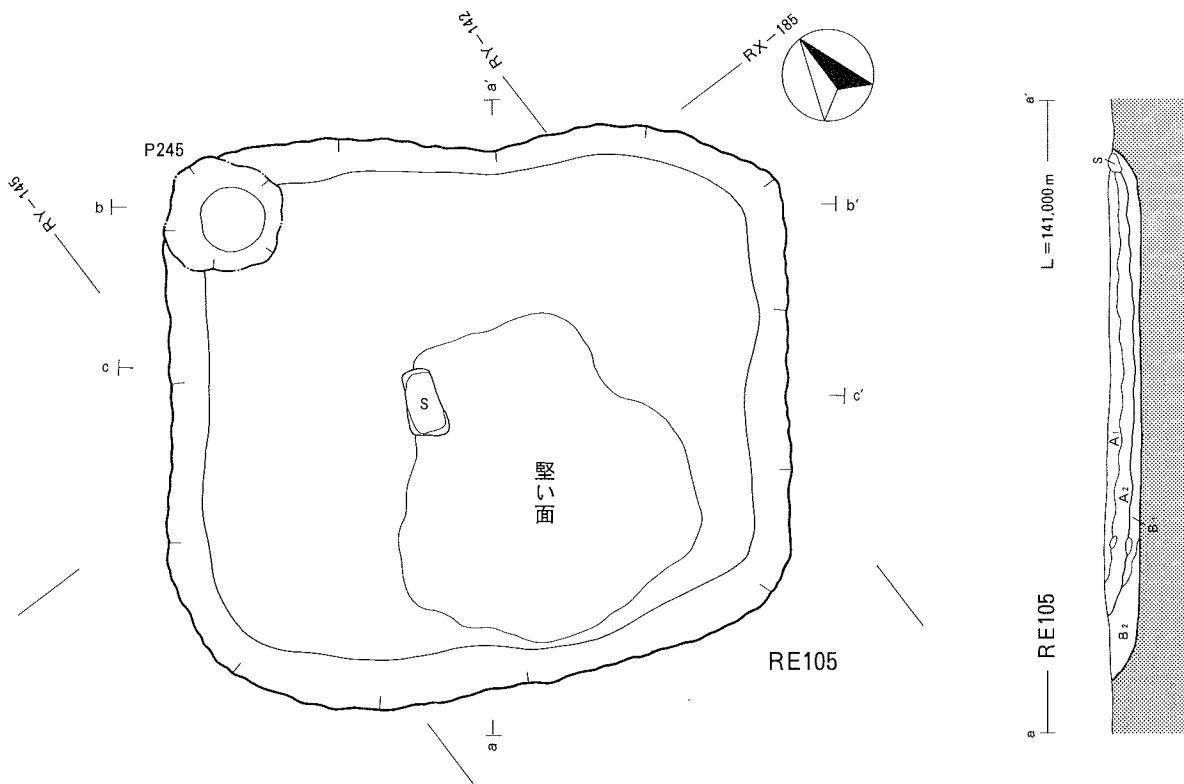
出土遺物 (第15図 1~6)

1~3は土師器坏である。1は外面全体にカーボンが付着し、底部は回転糸切後に体部下端のみに手持ちのヘラケズリ調整を施すものである。2は回転糸切無調整で内外面に煤が付着する。3は底部を欠損しており、器面調整は内外面にヘラミガキを施す。

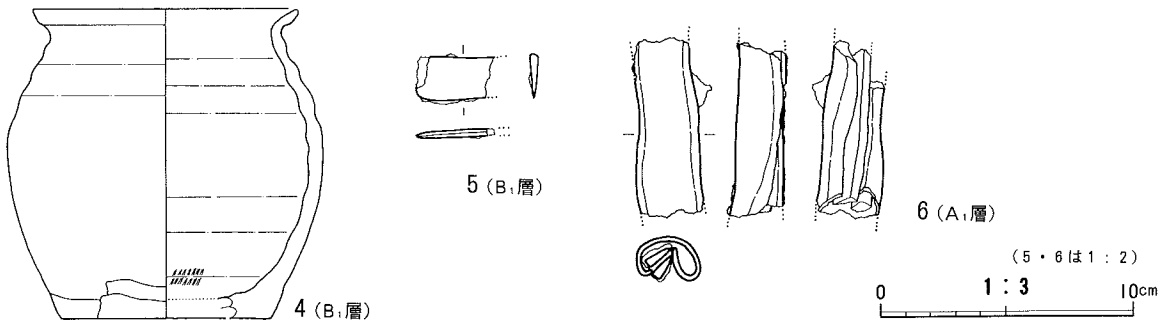
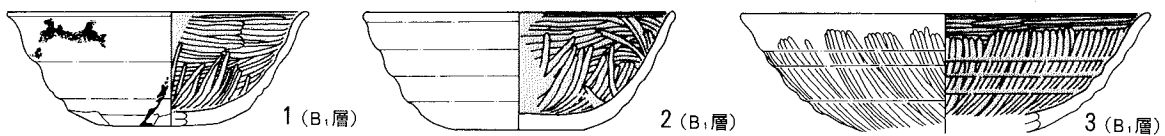
小形甕 4は最大径を体部中央に持つあかやき土器小形甕である。器高12.2cm、口径10.4cm、最大径12.4cm、底径8.3cm、をはかり、短い口縁部は強く外反し、球胴状の体部を呈する。器面調整は外面の体部下端にヘラケズリ調整、内面底部付近にハケメを施す。

鉄製品 6は筒状鉄製品で両側欠損しており、残存長4.6cm、幅0.9~1.7cmをはかる。鉄板を折り込んだ間に刀子が挟まっている(石突か?)。5は刀子で両側欠損しており、残存長1.9cm、幅1.0~1.1cm、厚さ0.2cmをはかる。

鉄滓 図示されていないが、床面および埋土下位より多量の碗形滓が出土している。



第14図 RE105 堅穴跡



第15図 RE105 堅穴跡出土遺物

RA106 竪穴住居跡 (第16～23図)

- 位置** 調査区中央 **平面形** 方形 **主軸方向** E13° S
- 規模** 北東-南西 上端6.18m・下端5.71m、北西-南東 上端5.70m・下端5.42m
- 重複関係** RE506・507 竪穴を切る
- 掘込面** 削平 **検出面** 褐色シルト層上面
- 埋土** A～D層に大別され、各層はさらに細別される。A層-細かい砂礫を含む褐色シルト、B層-粒子の細かい褐色シルト、C層-砂礫褐色シルト、D層-砂礫・褐色シルトが交互に重なり、炭化物を若干含む層。
- 壁の状態** 検出面から床面までの深さは0.52～0.70mで、検出面から壁中位までは外傾するが、その下半はほぼ直壁となっている。
- 床の状態** ほぼ平坦。粘質シルト層を床面としている。
- かまど** かまどは新旧2時期あり、新期のかまどは東壁南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面
- 煙道** は煙出しから燃焼部に向かって緩やかに傾斜し、煙道側面は角・円礫による石組みで補強される。規模は東壁から煙出しの先端までの長さは1.42m、石組み内の幅0.25～0.30m、検出面から煙道底面までの深さは、先端部で0.28m、燃焼部付近では煙道がシルトと粘質土の混合土で0.20m程覆い、さらに煙道天井部を石材で囲う。天井石下面から底面までの深さは0.38mをはかる。
- 燃焼部** かまどは、角礫などの石材で燃焼部を構築し、褐色シルト・雲母を含む黄褐色粘質土・白色粘土の混合土(K層)で石組み部を覆う。焚口付近が崩壊しているが、かまどは比較的良好に検出された。規模は焚口-煙道基部1.98m・基底部幅1.52m・天井部幅(石組み)0.78m・高さ0.52mをはかる。
- 旧期のかまどは、上記したかまどに北接し、石組みによる煙出し部のみが残存する。残存する規模は、0.62m×0.70m程で、深さは0.38mをはかる。
- ピット** ピットは床面上に5口を検出しており、柱穴と考えられるピットはP1～P4で、柱間は一間×一間である。P5は不整円形を呈し、規模は1.30m×1.05mで人為的に埋められる。各ピットの深さは次のとおりである。P1-0.32m・P2-0.30m・P3-0.35m・P4-0.30m・P5-0.24mである。

出土遺物 (第18図1～第23図54)

- 杯** 1は須恵器杯である。2～13はあかやき土器杯である。1～12は回転糸切無調整で、13は回転ヘラ切りの後、底面に手持ちヘラケズリ調整を施す。8は外面底部に墨書文字が認められ「聚」か。9は胎土に雲母を多く含み、外面の体部や底部に重ね焼きによる黒斑が見られる。また、内面全体には多量の煤が付着する。10は外面底部に「聚」の墨書文字が認められ、内外面に煤が付着する。12は外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。
- 14～19は土師器杯である。14・15・17・18は糸切後に再調整を施すものである。14は内外面にヘラミガキを施すが、外面は口縁部のみ横方向にヘラミガキが見られる。再調整は体部下端のみ手持ちヘラケズリ調整を施す。内面の黒色処理はとんでおり、口縁部外面に煤が付着する。
- 15の体部外面には「大力」の墨書文字が認められる。再調整は体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を施す。また、外面の口縁部・底部には重ね焼きによる黒斑が見られる。16も外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。17は体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を施す。

り調整を施す。18は体部下端から底部周辺にかけて手持ちヘラケズリ調整を施す。外面には重ね焼きによる黒斑や、口縁部にはタール状の付着物が見られる。19は体部破片で外面に墨書文字が認められるが、判読不明である。

高台付坏 20・21は土師器高台付坏で、高台の断面形は逆台形状を呈する。20は体部外面に墨書の痕跡が認められるが判読不明である。21は体部下端に回転ヘラケズリ調整を施す。底部には菊花文や重ね焼きによる黒斑が見られる。22は底部が欠損するあかやき土器鉢？である。外面の体部下半にはヘラケズリ調整を施す。

長頸瓶 23・24は須恵器瓶である。23は頸部から体部上半のみ残存する長頸瓶で、最大径は体部上半に持ち、体部内面にはカキメを施す。24は体部下半から底部のみ残存しており、残存高10.1cm、底径8.6cmをはかり、底部周縁には低い高台を貼付けている。器面調整は外面の体部下半には平行

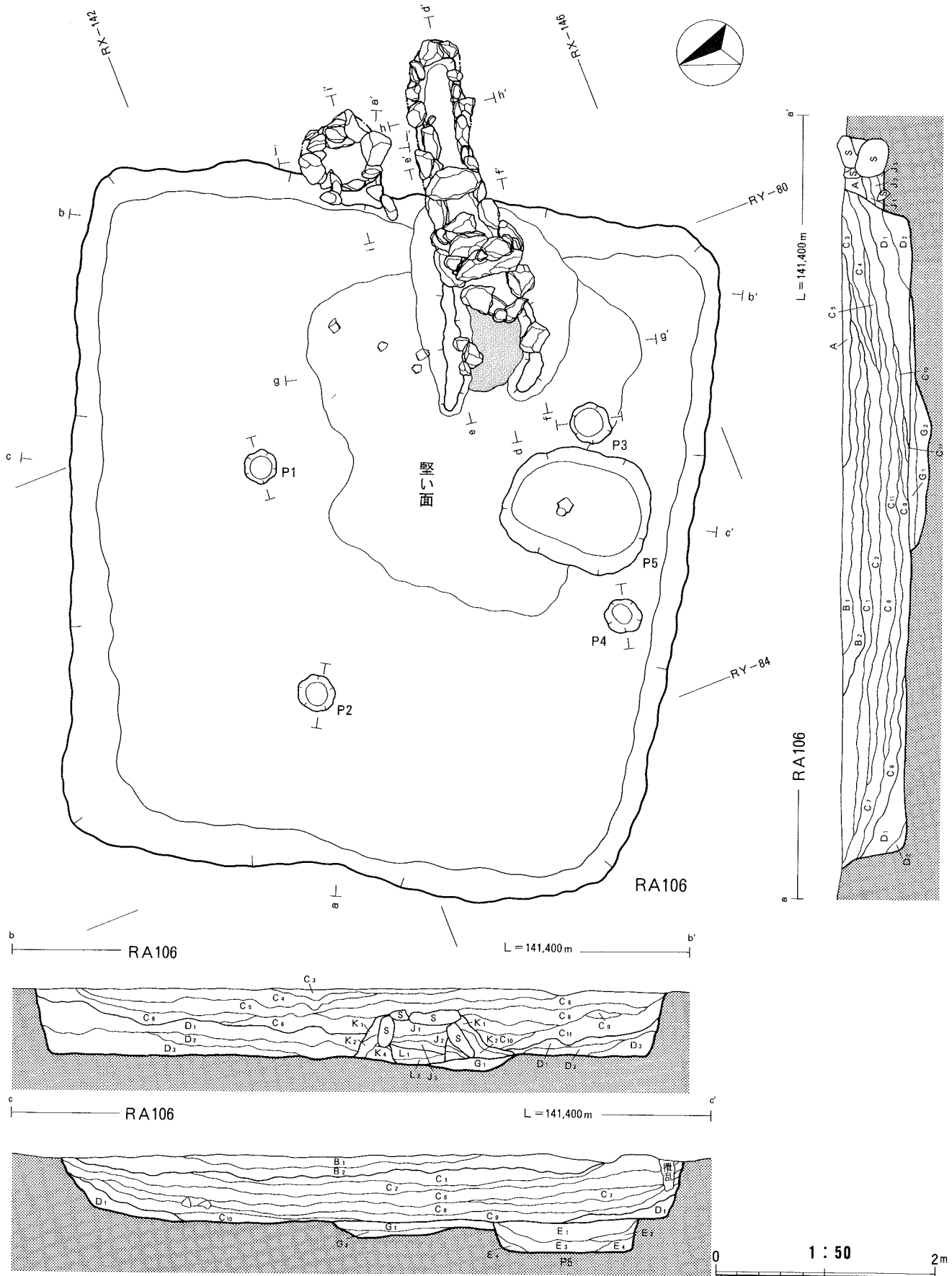
転用硯 タタキの後にヘラケズリ調整を施す。内面底部にはヘラナデを施す。また、内面全体に磨面が観察されることから、転用硯として使用されていたものと推定される。

小形甕 25～32はあかやき土器小形甕である。25は完形で器高15.8cm、口径15.8cm、最大径16.0cm、底径8.0cmをはかり、最大径を口縁部にもつ。また、体部下半から底部は火熱を受けており、器面が剥落及び煤が付着する。26～30・32は体部下半～底部を欠損しているが、最大径を口縁部にもつ。いずれも口縁部の内外面を中心に煤が付着する。30の外面はヘラケズリ調整を施す。31は底部を欠損するが、頸部が強く締まり残存高22.0cm、口径18.4cm、最大径19.2cmをはかり最大径を体部上半にもつ。器面調整は外面が体部上半からヘラケズリ調整、内面は頸部下よりカキメを施す。また、内外面の口縁部に多量の煤が付着する。32の器面調整は外面が体部上半からヘラケズリ調整、内面は頸部よりカキメを施す。

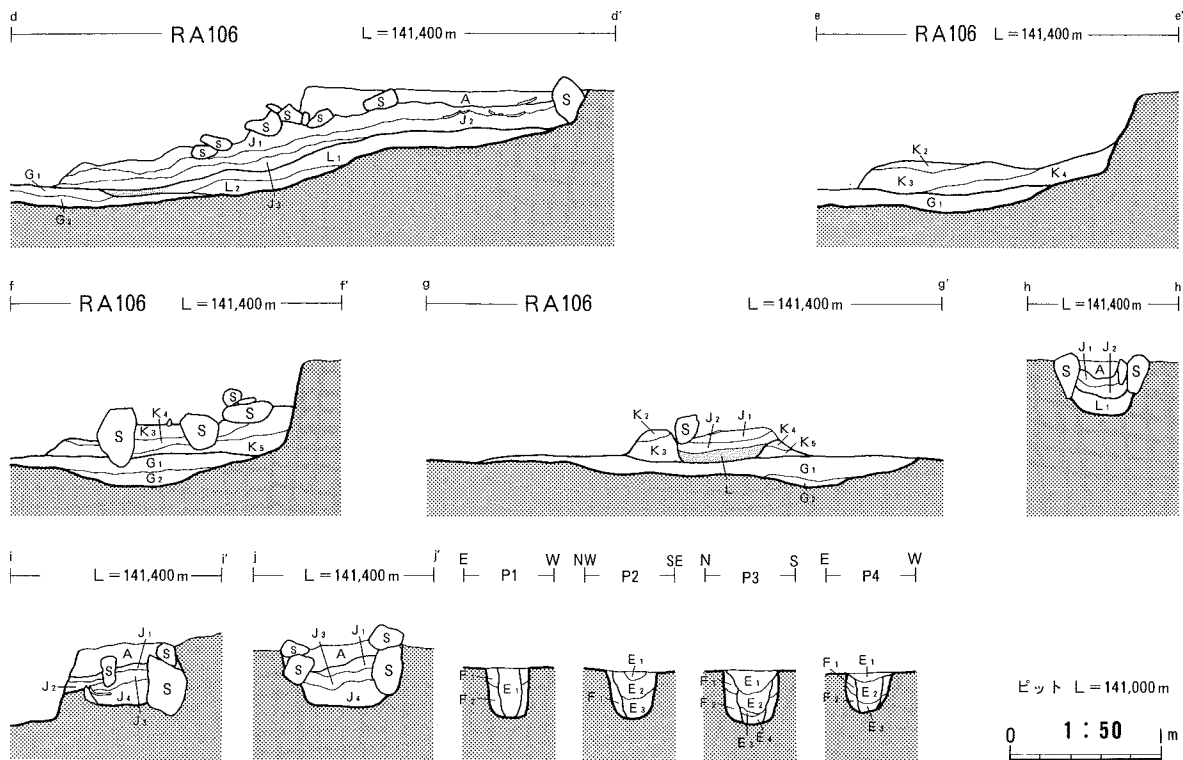
甕 33～38はあかやき土器長胴甕である。33は口縁部のみ残存し、外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナデを施す。34は口縁部から体部上半にかけて残存し、外面はヘラケズリ調整、内面は頸部に平行タタキ痕が見られる。35は口縁部のみ残存し、外面に平行タタキ痕が見られる。36は口縁部から体部下半にかけて残存しており、口縁部形態は頸部から外傾しながら直立気味に立ち上がり、体部上半に最大径を持ち肩が張り、体部下半がすぼまる形を呈する。残存高32.8cm、頸部内径17.4cm、最大径31.8cmをはかり、器面調整は内外面とも口縁部～底部周辺にかけて平行文様のタタキを施すが、底部周辺から口縁部へとタタキ調整が認められる。また、外面は口縁部ロクロナデによりタタキ痕は見られず、肩部下より体部下端にかけてヘラケズリ調整を施す。内面は丁寧なロクロナデによりタタキ痕は見られず、体部下半に一部ヘラナデが散見される。37は36の底部と考えられるもので、外面にヘラケズリ調整を施す。

38は底部が丸底状になる甕で、全体形は砲弾型を呈する。復元高36.5cm、口径25.0cm、最大径25.8cmをはかり、最大径を体部中央に持つ。器面調整は内外面とも口縁部～底部にかけて平行文様のタタキを施すが、底部から口縁部へとタタキ調整を施す。後に、外面の体部上半はロクロナデ、体部下半はヘラケズリ調整を施す。内面の体部上半のみロクロナデによりタタキ痕を消す。

39・40は口縁部が短く外反する土師器小形甕である。39は頸部がややくびれ、体部中央がやや膨れる形を呈する。器高11.5cm、口径11.0cm、底径7.7cmをはかる。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面～底部がヘラミガキ、体部内面がヘラナデを施す。口縁部～底部の内外面には煤が付着する。40は体部に緩やかな膨らみを持たせる甕で器高14.6cm、口径12.7cmをはかり、



第16図 RA106 堅穴住居跡



第17図 RA 106 竪穴住居跡土層断面

最大径は口縁部に持つ。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ調整、体部内面がヘラナデを施す。また、内面の口縁部と底部周辺には丹塗りが施され、底部外面には木葉痕が見られる。

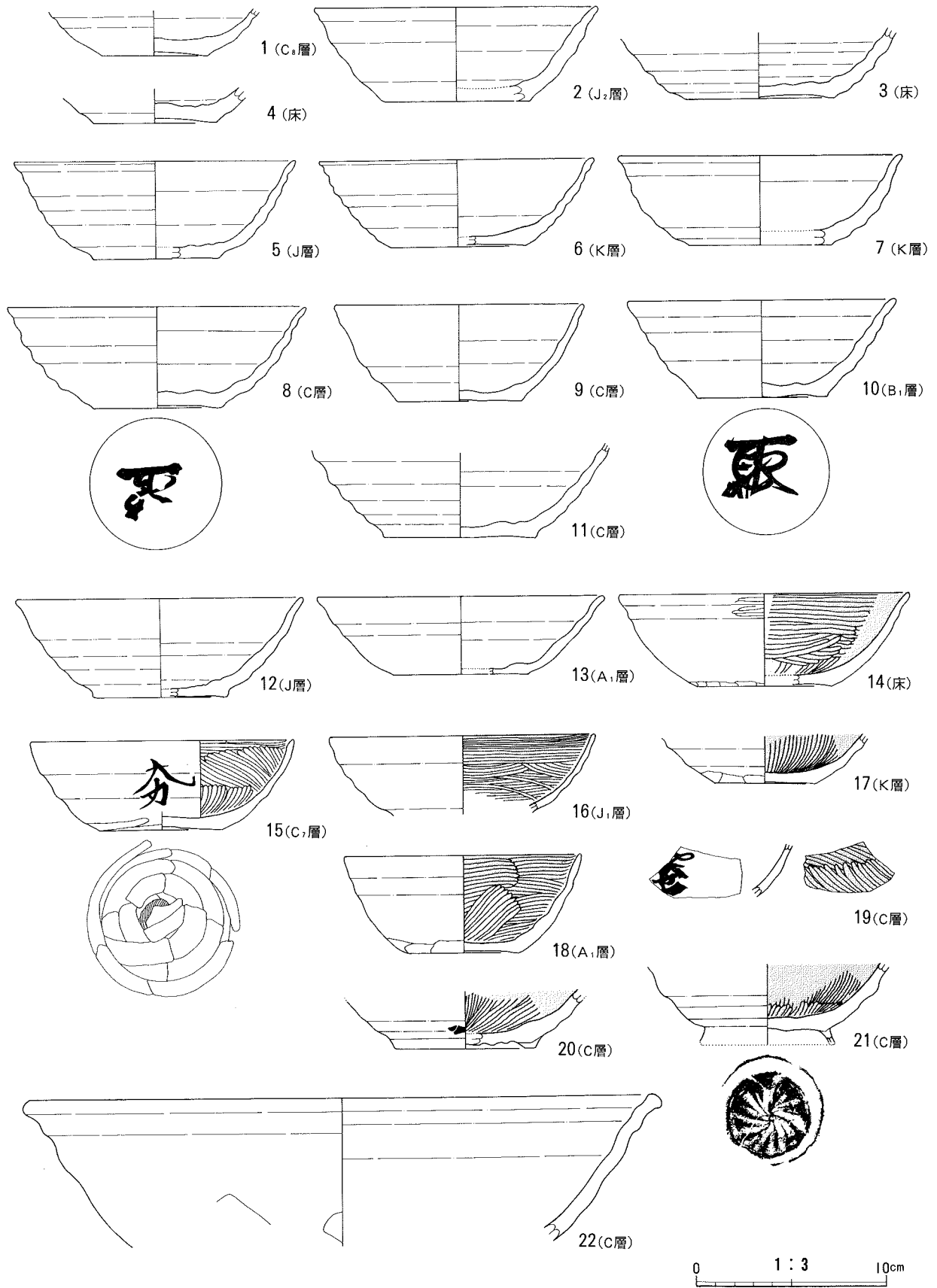
41は土師器長胴甕である。口縁部内外面にヨコナデ、外面の口縁部～体部下端がヘラケズリ調整、体部内面がヘラナデを施す。

羽 口 42は片側を欠損したファイゴの羽口である。残存長4.6～5.9cm、幅4.0～4.4cm、孔径1.7～1.8cmをはかる。

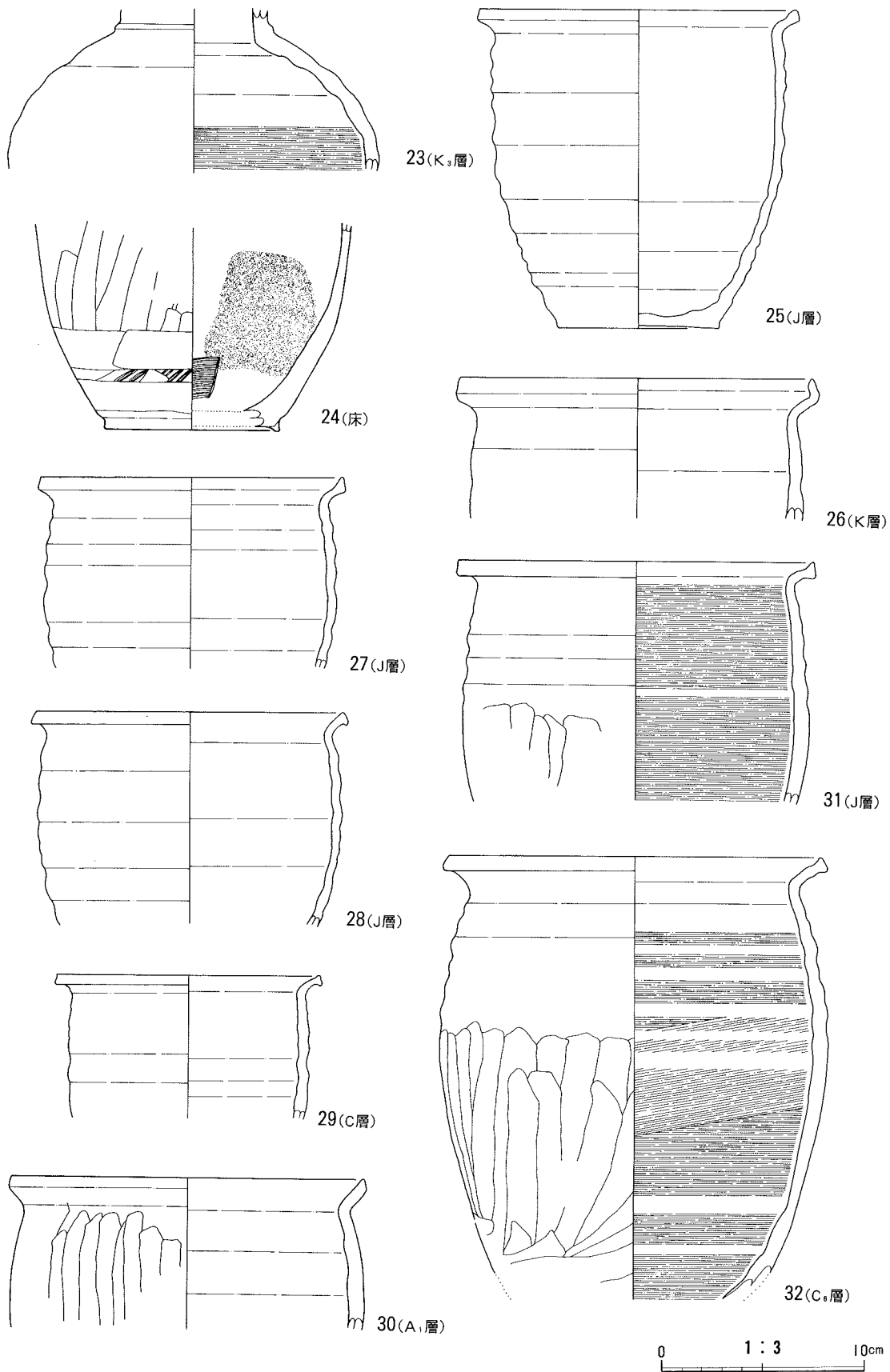
土 製 品 43～47は土錘である。43・45は中程が膨らむ形を呈しており、46・47は円柱状を呈する。43は全長3.4cm、幅0.8～1.9cm、孔径0.4～0.7cmをはかる。44は全長3.8cm、幅1.2～2.1cm、孔径0.5～0.7cmをはかる。45は全長4.3cm、幅1.0～2.4cm、孔径0.4～0.7cmをはかる。46は全長4.3cm、幅1.2～1.7cm、孔径0.5～0.7cmを、47は全長4.6cm、幅0.9～1.5cm、孔径0.4～0.7cmをはかる。

鉄 製 品 48は棒状鉄製品で片側を欠損しており、残存長1.7～3.5cm、幅0.3～0.9cm、孔径0.3～0.6cmをはかり、用途は不明である。

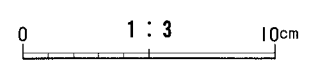
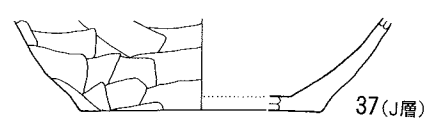
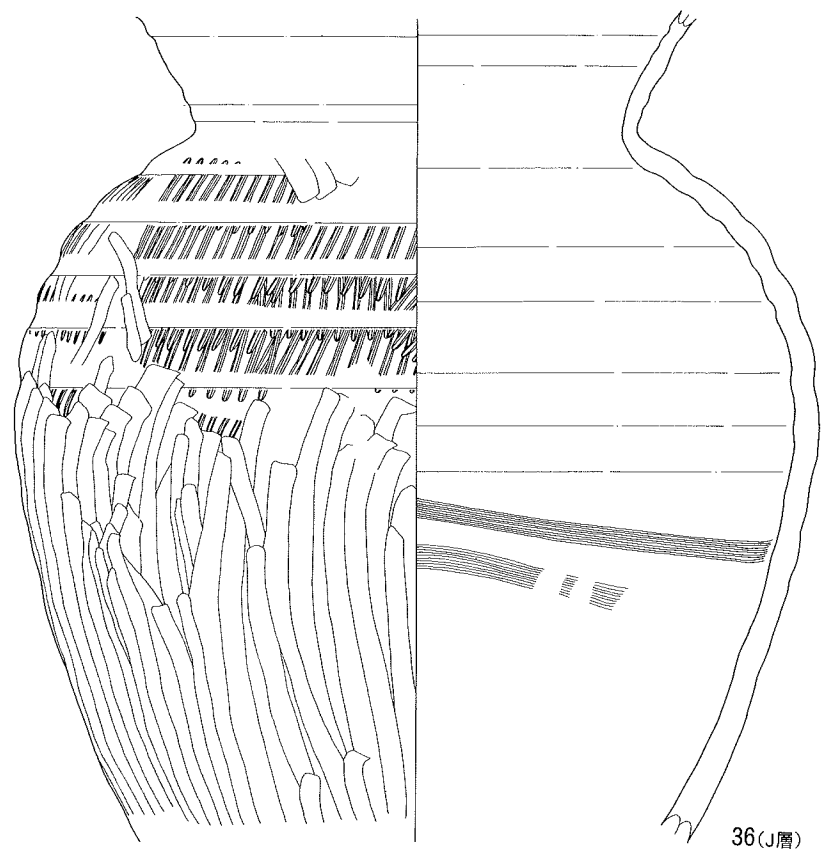
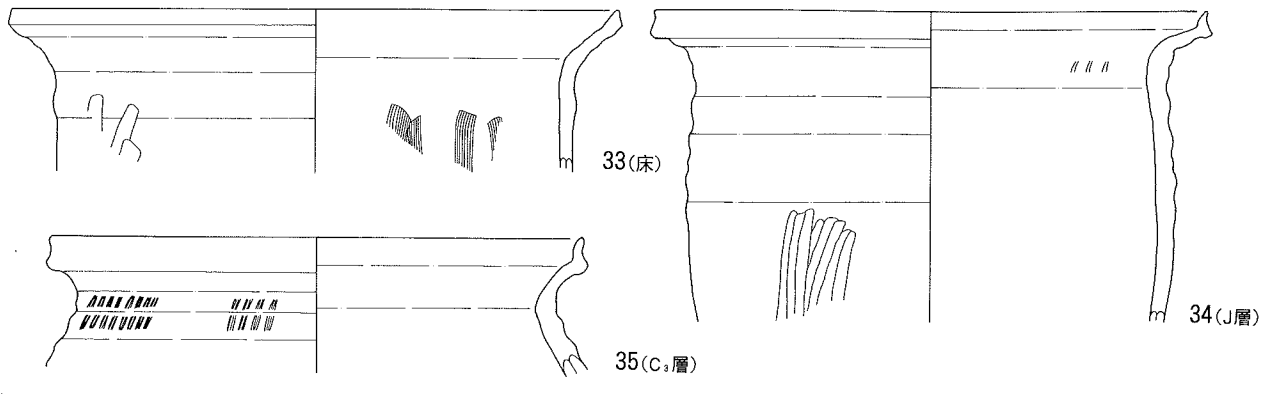
石 製 品 49は不整形楕円を呈する基石状の円礫である。石質は半透明の瑪瑙製である。全長1.9～2.1cm、幅0.9～1.4cm、厚さ0.6～0.8cmをはかる。50～53は砥石である。50・51は細粒砂岩製で50は四角柱状で一端が欠損しているが、5面に磨面が認められる。51はほぼ完形で、両端には敲打による細かい整形痕が認められる。52・53は多孔質安山岩製の砥石で、52は不整形な六角柱状を呈しており、ほぼ全面に磨面・使用痕が認められる。53もほぼ全面に磨面・使用痕が認められる。54は破損したものと考えられる砥石である。



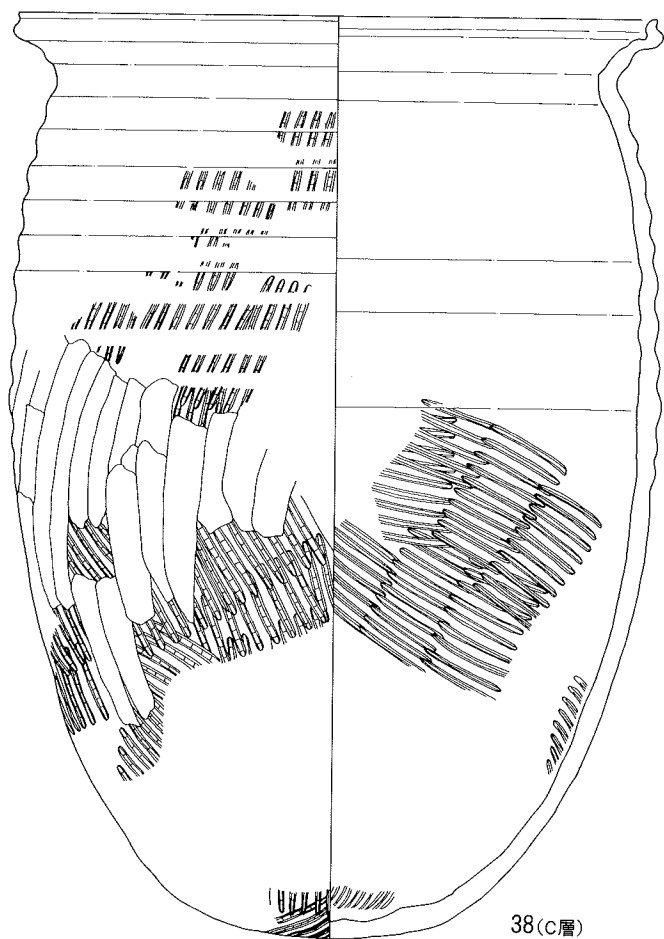
第18圖 RA 106 竪穴住居跡出土遺物 (1)



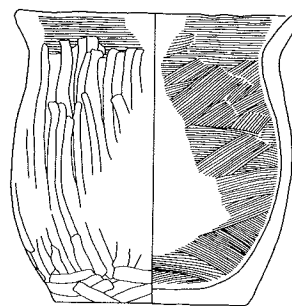
第19図 RA 106 竪穴住居跡出土遺物 (2)



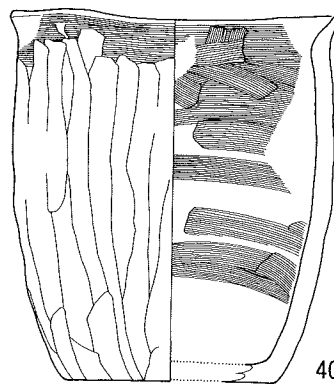
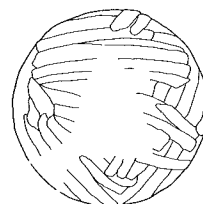
第20図 RA106 竪穴住居跡出土遺物(3)



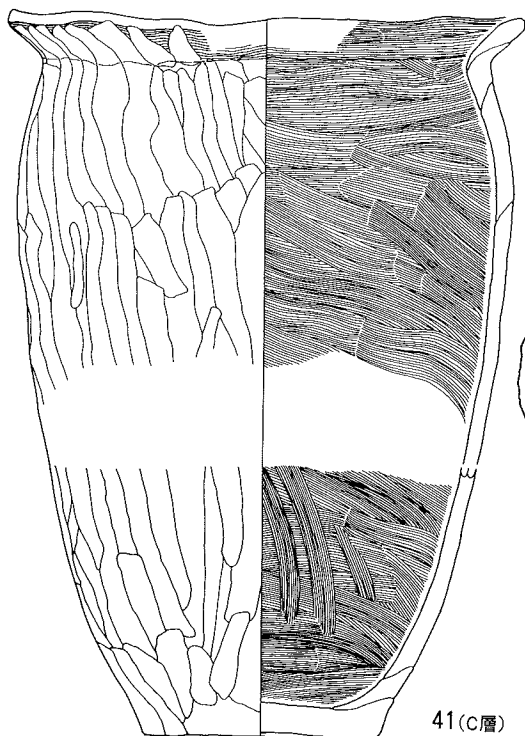
38(C層)



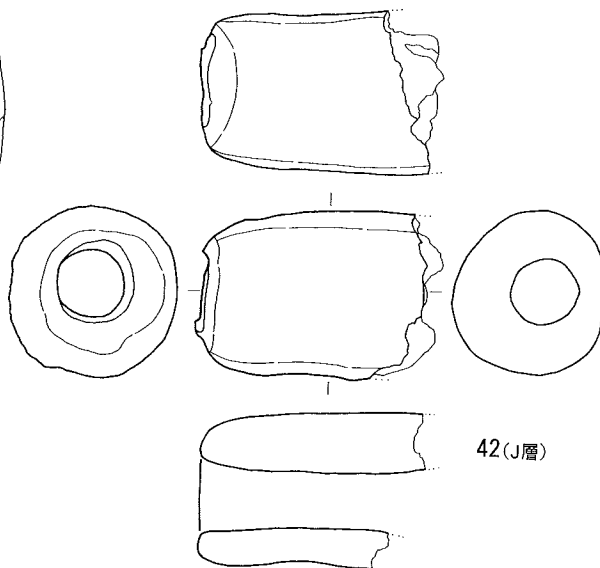
39(C層)



40(J層)



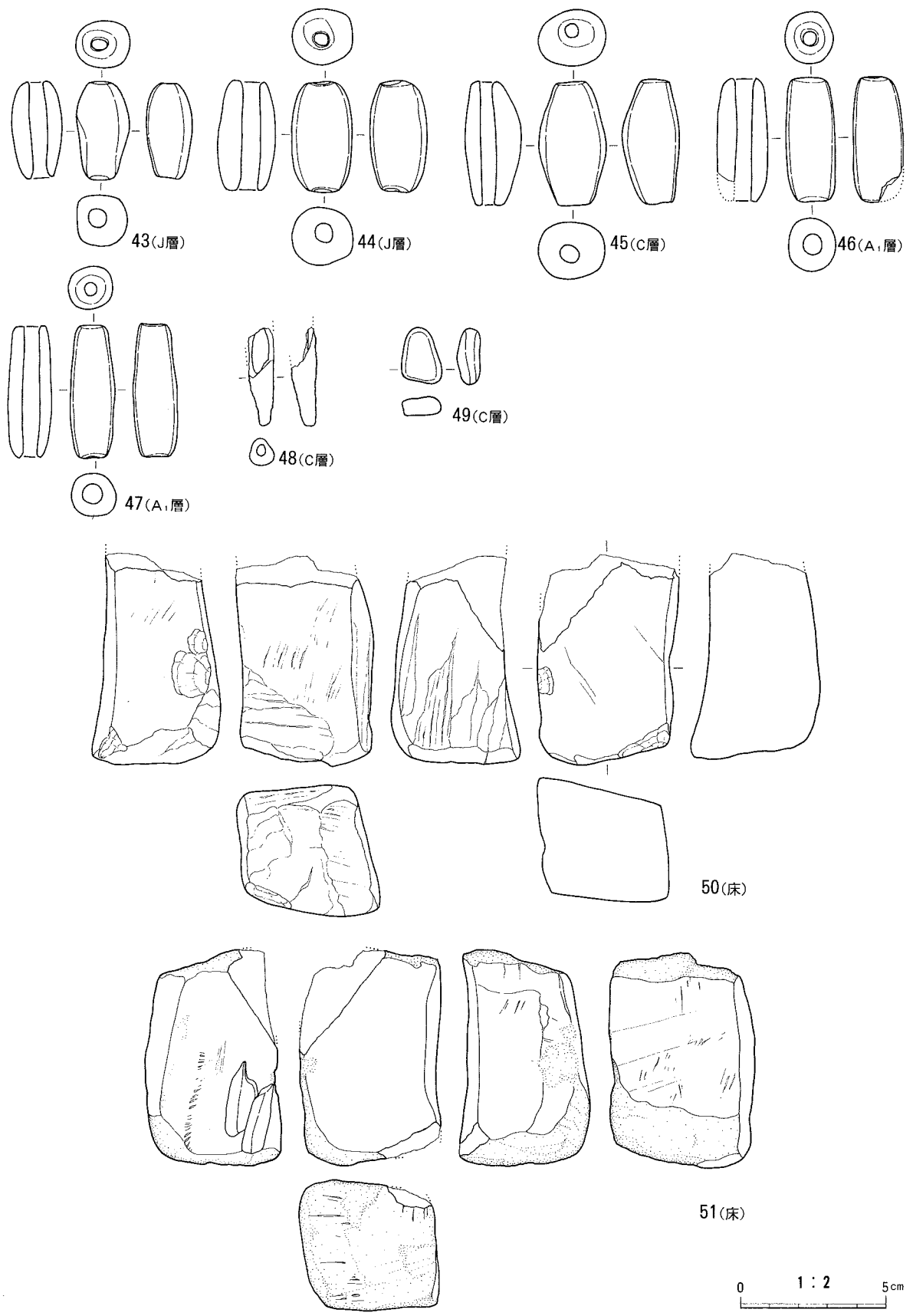
41(C層)



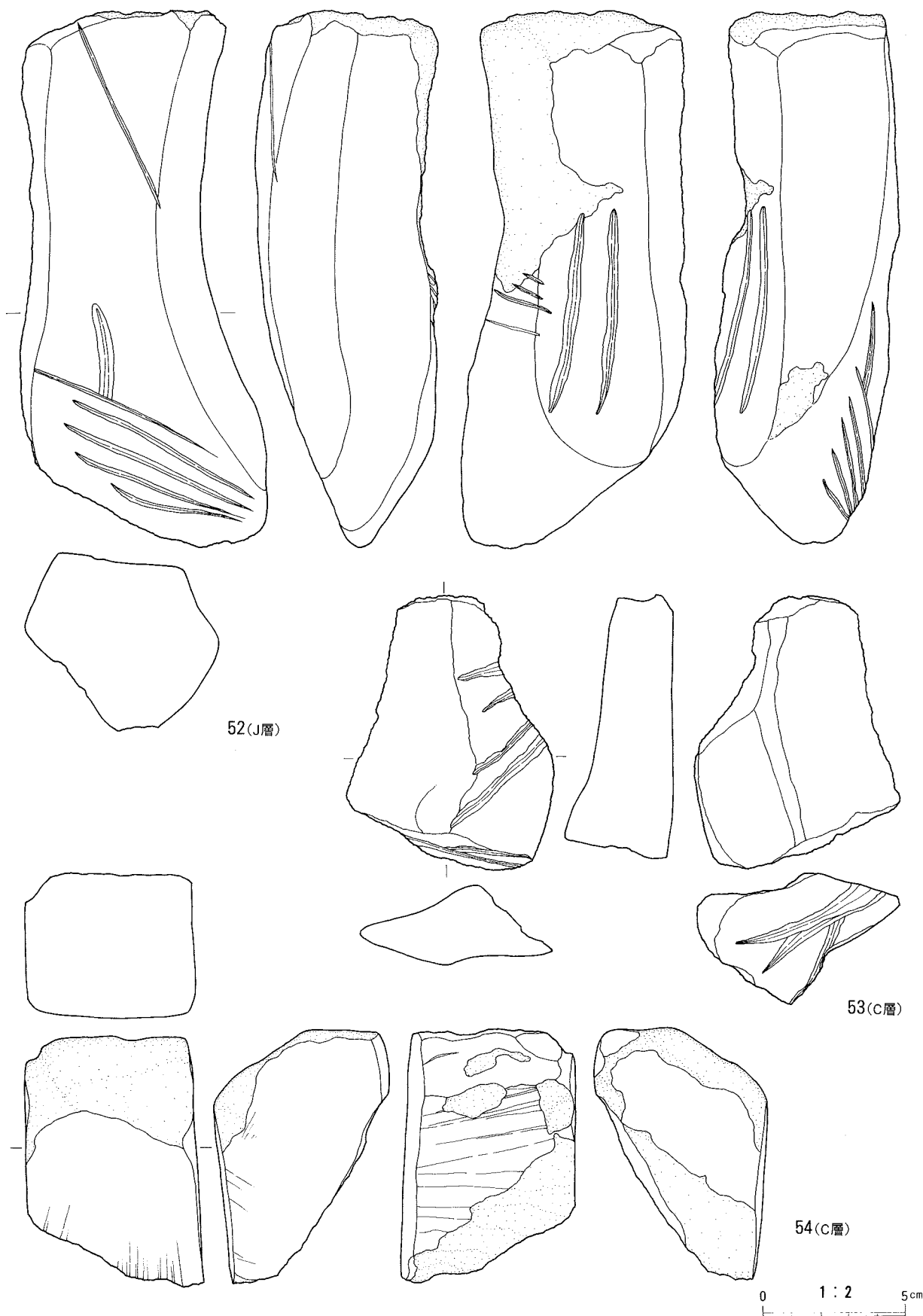
42(J層)

(42は 1 : 2)
0 1 : 3 10cm

第21図 RA106 竪穴住居跡出土遺物(4)



第22図 RA106 竪穴住居跡出土遺物 (5)



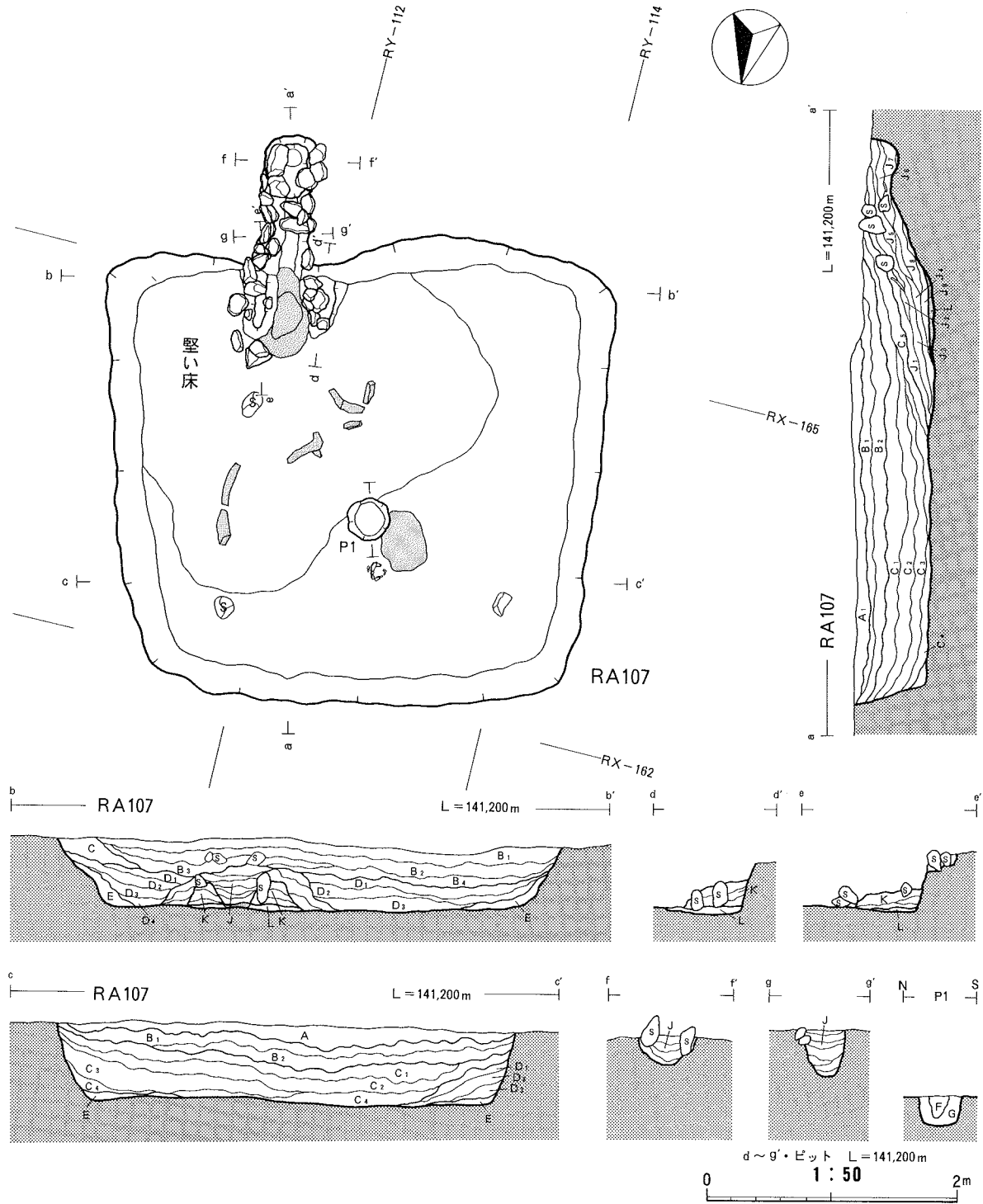
第23図 RA 106 竪穴住居跡出土遺物 (6)

RA107 竪穴住居跡 (第24・25図)

位置 調査区中央北西 平面形 方形

主軸方向 S12° E

規模 南-北 上端3.75m・下端3.34m、東-西 上端4.09m・下端3.56m



第24図 RA107 竪穴住居跡

重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 砂礫層上面

埋土 A～D層に大別され、各層はさらに細別される。A層－褐色シルト層、B層－砂礫を含む褐色シルト、C層－シルト・砂の混合土層、D層－褐色シルト層である。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.51～0.63mで、検出面から壁中位までは外傾するが、その下半はほぼ直壁となっている。

床の状態 ほぼ平坦。粘質シルト層を床面としている。

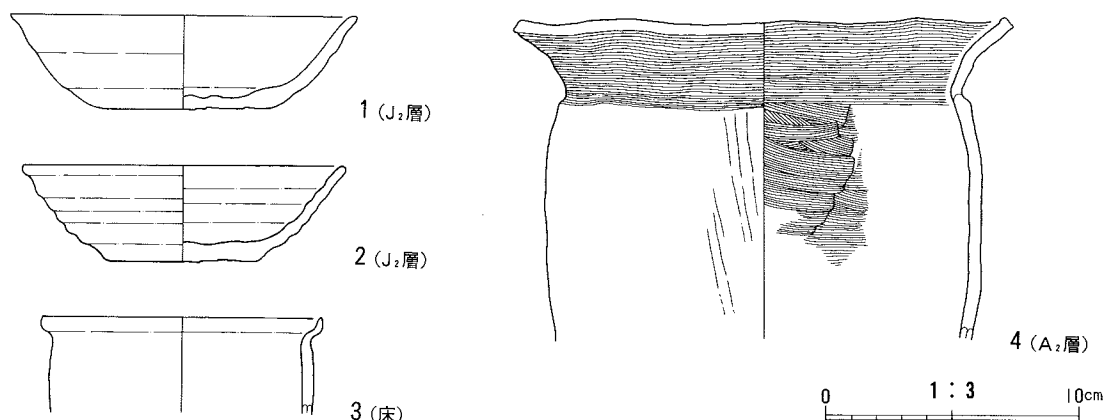
かまど 煙道平面形は溝状で、底面は煙出しから燃焼部に向かって緩やかに傾斜し、煙道側面は角・円礫による石組みで補強される。煙出しは煙道底面よりも若干深く掘り込まれる。規模は東壁から煙出しの先端までの長さは1.04m、石組み内の幅0.31～0.39m、検出面から煙道底面までの深さは、0.22～0.37mをはかる。

燃焼部 角礫・円礫などの石材で燃焼部を構築し、褐色シルト・雲母を含む黄褐色粘質土・白色粘土の混合土（K層）で石組み部を覆う。規模は焚口－煙道基部0.88m・基底部幅0.79m・高さ0.28m（かまど残存部）をはかる。

出土遺物（第25図1～4）

坏 1・2はあかやき土器坏で、かまど崩壊土より出土しており、2は摩滅が著しい。底部の切離しは回転ヘラ切り無調整である。

小形甕 3は体部下半～底部を欠損したあかやき土器小形甕で、口縁部内面と外面全体に煤が付着する。
甕 4は口唇部が平坦で、口縁部が大きく外反し頸部に浅い段を有する土師器長胴甕である。体部下半～底部を欠損しており、残存高12.8cm、口径19.8cmをはかる。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面がヘラミガキ調整、体部内面にヘラナデを施す。内外面には煤が付着する。



第25図 RA107 竪穴住居跡出土遺物

RA108 竪穴住居跡 (第26～31図)

位置 調査区中央東 **平面形** 方形 **主軸方向** S 21° W
規模 南-北 上端3.19～3.25m・下端2.92～3.03m、東-西 上端4.11～4.48m・下端3.82～4.23m
重複関係 RG506 溝跡に切られる **掘込面** 削平 **検出面** 褐色シルト層上面
埋土 A～C層に大別され、各層はさらに細別される。A層-白色火山灰を含む黒色土層、B層-褐色シルトを含む黒色土層、C層-シルト・砂・粘質土の混合土(床の構築土)

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.14～0.33mで、外傾して立ち上がる。

床の状態 0.10m前後の構築土によって床面はほぼ平坦にされ、構築面は凹凸がある。

かまど 煙道平面形は溝状で、煙出しは攪乱により失われている。煙道底面は燃焼部に向かって緩やかに傾斜し、煙道側面は角・円礫による石組みで補強される。

残存する煙道の長さは0.29m・幅0.21m・深さ0.27mをはかる。

燃焼部 角礫・円礫などの石材で燃焼部を構築し、雲母を含む黄褐色粘質土・白色粘土の混合土(K層)で石組み部を補強し、規模は焚口-煙道基部0.65m・基底部幅0.95m・高さ0.30m(かまど残存部)をはかる。

ピット ピットは床面上より4口検出され、柱穴と考えられるピットはP3・P4である。P1は不整形楕円形を呈し、規模は0.59m×0.50m・深さ0.11mをはかる。P2は上部が攪乱されており、残存する規模は長軸0.74m×0.51m・深さ0.18mをはかる。P3・4の深さはP3-0.18m・P4-0.12mである。

出土遺物 (第27図1～第31図37)

坏 1・2は須恵器坏である。2はほぼ完形で回転糸切後に体部下端～底部周縁に手持ちヘラケズリによる再調整が施される。また、外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。1は口縁部を欠損し、底部は回転ヘラ切り無調整である。内外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。

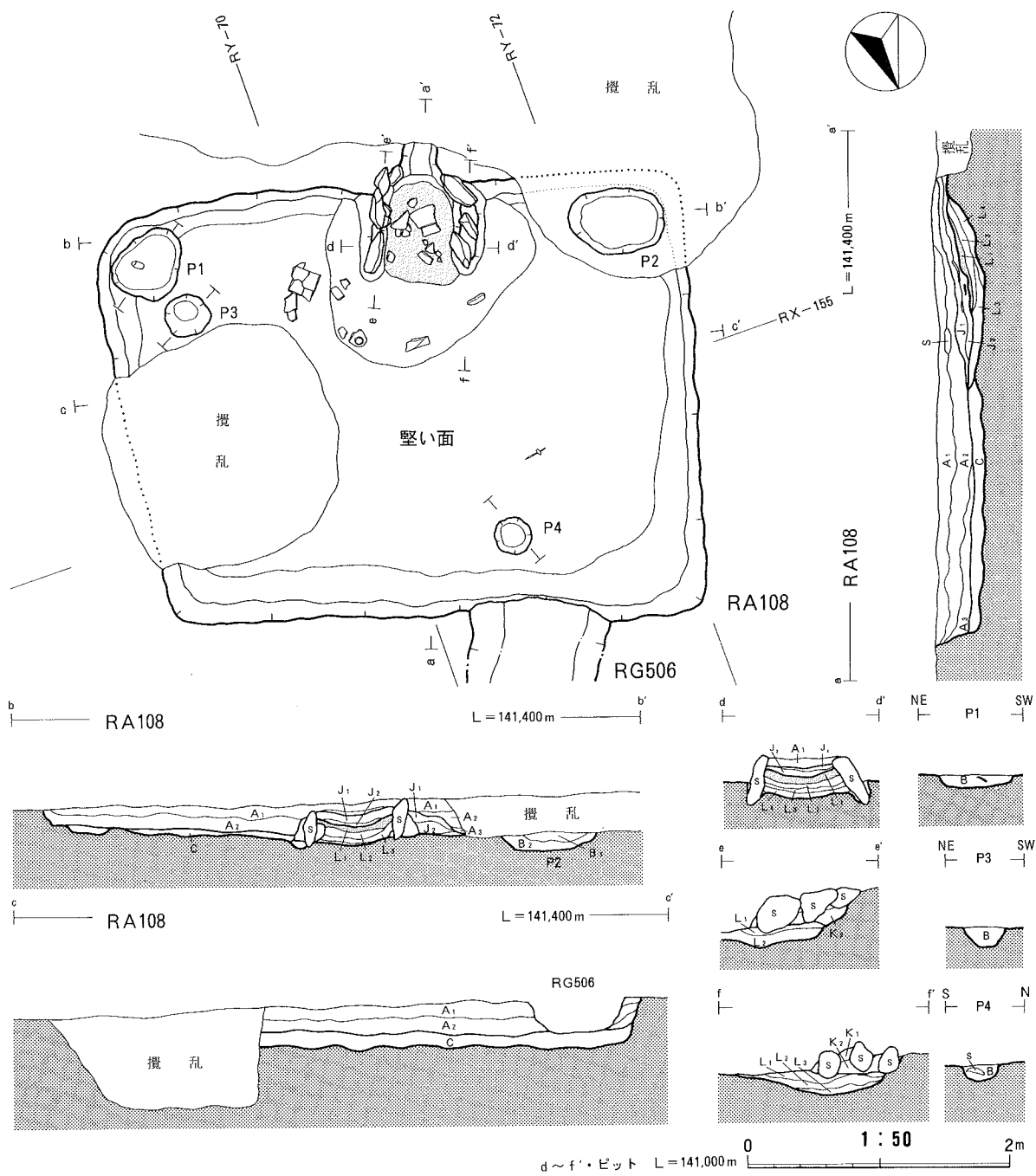
3～7は回転糸切無調整のあかやき土器坏である。3は底部、4・5・6は体部外面に墨書の痕跡が認められるが判読不明である。7は体部外面に墨書文字が認められ、「聚」か。また、内面にはカーボンが付着し、外面には重ね焼きによる黒斑が見られる。

8～15は土師器坏である。8・9・13・14は糸切後に再調整を施し、8～10は内面黒色処理がとんでいるものである。8は静止糸切後に体部下端のみに手持ちヘラケズリ調整を施す。9は口縁部外面にも横方向のヘラミガキが施され、体部下端には手持ちヘラケズリ調整を施す。

11は回転糸切無調整で底部外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。12は体部外面に墨書文字が認められるが、判読不明である。13は底部の破片であるが、体部下端～底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を施すものである。また、底部外面は炭素の吸着が見られる。14も底部の破片であるが、体部中位～体部下端にかけて手持ちヘラケズリ調整を施す。体部外面および底部に墨書文字が認められるが判読不明である。15は底部を欠損するが、薄手で丁寧な作りの坏である。内外面とも丁寧な横方向のヘラミガキと黒色処理が施される。

高台付椀 16はあかやき土器高台付椀である。口縁部は強く外反し、広く浅い坏部に逆台形状の高台を貼付する。

長頸瓶 17は口縁部～肩部にかけて残存する須恵器長頸瓶である。残存高11.0cm、口径9.8cm、頸部径1.0cmをはかる。口縁部は頸部から直線的に外傾しながら伸び、口縁がやや開く。頸部外面には



第26図 RA108 竪穴住居跡

リングを有する。また、口縁部外面にはタタキ痕が観察されるが、丁寧なロクロナデにより消されている。頸部内面の体部との境はナデにより平坦に仕上げられている。

壺 18は口縁部のみ残存する須恵器壺である。内面にはヘラナデを施す。

小形甕 19~21はあかやき土器小形甕である。19は口縁部~体部上半のみ残存し、外面全体及び口縁部内面に煤が付着する。20は口縁部~底部にかけて残存するが、約1/3を欠損する。器高12.8cm、口径15.7cm、底径6.9cmをはかり、最大計は口縁部に有する。底部は回転糸切で、外面の体部下

端には手持ちヘラケズリ調整を施す。また、外面全体及び口縁部内面に煤が付着する。21は口縁部～体部上半のみ残存し、最大計は口縁部に有する。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデを施し外面には煤が付着する。

甕

22～24・29～31はあかやき土器長胴甕である。22は口縁部がやや緩く外反し、口縁部～体部上半にかけて残存する。残存高13.6cm、口径28.0cmをはかり、最大計は口縁部に有する。また、内外面には多量の煤・カーボンが付着する。23は口縁部～体部上半にかけて残存し、残存高10.5cm、口径25.6cmをはかる。器面調整は内外面の体部にカキメを施す。また、外面に煤が付着する。24は口縁部～底部にかけて残存し、器高35.5cm、口径22.8cm、最大径25.2cm、底径12.2cmをはかり、体部中央に最大径を持ち、底部には多量の砂が付着し、器面調整は外面が口縁部～底部周辺にかけて平行文様のタタキを施すが、体部上半はロクロナデによりタタキ痕が消され、体部下半から下端にかけてヘラケズリ調整を施す。内面は体部中央～下半に幅広のハケメが施される。また、内外面に煤が付着する。

29～31は体部下半の破片と思われ、内外面にタタキ痕が残る。31は体部上半の破片である。

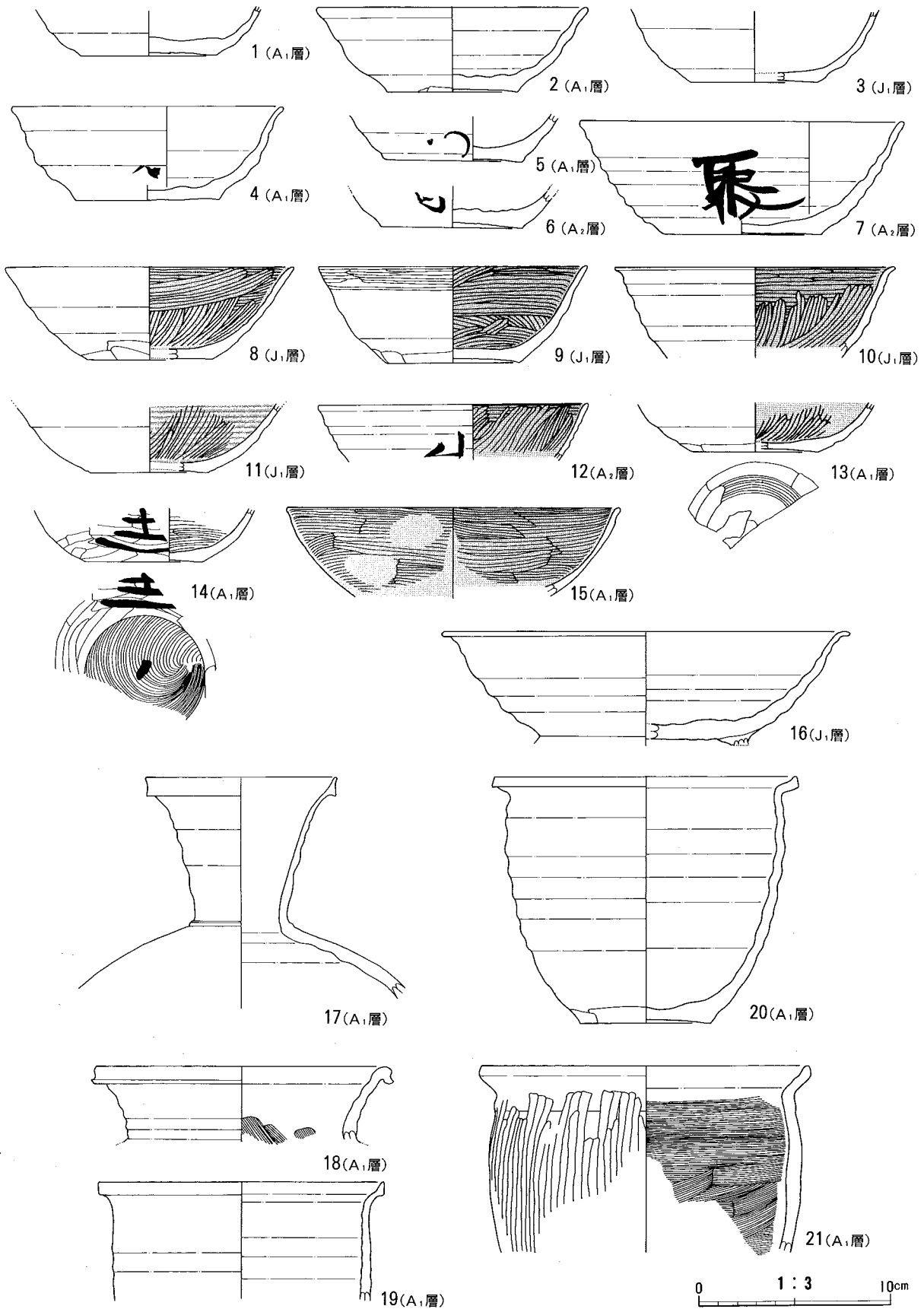
25は土師器長胴甕である。口縁部～底部にかけて残存するが、約1/2を欠損する。器高32.8～33.9cm、口径25.2cm、底径11.2cmをはかり、最大径は口縁部に有する。底部は砂の付着する平底で、器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ調整、体部内面がヘラナデを施す。また、内外面に煤が付着する。

26は底部が打ち欠かれた甕である。器高20.0～20.3cm、口径19.6cm、底径10.7cm、底部孔径6.2cmをはかり、最大径は口縁部に有する。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ調整、体部内面がヘラナデを施す。また、外面に煤、内面にカーボンが付着する。25・26の胎土には1～3cmの砂粒が多量に含まれる。

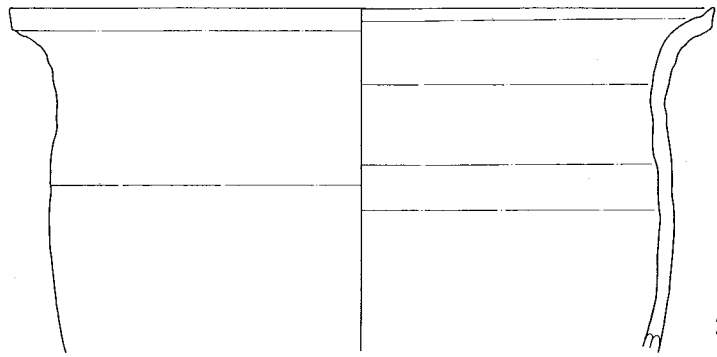
小形壺 27・28は土師器小形壺である。27は口縁部を欠損しているが、残存高4.8cm、体部最大径4.8cm、底径4.5cmをはかる。底部は回転糸切で、体部は内外面とも横方向のヘラミガキ・黒色処理を施す。外面体部下端は手持ちヘラケズリ調整を施す。28は口縁部～体部下端まで残存し、約1/2を欠損するが、短い口縁部に球胴形の体部をもつ。また、体部中央に横走沈線がめぐる。残存高11.3cm、口径8.7cm、最大径13.2cmをはかり、最大径は体部中央に持つ。器面調整は外面の口縁部～体部上半にかけてヘラミガキ、内面は内黒で丁寧な横方向のヘラミガキを施す。さらに、火熱を受けており、内外面は剥落し煤が付着している。

石製品 32～34は砥石である。32は凝灰岩製で全体的に擦り減っており、長軸両側端を除く6面に磨面や条痕が認められる。また、全体に煤が付着する。33は細粒砂岩製で、四角柱状を呈しており片側を欠損する。5面に磨面や条痕が認められ、全体に煤が付着して、黒色を呈する。34は溶岩質安山岩製で、四角柱状を呈しており3面に使用痕が認められる。

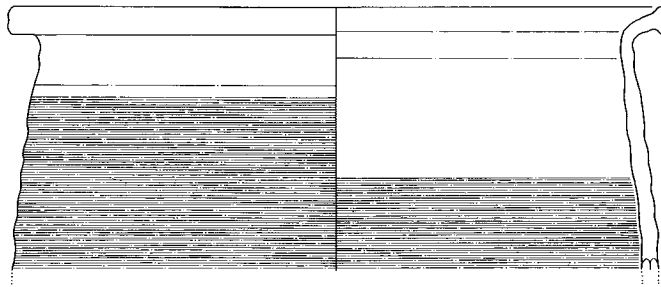
鉄製品 35は片関造りの刀子である。残存する長さは25.4cm、厚さ0.2～0.5cmをはかり、切先を欠損している。また、茎には孔径0.5cmの目釘穴が1カ所認められる。36は両端が欠損する紡錘車である。残存する長さは18.0cm、断面が円形を呈する棒状部の直径は0.4cm、円盤部の直径5.0～5.4cm、厚さ0.2～0.6cmをはかる。37は刀子と思われる鉄製品であるが、両端が欠損しており、木質部が目釘穴に残存するものである。残存部の長さは4.8～5.2cm、厚さ0.2cm、目釘の残存長は1.2cm、直径は0.2cmをはかる。



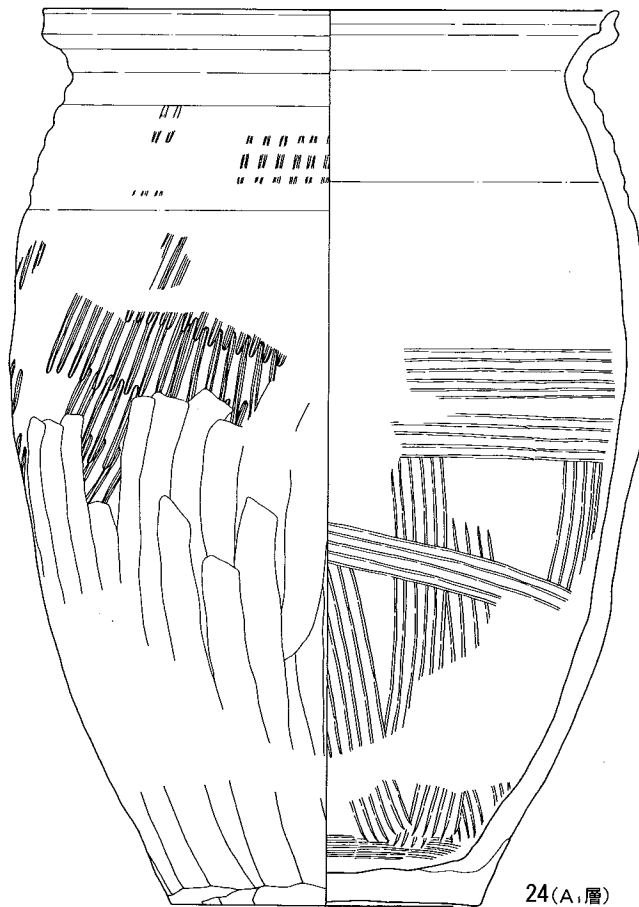
第27図 RA 108 竪穴住居跡出土遺物 (1)



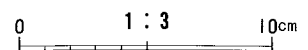
22(J,層)



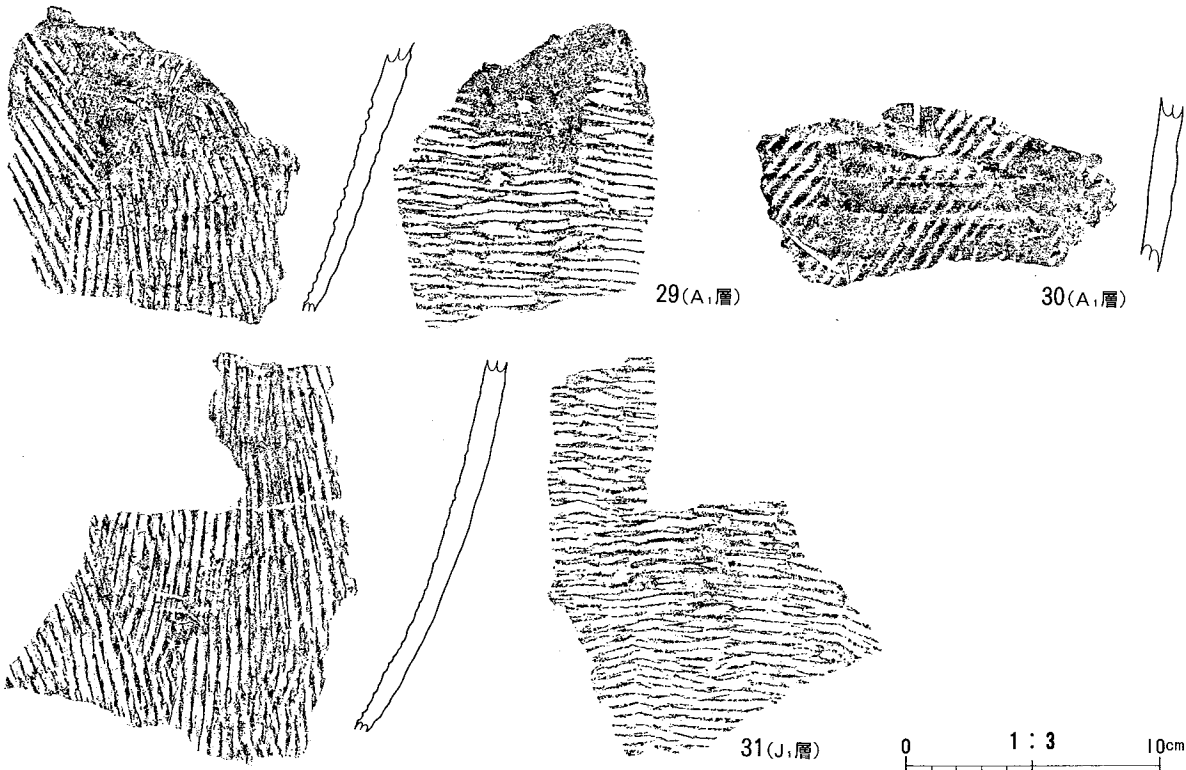
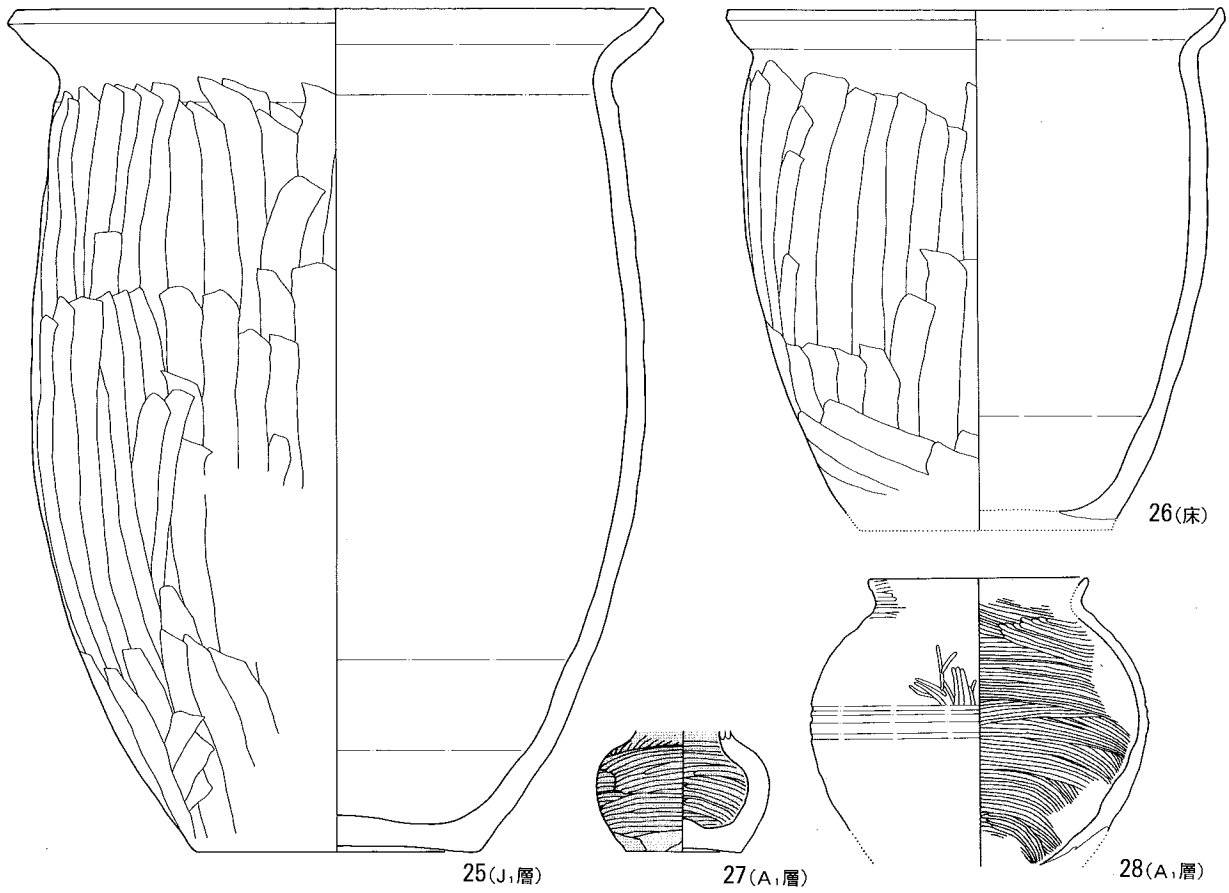
23(A,層)



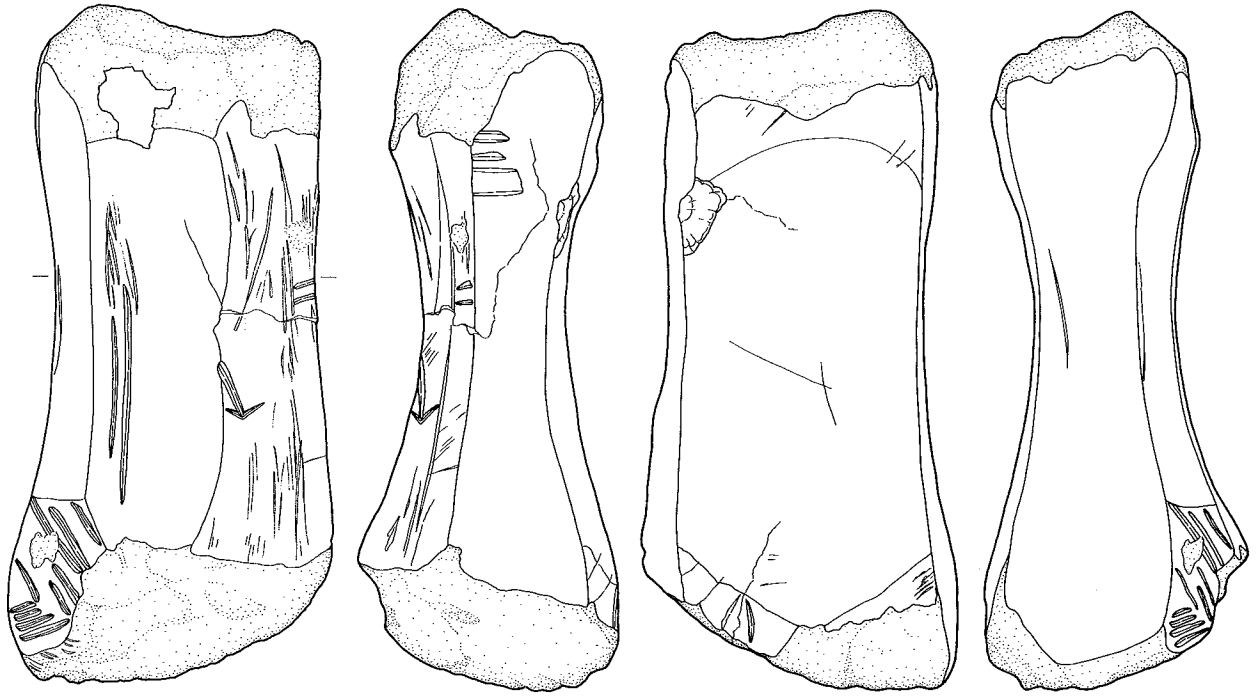
24(A,層)



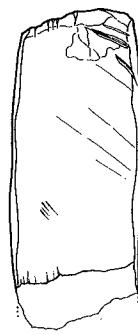
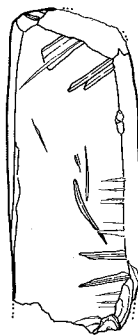
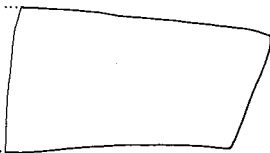
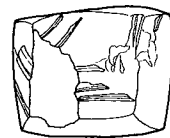
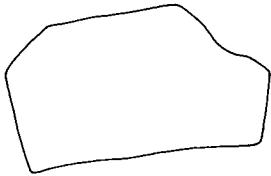
第28図 RA108 竪穴住居跡出土遺物(2)



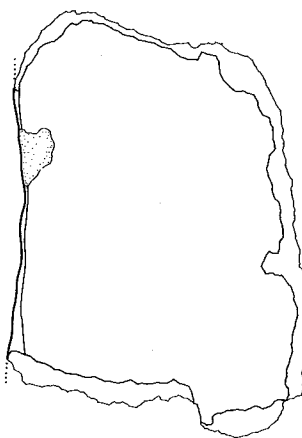
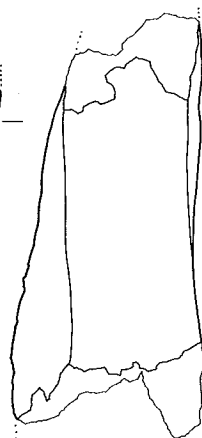
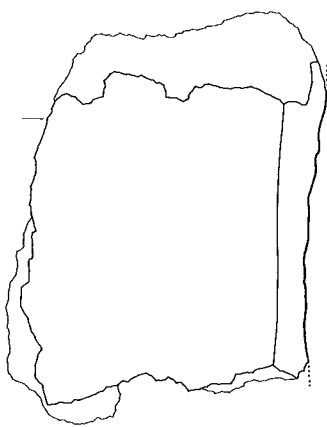
第29図 RA108 竪穴住居跡出土遺物 (3)



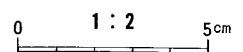
32(A,層)



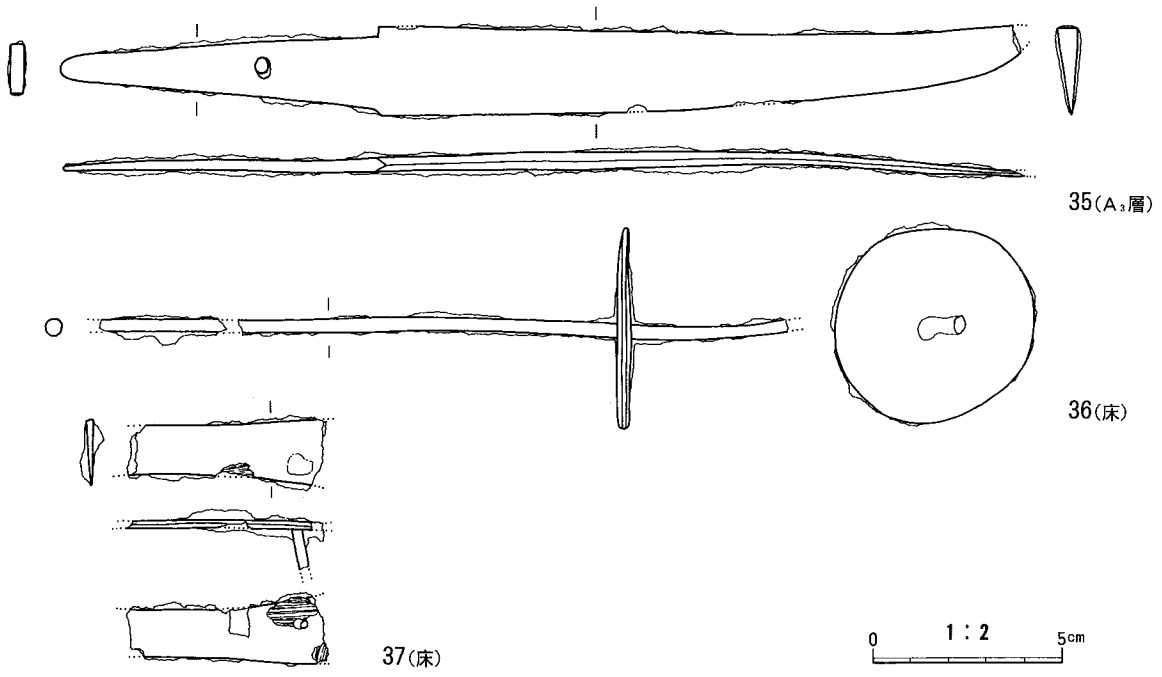
33(床)



34(A,層)



第30図 RA108 竪穴住居跡出土遺物(4)



第31図 RA 1 0 8 竪穴住居跡出土遺物 (5)

RA109 竪穴住居跡 (第32～34図)

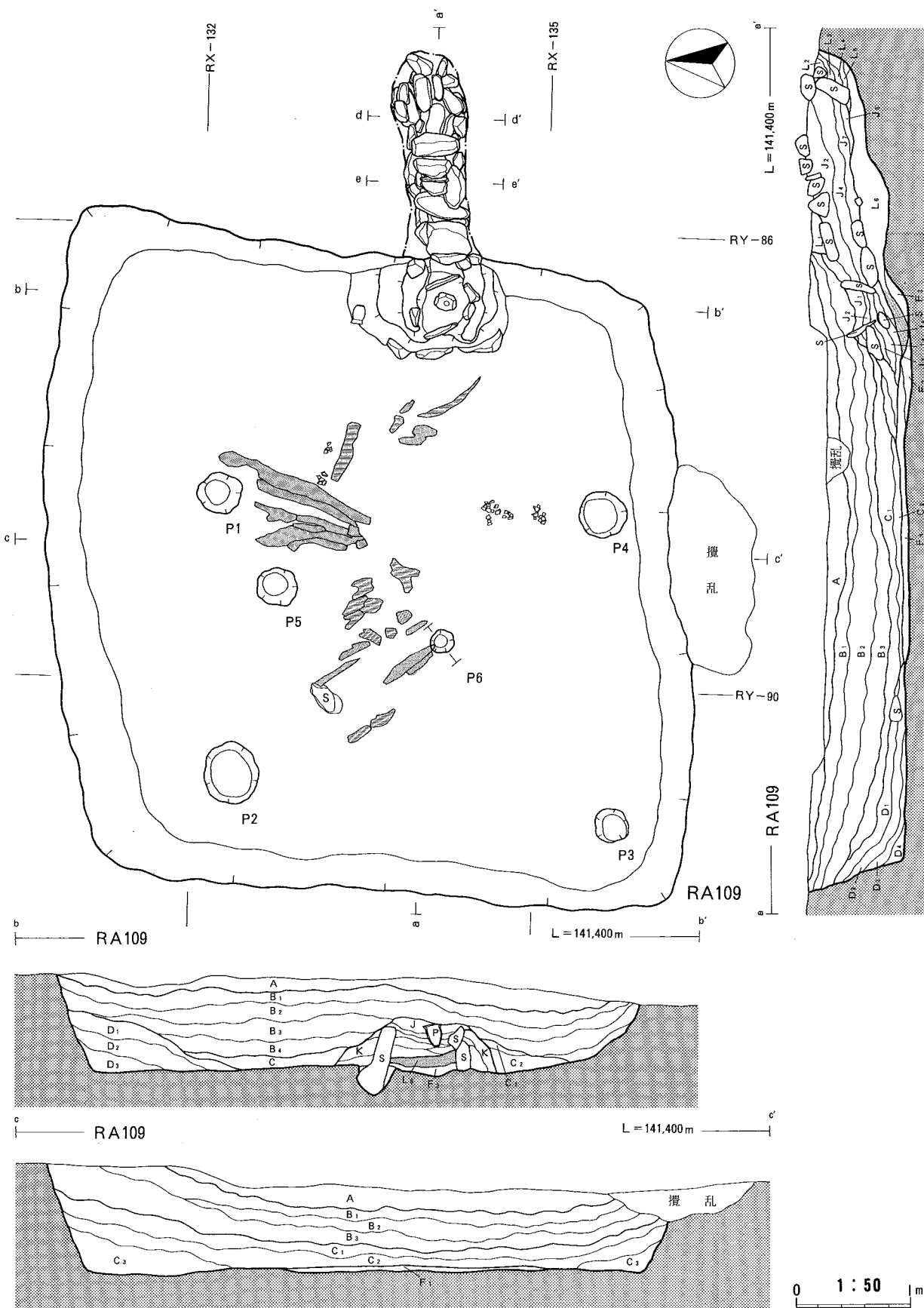
- 位置** 調査区中央 **平面形** 方形 **主軸方向** E 5° N
- 規模** 東-西 上端5.51～5.75 m・下端5.02～5.17 m、北-南 上端5.32～5.48 m・下端4.48～4.82 m
- 重複関係** RE504 竪穴に切られる **掘込面** 削平 **検出面** 褐色シルト層上面
- 埋土** A～D層に大別され、各層はさらに細別される。A層-砂礫層、B層-砂礫を含む褐色シルト、C層-粗い砂粒を多量に含む褐色シルト、D層-砂礫・褐色シルトが交互に重なる層。
- 壁の状態** 検出面から床面までの深さは0.52～0.91 mで、壁は外傾して立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦。粘質シルト層を床面としている。
- かまど** かまどは東壁中央南寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出しから燃焼部に向かって緩やかに傾斜し、煙道天井・側面は角・円礫による石組みで補強される。東壁から煙出しの先端までの煙道の長さは1.75 m、石組み内の幅0.53～0.68 m、検出面から煙道底面までの深さは、先端部で0.34 m、燃焼部付近では煙道がシルトと粘質土の混合土で0.15 m程覆い、さらに煙道天井部を石材で囲う。天井石下面から底面までの深さは0.22 mをはかる。
- 燃焼部** かまどは、角礫などの石材で燃焼部を構築し、褐色シルト・黄褐色粘質土・白色粘土の混合土(K層)で石組み部を覆う。焚口付近まで、煙出し部崩壊土・自然堆積土が煙出し部より流入し、かまど天井部が陥没しているが大凡の形状は保たれていた。また、陥没部からは第33図6の甕が正立して出土している。

規模は焚口-煙道基部0.89 m・基底部幅1.42 m・天井部幅(石組み) 0.80 m・高さ0.51 mをはかる。

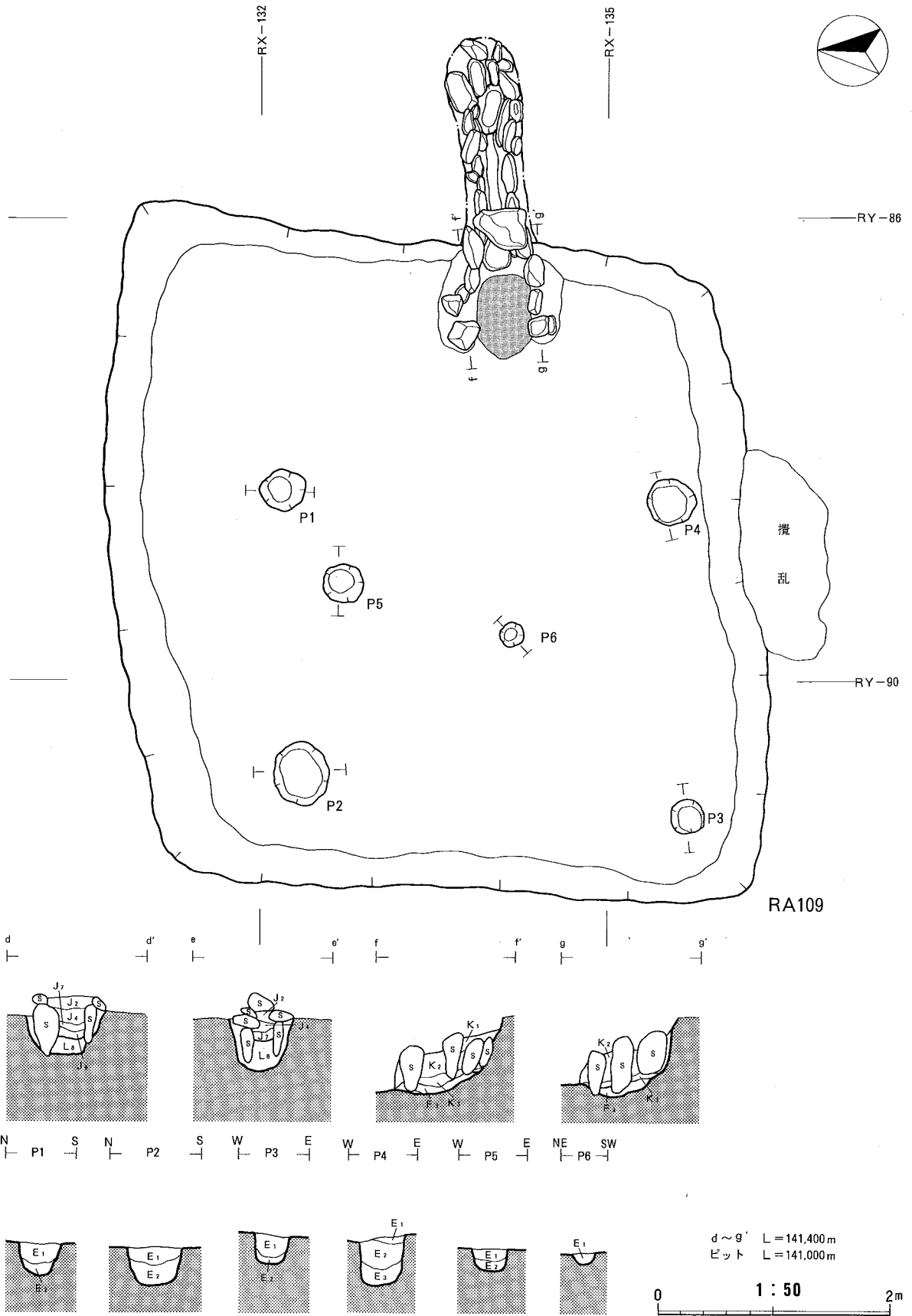
- ピット** ピットは床面上で6口検出され、柱穴と考えられるピットはP1～P4で、柱間は一間×一間である。各ピットの深さは次のとおりである。P1-0.28 m・P2-0.31 m・P3-0.27 m・P4-0.43 m・P5-0.19 m・P6-0.10 m。

出土遺物 (第34図1～7)

- 坏** 2は須恵器坏である。回転糸切無調整で、底部の内外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。1・3はあかやき土器坏である。1は床面出土の底部破片で、切離しは回転ヘラ切り無調整である。外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。3は回転糸切後に体部下端～底部周縁にかけて手持ちヘラケズリ調整を施すものである。外面には煤が付着する。
- 小形甕・甕** 4・5・7は土師器小形甕である。4は口縁部がやや外反し、口縁部～体部下端まで残存するが、約1/2を欠損する。残存高13.1 cm、口径14.3 cmをはかり、最大径は口縁部に有する。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ調整、内面が口縁部下にヘラナデ、体部下端にヘラミガキを施す。また、外面全体及び口縁部内面に丹塗りが施され、煤が付着する。
- 5はほぼ完形で、口縁部が外反し体部下端が強く湾曲する。底部には多量の砂が付着する。器高12.9～13.7 cm、口径14.6～15.0 cm、底径6.9～7.2 cmをはかり、最大径は口縁部に有する。器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部外面がヘラミガキ、内面がヘラナデを施す。また、外面は火を受け大部分が剥落し、煤が内外面に付着する。
- 6の全体形は口縁部が内湾しながら外傾し、体部上半が大きく膨らみ、体部下半から底部にかけてすぼまり、底面が張り出す甕である。ほぼ完形だが歪みが大きく、底面には木葉痕が残る。器高15.2～15.7 cm、口径12.3～13.3 cm、最大径13.6 cm、底径8.0～8.4 cmをはかり、器面調整は口縁



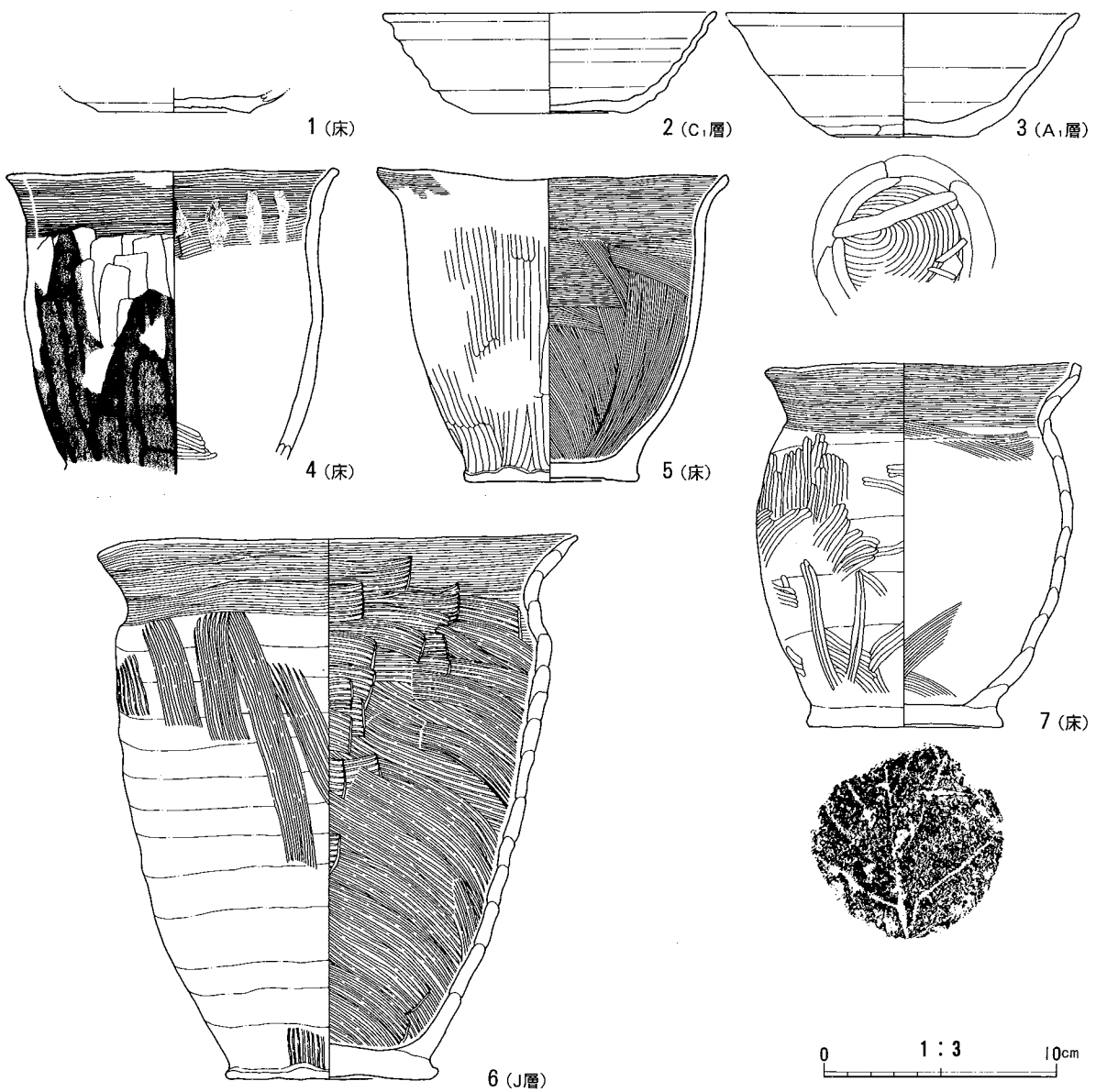
第32図 RA109 竖穴住居跡



第33図 RA109 竪穴住居跡

部の内外面がヨコナデ、体部外面がヘラミガキ、内面がヘラナデを施す。また、外面全体と口縁部内面には煤が付着する。

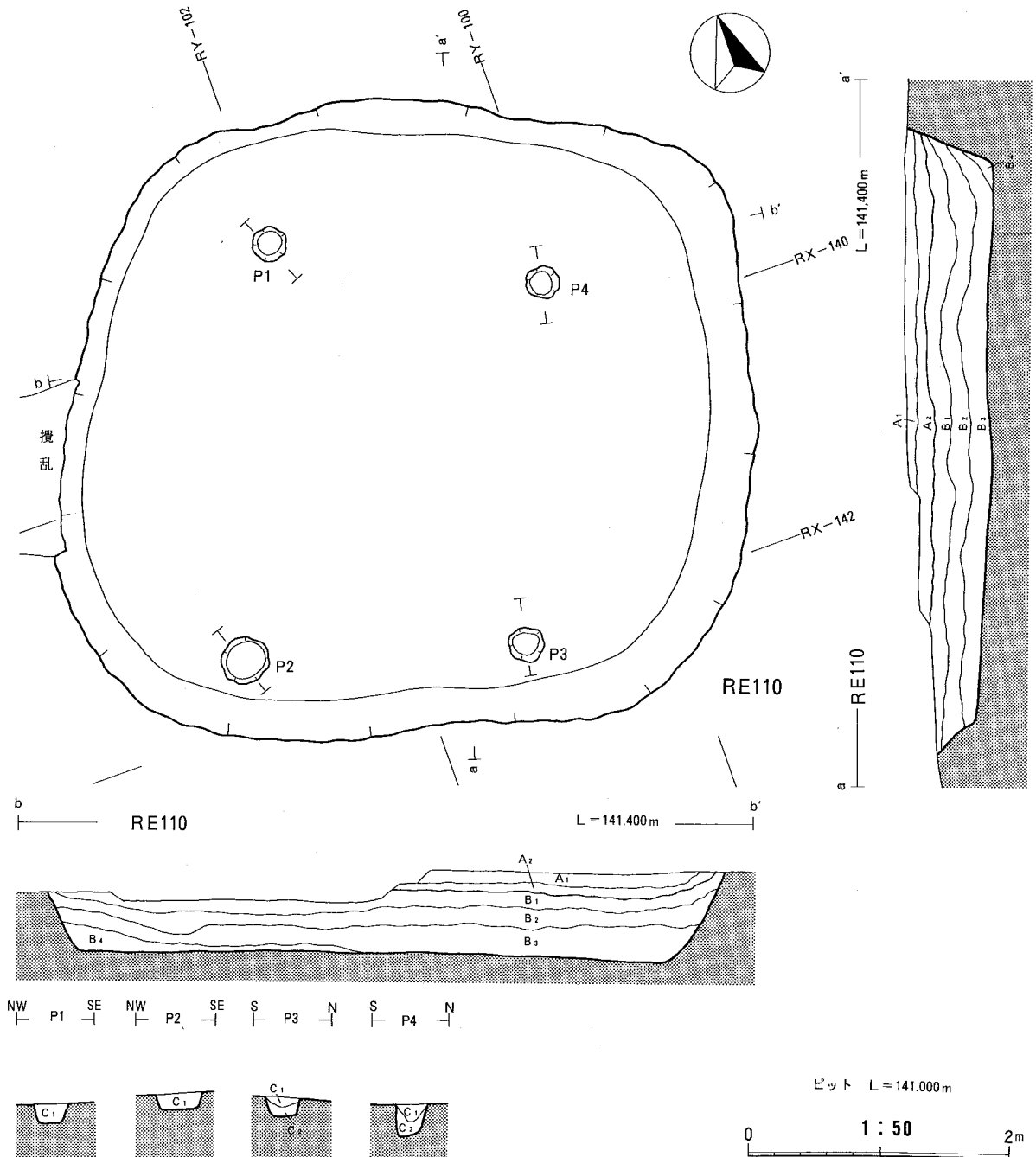
7もほぼ完形で、全体形は口縁部が外反し、頸部に軽い段を有し、体部には輪積みによる凹凸が目立ち、底部がややすぼまる形を呈する。器高22.6~23.3cm、口径20.0~20.5cm、底径8.9cmをはかり、器面調整は口縁部の内外面がヨコナデ、体部内外面がハケメを施す。また、外面全体と口縁部内面には煤が付着する。



第34図 RA109 竪穴住居跡出土遺物

RE110 竖穴跡 (第35図)

位置 調査区中央 平面形 方形 主軸方向 N22° E
 規模 北-南 上端5.03m・下端4.31m、東-西 上端4.82m・下端4.32m
 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
 埋土 A・B層に大別され、各層はさらに細別される。A層-砂礫層、B層-砂礫を含む褐色シルト
 壁の状態 検出面から床面までの深さは0.32~0.68mで、壁は外傾して直に立ち上がる。
 床の状態 ほぼ平坦。粘質シルト層を床面としている。

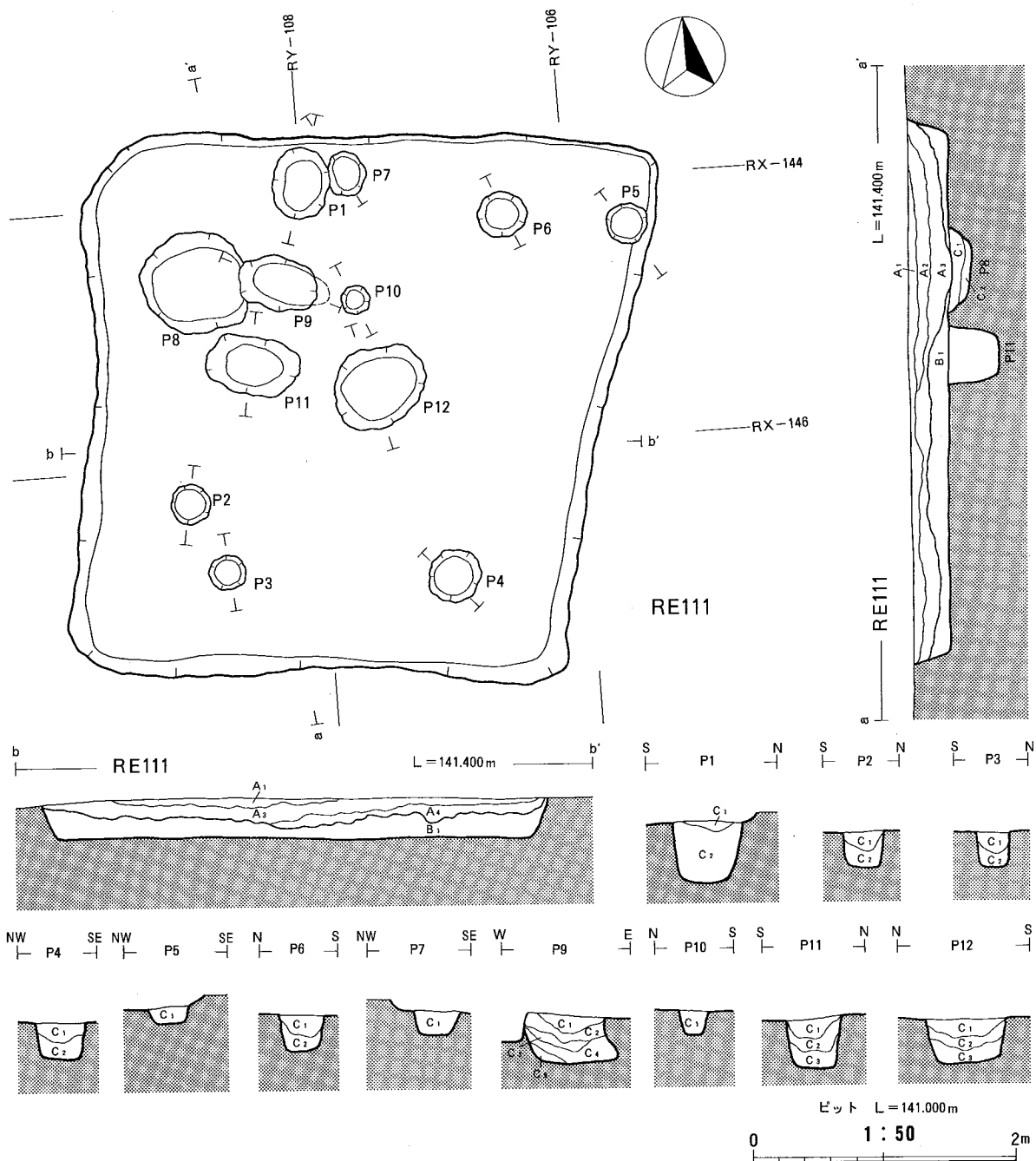


第35図 RE110 竖穴跡

ピット ピットは床面上で4口検出され、P1～P4は柱穴と考えられる。柱間は一間×一間である。
 各ピットの深さは、P1-0.14m・P2-0.16m・P3-0.17m・P4-0.26mである。
 出土遺物 土師器甕小片が出土している。

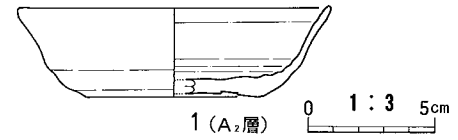
RE111 竪穴跡 (第36・37図)

位置 調査区中央 平面形 方形 主軸方向 N10° E
 規模 北-南 上端4.03~4.12m・下端3.87m~3.95m、東-西 上端3.78~4.36・下端3.51m~4.17m



第36図 RE111 竪穴跡

掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
 埋土 A・B層に大別される。
 A層-褐色シルト層
 B層-砂礫を含む褐色シルト層



第37図 RE 1 1 1 竪穴跡出土遺物

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.27~0.32mで、壁は外傾して直に立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。

ピット ピットは床面上で12口検出された。各ピットの深さは下記のとおりである。

P 1 -0.45m・P 2 -0.28m・P 3 -0.29m・P 4 -0.27m・P 5 -0.12m・P 6 -0.27m・P 7 -0.16m・P 8 -0.17m・P 9 -0.38m・P 10 -0.18m・P 11 -0.38m・P 12 -0.35m。

出土遺物 (第37図 1)

1は須恵器坏である。底部は回転ヘラ切り無調整で、口縁部外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。

RA 1 1 2 竪穴住居跡 (第38・39図)

位置 調査区中央 平面形 方形 主軸方向 E 8° N

規模 東-西 上端4.03~4.84m・下端3.78m~4.47m、南-北 上端4.02~4.39m・下端3.61m~3.98m

重複関係 RB 5 0 1 建物跡周溝に切られる 掘込面 削平

検出面 褐色シルト層上面

埋土 A~C層に大別され、各層はさらに細別される。A層-砂礫層、B層-砂礫を含む褐色シルト、C層-砂礫・褐色シルトが交互に重なる層。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.57~0.62mで、壁は外傾して直に立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦。粘質シルト層を床面としている。

かまど かまどは東壁中央北寄りに位置する。煙道平面形は溝状で、底面は煙出しから燃焼部に向かって緩やかに傾斜する。東壁から残存する煙道の長さは0.88m、幅0.33m以上、検出面から煙道底面までの深さは、0.29mをはかる。

ピット ピットは床面上で3口検出された。各ピットの深さは次のとおりである。P 1 -0.28m・P 2 -0.30m・P 3 -0.29m・

出土遺物 (第39図 1)

1は回転糸切無調整のあかやき土器坏である。体部外面には墨書が2カ所認められるが、判読不明である。

RE 1 1 3 竪穴跡 (第40・41図)

位置 調査区中央 平面形 長方形 主軸方向 N 27° W

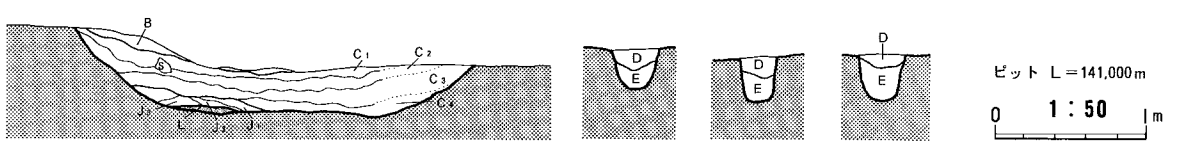
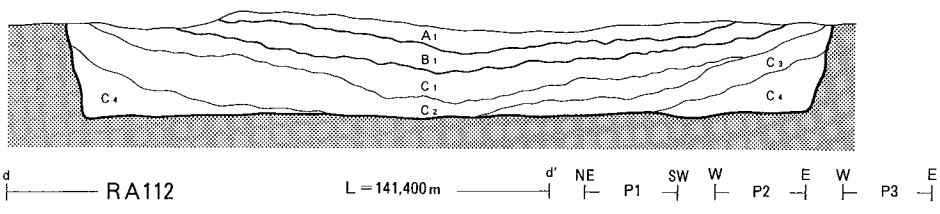
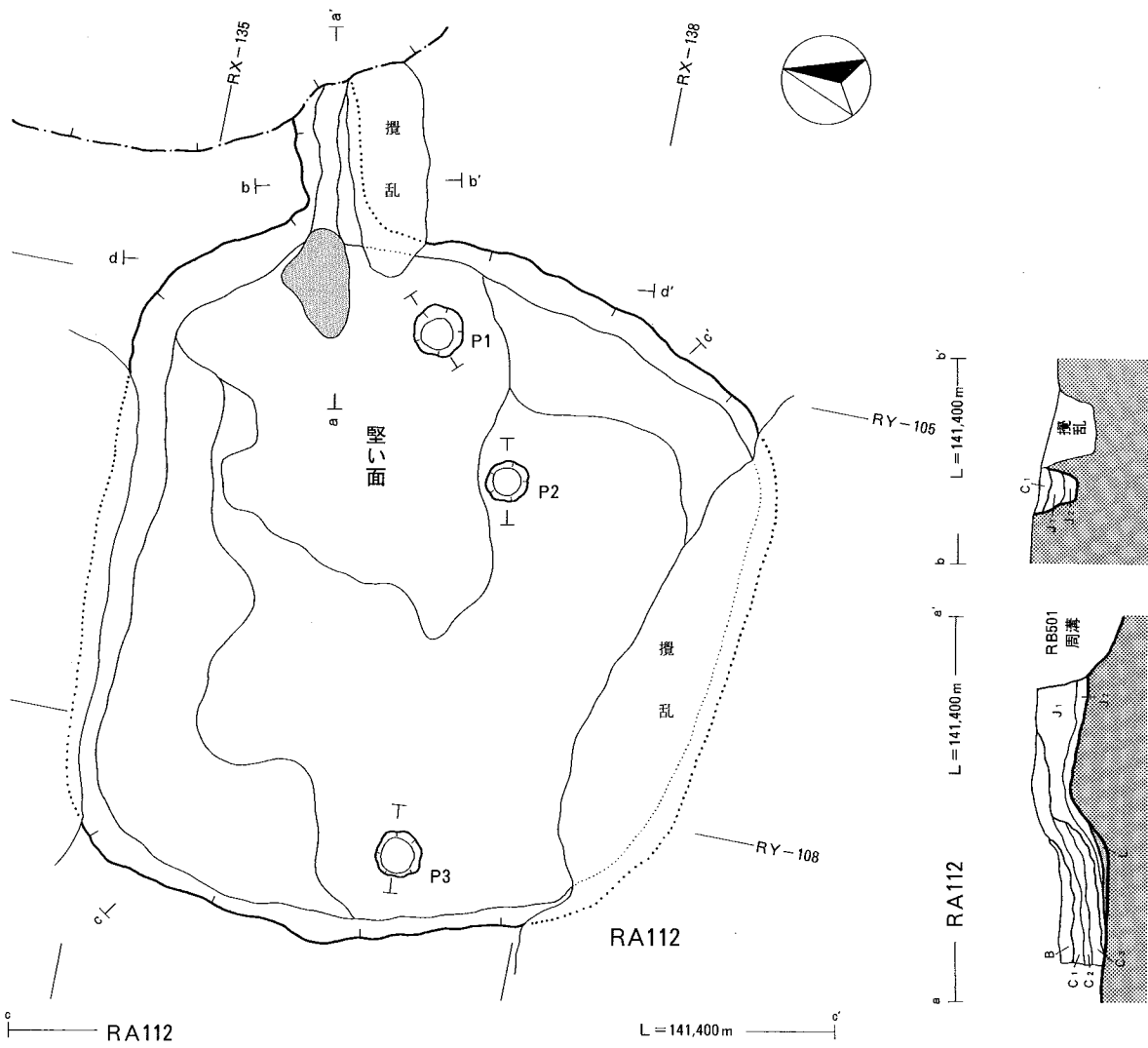
規模 長軸 上端3.85~4.18m・下端3.85m~4.18m、短軸 上端2.73m~2.89m・下端2.43m~2.52m

重複関係 RE 1 1 4 竪穴を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

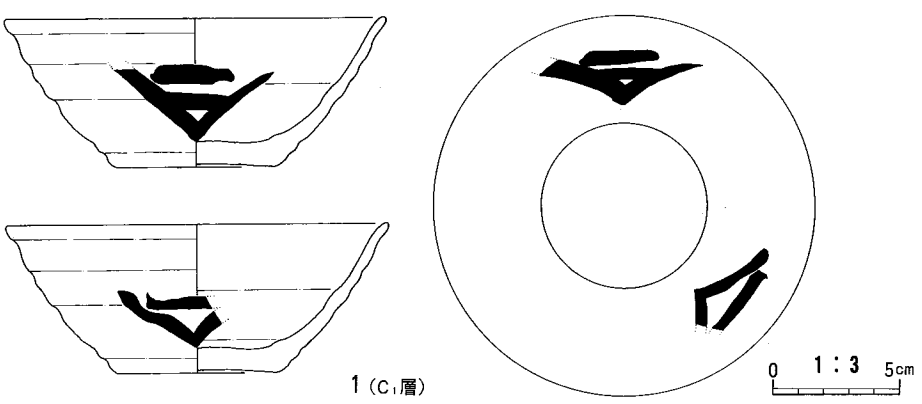
埋土 褐色シルトによる単層(A層)、A層はさらに細分され、A₁層に白色火山灰が微量含まれる。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.15~0.18mで、壁は外傾して立ち上がる。

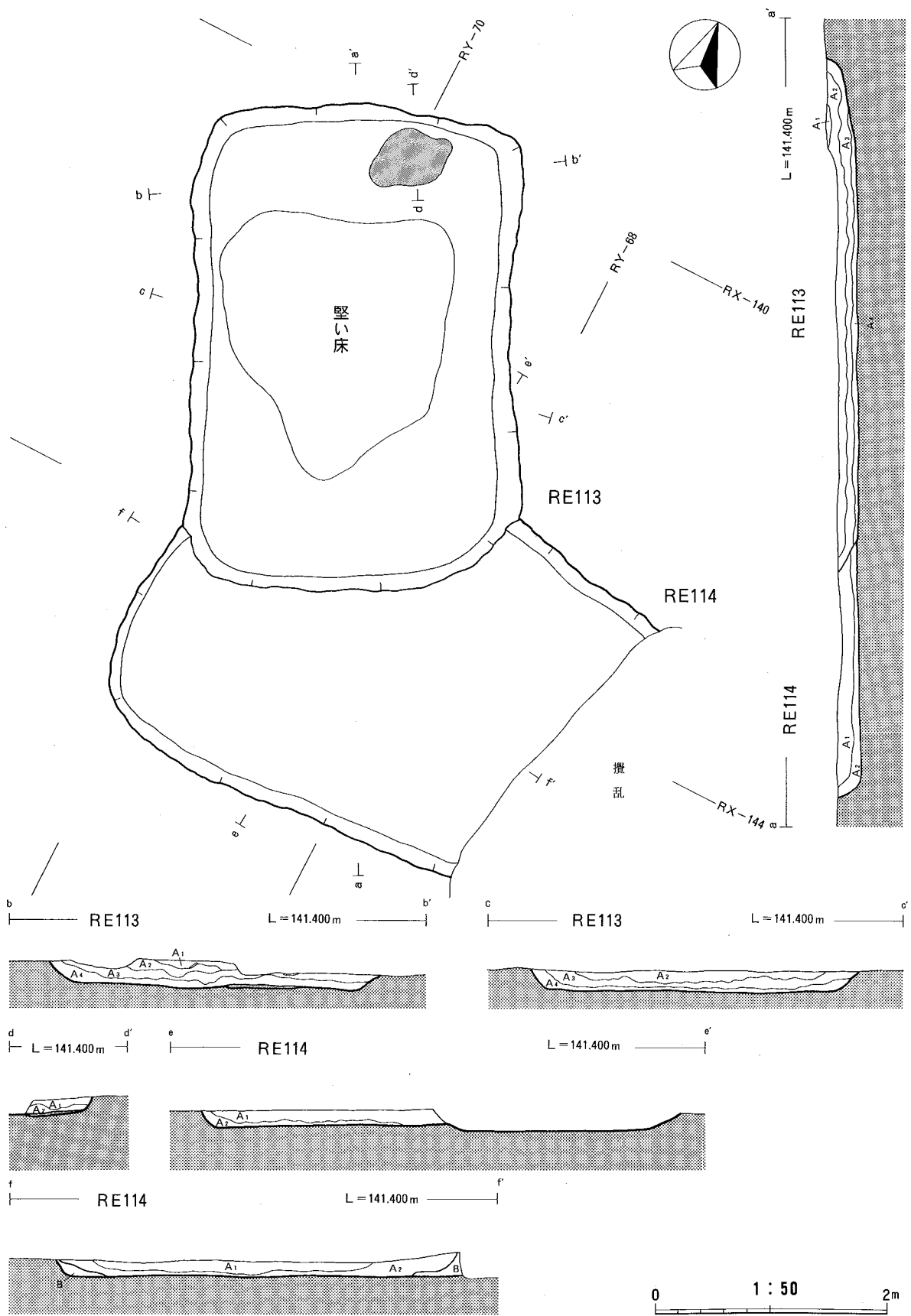
床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。



第38図 RA112 堅穴住居跡



第39図 RA112 堅穴住居跡出土遺物



第40図 RE113・114 堅穴跡

焼土 北壁寄りの床面より焼土が検出されている。規模は0.74m×0.54mである。

出土遺物 (第41図 1～6)

坏 1は回転糸切無調整のあかやき土器坏である。2は土師器高台付坏である。浅い内黒の坏部に、やや高く幅の広い高台部を貼する。内外面はヘラミガキを施す。口縁部は意図的に打ち欠いている。

小形甕 3はあかやき土器小形甕の底部である。残存高5.5cm、底径8.6cmをはかり、切離しは静止糸切である。内外面に煤が付着する。

甕4はあかやき土器長胴甕の口縁部である。外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナデを施す。外面に煤が付着する。5は土師器甕の口縁部である。残存高5.6cm、口径19.0cmをはかり、器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ調整、内面がヘラナデを施す。また、内外面には煤が付着する。

石製品 6は不整楕円を呈し、光沢を帯びる碁石状の小円礫である。材質は不明である。全長1.2～1.4cm、厚さ0.6cmをはかる。

RE114 竪穴跡 (第40・41図)

位置 調査区中央 平面形 長方形 主軸方向 W2°N

規模 長軸上端3.91m以上、短軸上端2.85～3.11m 重複関係 RE114 竪穴に切られる

掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

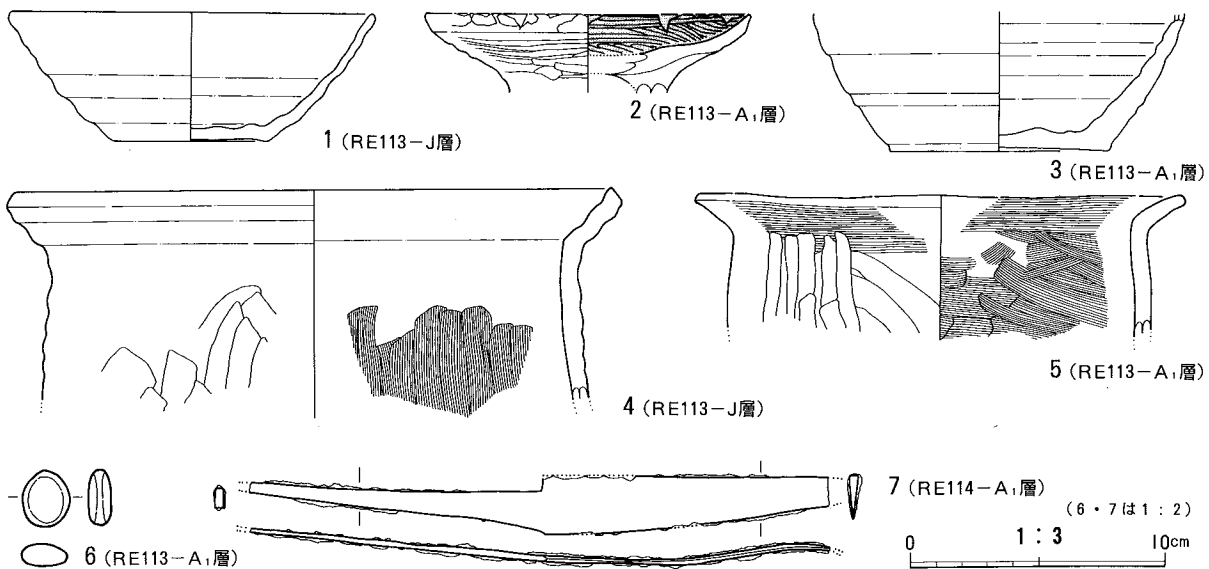
埋土 A・B層に大別され、A層は砂礫を含むシルト層、B層は褐色シルト層である。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.12～0.158mで、壁は外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。

出土遺物 (第41図 7)

切鉄製品 7は片関造りの刀子である。残存する長さは15.2cm、厚さ0.1～0.3cmをはかり、先が欠損する。茎(なかご)には目釘穴は見られない。



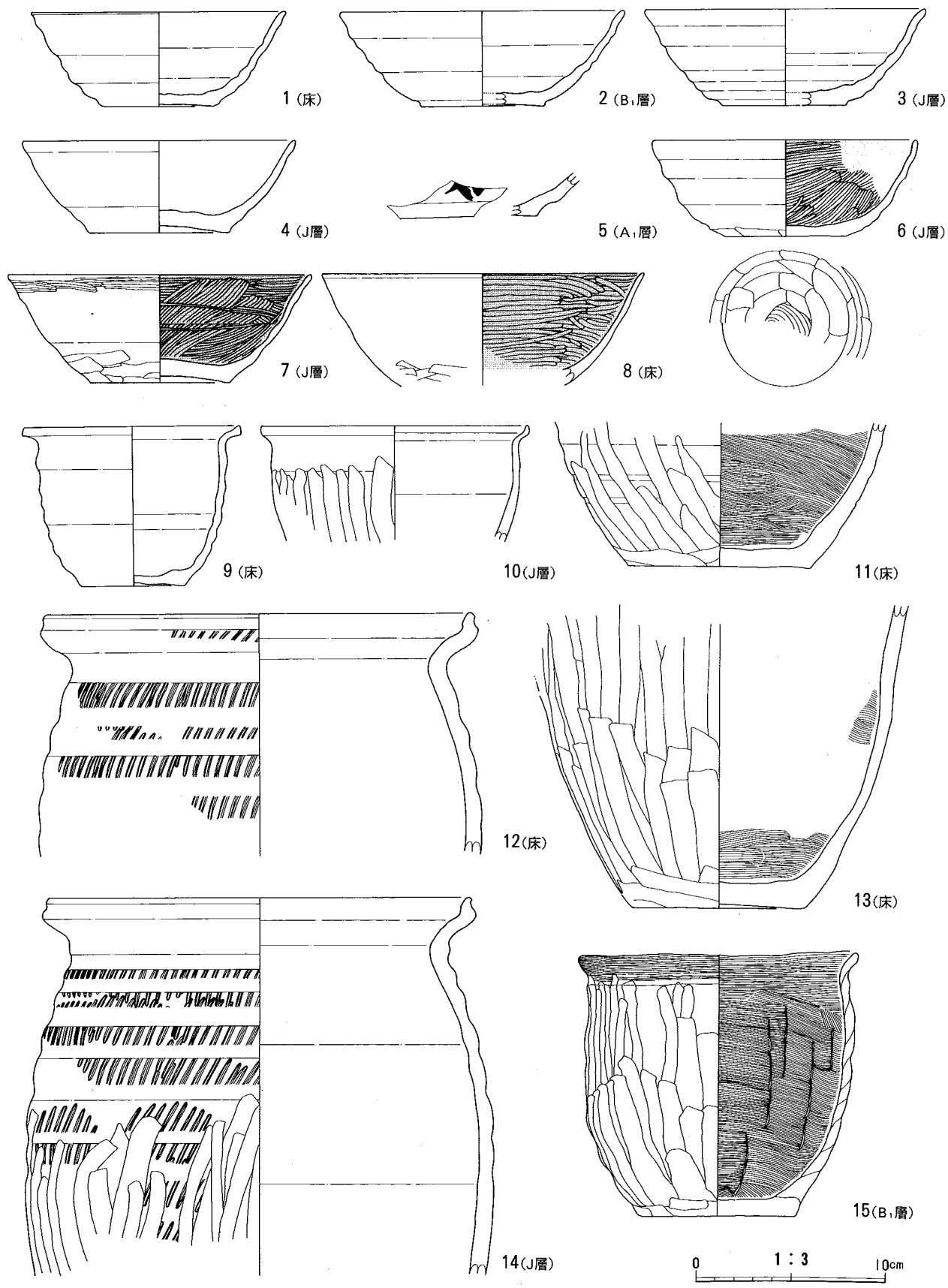
第41図 RE113・114 竪穴跡出土遺物

RA115 竪穴住居跡 (第42~44図)

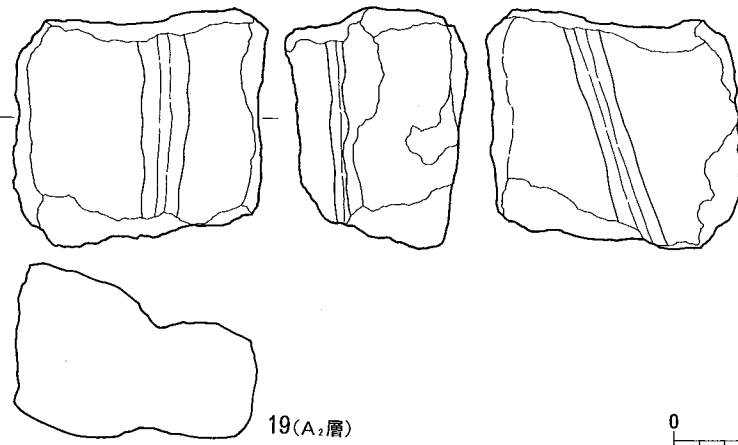
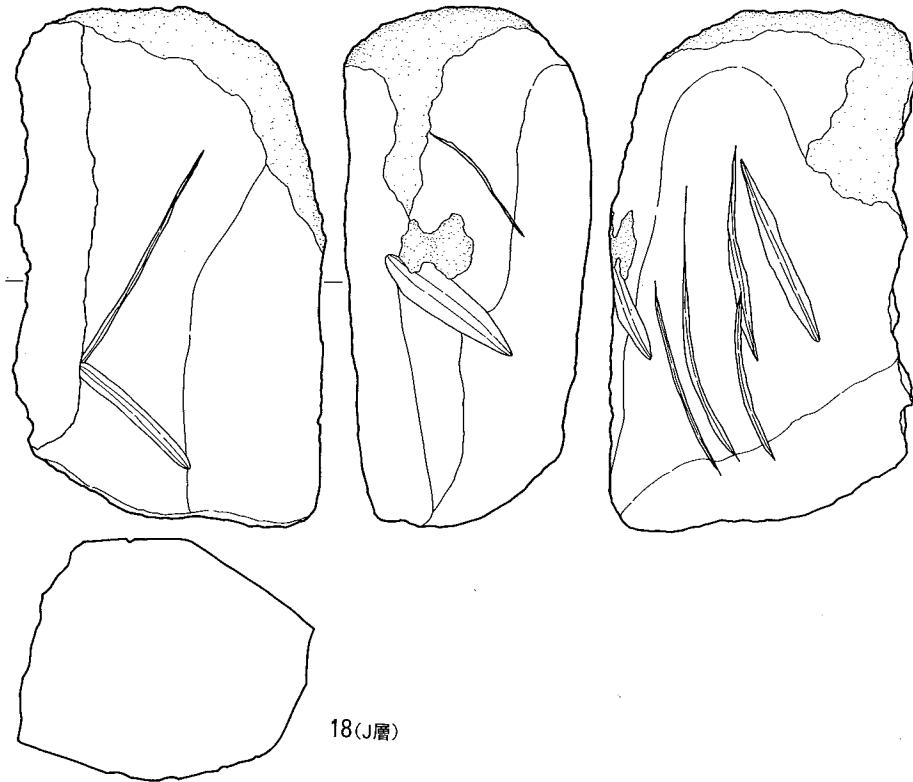
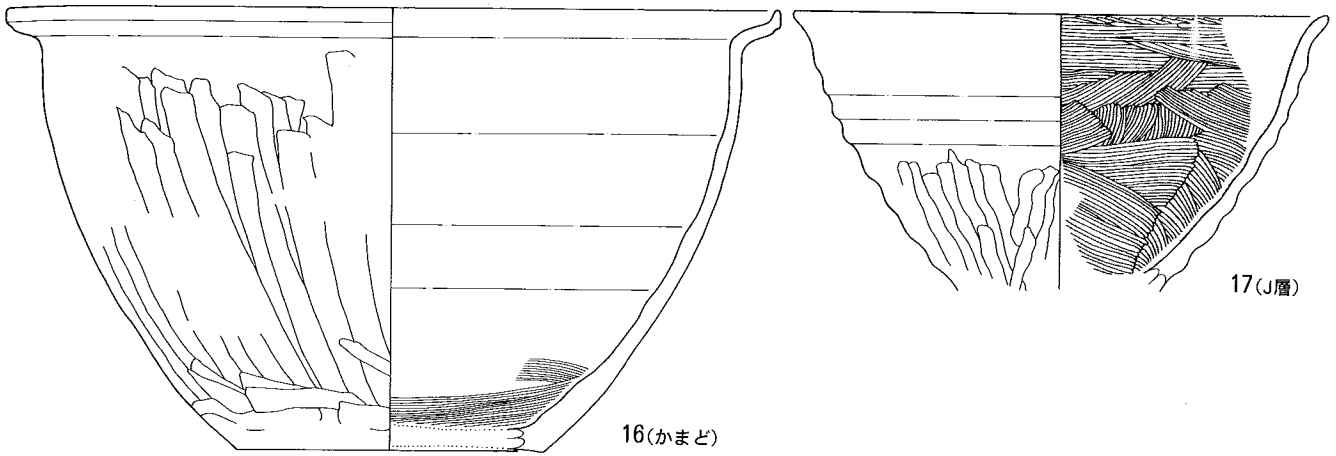
- 位置** 調査区北東 平面形 方形 主軸方向 E2°S
- 規模** 東-西上端4.38~4.51m、北-南4.88m以上
- 掘込面** 削平 検出面 砂礫層上面
- 埋土** A・B・E層に大別され、各層はさらに細別される。A層-白色火山灰を含む黒褐色土層、B層-褐色シルトを含む黒褐色土層、E層-床面構築土
- 壁の状態** 検出面から床面までの深さは0.19~0.27mで、壁は外傾して立ち上がる。
- 床の状態** ほぼ平坦。黄褐色粘土・シルト・砂礫による混合土で床面を構築する。
- かまど** かまどは東壁中央に位置する。煙道平面形は溝状で、底面はほぼ平坦である。東壁から煙出しの先端までの煙道の長さは0.59m、幅0.23~0.32m、検出面から煙道底面までの深さは、先端部で0.21mをはかる。
- 燃焼部** かまどは、芯材として角礫などの石材を用い、褐色シルト・黄褐色粘質土・白色粘土の混合土(K層)で構築する。規模は焚口-煙道基部0.69m・基部幅1.27m・残存高0.19mをはかる。
- ピット** ピットは床面上で1口検出され(P1)、規模は1.12m×0.91mの楕円形を呈し、深さ0.12mをはかる。

出土遺物 (第43・44図1~19)

- 坏** 1・2は須恵器坏である。1は床面より出土しており、静止糸切無調整である。2は回転糸切無調整である。3~5はいずれも糸切無調整のあかやき土器坏である。3は外面に火を受けており、一部剥落している。また、内面はやや摩滅する。4は静止糸切で内外面ともにやや摩滅する。5は体部に墨書文字が認められるが、判読不明である。
- 6~8は土師器坏である。6は回転糸切後に体部下端~底部全面にかけて手持ちヘラケズリ調整を施す。外面には重ね焼きによる黒斑が見られる。7は口縁部の外面にもヘラミガキを施しており、静止糸切後に体部下端のみに手持ちヘラケズリ調整を施す。また、外面には重ね焼きによる黒斑が見られる。8は底部を欠損するが、外面下端に手持ちヘラケズリ調整を施す。外面はやや摩滅する。
- 小形甕** 9・10は内外面に煤が付着するあかやき土器小形甕である。9は口縁部~底部まで残存するが、約1/2を欠損し底部の切離しは回転糸切である。器高8.4cm、口径11.4cm、底径5.4cmをはかり、最大径は口縁部に有する。10は口縁部~体部下半の破片で、残存高6.1cm、口径14.0cmをはかる。外面の体部はヘラケズリ調整を施す。
- 甕** 11~14はあかやき土器長胴甕である。11は体部下半~底部にかけて残存しており、残存高7.6cm、底径9.6cmをはかる。体部外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナデを施し、底部には砂が付着する。12は口縁部~体部上半にかけて残存しており、残存高12.7cm、口径22.2cmをはかる。体部外面はロクロナデを施すがタタキ痕が残る。また、内外面には煤が付着する。13は体部下半~底部にかけて残存しており、残存高16.1cm、底径9.0cmをはかる。体部外面はヘラケズリ調整、内面はヘラナデを施す。また、胎土には1~3cmの砂礫が多量に混入し、内外面には多量の煤が付着する。14は口縁部~体部下半にかけて残存しており、残存高20.0cm、口径22.2cm、最大径24.8cmをはかり、最大径を体部中央に持つ。外面の体部上半はロクロナデを施すがタタキ痕が残る、下半はヘラケズリ調整を施す。また、外面には多量の煤が付着する。



第43図 RA 1 1 5 竪穴住居跡出土遺物 (1)



(18・19は1:2)
0 1:3 10cm

第44図 RA115 竪穴住居跡出土遺物(2)

小形甕 15はほぼ完形の土師器小形甕である。口縁部は短く外反しながら頸部に軽い段を有し、緩く湾曲しながら底部へつながる。器高13.3~14.1cm、口径14.4~14.6cm、底径7.9~8.5cmをはかり、最大径は口縁部に有する。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ調整、内面がヘラナデを施す。また、内外面には多量の煤が付着するが、外面の体部下半は火熱を受けて、一部剥落する。

鉢 16はあかやき土器鉢である。口縁部~底部周辺にかけて残存するが、約1/3を欠損する。器高17.5cm、口径30.4cm、底径12.2cmをはかり、最大径は口縁部に有する。器面調整は体部外面がヘラケズリ調整、内面底部付近がヘラナデを施す。また、内外面には煤が付着する。

17は土師器鉢である。外面の体部下半にヘラケズリ調整、内面には丁寧なヘラミガキを施す。外面に煤が付着する。

石製品 18・19は溶岩質安山岩製の砥石である。18は四角柱状を呈しており、3面に使用痕が認められ、磨面や深い条痕を残す。19は楕円礫状で3面に使用痕が認められる。

RA116 竪穴住居跡 (第45・46図)

位置 調査区北西 **平面形** 方形 **主軸方向** E 42° S

規模 北西-南東 上端5.13~5.19m・下端4.62m~4.70m
北東-南西 上端4.55~5.33m・下端3.99m~4.82m

掘込面 褐色シルト層上面 (C層) ?

検出面 褐色シルト層上面

埋土 A・B層に大別され、各層はさらに細別される。A層-砂礫層、B層-粗い砂粒を多量に含む褐色シルト層。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.41~0.59mで、壁は外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦。粘質シルト層を床面としている。

かまど かまどは南東壁中央に位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部から煙出し部に向かって
煙道 緩やかに傾斜し、煙道天井・側面は角・円礫による石組みで補強される。南東壁から煙出穴中央までの煙道の長さは0.77m、煙道掘込みの幅0.66~0.72m、検出面から煙道底面までの深さは、先端部で0.59m、煙道中間では煙道天井部・壁面を石材で囲い、さらに褐色シルトで石組み部を0.21m程覆う。天井石下面から底面までの深さは0.24mをはかる。

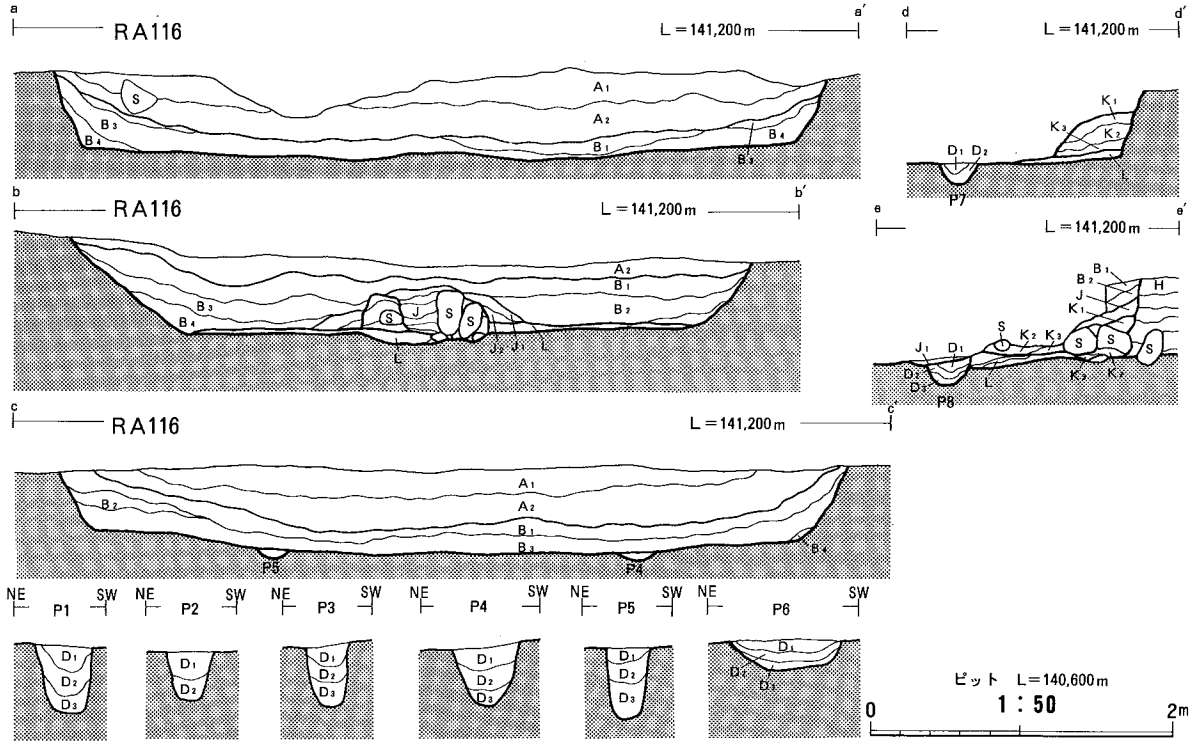
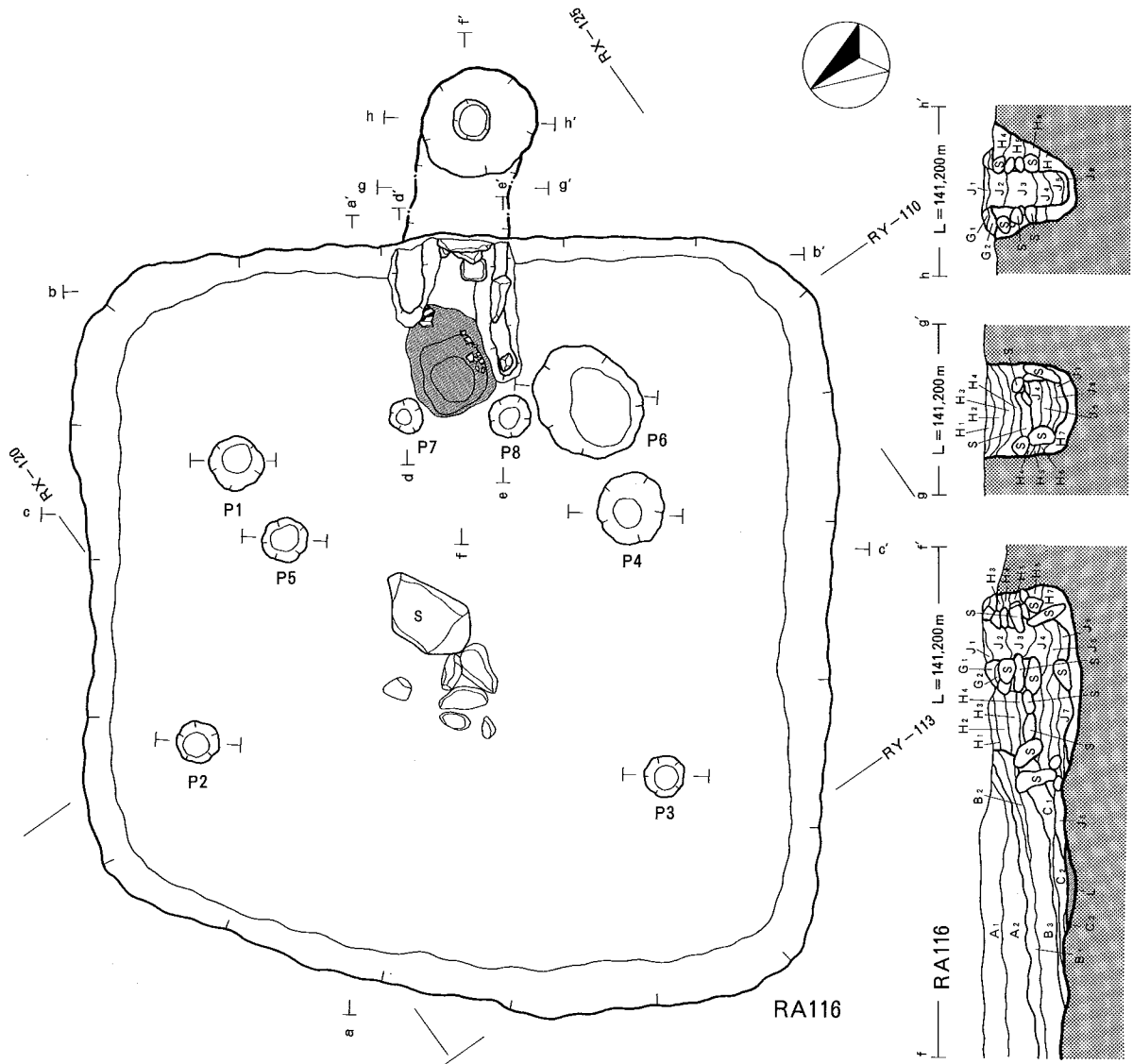
燃焼部 かまどは、芯材として角礫などの石材を用い、褐色シルト・粘質土の混合土 (K層) で構築する。残存するかまど基底部 (そで) の延長上にはP7・8がある。おそらくは芯材を埋設するための掘込みと考えられ、そでとピットの中間に範囲0.76m×0.58mの火床面が認められる。

P7・8間の線上を焚口とした規模は、焚口-煙道基部1.26m・基底部幅0.90m・残存高0.34mをはかる。

ピット ピットは床面上で8口検出され、柱穴と考えられるピットはP1~P4で、柱間は一間×一間である。各ピットの深さは次のとおりである。P1-0.43m・P2-0.32m・P3-0.41m・P4-0.38m・P5-0.48m・P6-0.24m・P7-0.14m・P8-0.16m。

出土遺物 (第46図1~3)

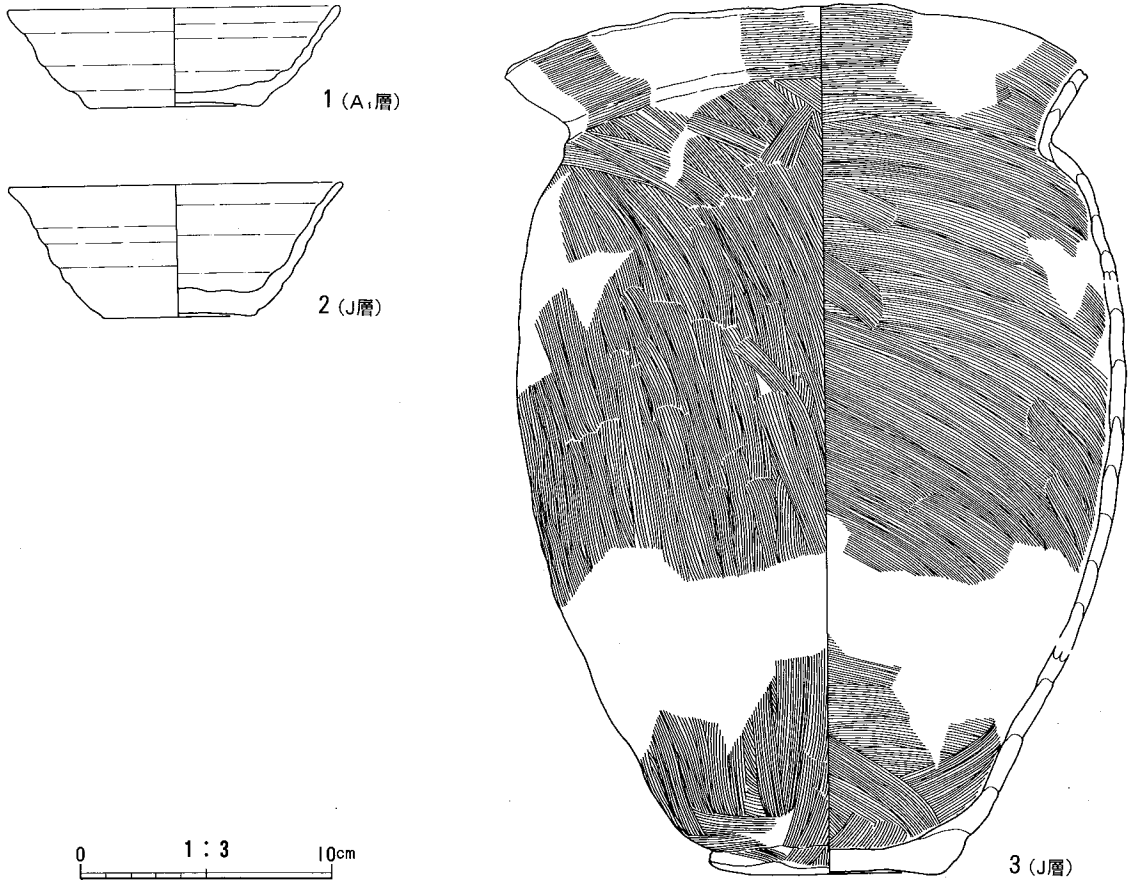
坏 1は回転糸切無調整の須恵器坏である。2は床面出土の回転糸切無調整のあかやき土器坏である。



第45図 RA116 竖穴住居跡

甕

3は砂底の土師器長胴甕である。口縁部～底部にかけて残存するが、約1/3を欠損する。口縁部は大きく開き、頸部に軽い段を有し、緩く湾曲しながら底部へつながる。器高27.7～34.3cm、口径19.0～22.4cm、最大径24.1cm、底径9.8～10.0cmをはかり、最大径は体部中央に有するが、歪みが非常に大きいものである。器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部は内外面ともにヘラナデを施す。また、内外面に煤が付着する。



第46図 RA 1 1 6 竪穴住居跡出土遺物

RA117 竪穴住居跡 (第47図)

位置 調査区北 平面形 方形 主軸方向 N6° E
 規模 北-南 上端3.06~3.25m・下端2.91m~3.05m、東-西 上端3.62~3.81m・下端3.51m~3.62m

掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 A・B層に大別され、各層はさらに細別される。A層-白色火山灰を含む黒褐色土層、B層-褐色シルトを含む黒褐色土層。

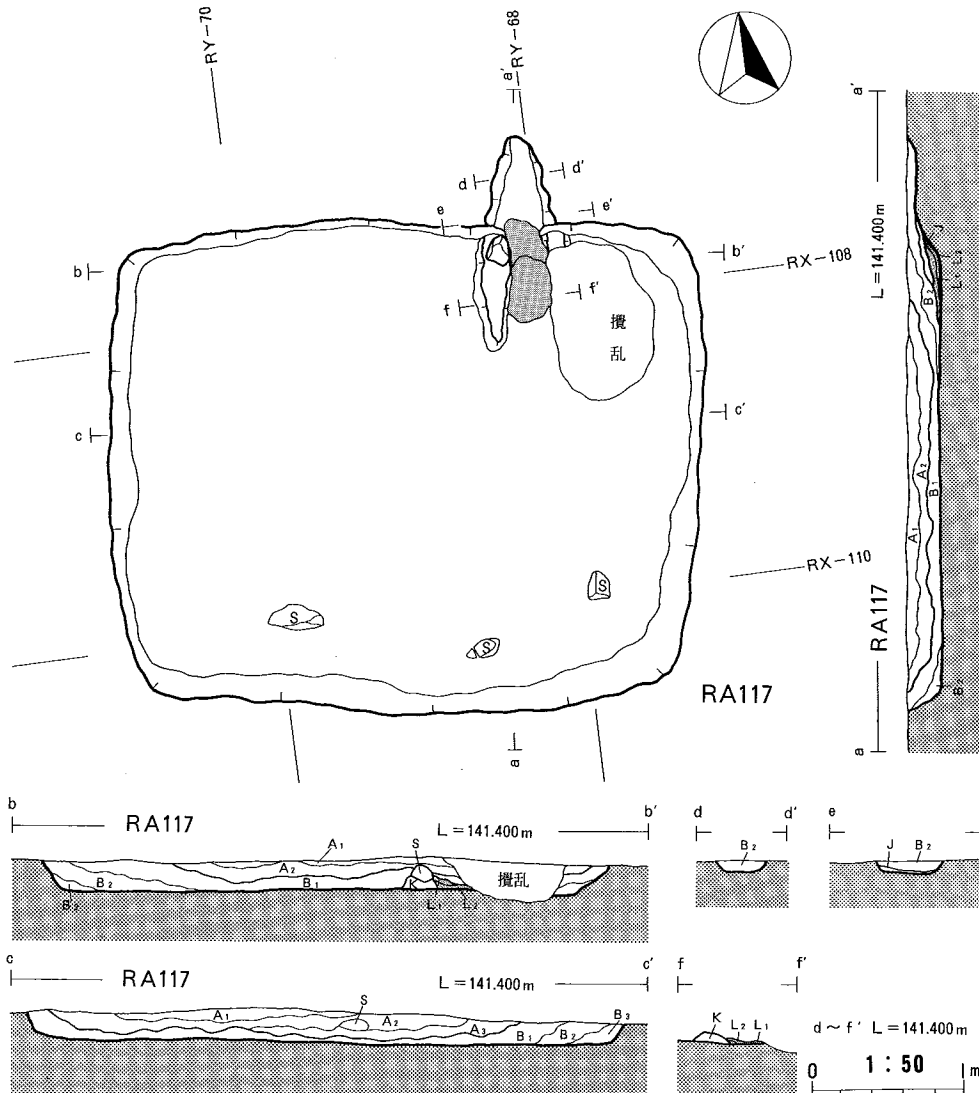
壁の状態 検出面から床面までの深さは0.13~0.22mで、壁は外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦

かまど かまどは北壁中央に位置する。煙道平面形は溝状で、底面はほぼ平坦である。北壁から残存する煙道の長さは0.61m、幅0.19~0.48m、検出面から煙道底面までの深さは、0.09mをはかる。

かまど基底部分は西側が残存し、長さ0.77m・幅0.19m・高さ0.06mをはかり、火床面は0.43m×0.32mの範囲で拡がる。

出土遺物 かまど周辺よりあかやき土器坏、土師器甕小片が少量出土している。



第47図 RA117 竪穴住居跡

(2) 中・近世の遺構と遺物

北東部 中・近世の遺構は、調査区全域に分布しているが、遺構別にまとまりを持つことが確認されている。調査区北部ではRG502・503溝跡が検出され、RG502は方形に、RG503はRG502北辺の東延長線上に延びる溝であり施設を囲う周溝であった可能性がある。

中央部 中央部ではRE502～507竪穴、ピット群(P44～139)が集中し、西側にはRB501建物跡が構築される。RB501建物跡は二間×三間の正方形を呈した建物跡で、周囲は溝で囲まれる。周溝からは12～13世紀の所産と思われるかわらけや陶器片が出土していることから建物跡も同時期または近い時期のものと考えられる。

南西部 南西部ではRB502建物跡を中心とした掘立柱建物群が検出された。出土遺物がないため時期は不明であるが、RB502は3面に庇を持つ母屋桁行3間×梁間2間の総柱建物で、桁行1間が約9尺、梁間1間が約7尺をはかる。近世の建物では類例を見ない構造であることから中世の建物跡と考えられる。さらに、棟方向を同じくするRB503も同時期の建物と考えられる。

RB501掘立柱建物跡. RG501・508溝跡 (第48～50・68図)

平面形 桁行3間、梁間2間(正方形)

規模 南北2間(4.33m・14尺4寸)、東西3間(4.29m・14尺)

重複関係 RD505土坑に切られ、RE101竪穴(奈良時代)・RA112竪穴住居(平安時代)を切る。

棟方向 北側柱列でE7°S

柱間寸法 北側柱列でP1・2間が1.45m(5尺)、P2・3間が1.30m(4尺)、P3・4間が1.47m(5尺)、南側柱列でP9・8間が1.46m(5尺)、P8・7間が1.32m(4尺)、P7・6間が1.46m(5尺)、西側柱列でP4・5間が2.09m(7尺)、P5・6間が2.42m(8尺)、東側柱列で、P1・10間が2.19m(7尺)、P10・9間が2.17m(7尺)をはかる。

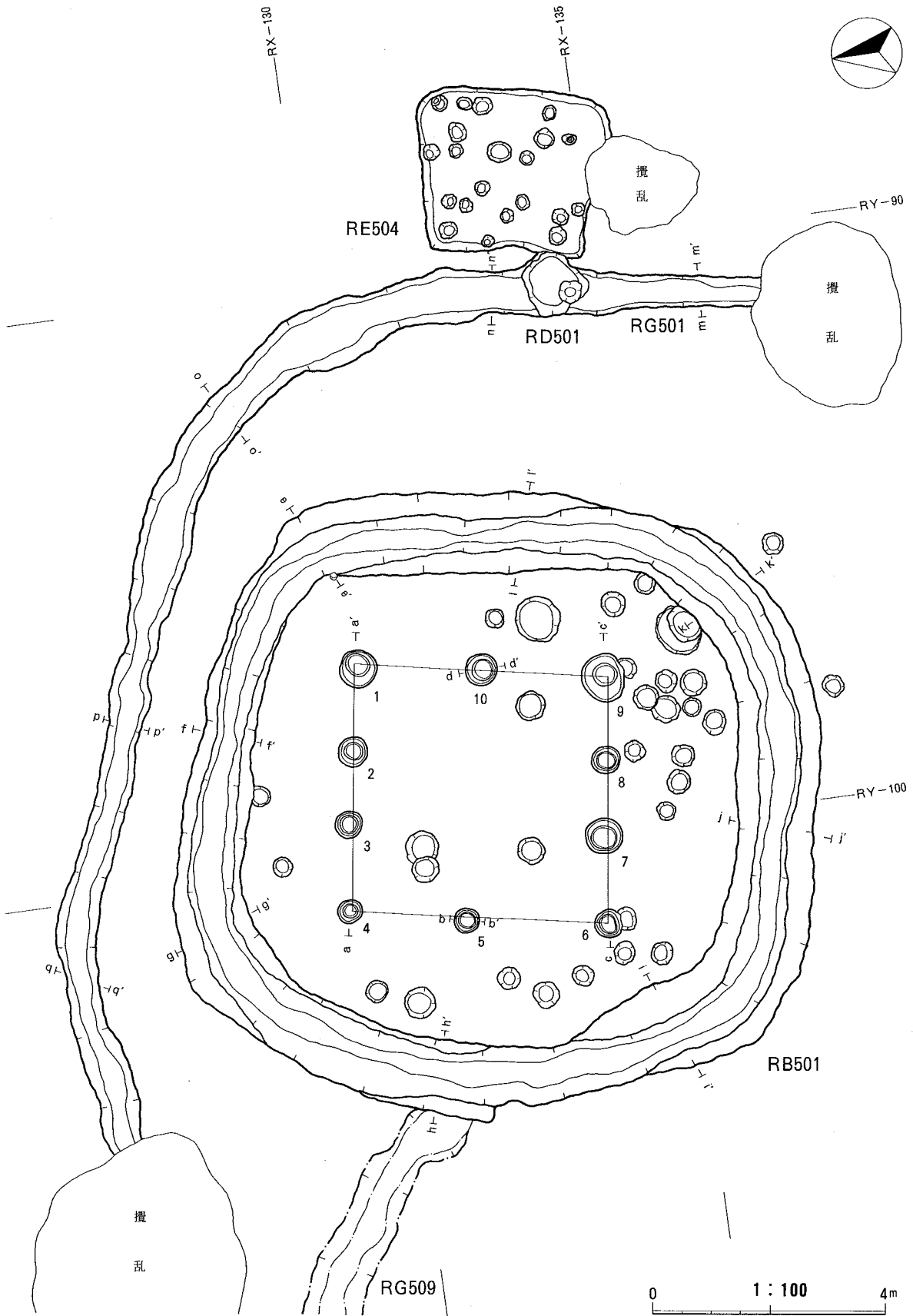
柱穴 P1～10すべての柱穴より柱痕跡が確認された。掘方径は0.50m前後、柱痕跡径は0.30m前後をはかる。柱痕跡からは多量の炭化物が検出され、掘方埋土は暗褐色土、粘質土を含む褐色シルトである。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P1-0.50m・P2-0.45m・P3-0.49m・P4-0.38m・P5-0.30m・P6-0.50m・
P7-0.39m・P8-0.51m・P9-0.50m・P10-0.32m。

周溝 幅0.80m前後、深さ0.30～0.55mの周溝が建物を囲う。埋土はA・B層に大別される。A₁層は砂礫を多量に含む黒色土層、A₂層は砂礫・黒色土の混合土層である。B₁層は炭化物を多量に含む黒色土層である。

RG501溝跡 RG501溝跡は、RB501周溝の北辺～北東コーナーを囲う浅い溝である。幅0.55m前後、深さ0.10～0.19mをはかり、埋土は礫・炭化物を含む黒色土である。

RG508溝跡(第68図) RB501周溝西辺より延びる溝と考えられる。接点の新旧関係を明らかに出来なかったが、埋土A層が礫を含む黒色土層、B層が炭化物を多量に含むシルト・黒色土の混合土で、RB501周溝の埋土と近似することから関連遺構と思われる。幅1.10m前後、深さ0.32～0.38mをはかる。



第48图 RB501 掘立柱建物跡・周溝、RG501 溝跡

遺物の出土状況 遺物はかわらけ、陶器が周溝より出土している。図示されたかわらけは、周溝壁際より貼り付くように出土している。その他にもA・B層よりかわらけの細片が出土している。

出土遺物（第50図1～3）

かわらけ 1・2は底部の切離しが糸切で、ロクロ使用のかわらけである。掘立柱建物跡をめぐる周溝内より出土したもので、1は完形で、器高1.8～2.0cm、口径8.9～9.2cm、底径6.3～6.8cmをはかり、内面底部に渦巻き状の沈線を施す。2は口縁部～底部にかけて残存するが、約2/3を欠損する。

波状文壺 3は珠洲産と考えられる陶器片で、波状文壺体部上半の破片と考えられる。

1～3の出土遺物の時期は12世紀末～13世紀前半頃のものとして推定され、周溝埋土上面より出土したことから、RB501掘立柱建物跡は遺物の年代より若干古い時期の建物跡と考えられる。

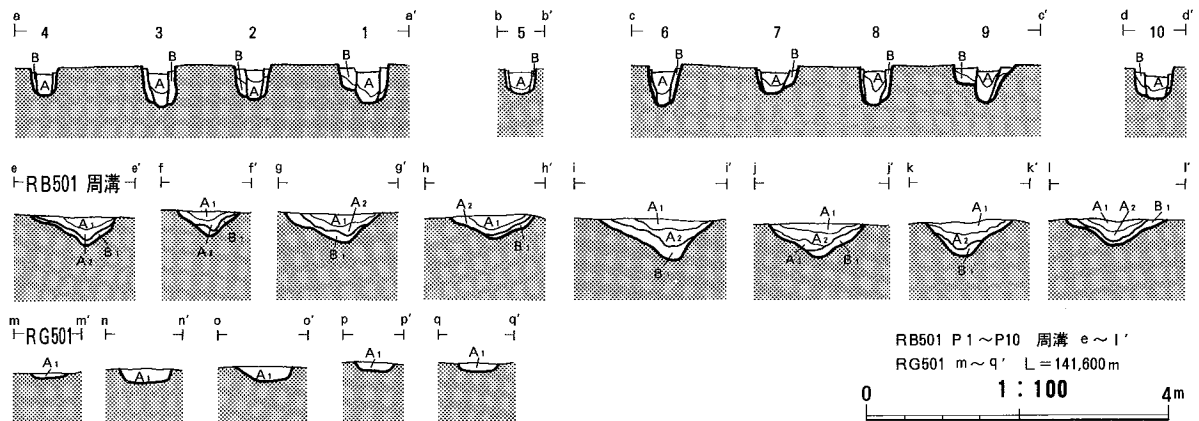
RB502掘立柱建物跡（第51図）

平面形 3面庇建物跡。母屋桁行3間・梁間2間、庇桁行4間・梁間4間（長方形）

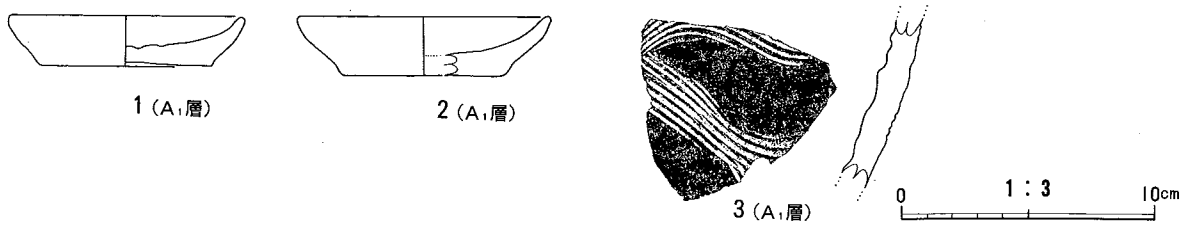
規模 母屋南北3間（9.80m・32尺6寸）、東西2間（4.33m・14尺4寸） 重複関係 なし

棟方向 東側柱列でN16°E

柱間寸法 西側柱列はP1・2間-4.24m（14尺）、P2・3間-2.89m（9尺6寸）、P3・4間-2.80m（9尺3寸）。東側柱列はP8・9間-1.55m（5尺）、P9・10間-2.30m（7尺6寸）、P10・11間-3.18m（10尺5寸）、P11・12間-2.75m（9尺）。北側柱列はP1・5間-2.03m（7尺）、



第49図 RB501掘立柱建物跡・周溝、RG501溝跡土層断面

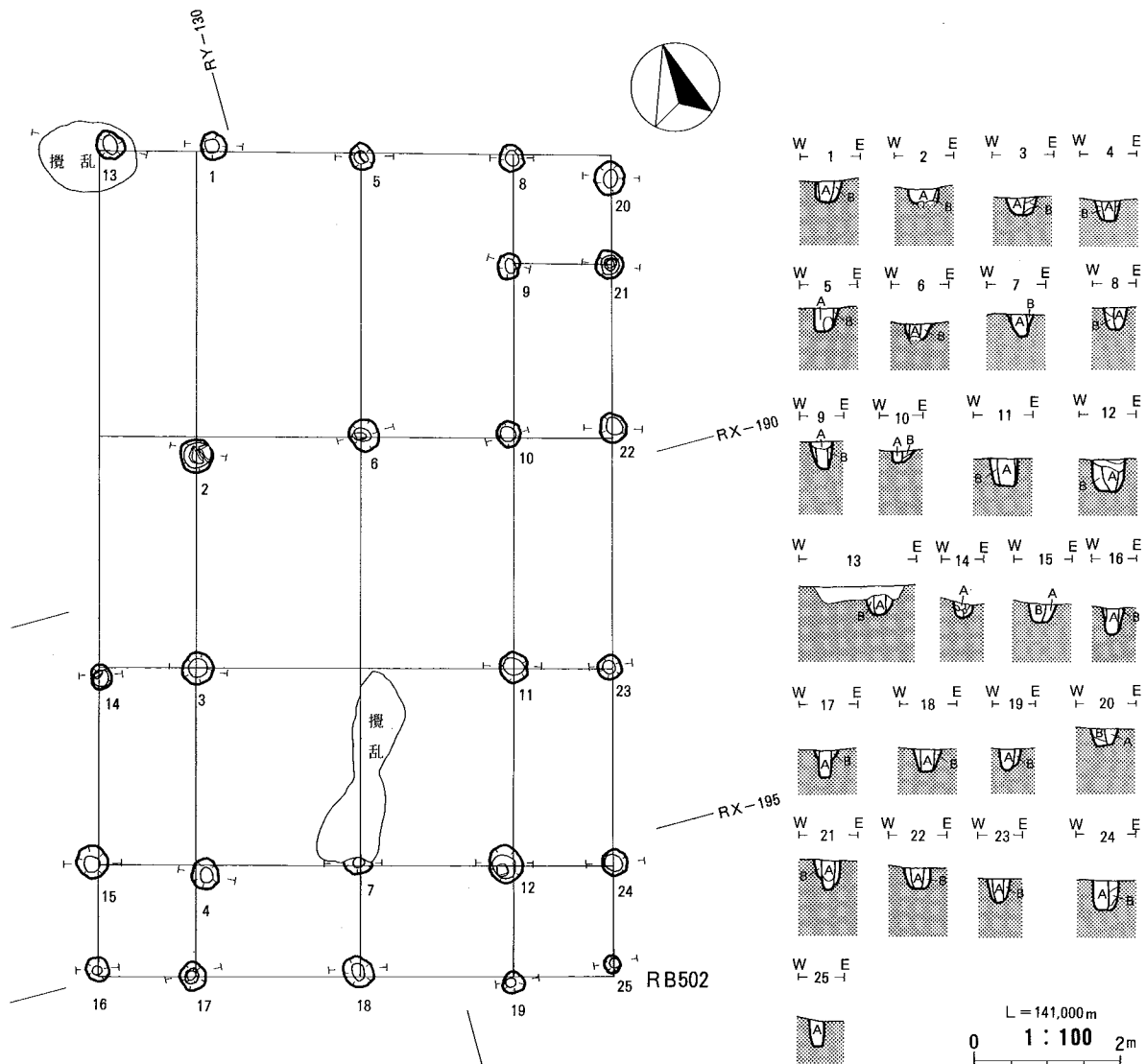


第50図 RB501掘立柱建物跡・周溝出土遺物

P 5・8間-2.09m(7尺)。南側柱列は、P 4・7間-2.11m(7尺)、P 7・12間-2.00m(6尺6寸)。間仕切は、P 2・6間-2.29m(7尺6寸)、P 6・10間-2.09m(7尺)である。

底の柱間は西側柱列でP 14・15間-2.13m(7尺)、P 15・16間-1.55m(5尺)、東側柱列はP 20・21間-1.19m(4尺)、P 21・22間-2.29m(7尺6寸)、P 22・23間-3.31m(11尺)、P 23・24間-2.65m(9尺)、P 24・25間-1.36m(4尺5寸)、南側柱列はP 16・17間-1.29m(4尺)、P 17・18間-2.31m(7尺7寸)、P 18・19間-2.10m(7尺)、P 19・25間-1.43m(4尺7寸)である。

柱 穴 P 1~25すべての柱穴より柱痕跡が確認された。掘方径は0.41~0.50m前後、柱痕跡径は0.20m前後をはかる。柱痕跡からは多量の炭化物が検出され、掘方埋土は黒褐色土、粘質土を含む褐色シルトである。なお、RB 5 0 2掘立柱建物跡からの出土遺物はない。各柱穴の深さは以下のおりである。



第51図 RB 5 0 2 掘立柱建物跡

P 1 - 0.30m • P 2 - 0.19m • P 3 - 0.20m • P 4 - 0.25m • P 5 - 0.30m • P 6 - 0.20m •
 P 7 - 0.28m • P 8 - 0.31m • P 9 - 0.38m • P 10 - 0.18m • P 11 - 0.37m • P 12 - 0.45m •
 P 13 - 0.38m • P 14 - 0.18m • P 15 - 0.26m • P 16 - 0.35m • P 17 - 0.37m • P 18 - 0.29m •
 P 19 - 0.30m • P 20 - 0.25m • P 21 - 0.41m • P 22 - 0.28m • P 23 - 0.30m • P 24 - 0.39m •
 P 25 - 0.32m。

RB 5 0 3 掘立柱建物跡 (第52図)

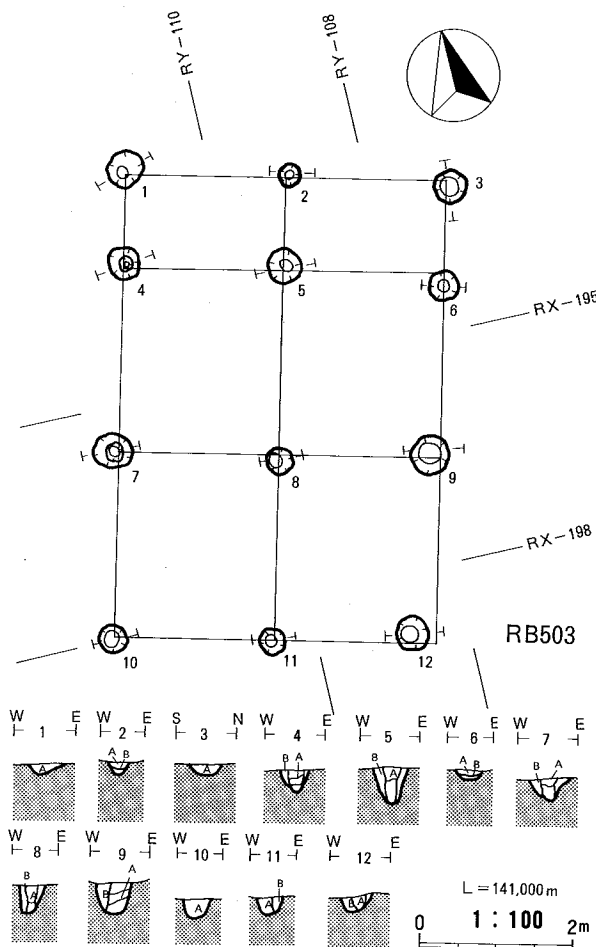
平面形 2面底建物跡?。母屋桁行2間・梁間2間、庇梁間2間(長方形)
 規模 母屋南北2間(4.89m・16尺)、東西2間(3.98m・13尺2寸) **重複関係** なし
 棟方向 東側柱列でN14° E
 柱間寸法 西側柱列はP 4・7間-2.45m(8尺)、P 7・10間-2.51m(8尺3寸)、東側柱列はP 6・9間-2.19m(7尺2寸)、P 9・12間-2.38m(8尺)、北側柱列はP 4・5間-2.11m(7尺)、P 5・6間-2.10m(7尺)。南側柱列は、P 10・11間-2.09m(7尺)、P 11・12間-1.81m(6尺)。

間仕切は、P 7・8間-2.11m(7尺)、P 8・9間-2.09m(7尺)である。庇の柱間は北側柱列でP 1・2間-2.21m(7尺3寸)、P 2・3間-2.18m(7尺2寸)、P 1・4間-1.18m(4尺)、P 2・5間-1.21m(4尺)、P 3・6間-1.35m(4尺5寸)である。

また、南側柱列の南に接するP 188・189・190も建物を構成する柱穴と考えられるが、P 188がP 10と1.21m(4尺)の間尺であるのに対し、南東隅と思われるP 190がP 12と0.89m(3尺)しか間尺がないことから別個の柱穴として考えたものである。

柱 穴 P 4・5・7~9・11・12の柱穴より柱痕跡が確認された。掘方径は0.32~0.53m前後、柱痕跡径は0.20m前後をはかる。柱穴の埋土はRB 5 0 2掘立柱建物跡の柱穴と共通し、柱痕跡からは多量の炭化物が検出され、掘方埋土は黒褐色土、粘質土を含む褐色シルトである。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P 1 - 0.13m • P 2 - 0.17m • P 3 - 0.16m
 P 4 - 0.28m • P 5 - 0.48m • P 6 - 0.12m
 P 7 - 0.30m • P 8 - 0.37m • P 9 - 0.45m
 P 10 - 0.26m • P 11 - 0.24m • P 12 - 0.20m



第52図 RB 5 0 3 掘立柱建物跡

RB504 掘立柱建物跡 (第53図)

平面形 桁行3間・梁間2間(長方形)

規模 北西-南東3間(5.81m・19尺3寸)、北東-南西2間(3.45m・11尺5寸)

重複関係 新旧関係は不明だが、RC501柱列跡と重複するものと考えられる。

棟方向 北西側柱列でN33°E

柱間寸法 北東側柱列はP1・4間-1.80m(6尺)、P4・6間-2.10m(7尺)、P6・8間-1.85m(6尺)。南西柱列はP3・10間-5.42m(18尺)。

西北柱列はP1・2間-1.93m(6尺4寸)、P2・3間-1.89m(6尺3寸)。東南側柱列は、P8・9間-1.33m(4尺4寸)、P9・10間-2.25mである。

柱穴 全ての柱穴より柱痕跡が確認された。掘方径は0.31~0.48m前後、柱痕跡径は0.15m前後をはかる。埋土は、柱痕跡からは多量の炭化物が検出され、掘方埋土は円礫を多量に含む黒褐色土である。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P1-0.38m・P2-0.27m・P3-0.42m・P4-0.36m・P5-0.28m・P6-0.26m・
P7-0.30m・P8-0.22m・P9-0.24m・P10-0.40m。

RB505 掘立柱建物跡 (第53図)

平面形 東桁行3間、梁間2間(長方形)

規模 南北3間(5.15m・17尺)、東西2間(4.20m・14尺)

重複関係 なし 棟方向 間仕切の柱列(P4~7)でN3°W

柱間寸法 西側柱列はP1・2間-1.92m(6尺4寸)、P2・3間-1.98m(6尺6寸)。東側柱列は、P8・9間-2.22m(7尺4寸)、P9・10間-2.01m(6尺7寸)、P10・11間-1.65m(5尺5寸)。北側柱列はP1・4間-1.81m(6尺)、P4・8間-2.30m(7尺6寸)。間仕切はP4・5間-2.29m(7尺6寸)、P5・6間-1.51m(5尺)、P6・7間-1.81m(6尺)である。

柱穴 全ての柱穴より柱痕跡が確認された。掘方径は0.38~0.50m前後、柱痕跡径は0.20m前後をはかる。掘方埋土は粒~塊状の黒褐色土を含む褐色シルトで、柱痕跡の埋土は黒褐色土を主体とする。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P1-0.28m・P2-0.09m・P3-0.10m・P4-0.29m・P5-0.24m・P6-0.21m・
P7-0.30m・P8-0.25m・P9-0.27m・P10-0.19m・P11-0.22m。

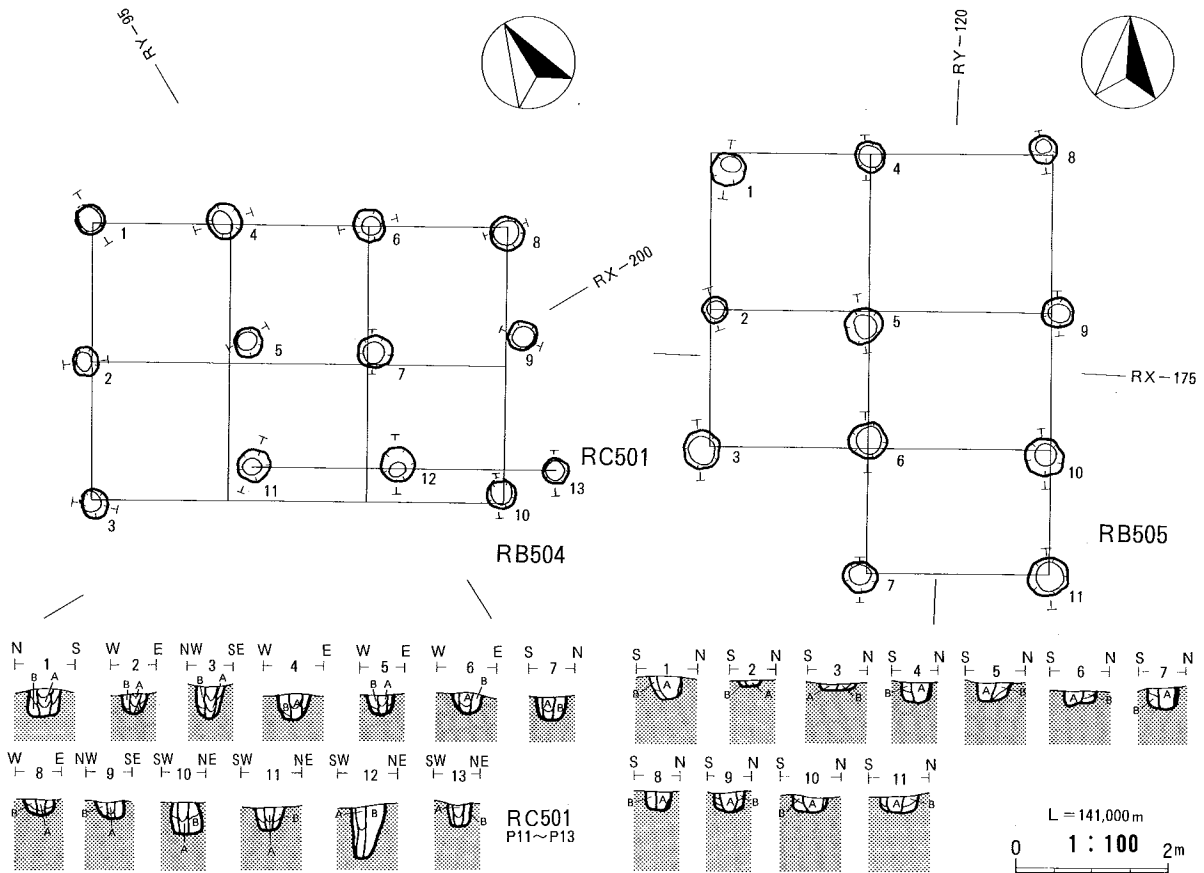
RC501 柱列跡 (第53図)

規模 北西-南東2間(4.05m・13尺5寸)。RB504掘立柱建物跡の桁行と方向を同じくする。

重複関係 新旧関係は不明だが、RB504掘立柱建物跡と重複する。

柱間寸法 柱列はP11・12間-2.06m(6尺8寸)、P12・13間-2.10m(7尺)である。

柱穴 全ての柱穴より柱痕跡が確認された。掘方径は0.40~0.48m前後、柱痕跡径は0.15m前後をはかる。埋土は、柱痕跡からは多量の炭化物が検出され、掘方埋土は円礫を多量に含む黒褐色土である。各柱穴の深さは次のとおりである。P11-0.29m・P12-0.67m・P13-0.31m。



第53図 RB504・506掘立柱建物跡、RC501柱列跡

RE501 竪穴跡 (第54図)

位置 調査区南西 平面形 南西端に張り出し部を持つ方形

主軸方向 W37° N

規模 北西-南東上端3.08~3.22m・下端2.95~3.15m

南西-北東上端2.92~3.12m・下端2.82~2.96m。

張り出し部長軸上端1.32m・下端1.29m、短軸上端0.52~1.31m。

重複関係 なし

掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 A層は黒褐色土を主体に褐色シルトを含み、B層は褐色シルトを主体に塊状の黒褐色土が混入する層である。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.06~0.12mで、壁は外傾して立ち上がる。

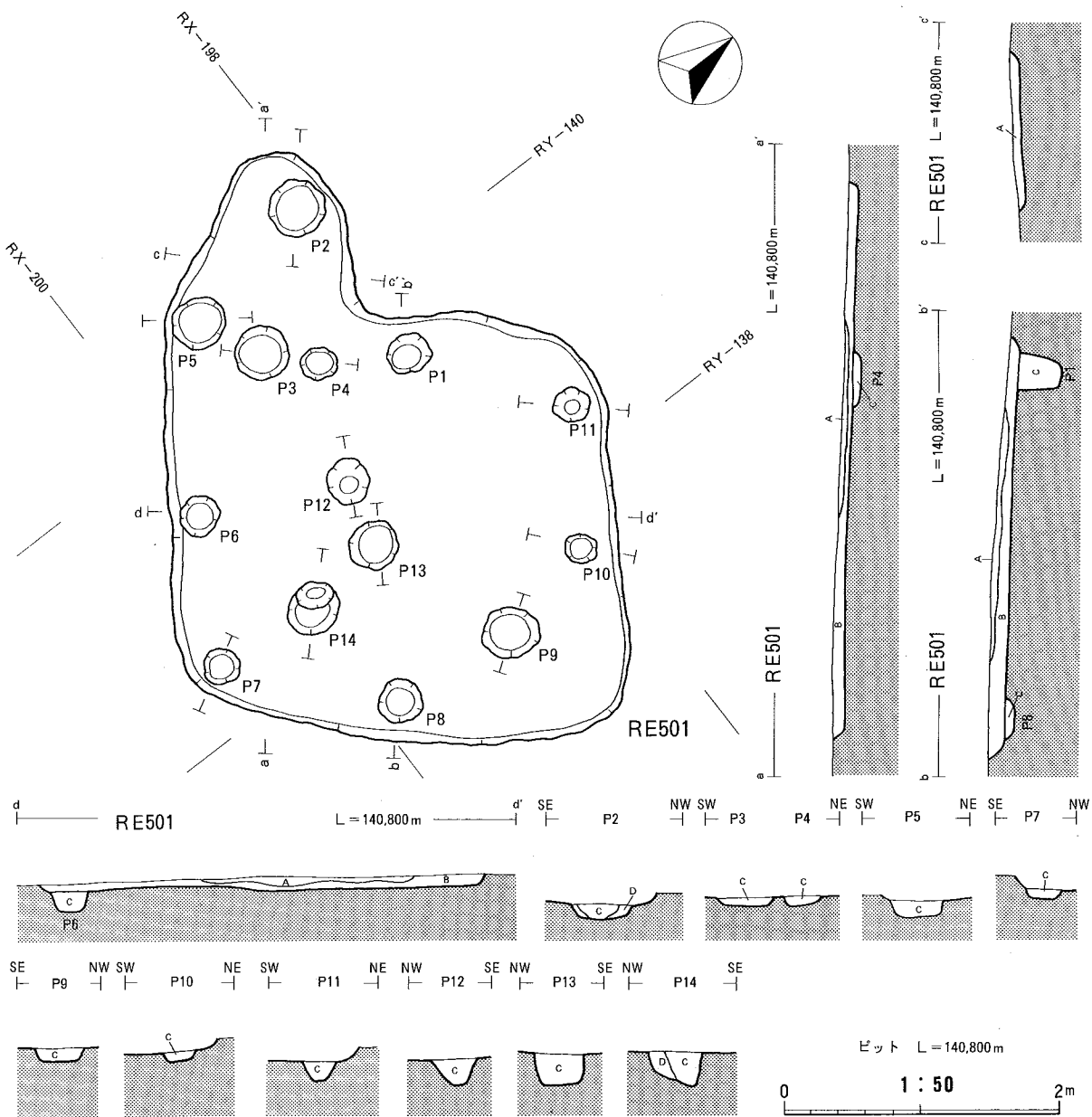
床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。

柱穴 P1~14が床面より検出されている。北東隅以外の三隅と各辺中央部より建物を構成する柱穴が8口 (P1・5・6~11・13) 検出されている。明確な柱痕跡を残すものはなく、深さは0.07

～0.32mと規則性が見られない。埋土は、微量の黒褐色土を含む褐色シルトで、各柱穴の深さは次のとおりである。

P 1 -0.32m・P 2 -0.14m・P 3 -0.09m・P 4 -0.07m・P 5 -0.12m・P 6 -0.15m
 P 7 -0.08m・P 8 -0.07m・P 9 -0.10m・P 10 -0.08m・P 11 -0.16m・P 12 -0.19m
 P 13 -0.23m・P 14 -0.25m。

遺物 なし



第54図 RE501 竪穴跡

RE502 竪穴跡 (第55図)

位置 調査区中央北 **平面形** 不整長方形 (北隅攪乱) **主軸方向** E49° N

規模 北東-南西 上端4.71~4.99m・下端4.53~4.82m
北西-南東 上端3.99~4.28m・下端3.73~4.10m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** 褐色シルト層上面

埋土 A層は褐色シルトを主体に粒~塊状の黒褐色土が混入する層で、砂礫の混入状況により3層に細別される。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.12~0.24mで、壁は外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。

柱穴 P1~13が床面より検出されている。北隅以外の三隅より建物を構成する柱穴が3口 (P2・3・4) 検出されている。各明確な柱痕跡を残すものはない。埋土は、細かい砂礫を含む褐色シルトで、各柱穴の深さは次のとおりである。P1-0.22m・P2-0.19m・P3-0.18m・P4-0.23m・P5-0.12m・P6-0.14m・P7-0.21m・P8-0.19m・P9-0.13m・P10-0.15m・P11-0.29m・P12-0.19m・P13-0.22m。

遺物 なし

RE503 竪穴跡 (第56図)

位置 調査区北 **平面形** 方形 **主軸方向** N30° W

規模 北西-南東 上端3.38~3.62m・下端3.24~3.28m
南西-北東 上端3.59~3.80m・下端3.25~3.50m

重複関係 なし **掘込面** 削平 **検出面** 褐色シルト層上面

埋土 A層は褐色シルトを主体に塊状の暗褐色土が多量に混入する層で、3層に細別される。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.09~0.15mで、壁は緩やかに外傾する。

床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。

柱穴 P1~8が床面より検出されている。四隅より建物を構成する柱穴が4口 (P1・3・7・8) 検出されている。P7・8以外のピットからは柱痕跡が見られる。柱痕跡と考えられるB層は、黒褐色土を主体とし、C層は粒状の暗褐色土を含む褐色シルトである。各柱穴の深さは次のとおりである。P1-0.27m・P2-0.30m・P3-0.33m・P4-0.29m・P5-0.31m・P6-0.31m・P7-0.22m・P8-0.13m。

遺物 なし

RE504 竪穴跡 (第56図)

位置 調査区中央北 **平面形** 不整形 (南辺攪乱) **主軸方向** N10° E

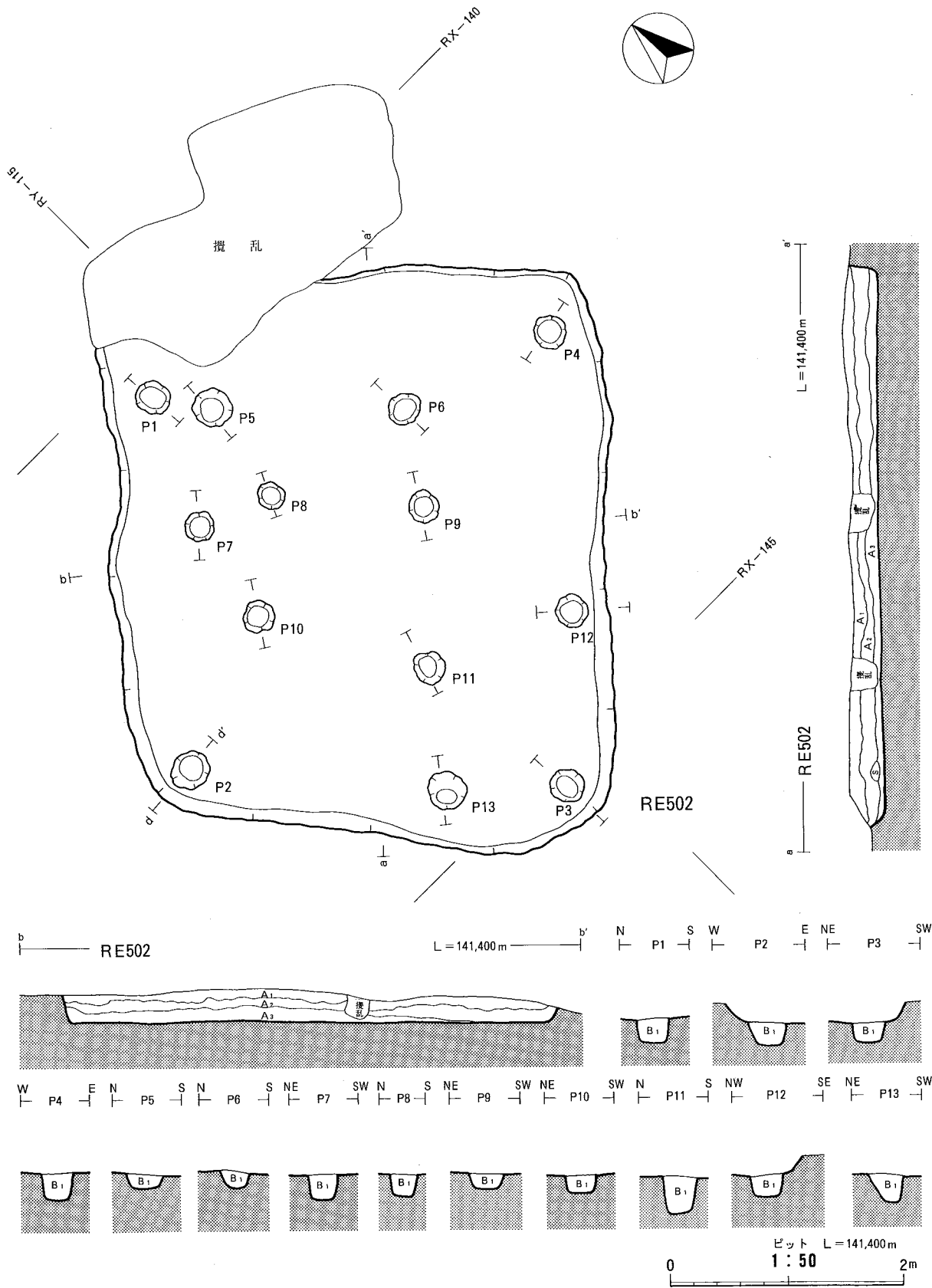
規模 北-南上端2.73~3.32m・下端2.53~3.11m、西-東上端2.69~2.82m・下端2.51~2.54m。

重複関係 RA109 竪穴住居跡を切り、RD501 土坑に切られる。

掘込面 削平 **検出面** 褐色シルト層上面

埋土 単層で、黒褐色土を主体とする。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.12~0.19mで、壁は外傾して立ち上がる。



第55図 RE502 竪穴跡

床の状態 ほぼ平坦。RA109 堅穴住居跡A層（礫層）を床面としている。

柱 穴 P1～21が床面より検出されている。埋土は黒褐色土である。各柱穴の深さは次のとおりである。

P1-0.19m・P2-0.11m・P3-0.12m・P4-0.18m・P5-0.12m・P6-0.16m・
P7-0.18m・P8-0.23m・P9-0.20m・P10-0.07m・P11-0.08m・P12-0.12m・
P13-0.09m・P14-0.08m・P15-0.08m・P16-0.09m・P17-0.15m・P18-0.04m・
P19-0.12m・P20-0.09m・P21-0.16m。

遺 物 なし

RD501 土坑跡（第56図）

位 置 調査区中央北 平面形 不整楕円形

長軸方向 E33° N

規 模 東-西上端1.07m・下端0.84m、南-北上端2.17m・下端1.35m。

重複関係 RG501 溝跡、RE504 堅穴跡を切る

掘込面 削平 検出面 RG501 溝跡A層

埋 土 A・B層に大別される。A層は黒褐色土を主体に粒状の褐色シルトを含み、B層は褐色シルトを主体に円礫・粒状の黒褐色土を含む層である。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.32mをはかり、壁は起伏をもちながら外傾する。

底面の状態 南壁下に掘り込みがある。

遺 物 なし

RE505 堅穴跡（第57図）

位 置 調査区中央北 平面形 南東隅に張り出しのある不整形

主軸方向 E26° S

規 模 西-東 上端4.24～4.65m・下端3.92～4.25m

北-南 上端3.34～3.85m・下端2.88～3.72m

張り出し部 長軸上端0.85～1.19m・下端0.78～1.11m、短軸上端1.20～1.31m。

重複関係 なし 掘込面 削平

検出面 褐色シルト層上面

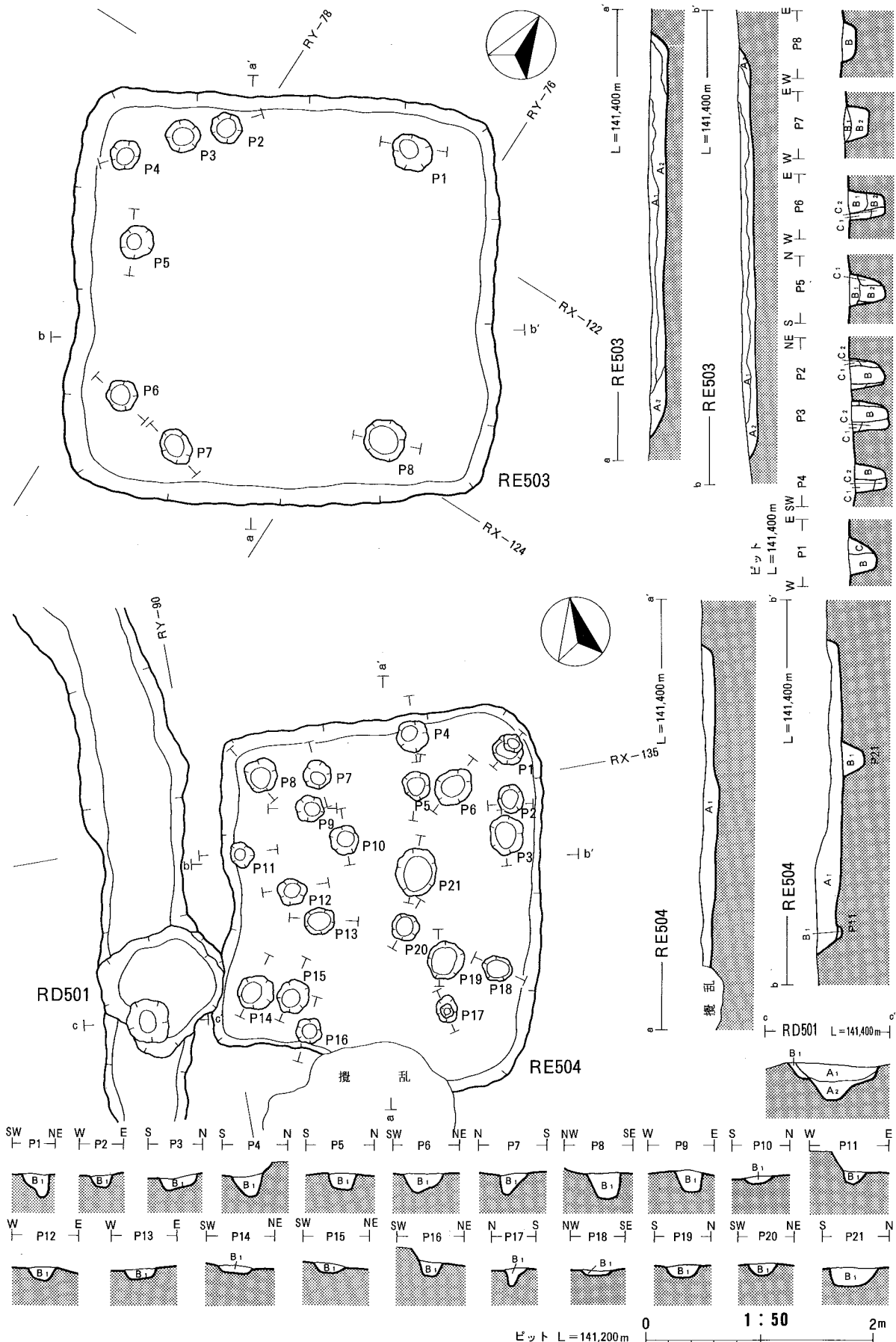
埋 土 A～C層に大別され、B層は2層に細別される。A層は黒褐色土を主体に褐色シルトを含み、B層は褐色シルトを主体に塊状の黒褐色土が混入する層である。C層はP1に堆積するもので褐色シルトと細かい砂粒の混じる層である。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.12～0.19mで、壁は外傾して立ち上がる。

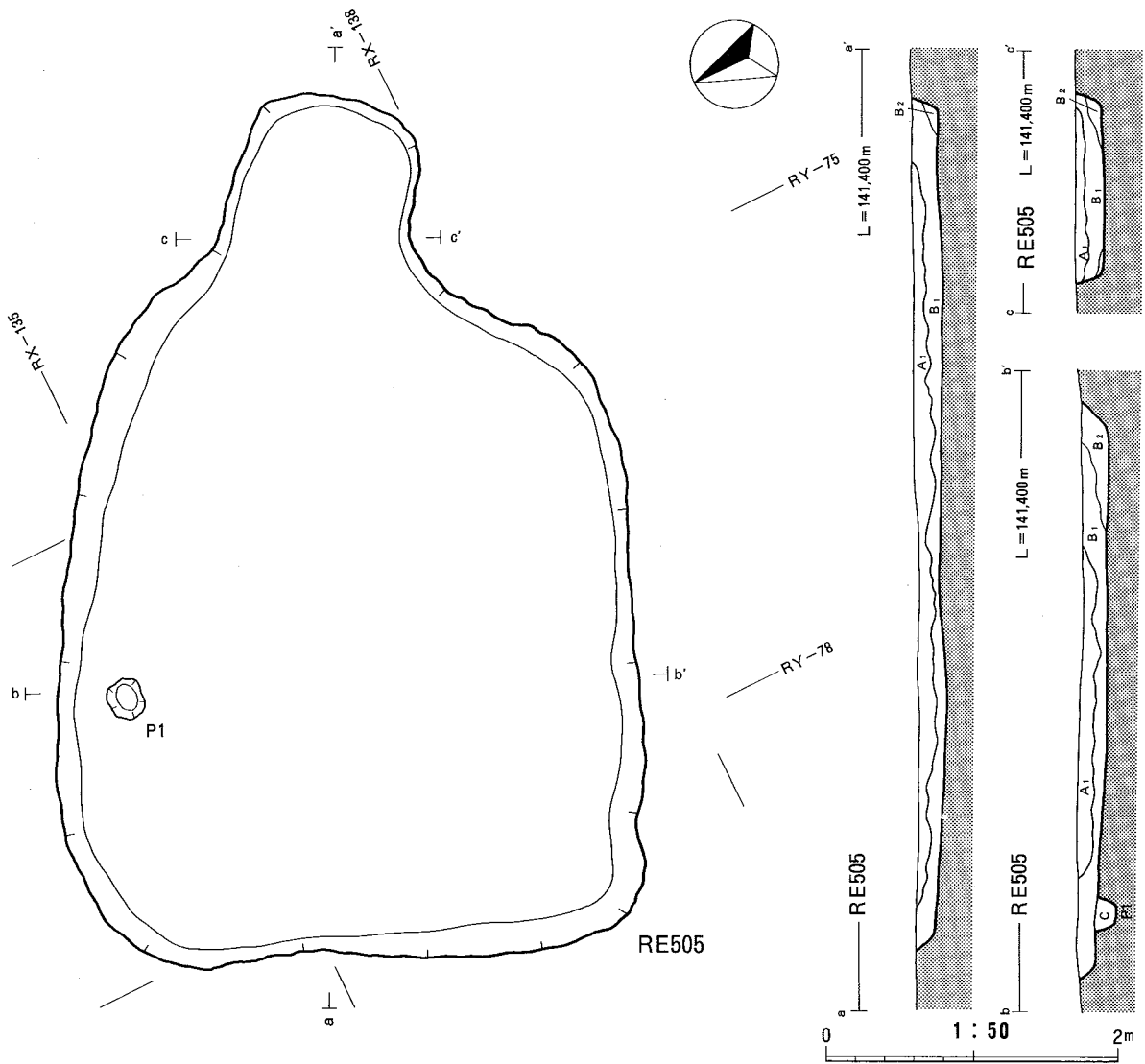
床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。

柱 穴 P1が床面より検出されている。深さは0.13mをはかる。

遺 物 なし



第56図 RE503・504 整穴跡、RD501 土坑



第57図 RE505 竪穴跡

RE506 竪穴跡 (第58図)

位置 調査区中央 平面形 不整形 (南辺攪乱) 主軸方向 E40.5° N

規模 北東-南西 上端4.36m・下端4.08m、北西-南東 上端4.36m・下端4.11m

重複関係 RA106 竪穴住居跡を切り、RD502 土坑に切られる

掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 A・B層に大別されA層は褐色シルトを主体に粒~塊状の黒褐色土が混入する層で、砂礫の混入状況により2層に細別される。B層はピットに堆積し、黒褐色土を主体とする層である。

壁の状態 検出面から床面までの深さは0.11~0.15mで、壁は外傾して立ち上がる。

床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。 遺物 なし

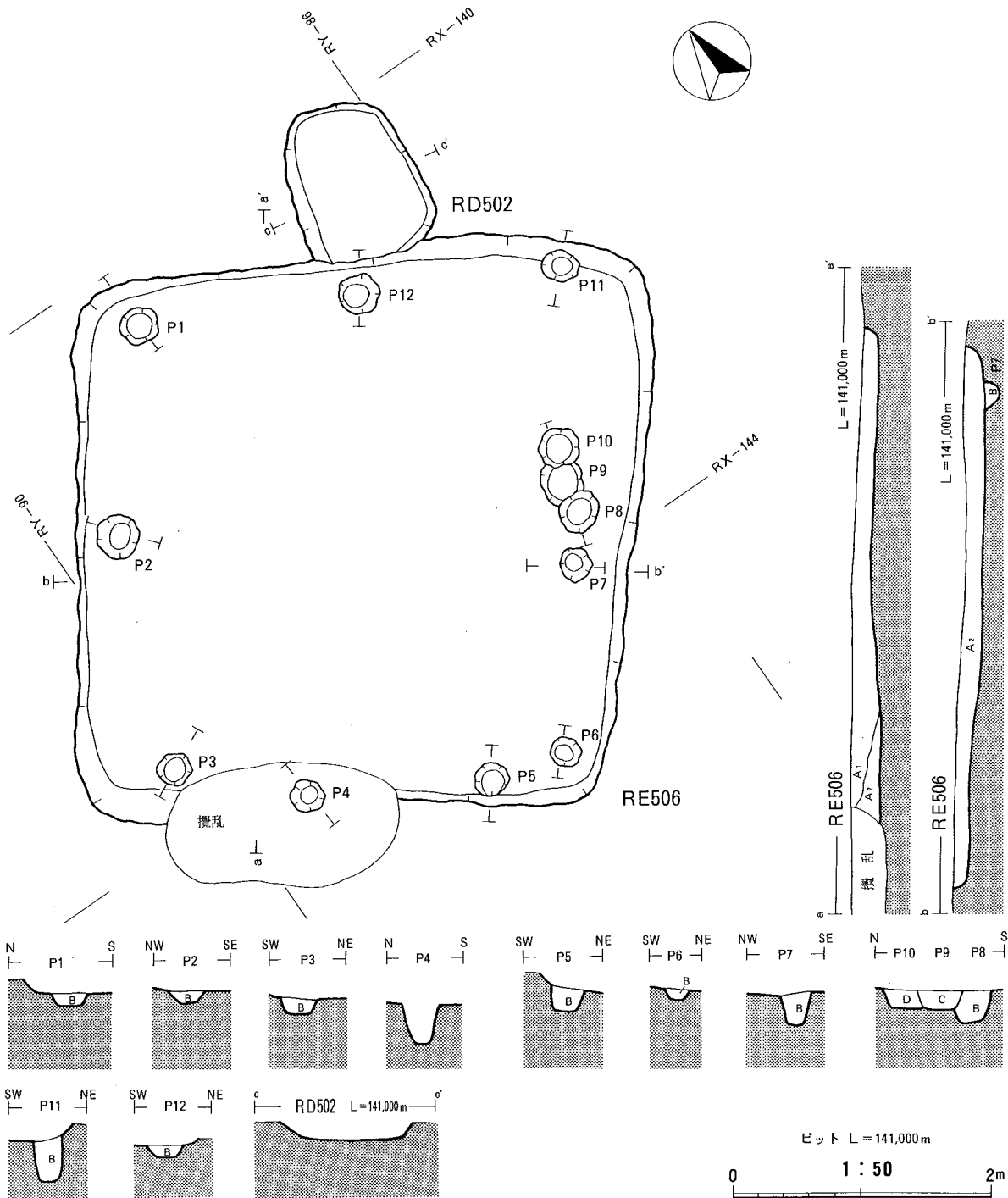
柱穴 P1~12が床面より検出されている。四隅・四辺より建物を構成する柱穴 (P1~7・11・12) が検出されている。明確な柱痕跡を残すものはない。各柱穴の深さは次のとおりである。

P1-0.10m・P2-0.09m・P3-0.11m・P4-0.31m・P5-0.18m・P6-0.08m・

P7-0.26m・P8-0.24m・P9-0.16m・P10-0.15m・P11-0.29m・P12-0.10m。

RD502土坑跡 (第58図)

位置 調査区中央 平面形 不整楕円形 長軸方向 N17° E
 規模 南-北 上端1.22m以上・下端1.17m、東-西 上端1.02m・下端0.82m。
 重複関係 RE506 竪穴を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
 壁の状態 検出面から床面までの深さは0.12mで、壁は外傾して立ち上がる。
 底面の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。 遺物 なし



第58図 RE506 竪穴跡・RD502 土坑

RE507 竪穴跡 (第59・60図)

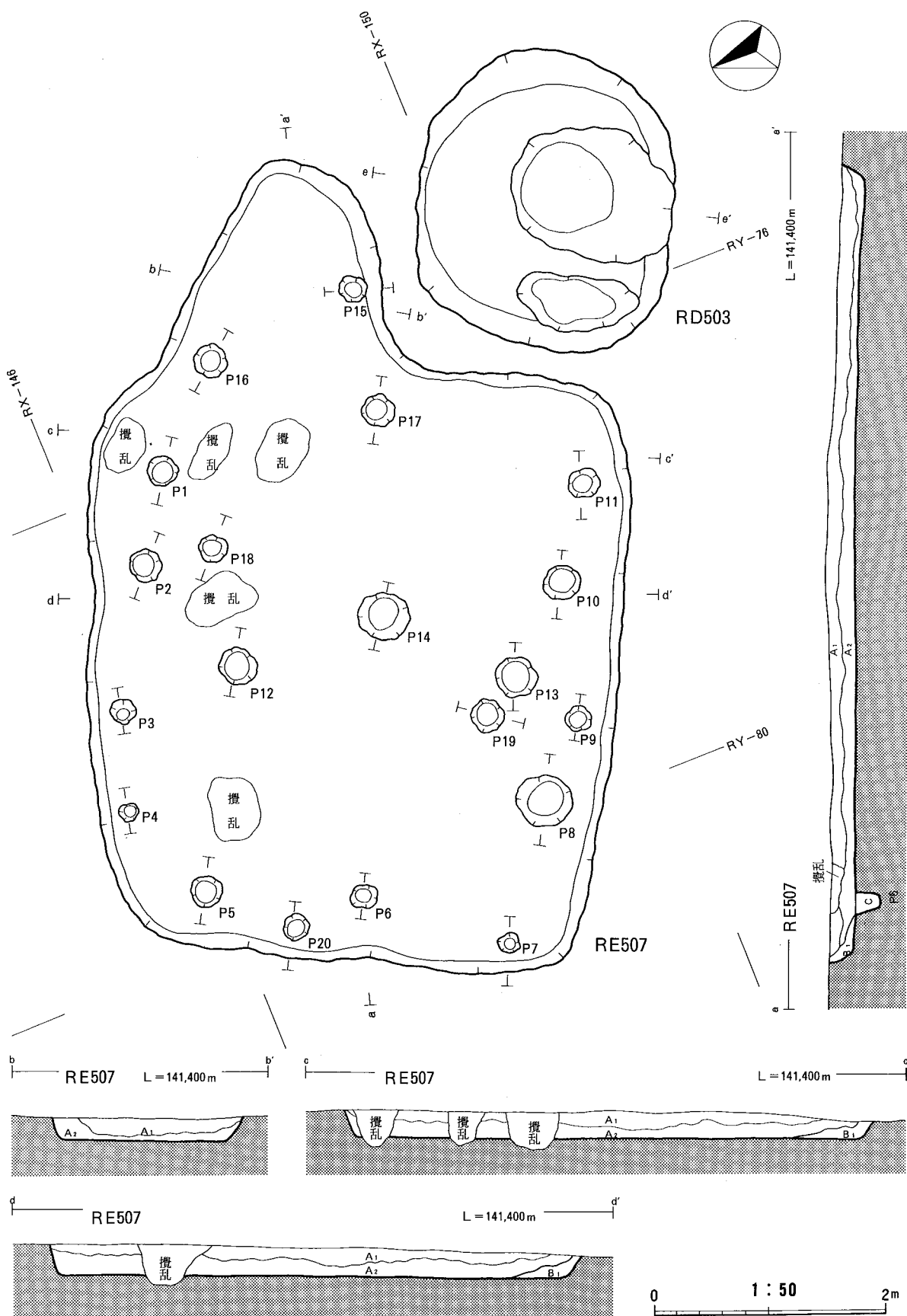
- 位置 調査区中央 平面形 北東端に張り出し部を持つ長方形
- 主軸方向 E23° S
- 規模 東-西 上端4.80~5.12m・下端4.58~4.92m
南-北 上端3.73~4.61m・下端3.46~4.38m
張り出し部 長軸上端1.92m・下端1.78m、短軸上端0.91~1.98m・下端0.65~1.85m。
- 重複関係 RA106 竪穴住居跡を切る
- 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
- 埋土 A~C層に大別されA層は2層に細別される。A層は黒褐色土を主体に粒状の褐色シルトを含み、B層は褐色シルトを主体に小塊状の黒褐色土が混入する層である。C層は柱穴に堆積する層で、暗褐色土を主体に粒状の褐色シルト、黒褐色土を含むものである。
- 壁の状態 検出面から床面までの深さは0.15~0.28mで、壁は外傾して立ち上がる。
- 床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。
- 柱穴 P1~20が床面より検出されている。各辺より建物を構成する柱穴が検出されている。明確な柱痕跡を残すものはない。各柱穴の深さは下記のとおりである。
P1-0.12m・P2-0.16m・P3-0.12m・P4-0.19m・P5-0.14m・P6-0.20m・
P7-0.17m・P8-0.38m・P9-0.24m・P10-0.18m・P11-0.19m・P12-0.12m・
P13-0.18m・P14-0.23m・P15-0.16m・P16-0.14m・P17-0.13m・P18-0.14m・
P19-0.15m・P20-0.18m。
- 遺物 図示していないが、A層より青磁小片・かわらけ片が各1点出土している。

RD503 土坑跡 (第59・60図)

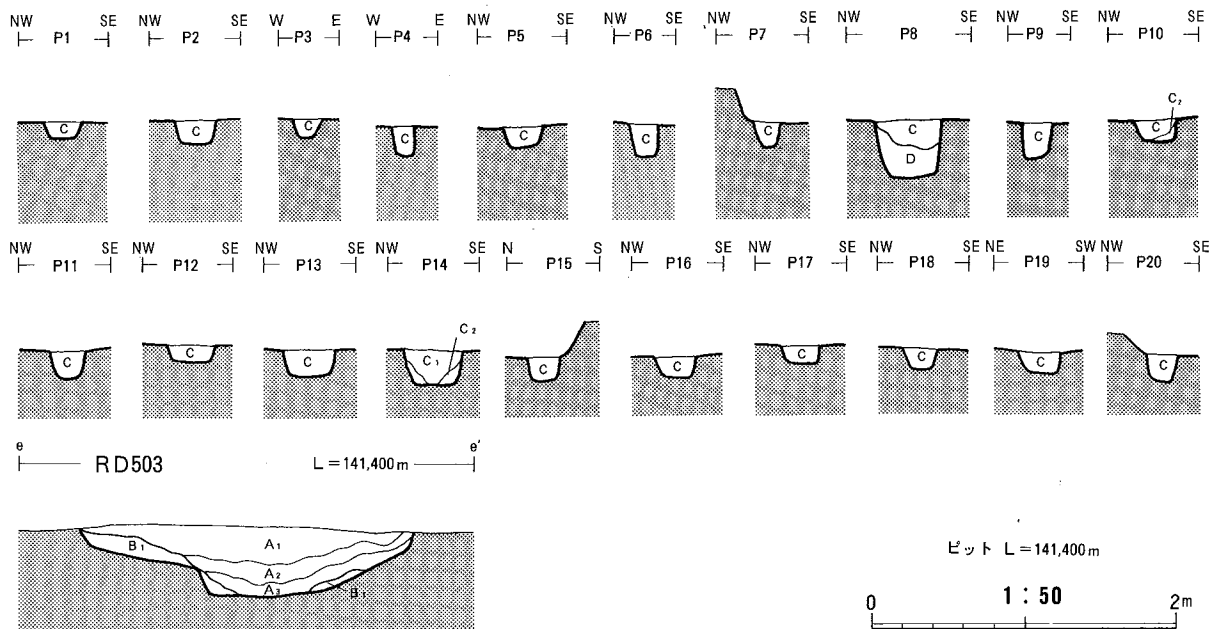
- 位置 調査区中央 平面形 不整形
- 規模 東-西上端2.55m・下端2.03m、南-北上端2.22m・下端1.83m。
- 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
- 埋土 A・B層に大別されA層は3層に細別される。A層は黒褐色土を主体に粒状の褐色シルトを含み、B層は褐色シルトを主体に黒褐色土を含む層である。
- 壁の状態 検出面から底面までの深さは0.15~0.45mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。
- 底面の状態 南壁下に掘り込みがあるほか、底面はやや凹凸になる
- 遺物 図示していないが土師器坏・甕の小破片が出土している。

RE508 竪穴跡 (第61図)

- 位置 調査区中央 平面形 不明(壁の一部のみ) 主軸方向 不明
- 規模 東-西上端2.82m以上・下端2.75m以上
- 重複関係 RG507 溝跡を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
- 壁の状態 検出面から床面までの深さは0.08mで、壁は外傾して立ち上がる。
- 床の状態 ほぼ平坦。褐色シルト層を床面としている。



第59図 RE507 竖穴跡・RD503 土坑



第60図 RE507 竪穴跡、ピット、RD503 土坑土層断面

柱 穴 P1・2が床面より検出されている。各柱穴の深さは次のとおりである。P1-0.33m・P2-0.26m。

遺 物 なし

RD504 土坑跡 (第61図)

位 置 調査区中央 平面形 不整形

規 模 東-西上端1.49m・下端0.88m、南-北上端1.68m・下端0.82m。

重複関係 RG507 溝跡に切られる 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋 土 A層は4層に細別され、黒褐色土を主体とするものである。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.49~0.60mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態 やや平坦

遺 物 なし

RD505 土坑跡 (第62図)

位 置 調査区中央北西 平面形 不整形

規 模 東-西上端2.08m・下端1.77m、南-北上端2.07m・下端1.72m。

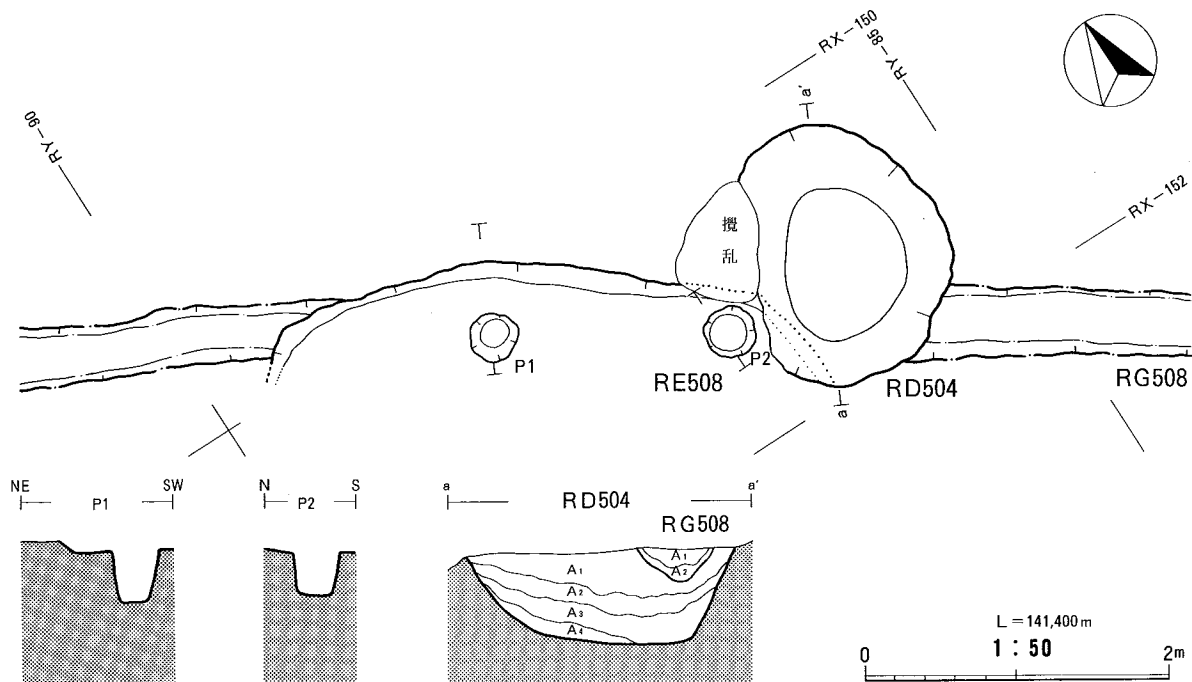
重複関係 RB501 掘立柱建物跡を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋 土 A層は4層に細別され、黒褐色土を主体とするものである。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.22~0.26mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。

底面の状態 平坦

遺 物 なし



第61図 RE508 竖穴跡・RD504 土坑

RD506 土坑跡 (第62図)

位置 調査区北 平面形 不整楕円形 長軸方向 N45° E
 規模 長軸上端1.77m・下端1.18m、短軸上端0.93~1.49m・下端0.44~0.83m。
 重複関係 RB501 掘立柱建物跡を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
 埋土 A・B・C層の3層に大別される。A・B層は褐色シルトを主体に、B層は黒褐色土を主体とするものである。
 壁の状態 検出面から底面までの深さは0.28~0.44mをはかり、壁は外傾してゆるやかに立ち上がる。
 底面の状態 ほぼ平坦
 遺物 なし

RD507 土坑跡 (第62図)

位置 調査区南 平面形 楕円形 長軸方向 W21.5° N
 規模 長軸上端1.22m・下端0.48m、短軸上端0.78m・下端0.29m。
 重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 砂礫層
 埋土 A・B層の2層に大別される。A層は黒褐色を主体に多量の炭化物を含み、B層は黒褐色土を主体に塊状の黄褐色シルトを含む。
 壁の状態 検出面から底面までの深さは0.15~0.39mをはかり、壁は直立ぎみに外傾して立ち上がる。
 底面の状態 ゆるやかな起伏がある。
 遺物 なし

RD508土坑跡(第62図)

位置 調査区西 平面形 不整長方形 長軸方向 N44° W
規模 長軸上端1.78m・下端1.62m、短軸上端1.01m・下端0.87m。
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 砂礫層
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.08~0.14mをはかり、壁は直立ぎみに立ち上がる。
底面の状態 ほぼ平坦
ピット 長軸線上より2口(P1・2)のピットが検出されている。ピットの深さはP1-0.07m・P2-0.44mである。
遺物 なし

RD509土坑跡(第62図)

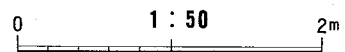
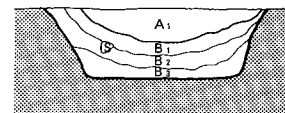
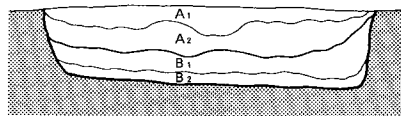
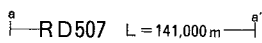
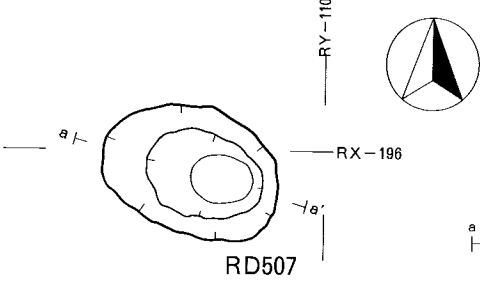
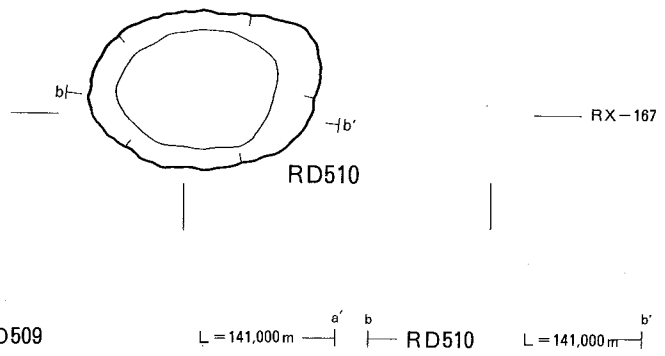
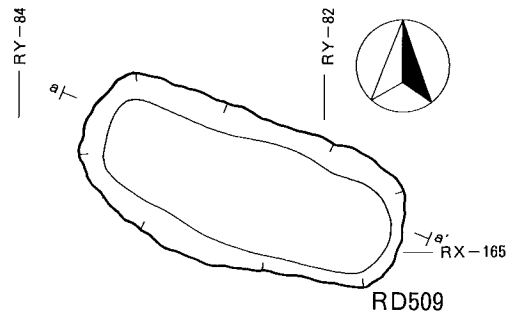
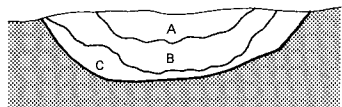
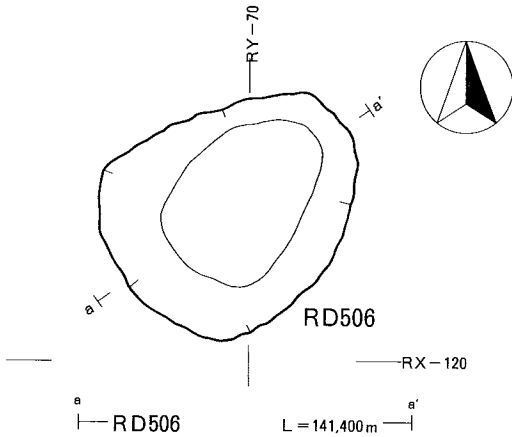
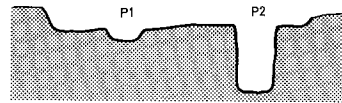
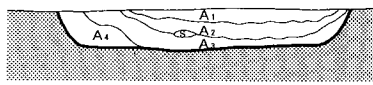
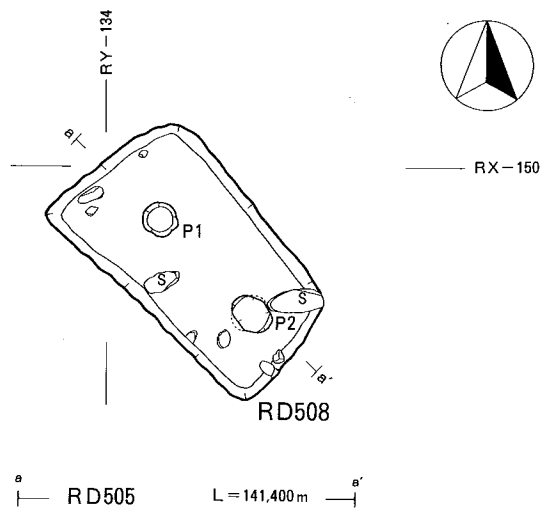
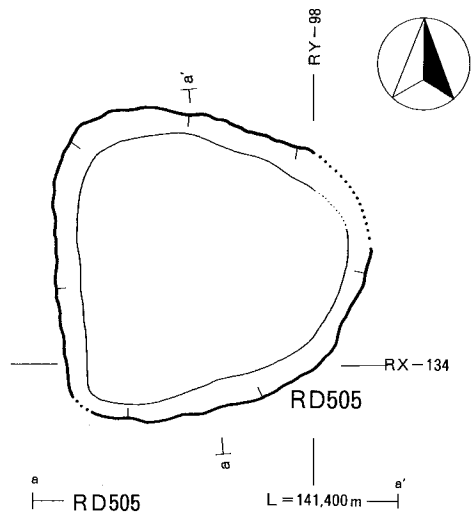
位置 調査区中央南東 平面形 不整楕円形 長軸方向 W21° N
規模 長軸上端2.19m・下端1.93m、短軸上端1.04m・下端0.68m。
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 A・B層の2層に大別され、各層は2層に細別される。A層は黒褐色土を主体に塊状の褐色シルトを含み、B層は黒褐色土と黄褐色シルトの混合土である。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.43~0.50mをはかり、壁はほぼ直壁である。
底面の状態 ほぼ平坦
遺物 なし

RD510土坑跡(第62図)

位置 調査区中央南東 平面形 楕円形 長軸方向 W6° N
規模 長軸上端1.48m・下端1.02m、短軸上端1.04m・下端0.78m。
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 A・B層の2層に大別され、B層は3層に細別される。A層は黒褐色土を主体とし、B層は褐色シルトを主体に粒~塊状の暗褐色土を含む。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.47mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし

RD511土坑跡(第63図)

位置 調査区中央 平面形 楕円形 長軸方向 W30.5° N
規模 長軸上端0.98m・下端0.73m、短軸上端0.84m・下端0.63m。
重複関係 なし
掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 A層は4層に細別され、褐色シルトを主体に粒~塊状の暗褐色土を含む。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.58mをはかり、壁はほぼ直壁である。
底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし



第62图 RD505·506·507·508·509·510土坑

R D 5 1 2 土坑跡 (第63図)

位 置 調査区中央 平面形 円形 規模 上端1.18～1.32m・下端0.67～0.71m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A層は円礫を含む黒褐色土を主体とし、褐色シルトの混入量により4層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.78mをはかる。壁は上半部が大きく外傾し、下半部はほぼ直壁となる。
底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし

R D 5 1 3 土坑跡 (第63図)

位 置 調査区中央東 平面形 円形 規模 上端1.06～1.03m・下端0.72～0.81m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A・B層の2層に大別され、B層は3層に細別される。A層は黒褐色土を主体とし、B層は褐色シルトを主体に粒～塊状の暗褐色土を含む。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.57mをはかる。壁はほぼ直壁である。
底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし

R D 5 1 4 土坑跡 (第63図)

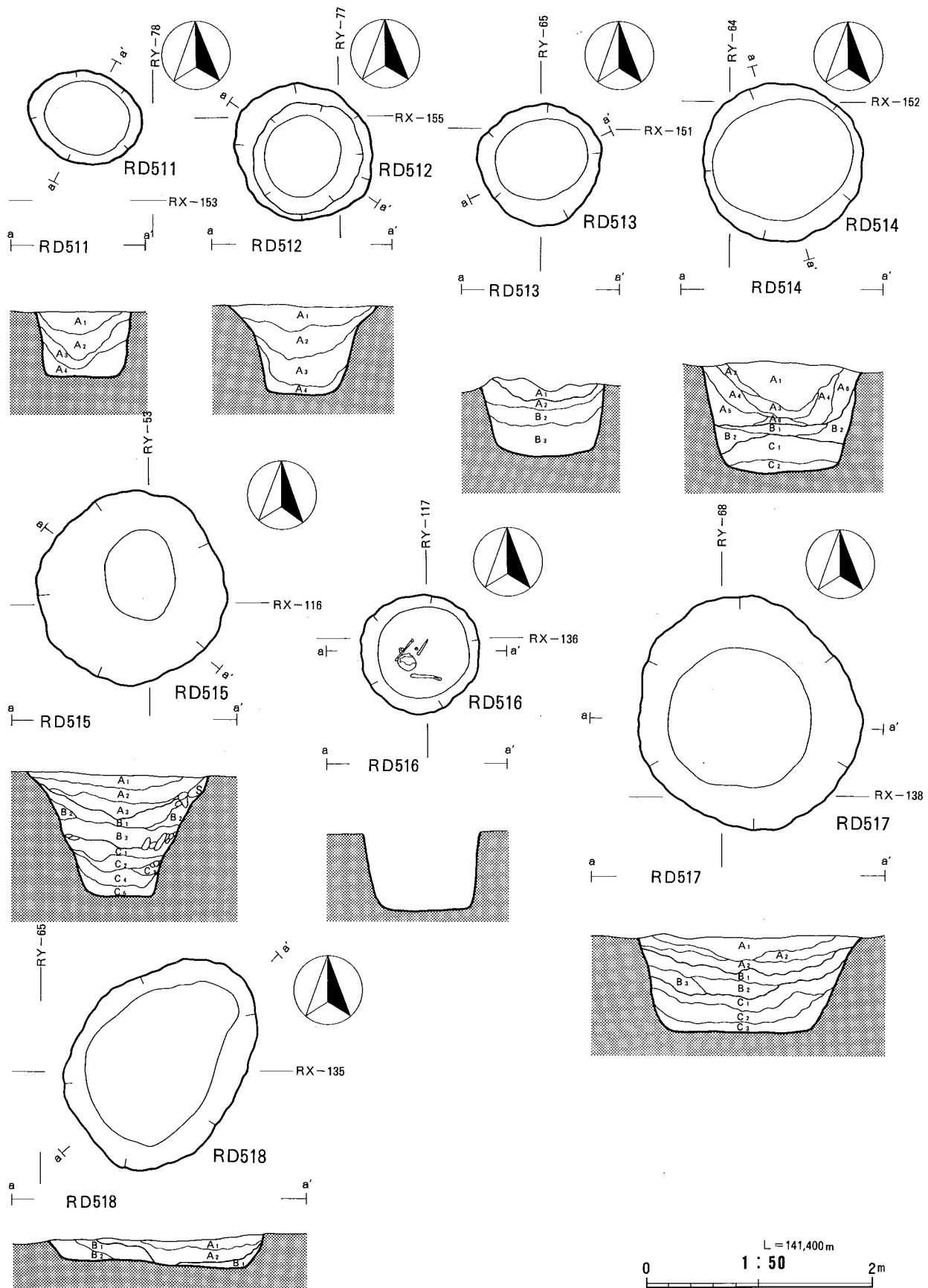
位 置 調査区中央東 平面形 円形 規模 上端1.42m・下端1.42m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A～C層の3層に大別され、A層は5層、B・C層は2層に細別される。A層は黒褐色土、B層は暗褐色土、C層は塊状の褐色シルトが混入する暗褐色土である。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.92mをはかる。壁はほぼ直壁である。
底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし

R D 5 1 5 土坑跡 (第63・64図7)

位 置 調査区北東 平面形 円形 規模 上端1.62～1.69m・下端0.61～0.80m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A～C層の3層に大別され、A・B層は3層、C層は5層に細別される。A層は黒褐色土、B層は暗褐色土、C層はグライ化した粘質のあるシルトである。
壁の状態 検出面から底面までの深さは1.08mをはかる。壁は、底部付近より大きく外傾し立ち上がる。
底面の状態 ほぼ平坦
遺物 (第63図7) 7はA層より出土した銅銭であるが、腐食しているため判読不明である。

R D 5 1 6 土坑跡 (第63・64図1～6)

位 置 調査区中央西 平面形 円形 規模 上端1.06m・下端0.80m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.78mをはかる。壁はほぼ直壁である。
底面の状態 ほぼ平坦



第63图 RD511·512·513·514·515·516·517·518土坑

出土状況 底面付近より、縦位に屈葬された人骨と寛永通宝が6枚出土している。

遺物(第63図1~6) 1は(古)寛永通宝で、2~6は(新)寛永通宝である。

RD517土坑跡(第63図)

位置 調査区中央北東 平面形 円形 規模 上端1.98~2.07m・下端0.82~1.23m

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 A~C層の3層に大別され、各層は3層に細別される。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.82mをはかる。壁は、底部付近よりやや外傾し立ち上がる。

底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし

RD518土坑跡(第63図)

位置 調査区中央北東 平面形 不整楕円形 長軸方向 N46° E

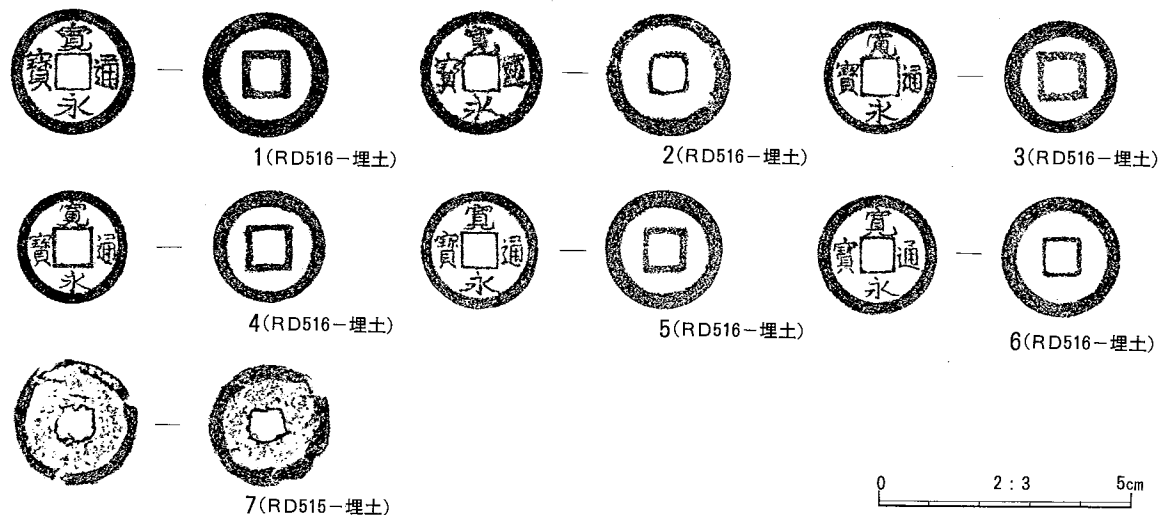
規模 長軸上端1.89m・下端1.55m、短軸上端1.48m・下端1.02m 重複関係 なし

掘込面 削平

検出面 褐色シルト層上面 埋土 A・B層の2層に大別され、各層は2層に細別される。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.16~0.29mをはかる。壁は、外傾し立ち上がる。

底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし



第64図 RD515・516土坑出土遺物

RG502溝跡(第65図)

位置 調査区北 平面形 不整形

規模 長さは東辺7.9m・南辺7.2m・西辺5.6m・北辺7.3mをはかり、幅は上端0.35~0.90m・下端0.22~0.60mをはかる。

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 砂礫層上面

埋 土 A層は小円礫を含む黒色土で層相により4層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.10～0.29mをはかる。壁は、外傾し立ち上がる。
底面の状態 若干の起伏をもつ
遺 物 図示していないが、かわらけ片、縄文土器片が数片出土している。

RG503溝跡(第65図)

位 置 調査区北 平面形 L字形(RG502溝跡北辺からの延長か?)
規 模 長さは東-西方向9.1m・南-北方向14.9mをはかり、幅は上端0.22～0.95m・下端0.15～0.57mをはかる。

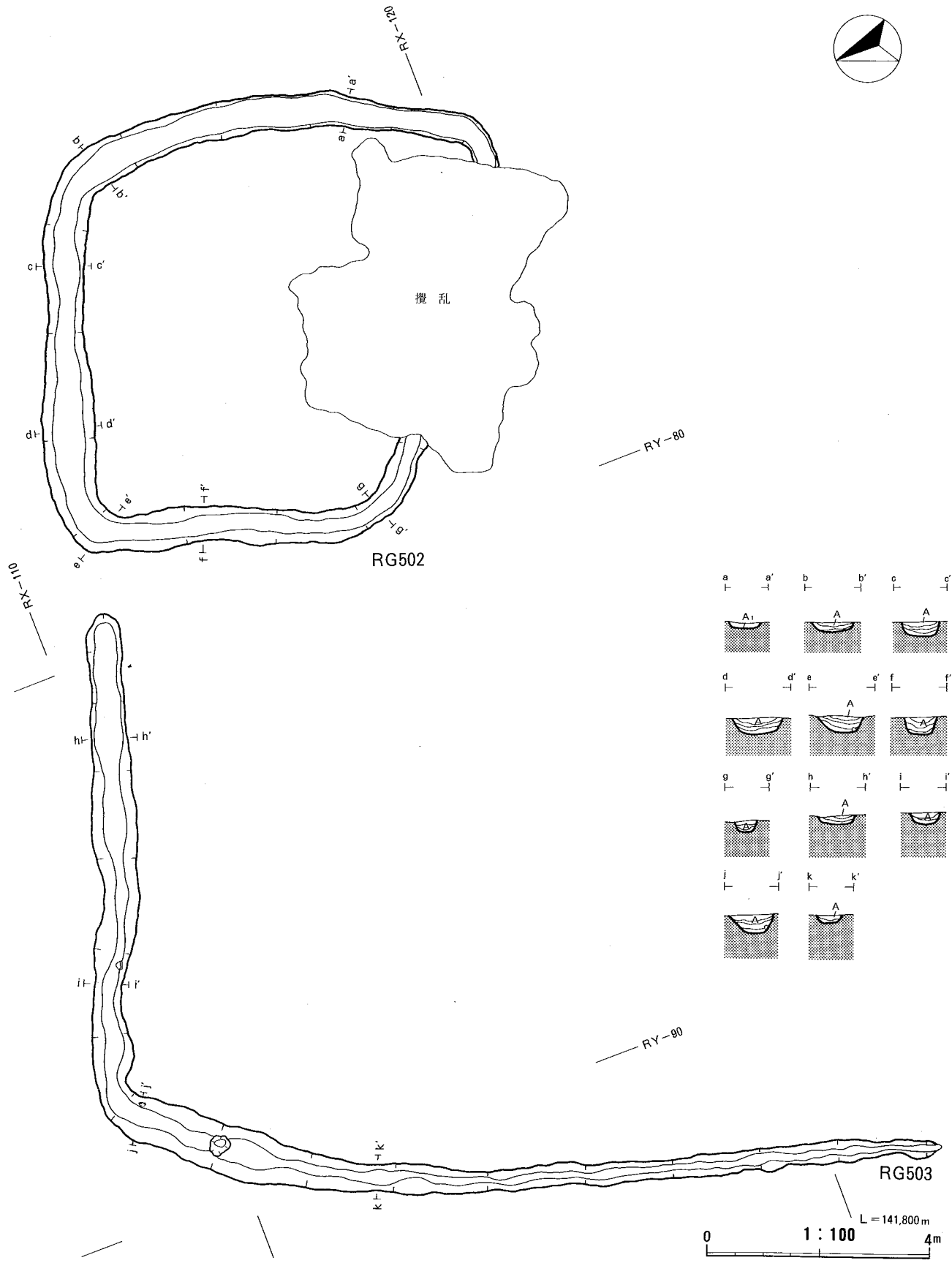
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 砂礫層上面
埋 土 RG502溝跡の層相と同様で、A層は小円礫を含む黒色土で層相により4層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.15～0.35mをはかる。壁は、外傾して立ち上がる。
底面の状態 若干の起伏をもつ
遺 物 図示していないが、縄文土器片が数片出土している。

RG504・505溝跡(第66図)

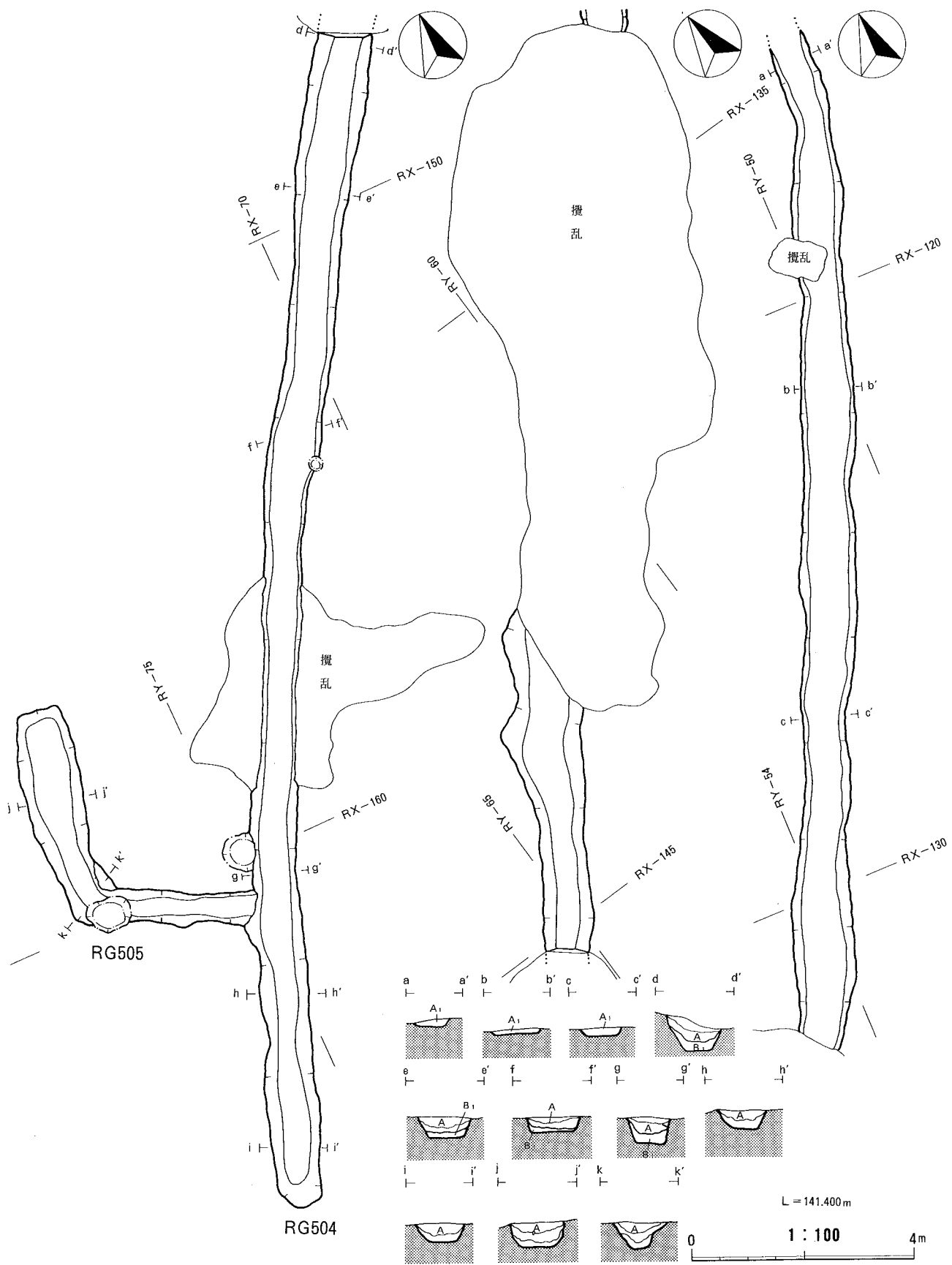
位 置 調査区東
平面形 直線状に南北に延び、中央部、北端は攪乱のため不明。南端で分岐する(RG505溝跡)。RG505溝跡はL字状に屈曲する。
規 模 長さは南-北方向58.2mをはかり、幅は上端0.50～1.45m・下端0.40～0.78mをはかる。
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 砂礫・褐色シルト層上面
埋 土 A層は小円礫を含む黒色土で層相により2層に細別される。B層は黒褐色土に塊状の褐色シルトが混入する層である。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.09～0.62mをはかる。壁の形状は外傾して立ち上がる。
底面の状態 ほぼ平坦
遺 物 図示していないが、近世の陶磁器片、平安時代の土師器・須恵器片出土している。

RG506溝跡(第67図)

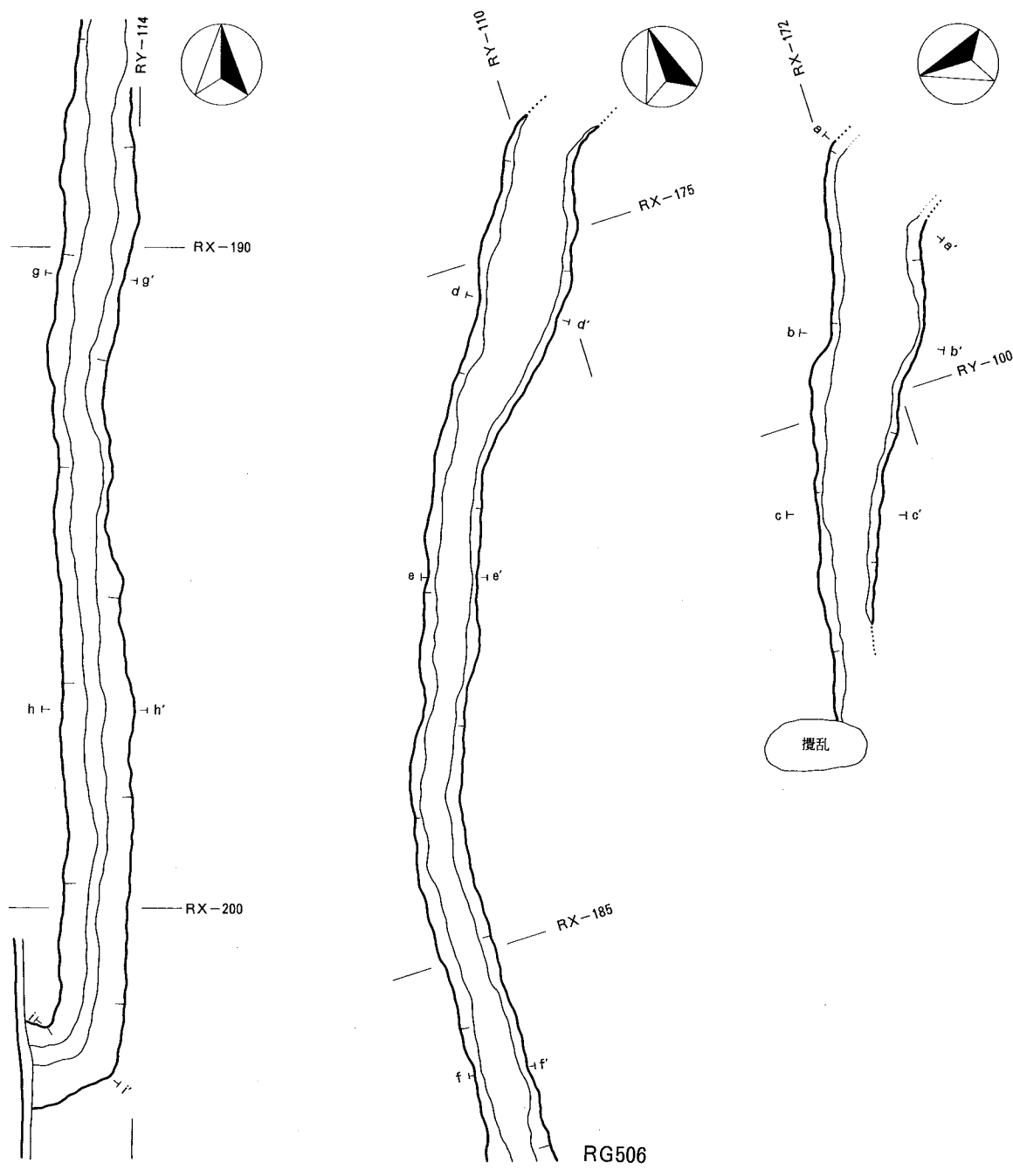
位 置 調査区南
平面形 溝南端・北端で屈曲し、北辺東端・北端屈曲部付近は攪乱される。
規 模 長さは総延長46.7mをはかり、幅は上端0.70～1.40m・下端0.20～1.09mをはかる。
重複関係 なし 掘込面 削平
検出面 円礫を含むシルト層上面
埋 土 A・B層は各層2層に細別され、A層は黒褐色土を主体に塊状のシルトを含み、B層はシルト質暗褐色土を主体とする層である。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.12～0.40mをはかる。壁は、外傾して立ち上がる。
底面の状態 底面はほぼ平坦であるが、部分によって狭くなる箇所がある。
遺 物 図示していないが、土師器小片が出土している。



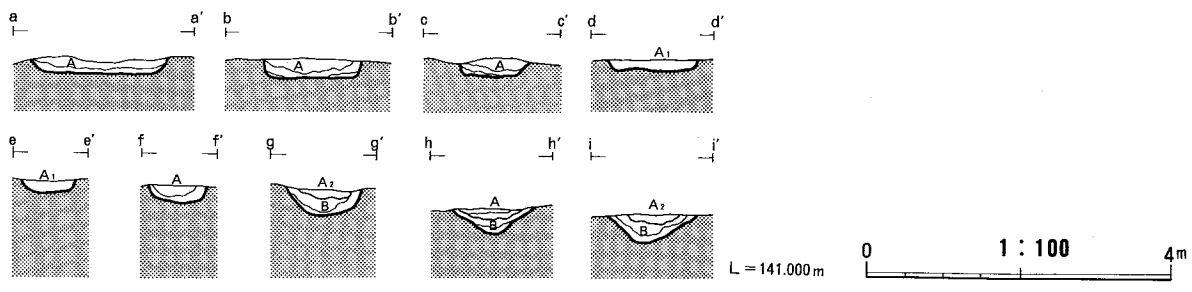
第65图 RG502·503 沟迹



第66图 RG504·505 沟迹



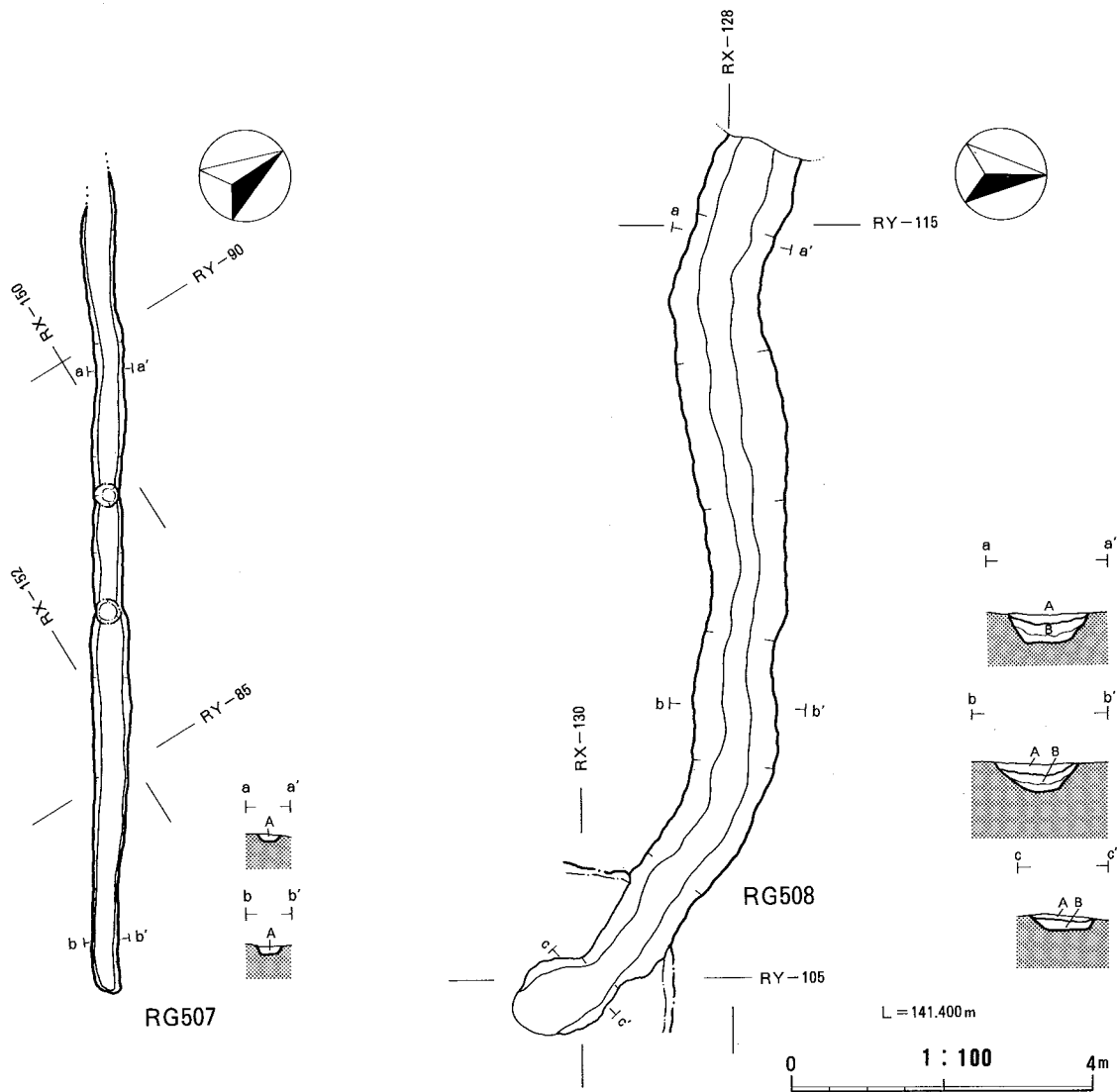
RG506



第67图 RG 5 0 6 沟迹

RG507 溝跡 (第68図)

位置 調査区中央 平面形 溝南端・北端で屈曲し、北辺東端・北端屈曲部付近は攪乱される。
 規模 長さ総延長10.8mをはかり、幅は上端0.35~0.55m・下端0.38~0.22mをはかる。
 重複関係 RE508 堅穴跡に切られ、RD504 土坑を切る 掘込面 削平
 検出面 円礫を含むシルト層上面
 埋土 A・B層に大別されB層は2層に細別される。A層はややグライ化した黒褐色土を主体に塊状のシルトを含み、B層は黒褐色土を主体とする層である。
 壁の状態 検出面から底面までの深さは0.08~0.12mをはかる。壁は、外傾して立ち上がる。
 底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし



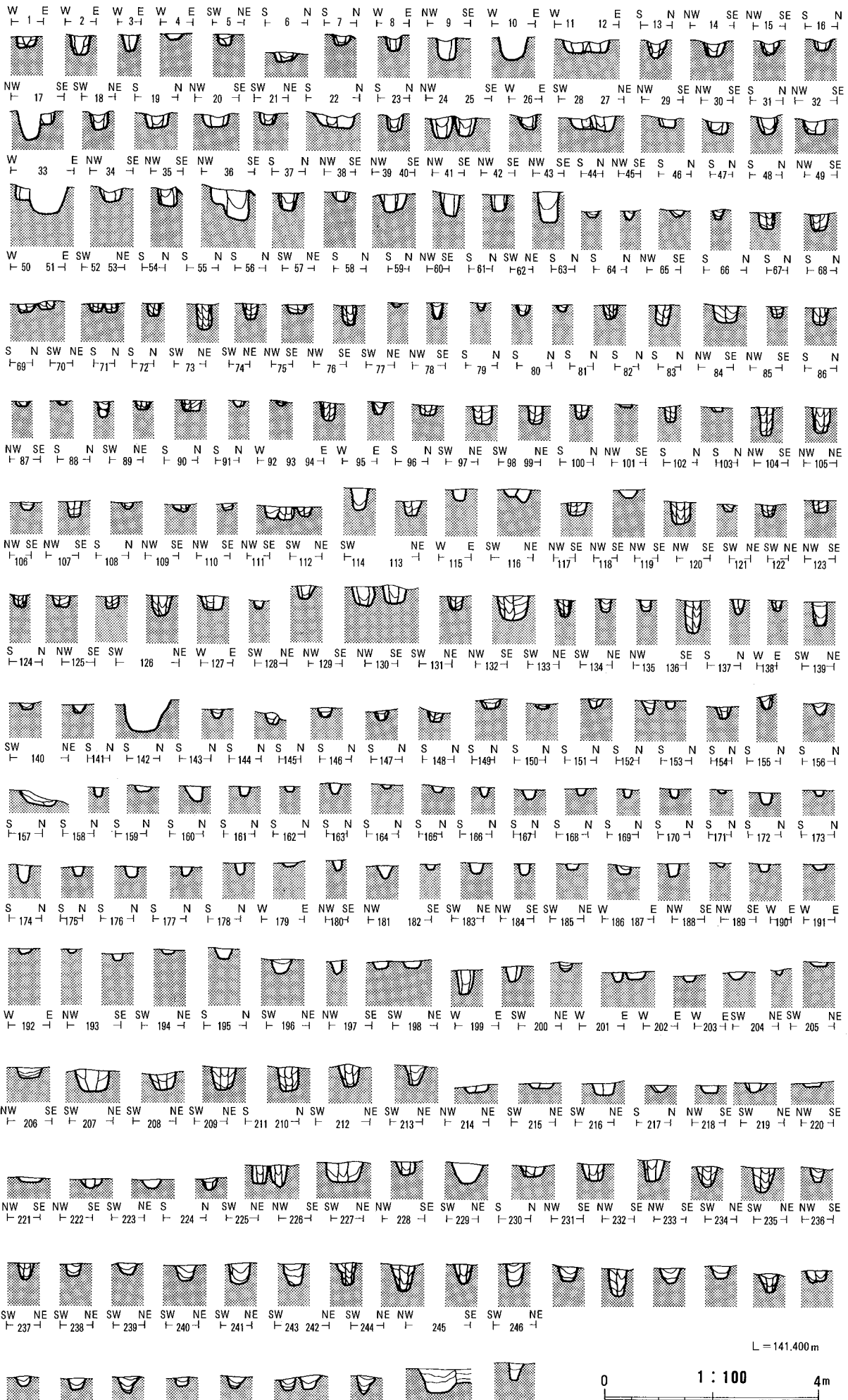
第68図 RG507・508 溝跡

ピット群 (第4・69図)

調査区中央部、南部を中心に246口のピット (P1~246) が検出されている。埋土は暗褐色土・黒褐

色土を含むシルトが主体となるものが多い。以下は、各ピットの深さである。

P 1 -0.20m・P 2 -0.37m・P 3 -0.28m・P 4 -0.11m・P 5 -0.21m・P 6 -0.19m・P 7 -0.15m
P 8 -0.25m・P 9 -0.38m・P 10 -0.40m・P 11 -0.18m・P 12 -0.19m・P 13 -0.30m・P 14 -0.25m
P 15 -0.21m・P 16 -0.18m・P 17 -0.19m・P 18 -0.32m・P 19 -0.24m・P 20 -0.25m・P 21 -0.19m
P 22 -0.20m・P 23 -0.22m・P 24 -0.38m・P 25 -0.29m・P 26 -0.24m・P 27 -0.28m・P 28 -0.22m
P 29 -0.18m・P 30 -0.22m・P 31 -0.29m・P 32 -0.24m・P 33 -0.28m・P 34 -0.20m・P 35 -0.31m
P 36 -0.54m・P 37 -0.35m・P 38 -0.21m・P 39 -0.29m・P 40 -0.32m・P 41 -0.40m・P 42 -0.29m
P 43 -0.55m・P 44 -0.09m・P 45 -0.15m・P 46 -0.11m・P 47 -0.19m・P 48 -0.31m・P 49 -0.28m
P 50 -0.18m・P 51 -0.17m・P 52 -0.16m・P 53 -0.17m・P 54 -0.22m・P 55 -0.49m・P 56 -0.28m
P 57 -0.18m・P 58 -0.34m・P 59 -0.08m・P 60 -0.29m・P 61 -0.14m・P 62 -0.20m・P 63 -0.13m
P 64 -0.22m・P 65 -0.39m・P 66 -0.29m・P 67 -0.21m・P 68 -0.32m・P 69 -0.10m・P 70 -0.08m
P 71 -0.29m・P 72 -0.15m・P 73 -0.21m・P 74 -0.12m・P 75 -0.07m・P 76 -0.32m・P 77 -0.21m
P 78 -0.18m・P 79 -0.36m・P 80 -0.32m・P 81 -0.24m・P 82 -0.06m・P 83 -0.25m・P 84 -0.09m
P 85 -0.52m・P 86 -0.43m・P 87 -0.17m・P 88 -0.32m・P 89 -0.14m・P 90 -0.15m・P 91 -0.14m
P 92 -0.22m・P 93 -0.25m・P 94 -0.19m・P 95 -0.42m・P 96 -0.27m・P 97 -0.22m・P 98 -0.15m
P 99 -0.24m・P 100 -0.37m・P 101 -0.16m・P 102 -0.41m・P 103 -0.15m・P 104 -0.22m・P 105 -
0.23m・P 106 -0.21m・P 107 -0.23m・P 108 -0.28m・P 109 -0.39m・P 110 -0.28m・P 111 -0.17m
P 112 -0.22m・P 113 -0.31m・P 114 -0.33m・P 115 -0.26m・P 116 -0.48m・P 117 -0.31m・P 118 -
0.24m・P 119 -0.20m・P 120 -0.61m・P 121 -0.30m・P 122 -0.19m・P 123 -0.48m・P 124 -0.12m
P 125 -0.15m・P 126 -0.58m・P 127 -0.18m・P 128 -0.19m・P 129 -0.17m・P 130 -0.20m・P 131 -
0.22m・P 132 -0.19m・P 133 -0.08m・P 134 -0.17m・P 135 -0.28m・P 136 -0.12m・P 137 -0.20m
P 138 -0.24m・P 139 -0.19m・P 140 -0.28m・P 141 -0.17m・P 142 -0.13m・P 143 -0.29m・P 144 -
0.18m・P 145 -0.10m・P 146 -0.20m・P 147 -0.08m・P 148 -0.11m・P 149 -0.18m・P 150 -0.19m・
P 151 -0.14m・P 152 -0.17m・P 153 -0.16m・P 154 -0.07m・P 155 -0.21m・P 156 -0.12m・P 157 -
0.32m・P 158 -0.18m・P 159 -0.19m・P 160 -0.17m・P 161 -0.20m・P 162 -0.09m・P 163 -0.18m・
P 164 -0.22m・P 165 -0.11m・P 166 -0.19m・P 167 -0.20m・P 168 -0.12m・P 169 -0.18m・P 170 -
0.23m・P 171 -0.08m・P 172 -0.13m・P 173 -0.11m・P 174 -0.12m・P 175 -0.09m・P 176 -0.13m・
P 177 -0.11m・P 178 -0.19m・P 179 -0.27m・P 180 -0.22m・P 181 -0.12m・P 182 -0.14m・P 183 -
0.46m・P 184 -0.29m・P 185 -0.15m・P 186 -0.18m・P 187 -0.16m・P 188 -0.09m・P 189 -0.23m・
P 190 -0.10m・P 191 -0.08m・P 192 -0.18m・P 193 -0.39m・P 194 -0.32m・P 195 -0.42m・P 196 -
0.44m・P 197 -0.40m・P 198 -0.39m・P 199 -0.13m・P 200 -0.11m・P 201 -0.21m・P 202 -0.15m・
P 203 -0.14m・P 204 -0.16m・P 205 -0.09m・P 206 -0.10m・P 207 -0.18m・P 208 -0.24m・P 209 -
0.21m・P 210 -0.42m・P 211 -0.33m・P 212 -0.36m・P 213 -0.25m・P 214 -0.37m・P 215 -0.18m・
P 216 -0.32m・P 217 -0.39m・P 218 -0.38m・P 219 -0.49m・P 220 -0.29m・P 221 -0.28m・P 222 -
0.24m・P 223 -0.21m・P 224 -0.28m・P 225 -0.41m・P 226 -0.40m・P 227 -0.41m・P 228 -0.50m・
P 229 -0.36m・P 230 -0.44m・P 231 -0.28m・P 232 -0.52m・P 233 -0.28m・P 234 -0.25m・P 235 -
0.29m・P 236 -0.21m・P 237 -0.19m・P 238 -0.20m・P 239 -0.30m・P 240 -0.16m・P 241 -0.18m・
P 242 -0.24m・P 243 -0.18m・P 244 -0.37m・P 245 -0.46m・P 246 -0.30m。



第69図 ピット土層断面

(3) 包含層および表土の遺物 (第70図1～第72図44)

弥生時代 (第70図1～3)

1～3は弥生時代の遺物である。1は弥生時代前期、砂沢式土器の壺の脚部で、内外面に平行沈線を施す。2・3は弥生時代終末期、赤穴式の甕の体部破片である。2は平行沈線により菱形状の文様が描かれ、直下に縦位の撚糸文が施文される。また、外面に朱とカーボンが付着する。3は甕体部下半で縦位の撚糸文が施文される。

続縄文時代 (第70図4)

4は後北C₂式土器と考えられる深鉢体部片である。全体的に摩滅しており、外面に縦位の沈線と三角状の刺突を施す。

奈良時代 (第70図5～第71図14)

5・6は丸底でロクロ未使用の土師器坏である。5は体部下半の外面に段を有し、緩く内湾しながら立ち上がる器形である。体部は内外面ともヘラミガキ、底部はハケメによる調整がみられる。6は体部下端の外面に段を有し、内湾しながら立ち上がる器形である。体部は内外面ともヘラミガキ、底部はハケメの後にヘラミガキを施す。5・6とも外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。

7～11・13は土師器甕である。7は口縁部が外反し、頸部には多段の沈線?が巡る。口縁部～体部下半まで残存するが、約2/3を欠損しており、残存高15.9cm、口径14.8cmをはかり、最大径は口縁部に有する。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面ともヘラナデを施し、内外面には炭化物が付着する。8は口縁部～頸部にかけて残存しており、頸部にわずかな段を有し、口縁部が直線気味に大きく外傾する。口縁部の内外面はヨコナデ、体部の内外面ともハケメを施し、外面には炭化物が付着する。9は頸部にわずかな段を有し、体部上半に膨らみを持たせた甕である。口縁部～底部まで残存するが、約1/2を欠損している。残存高24.3～25.4cm、口径18.7cm、底径7.0cmをはかり、最大径を口縁部に有する。口縁部外面はヨコナデ、内面がヘラナデ、体部外面がヘラミガキを施し、内外面に多量の煤が付着する。底部内面は丸く整形される。

10は口縁部直下に段を有し、全体的に歪みのある甕である。器高17.6～20.3cm、口径19.6～20.2cm、底径7.0cmをはかり、最大径を口縁部に有する。外面は口縁部のヨコナデ後、口縁部～体部下端にかけてヘラミガキを施す。内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデを施す。内外面には煤が付着する。底部内面は丸く整形される。11は頸部に段を有し、口縁部大きく開く甕である。残存高15.0cmをはかり、最大径を口縁部に有する。内外面とも全面にハケメを施した後に、口縁部内外面にヨコナデを施す。外面には煤が付着する。13は頸部に段を有し、体部が緩くカーブを描く甕である。口縁部～体部下半にかけて残存しており、残存高16.6cmをはかる。口縁部の内外面はヨコナデ、体部は内外面ともハケメを施した後、ヘラミガキを施す。外面には煤が付着する。

15は体部中央が大きく膨らむ器形を呈する甕である。口縁部～体部下半にかけて残存し、口縁部の内外面はヨコナデ、体部の外面はヘラミガキ、内面はヘラナデを施す。外面には煤が付着する。13は土師器甕である。ほぼ完形で頸部に段を有し、平底部は焼成以前に鋭利な工具により切り離されたようである。底部付近には工具による切込みの痕跡が見られる。器高18.3～18.6cm、口径20.1cm、底部孔径9.1～9.8cmをはかり、最大径を口縁部に有する。口縁部の外面はヨコナデ、内面がヘラナデ、体部は内外面ともヘラミガキを施す。内外面には煤が付着する。

平安時代（第71図15～第72図30）

15・16・18・19は須恵器坏である。15は回転ヘラ切り無調整で、内外面に重ね焼きによる黒斑が見られる。17・20～22はあかやき土器坏である。21は回転糸切後に底面のみ手持ちヘラケズリを施す。23～25は土師器坏である。26は外面にもヘラミガキを施し、底部はヘラナデで再調整を施している。また、体部下端には一度高台を貼付けた痕跡が見られるが、外面全体に多量の煤が付着していることから、使用時においては高台がなかったものである。23は回転糸切後に体部下端のみ手持ちヘラケズリを施す。内外面には重ね焼きによる黒斑が見られ、内面の黒色処理は消失している。

26は須恵器長頸瓶である。口縁部～底部まで残存しており、約1/4を欠損している。器高20.6cm、口径7.4cm、頸部内径2.6cm、最大径13.3cm、底径6.0cmをはかり、最大径を体部上半にもち肩が張る器形である。頸部にはリングは見られず、底部は糸切りで断面逆台形状の高台が貼り付けられ、外面の体部下半に手持ちのヘラケズリ調整を施す。

27～29は口縁部～体部上半のみ残存するあかやき土器長胴甕である。27は残存高10.5cm、口径23.6cmをはかり、外面に煤が付着する。28は残存高8.4cm、口径20.4cmをはかり、内面に煤が付着する。29は残存高6.5cm、口径23.2cmをはかり、頸部内面にカキメを施す。また、内外面に煤が付着する。

30は口縁部が短く外反する土師器甕である。口縁部～体部下半にかけて残存しており、約2/3を欠損する。残存高24.3cmをはかり、外面は頸部がヘラミガキ、体部がヘラケズリ調整を施す。また、内外面には煤が付着する。

土製品・石製品・鉄製品（第72図31～44）

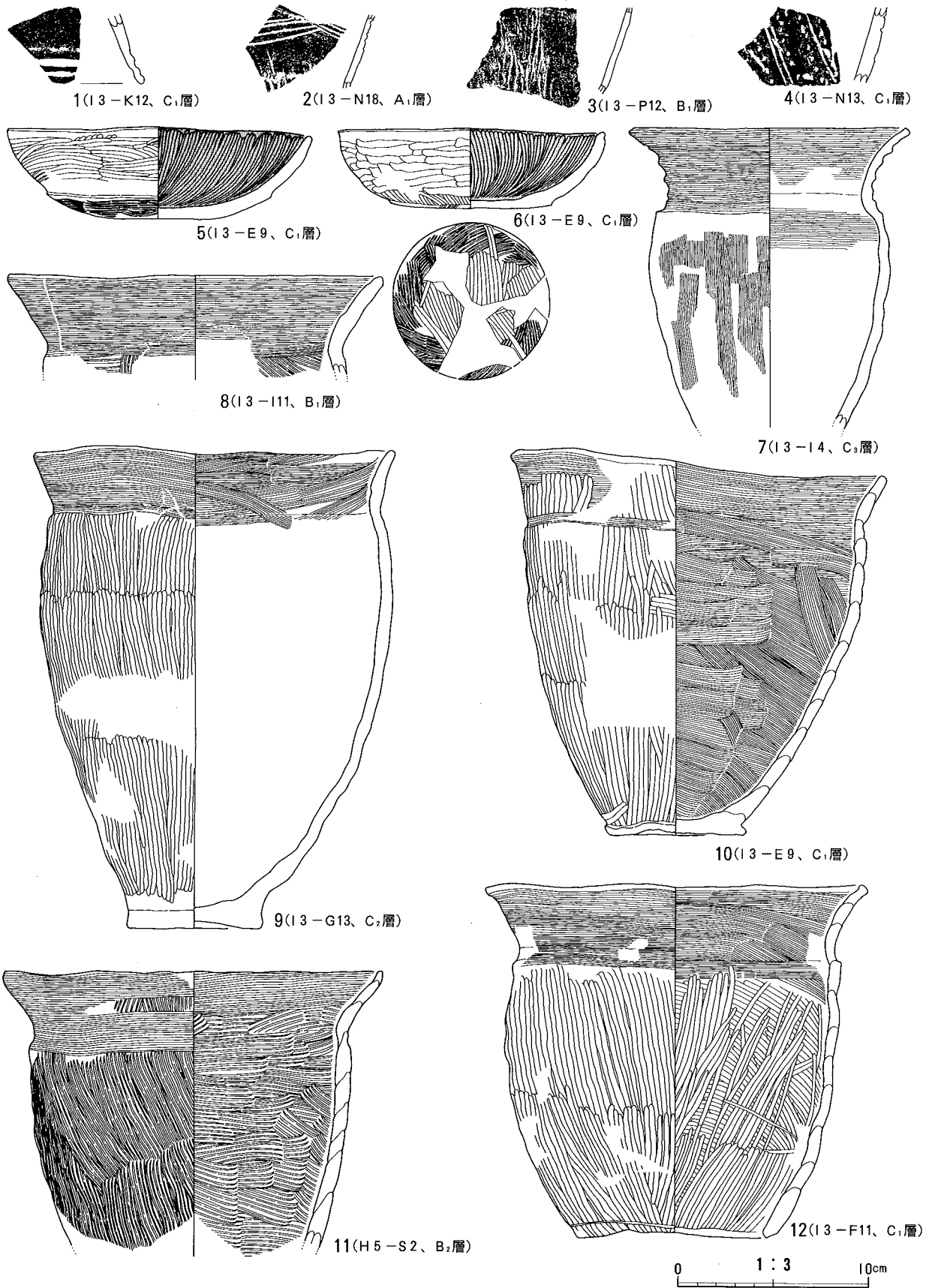
31は膨らみのある土錘である。全長4.0cm、幅0.8～2.0cm、孔径0.4～0.6cmをはかる。

32・33は頁岩製の碁石状石製品で黒色を呈する。32は楕円形を呈しており、片面が欠損する。全長2.4～2.7cm、厚さ0.8cmをはかる。33は方形を呈しており、片面が平らに仕上げられている。全長1.4～1.7cm、厚さ0.4～0.9cmをはかる。

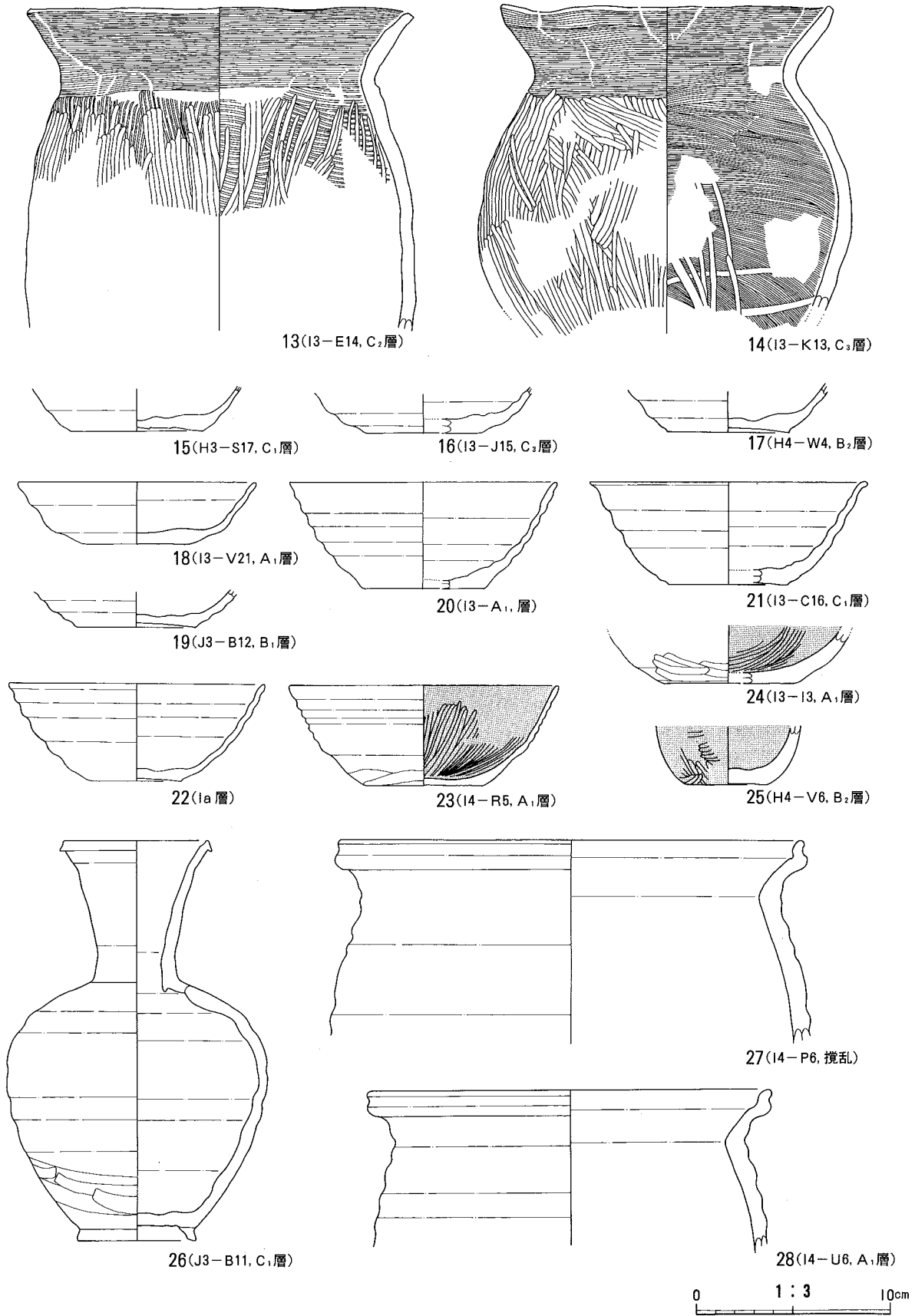
35は鉄鏝の一部で、鏝部が欠損したものである。棒状部の断面は長方形を呈している。残存する長さは9.5cm、幅0.6～1.2cmをはかる。36は片端が屈曲するヘラ状鉄製品で、両端が欠損する。残存する長さは10.0cm、幅0.9cm、厚さ0.2～0.3cmをはかるが、用途は不明である。34は刀子とと思われる鉄製品である。両端が欠損しており、目釘穴が1カ所認められる。残存する長さは4.6cm、幅0.2～1.2cm、厚さ0.2～0.5cm、孔径0.4cmをはかる。刀身側の断面は逆台形状を呈するが、東側は徐々に細くなり、断面は正方形を呈する。

37は煙管で、残存する長さは6.7cm、幅0.5～1.0cm、孔径0.5～0.7cmをはかる。

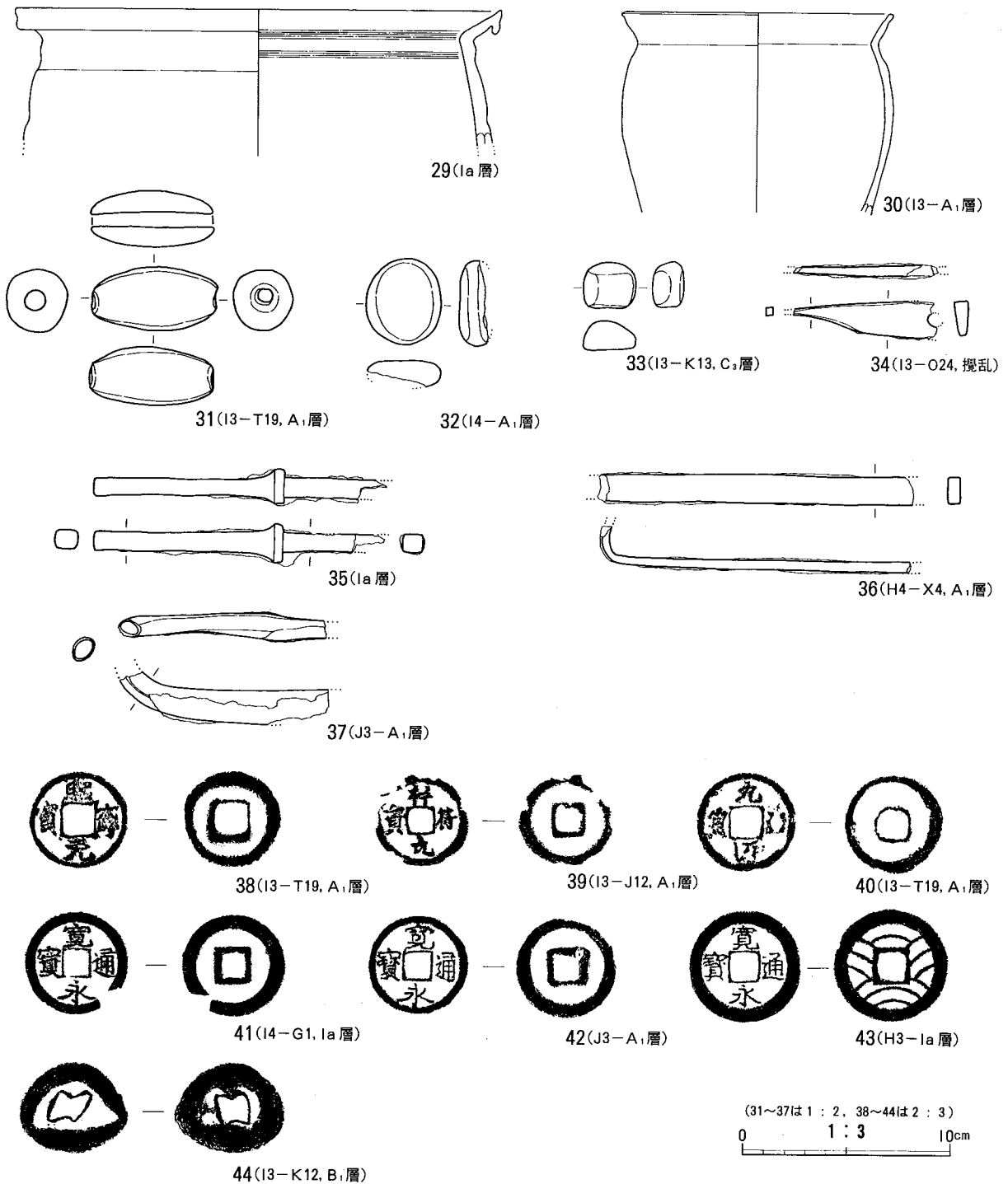
古 銭 38～40は渡来銭で、38は熙寧元寶、39は祥符元寶、40は「元」「寶」の字体は認められるが、残りは不明である。41～43は寛永通寶で、41・42は（古）寛永通寶で、43は（青海波文）寛永通寶である。53は煙管の雁首を潰したもので、所謂「雁首銭」と考えられるものである。



第70図 遺物包含層・遺構外出土遺物 (1)



第71図 遺物包含層・遺構外出土遺物(2)



第72図 遺物包含層・遺構外出土遺物(3)

RE101

番号	位置・層	形態		法量 (cm)				底部切難	調整		外傾度	墨書	色調	備考
		区分	器種	器高	口径	口径	口径		口径	内面				
7-1	床	土師器	甕	—	—	15.8	6.5	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR6/4	にぶい橙	

RD101

番号	位置・層	形態		法量 (cm)				底部切難	調整		外傾度	墨書	色調	備考
		区分	器種	器高	口径	口径	口径		内面	外面				
7-2	床	土師器	甕	24.4	18.9	17.0	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR6/3	にぶい黄橙	黒班

RE102

番号	位置・層	形態		法量 (cm)				底部切難	調整		外傾度	墨書	色調	備考
		区分	器種	器高	口径	口径	口径		内面	外面				
9-1	B	土師器	甕	—	—	6.0	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	—	—	—
9-2	床	土師器	小型甕	—	10.8	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR6/4	にぶい褐	備考

RE103

番号	位置・層	形態		法量 (cm)				底部切難	調整		外傾度	墨書	色調	備考
		区分	器種	器高	口径	口径	口径		内面	外面				
12-1	床	須恵器	甕	4.0	13.0	—	6.1	ハナナリ	ハナナリ	—	—	2.5YR8/4	淡黄	備考

RE105

番号	位置・層	形態		法量 (cm)				底部切難	調整		外傾度	墨書	色調	備考
		区分	器種	器高	口径	口径	口径		内面	外面				
15-1	B1	土師器	甕	4.4	11.8	—	4.8	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR5/4	にぶい赤褐	内黒とび 外-カーボン付着
15-2	B1	土師器	甕	4.6	12.2	—	5.1	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR5/4	にぶい褐	内-カーボン付着
15-3	B1	土師器	甕	—	16.2	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR8/3	浅黄橙	—
15-4	B1	土師器	小型甕	12.2	10.4	14.6	8.3	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR6/6	橙	外-マト

RA106

番号	位置・層	形態		法量 (cm)				底部切難	調整		外傾度	墨書	色調	備考
		区分	器種	器高	口径	口径	口径		内面	外面				
18-1	C8	須恵器	甕	—	—	5.4	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR6/4	にぶい橙	—
18-2	床	須恵器	甕	5.2	15.0	—	7.4	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR6/4	にぶい黄橙	—
18-3	床	須恵器	甕	—	—	7.7	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR6/6	橙	—
18-4	床	須恵器	甕	—	—	6.5	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR7/6	橙	—
18-5	J	須恵器	甕	5.2	14.8	—	6.7	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR7/4	にぶい橙	—
18-6	K	須恵器	甕	4.6	14.4	—	7.0	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR6/6	橙	—
18-7	K	須恵器	甕	4.0	15.0	—	7.5	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR7/8	橙	—
18-8	C	須恵器	甕	5.3	15.6	—	6.6	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR7/8	橙	—
18-9	C	須恵器	甕	5.1	13.1	—	6.5	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR7/4	にぶい橙	外-重ね焼き黒班 内-煤カーボン
18-10	B1	須恵器	甕	5.1	13.8	—	6.9	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR6/8	橙	—
18-11	C	須恵器	甕	—	—	8.0	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR7/6	橙	外-口~体 黒班
18-12	J	須恵器	甕	5.2	15.2	—	7.1	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR7/6	橙	—
18-13	A1	須恵器	甕	4.1	15.0	—	7.0	ハナナリ	ハナナリ	—	—	外-5YR6/8	橙	—
18-14	床	須恵器	甕	4.85	15.2	—	7.0	ハナナリ	ハナナリ	—	—	内-7.5YR5/3	にぶい橙	—
18-15	C7	須恵器	甕	4.7	13.9	—	6.4	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR5/3	にぶい橙	—
18-16	J1	須恵器	甕	—	13.8	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR6/4	にぶい黄橙	—
18-17	K	須恵器	甕	—	—	5.3	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR8/4	浅黄橙	—
18-18	A1	須恵器	甕	5.1	12.4	—	5.8	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR5/4	にぶい赤褐	—
18-19	C	須恵器	甕	—	—	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR6/4	にぶい橙	—
18-20	C	須恵器	甕	—	—	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR7/4	にぶい橙	—
18-21	C	須恵器	甕	—	—	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR7/4	にぶい黄橙	—
18-22	C	須恵器	甕	—	—	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR7/4	にぶい黄橙	—
19-23	K3	須恵器	長頸瓶	—	—	18.3	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR6/1	褐灰	—
19-24	床	須恵器	長頸瓶	—	—	8.6	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR7/3	にぶい黄橙	—
19-25	J	須恵器	小型甕	15.8	15.8	14.5	8.0	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR7/6	橙	—
19-26	K	須恵器	小型甕	—	17.4	16.4	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR6/4	にぶい黄橙	—
19-27	J	須恵器	小型甕	—	15.1	14.4	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR7/3	にぶい黄橙	—
19-28	J	須恵器	小型甕	—	15.2	15.0	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR7/4	にぶい黄橙	—
19-29	C	須恵器	小型甕	—	13.0	11.9	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR7/4	にぶい黄橙	—
19-30	A1	須恵器	甕	—	—	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR7/4	にぶい橙	—
19-31	J	須恵器	甕	—	17.4	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	—	—	—
19-32	C6	須恵器	甕	—	18.4	19.2	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	10YR8/3	浅黄橙	—
20-33	床	須恵器	甕	—	24.0	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR8/4	浅黄橙	—
20-34	J	須恵器	甕	—	21.8	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	5YR7/6	橙	—
20-35	C3	須恵器	甕	—	21.0	—	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	7.5YR5/4	にぶい褐	—
20-36	J	須恵器	甕	—	—	31.8	—	ハナナリ	ハナナリ	—	—	—	—	—

番号		位置・層		形状		質量 (cm)		底面切離		調整		色調		備考				
図	位置・層	区	分	器種	分類	器高	口径	口径	底径	口径/底径	口径/高	外面	内面	分類	外傾度	墨書	色調	備考
RE111	37-1	A2		環	A	3.55	12.2	—	6.9	1.77	3.44			—	1.27		5Y7/2 灰白	外-口縁部に重ね焼きによる黒班

番号		位置・層		形状		質量 (cm)		底面切離		調整		色調		備考				
図	位置・層	区	分	器種	分類	器高	口径	口径	底径	口径/底径	口径/高	外面	内面	分類	外傾度	墨書	色調	備考
RA112	39-1	C1		環	C	5.9	15.0	—	6.3	2.38	2.54			—	1.37	○2カ所	7.5YR6/6 橙	内-口縁部に重ね焼きによる黒班

番号		位置・層		形状		質量 (cm)		底面切離		調整		色調		備考				
図	位置・層	区	分	器種	分類	器高	口径	口径	底径	口径/底径	口径/高	外面	内面	分類	外傾度	墨書	色調	備考
RE113	41-1	J	あかやき	環	A	5.1	14.2	—	6.2	2.29	2.78			—	1.24		7.5YR8/4 浅黄橙	
	41-2	AI	土師器	高台付環		—	—	—	6.2	—	—	△3跡					10YR7/4 にぶい橙	
	41-3	AI	あかやき	小型甕		—	—	—	8.6	—	—						7.5YR6/4 にぶい橙	内外-薬付着
	41-4	J	あかやき	甕		—	—	—	23.3	—	—	△3跡					7.5YR7/4 にぶい黄橙	外-薬付着
	41-5	AI	土師器	甕		—	—	—	19.0	—	—	△3跡 → △3跡					7.5YR5/4 にぶい褐	内外-薬付着

番号		位置・層		形状		質量 (cm)		底面切離		調整		色調		備考				
図	位置・層	区	分	器種	分類	器高	口径	口径	底径	口径/底径	口径/高	外面	内面	分類	外傾度	墨書	色調	備考
RA115	43-1	床	須恵器	環	C	5.0	13.4	—	(5.7)	2.35	2.68			—	1.32		5G/6/1 オリーブ灰	
	43-2	BI	須恵器	環	A	5.0	15.0	—	(6.4)	2.34	3			—	1.19		5G/6/2 オリーブ灰	
	43-3	J	あかやき	環	A	5.15	14.8	—	(6.4)	2.31	2.87			—	1.23		2.5YR5/6 明赤褐	外-体部下平縁部に重ね焼きによる黒落
	43-4	J	あかやき	環	A	4.85	14.4	—	7.3	1.97	2.97			—	1.41		5YR6/6 橙	内-やや薄減
	43-5	AI	あかやき	環	—	—	—	—	—	—	—			—			5YR7/6 橙	内外-やや薄減
	43-6	J	土師器	環	B	5.1	14.0	—	6.3	2.22	2.75			△3跡	1.39		7.5YR8/4 浅黄橙	外-重ね焼き黒班
	43-7	J	土師器	環	C	5.7	16.0	—	7.3	2.19	2.81			△3跡	1.36		7.5YR7/4 にぶい橙	外-底部～口縁部を重ね焼き黒班
	43-8	床	土師器	環	A	—	—	—	—	—	—			△3跡			2.5YR7/8 橙	やや薄減
	43-9	床	あかやき	小型甕		8.4	11.4	—	10.0	—	—			—			10YR5/3 にぶい黄褐	内外-薬付着
	43-10	J	あかやき	小型甕		—	—	—	(14.0)	(13.1)	—			—			5YR7/6 橙	内外-薬付着
	43-11	床	あかやき	甕		—	—	—	—	—	—			—			5YR7/6 橙	内外-薬付着
	43-12	床	あかやき	甕		—	—	—	(22.2)	23.2	—			—			10YR7/4 にぶい黄橙	砂底
	43-13	床	あかやき	甕		—	—	—	—	—	—			—			5YR1/6 橙	外-内-全体に多量の薬付着
	43-14	J	あかやき	甕		—	—	—	21.9	24.8	—			—			7.5YR7/4 にぶい橙	3mm以上の砂層多く含む
	43-15	BI	土師器	小型甕		14.6	14.4	—	13.9	8.2	—			△3跡 → △3跡			外-5YR7/3 にぶい赤褐	内外-多量の薬付着
	44-16	かまど口	あかやき	鉢		17.5	30.4	—	(12.2)	—	—			△3跡			内-7.5YR7/4 にぶい橙	外-縁部による剥落
	44-17	J	土師器	鉢		—	—	—	—	—	—			△3跡			5YR5/6 明暗褐	内外-薬付着

番号		位置・層		形状		質量 (cm)		底面切離		調整		色調		備考				
図	位置・層	区	分	器種	分類	器高	口径	口径	底径	口径/底径	口径/高	外面	内面	分類	外傾度	墨書	色調	備考
RA116	46-1	AI	須恵器	環	A	2.9	13.0	—	6.7	1.94	3.33			—	1.26		7.5YR7/1 灰白	
	46-2	J	あかやき	環	A	5.2	13.3	—	6.1	2.17	2.35			—	1.44		2.5YR8/4 淡黄	
	46-3	J	土師器	甕		31.0	20.7	—	23.4	9.9	—			△3跡 → △3跡			5YR7/8 橙	内外-薬付着

番号		位置・層		形状		質量 (cm)		底面切離		調整		色調		備考				
図	位置・層	区	分	器種	分類	器高	口径	口径	底径	口径/底径	口径/高	外面	内面	分類	外傾度	墨書	色調	備考
RB501	50-1	AI	かわらけ	環		2.0	9.0	—	—	—	—			—			7.5YR8/4 浅黄橙	
	50-2	AI	かわらけ	環		2.3	9.8	—	—	—	—			—			7.5YR6/6 浅黄橙	
	50-3	AI	須恵器	甕		—	—	—	—	—	—			波状文			外-2.5YR4/2 暗灰黄	内-2.5YR3/1 黒褐

第3期 出土器類表 (3)

図号	位置・層	区分	形器種	分類	質量 (cm)			底口/高	底部切離	調整		外傾度	黒書	色調	備考
					口径	口径	口径			外面	内面				
70-5	C1	土師器	坏	A	4.8	15.2	-	(6.2)	内	外			7.5YR7/4 にぶい橙	8C 外-底~口縁部重ね焼き黒班 内-底~口縁部重ね焼き黒班	
70-6	C1	土師器	坏	A	4.1	14.0	-	8.2	内	外			7.5YR7/5 にぶい橙	8C 外-底~口縁部重ね焼き黒班 内-口縁部にペンダラケ付着?	
70-7	C3	土師器	壺	A	-	14.8	12.7	-	内	外			10YR6/3 にぶい黄橙	内外-張付着	
70-8	B1	土師器	壺	A	-	19.7	-	-	内	外			外-7.5YR6/3 にぶい黄橙	外-張付着	
70-9	C2	土師器	壺	A	24.9	18.5	18.9	7.0	内	外			内-7.5YR6/4 にぶい橙	内外-多量の張付着	
70-10	C1	土師器	壺	A	20.1	19.6	17.9	7.0	内	外			7.5YR6/4 にぶい橙	内外-張付着	
70-11	B2	土師器	壺	A	17.4	19.8	17.4	-	内	外			7.5YR6/4 にぶい橙	内外-張付着	
70-12	C1	土師器	瓶	A	18.3	20.1	17.1	10.6	内	外			7.5YR6/3 にぶい橙	内外-張付着	
71-13	C2	土師器	壺	A	(27.3)	18.8	21.1	6.8	内	外			10YR6/3 にぶい黄橙	内外-張付着	
71-14	C3	土師器	壺	A	-	16.5	21.7	-	内	外			2.5YR7/6 橙	外-張付着	
71-15	C1	須置器	坏	A	-	-	-	6.6	内	外			2.5YR8/3 淡黄	内外-重ね焼き黒班 内-張付着	
71-16	C3	須置器	坏	A	-	-	-	(6.8)	内	外			10YR7/4 にぶい黄橙		
71-17	B2	須置器	瓶	A	-	-	-	6.4	内	外			10YR5/1		
71-18	A1	須置器	瓶	A	3.2	12.2	-	5.4	内	外			2.5YR6/3 にぶい黄		
71-19	B1	須置器	坏	A	-	-	-	6.0	内	外			5Y6/2 灰オリーブ	内外-張付着	
71-20	A1	あかやき	坏	A	5.5	13.6	-	6.2	内	外			7.5YR6/6 橙		
71-21	C1	あかやき	坏	A	5.3	14.2	-	6.2	内	外			5YR7/6 橙		
71-22	I a	あかやき	坏	A	5.0	13.0	-	4.7	内	外			7.5YR7/2 灰白	内外-張付着	
71-23	A1	須置器	坏	A	5.2	13.8	-	6.0	内	外			2.5YR8/2 灰白	黒とび 内外-重ね焼き黒班	
71-24	A1	須置器	坏	A	-	-	-	6.4	内	外			10YR7/4 にぶい黄橙		
71-25	B2	土師器	シロコシ壺	A	-	-	-	4.0	内	外			2.5YR3/1 黒褐	内外-黒色処理	
71-26	C1	須置器	長頸瓶	A	20.6	7.4	13.3	(6.0)	内	外			N8/0 暗灰		
71-27	攪乱	あかやき	壺	A	-	23.6	(24.6)	-	内	外			7.5YR7/4 にぶい橙	外-張付着	
71-28	A1	あかやき	壺	A	-	20.4	(20.2)	-	内	外			7.5YR8/6 浅黄橙	内外-張付着	
72-29	I a	あかやき	壺	A	-	23.2	(21.5)	-	内	外			7.5YR6/4 にぶい橙	内外-張付着	
72-30	A1	あかやき	壺	A	-	13.0	13.1	-	内	外			7.5YR5/3 にぶい褐	体部下半-焼熱による剥落	

(4) ま と め

検出遺構 検出された遺構は、奈良時代の竪穴1棟（RE101）、土坑1基（RD101）、平安時代の竪穴住居跡8棟（RA106～109、112、115～117）、竪穴8棟（RE102～105、110、111、113、114）、中世の掘立柱建物跡5棟（RB501～505）、柱列跡1条（RC501）、竪穴7棟（RE501～507）、中・近世の土坑18基（RD501～518）、溝跡8条（RG501～508）、ピット246口（P1～246）である。

これまでに、中津川流域において古代集落が調査された遺跡は、昭和50・51年度に実施された柿ノ木平遺跡、平成2年度に調査された大塚遺跡の2遺跡だけであったが、今回の前野遺跡の発掘調査によって古代の集落が浅岸地区各地に広がっていることが確認された。また、中・近世においても村落が営まれていたことが調査の結果明らかになった。

なお、平安時代～近世の詳細についてはⅢ. 考察編でまとめているので本項では多くを述べない。考察に掲載されなかった古代以前の土器について下記にまとめた。

縄文時代の遺物 縄文時代の遺物は調査区全域より出土している。磨滅が著しいため図示しなかったが、その多くは東に接する柿ノ木平遺跡より流出したものであろう。

弥生時代

砂沢式・赤穴式 微量ではあるが、弥生時代、続縄文時代の土器が出土している。弥生時代の遺物は、前期の砂沢式高坏（第70図1）と後期の赤穴式甕（第70図2・3）である。砂沢式に類似する土器は柿ノ木平遺跡に隣接する向田遺跡・寺沢遺跡からも表面採集されており、前野遺跡出土の土器は磨滅していることから縄文土器と同じく流出した遺物である可能性がある。赤穴式は山岸・浅岸地区において、出土遺物量は少ないものの出土遺跡数が増加する時期である。前野遺跡周辺では、柿ノ木平遺跡、堰根遺跡、向田遺跡、寺沢遺跡、大塚遺跡、永福寺山遺跡からの出土例があり、特に堰根遺跡では多量の赤穴式土器を伴う竪穴住居跡が1棟発見されており興味深い（未報告）。部分的な調査であるため、他の遺構との関連は不明である。遺構の検出例が少ない時期でもあり将来の周辺調査に期待したい。

続縄文時代 北海道系の土器である後北C₂式土器（第70図4）が1点出土している。前野遺跡周辺では、昭和40・41年に発掘調査された永福寺山遺跡、屠牛場遺跡、柿ノ木平遺跡、堰根遺跡、向田遺跡より出土例があり、永福寺山遺跡からは5基以上の土坑墓が検出され、4世紀の土師器である塩釜式と後北C₂式土器が共伴して出土している。前野遺跡においては遺構・共伴を示す土器等は発見されなかったが、遺跡の分布傾向を考えると重要である。

奈良時代 奈良時代と思われる遺構・遺物はRE101竪穴、RD101土坑、遺物についてはI3-E・Fグリッド周辺より土師器が集中して出土している。特に、I3-I4グリッドより出土した甕（第70図7）は、口縁部が大きく湾曲しながら外反し、多段の沈線を巡らすなど在地の土器と異なる要素を持つ土器である。近似する土器として北海道に広く分布する擦文土器があるが、前記した甕類が7・8世紀代の土器に共伴する例が増加しており、一概に北海道系土器ともいえない

土器である。口縁部に沈線が描かれる土器群の位置づけについては今後の研究に委ねたい。

2. 平成9年度調査（第3・4・6次）

位置 平成9年度調査（第3・4・5・6次調査区、第3図）は、第1・2次調査区（平成7・8年度調査区）の北部を対象を対象としたが、旧河道が入り組んでいるため、旧河道を除く微高地上を調査した。なお、第5次調査区（大グリッドI4区南半部）については第1・2次調査からの継続であり、位置的にも離れた調査区であることから平成7・8年度報告分に含ませている。そのため、本項においては主に第3・4・6次調査区について記載する。平成9年度の調査面積は4,750㎡で、内訳は第5次調査区790㎡、第3・4・6次調査区3,960㎡である。調査期間は4月7日～9月29日のうち第5次調査は4月7日～20日までである。

調査回数については、調査予定地の開始順で事前に設定したものであったが、家屋移転等の日程調整や移転順の変更などにより、当初予定していた調査区が数回に渡り分割され、調査区も複雑に入り組んだため第3・4・6次調査区については、平成7・8年度報告分同様に検出遺構・遺物を総括して記述した。

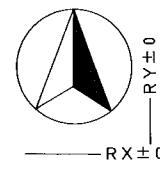
検出遺構 検出された遺構は、縄文時代?の土坑1基（RD001）、古代の溝跡群（畝状）2基（RG509・510）、中・近世の掘立柱建物跡9棟（RB506～514）、柱列跡2条（RC502・503）、中・近世の土坑22基（RD519～537）、溝跡2条（RG511～512）、井戸跡（RI501・502）、ピット357口（P1～357）である。

出土遺物 上記した遺構埋土より、中・近世の遺物が出土している。RB506掘立柱建物跡からは17世紀と考えられる瀬戸の「徳利」?片（第78図1）が出土している。同掘立柱建物跡柱穴からは「熙寧元寶」・「永樂通寶」などの古銭も出土しているが、出土遺物の全てが伝世品・流通期間の長いものであるため、必ずしも17世紀以前の建物跡とはいえないであろう。RB507掘立柱建物跡柱穴からは「永樂通寶」・「古寛永通寶」が出土しており、17～18世紀にかけての建物跡である可能性がある。

検出状況 第3・4・6次調査区付近における基本層序は、基本的に第1・2次調査区（平成7・8年度調査区）と同様で、表土が円礫を多量に含む黒～褐色土（Ia層）、表土下に水成堆積による円礫層（A層）、砂礫シルト層（B層）、褐色シルト（C層）、粘質のある褐色シルト層（D層）が堆積しており、部分的ではあるが、B・C層間に薄い黒色土層が介在する箇所も確認されている。遺構検出については褐色シルト層上面（C層）で行われた。

調査の結果、第1・2次調査で確認された古代（奈良・平安時代）の竪穴住居跡など明確な古代遺構は畝状の溝跡群（RG509・510）を除いては確認されなかった。遺物についても旧河道やC層検出面などで散見された程度である。

中世～近世にかけての遺構内には礫が混入する黒色土が堆積しており、B層上位より掘り込まれたものが大部分と考えられる。近世末～近・現代の遺構埋土は、塊状の黄褐色土を含む暗褐色土で、近・現代の遺構?内の場合はコンクリート・ブロック片などが混入することが多い。



第73図 前野遺跡第3・4・6次調査全体図

(1) 縄文時代・古代の遺構

RD001土坑跡(第74図)

位置 第6次調査区中央 平面形 不整円形
規模 北東-南西上端1.31m・下端1.09m、北西-南東端0.94m・
下端0.77m。

重複関係 P275に切られる

掘込面 削平

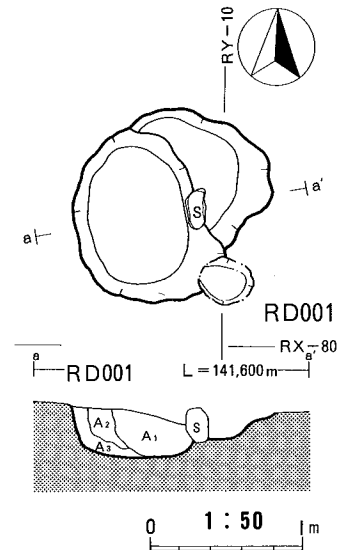
検出面 褐色シルト層上面

埋土 A層は黒褐色土を主体とし、粒状の褐色シルトを含む割合
により3層に細別される。各層は硬く締まる。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.18~0.31mをはかり、南西
壁は直立気味に外傾して立ち上がり、北東壁は緩やかに外傾
して立ち上がる。

底面の状態 南西部が大きく掘り込まれる。

遺物 図示していないが、縄文時代後期の土器片・粘板岩製の石
製品2点が埋土中より出土している。



第74図 RD001土坑

RG509溝跡群(第75図)

位置 第6次調査区南東

平面形 東西に延びる浅い溝が8条並列する。所謂「畝状遺構」に相当する。

規模 長さは1条あたり2.95m~6.05mをはかり、幅は上端1.19~0.19m・下端0.05~0.60mをはかる。

重複関係 RB507・508掘立柱建物跡に切られる 掘込面 削平

検出面 褐色シルト層上面 埋土 白色火山灰を主体に若干の炭化物を含む単層。

壁・底面の状態 検出面から底面までの深さは、最深部で0.20mをはかり、多くは0.01~0.05m以内で緩や
かに上面に立ち上がる。

遺物 なし

RG510溝跡群(第75図)

位置 第6次調査区南東

平面形 東西に延びる浅い溝が4条並列する。RG509溝跡群と同様の遺構である。

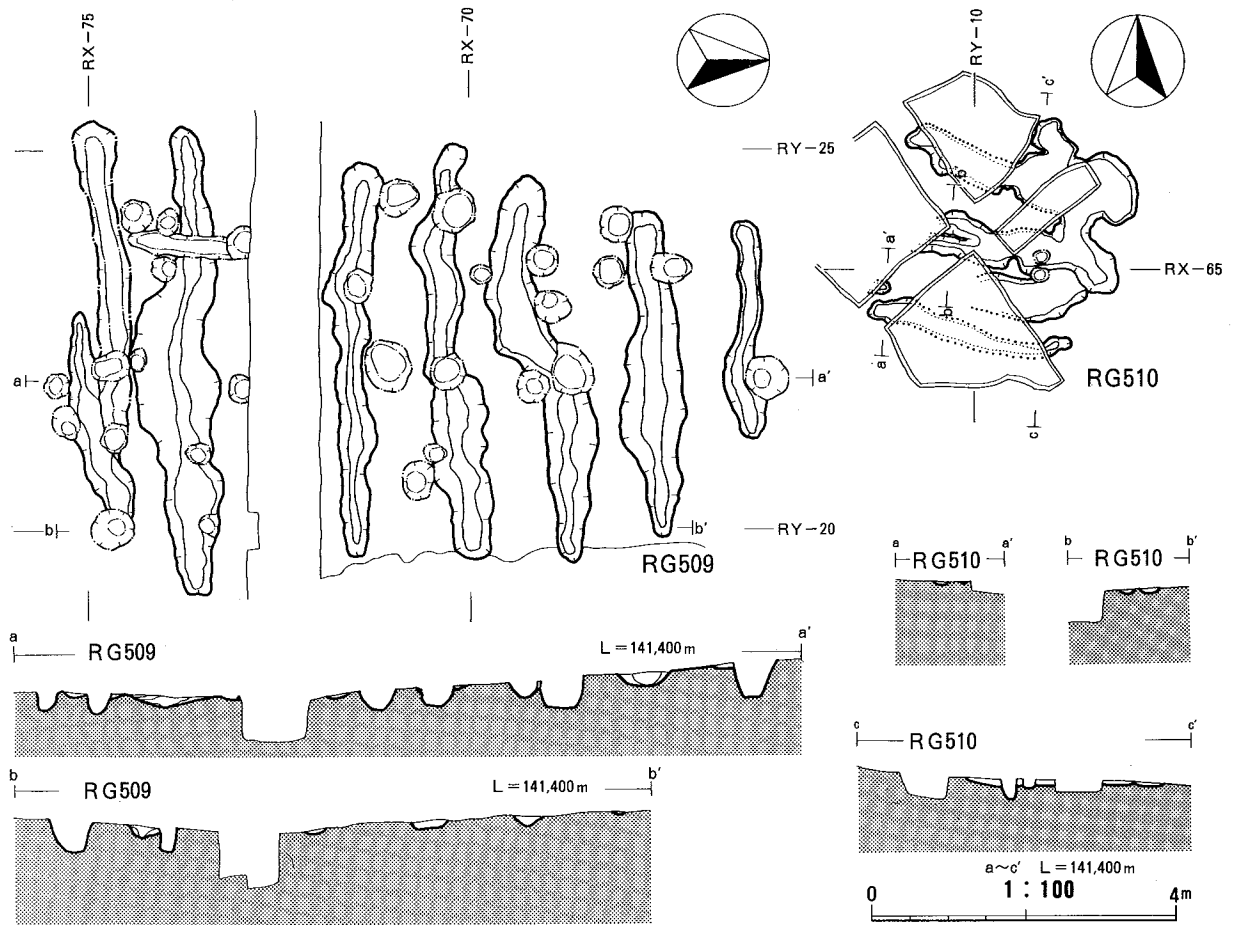
規模 長さは1条あたり2.60m~2.80mをはかり、幅は上端0.17~0.65m・下端0.10~0.48mをはかる。

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 白色火山灰を主体に若干の炭化物を含む単層。

壁・底面の状態 検出面から底面までの深さは、0.05m前後をはかり、緩やかに上面に立ち上がる。

遺物 なし



第75図 RG509・510溝跡群

(2) 中・近世の遺構と遺物

RB506掘立柱建物跡 (第76・78図)

位置 6次調査区の西半。

平面形 母屋桁行6間・梁間3間の南北棟

西面北半・北妻側にかけて庇、西面南半・東面北半・南妻側に下屋を持つ。

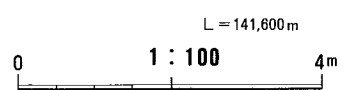
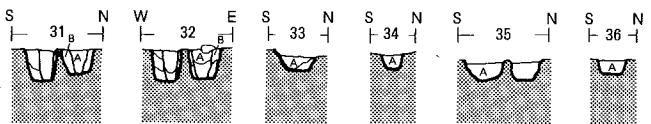
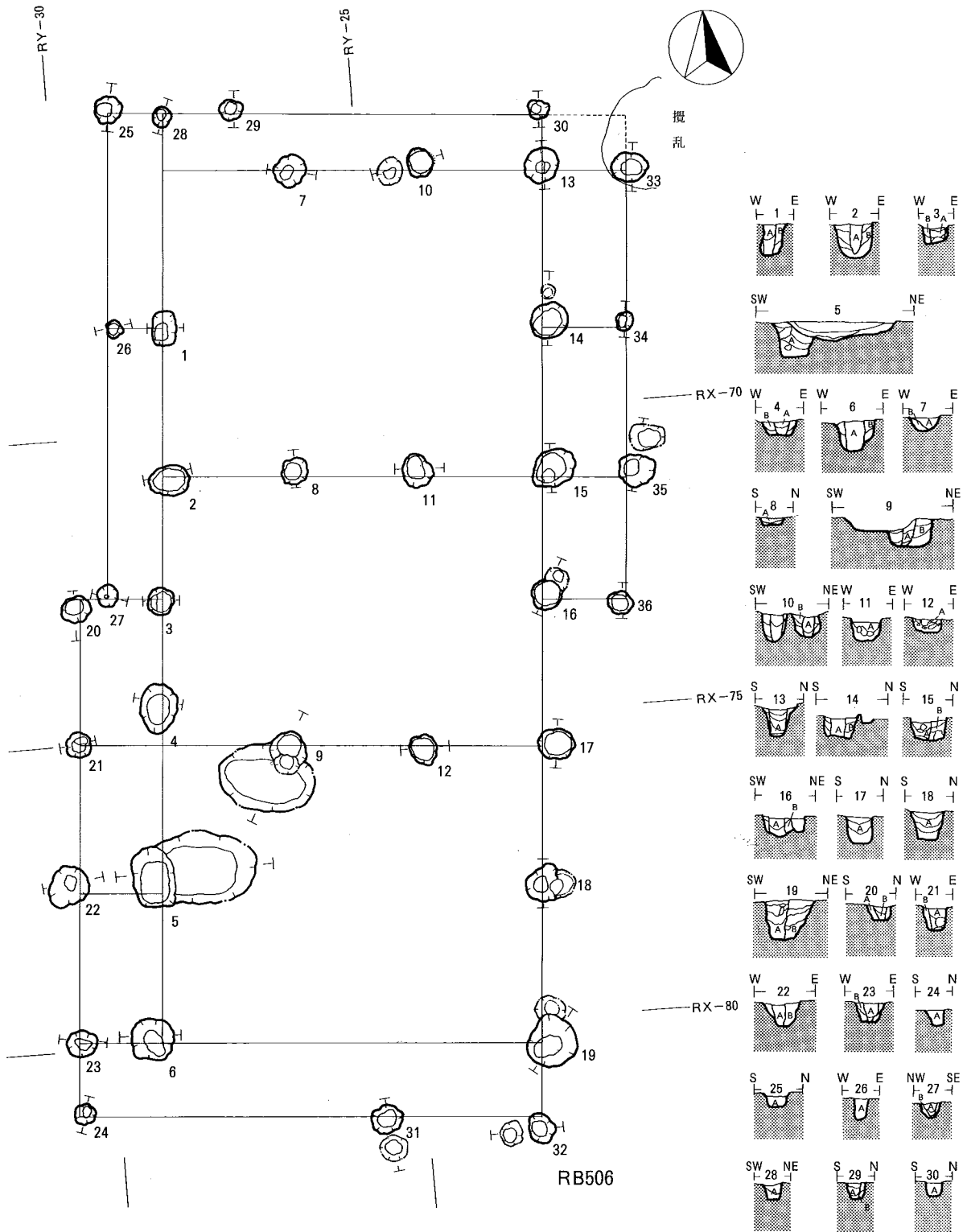
規模 母屋南北6間 (14.15m・46尺7寸)、東西3間 (6.15m・20尺3寸)

重複関係 RD524・525土坑に切られる。RB507・508・509・510掘立柱建物跡と重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。

棟方向 P13とP19を通る東側柱筋でN3°E

柱間寸法 母屋桁行柱間は平均2.36m (7尺8寸)である。西側柱筋はP1・2間-2.39m (7尺9寸)、P2・3間-2.00m (6尺6寸)、P3・4間-1.85m (6尺1寸)、P4・5間-2.72m (尺)、P5・6間-2.61m (尺)である。東側柱筋はP13・14間-2.52m (8尺3寸)、P14・15間-2.45m (8尺1寸)、P15・16間-2.00m (6尺6寸)、P16・17間-2.42m (8尺)、P17・18間-2.24m (7尺4寸)、P18・19-2.52m (8尺3寸)である。

母屋梁間柱間は平均2.05m (6尺8寸)である。北妻柱筋はP7・10間-2.19m (7尺2寸)、P10・13間-1.96m (6尺5寸)である。北側間仕切の柱間はP2・8間-2.12m (7尺)、P8・11間-2.03m (6尺7寸)、P11・15間-2.00m (6尺6寸)である。南側間仕切の柱間はP9・12間-2.15m (7尺)、P12・17間-1.94m (6尺4寸)である。



第76图 RB506 掘立柱建物跡

母屋と庇の幅は0.90m（3尺）、下屋の幅は建物東西面で1.30m（4尺4寸）、南妻側で1.20m（4尺）である。

柱 穴 P1・2・4・6・10・13・14・19～23・31・32の柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.20m前後、掘方径は0.35～0.70mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡（A層）及び掘方（B層）ともに黒褐色土を主体としている。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P1-0.50m・P2-0.52m・P3-0.29m・P4-0.25m・P5-0.58m・P6-0.48m・
P7-0.21m・P8-0.12m・P9-0.43m・P10-0.47m・P11-0.29m・P12-0.20m・
P13-0.49m・P14-0.38m・P15-0.40m・P16-0.36m・P17-0.45m・P18-0.47m・
P19-0.65m・P20-0.22m・P21-0.31m・P22-0.33m・P23-0.32m・P24-0.24m・
P25-0.22m・P26-0.35m・P27-0.25m・P28-0.27m・P29-0.28m・P30-0.21m・
P31-0.35m・P32-0.41m・P33-0.23m・P34-0.20m・P35-0.26m・P36-0.20m

出土遺物（第78図1～8） 1は17世紀代の瀬戸の灰釉徳利である。2は熙寧元寶である。3～8は永楽通寶である。

R B 5 0 7 掘立柱建物跡（第77・78図）

平面形 桁行4間・梁間4間の南北棟

規模 南北4間（8.52m・28尺1寸）、東西4間（8.34m・27尺5寸）

重複関係 RD530・531・532・534土坑に切られる。RB506・508・509掘立柱建物跡と重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。

棟方向 P1とP13を通る西側柱筋でN1°E

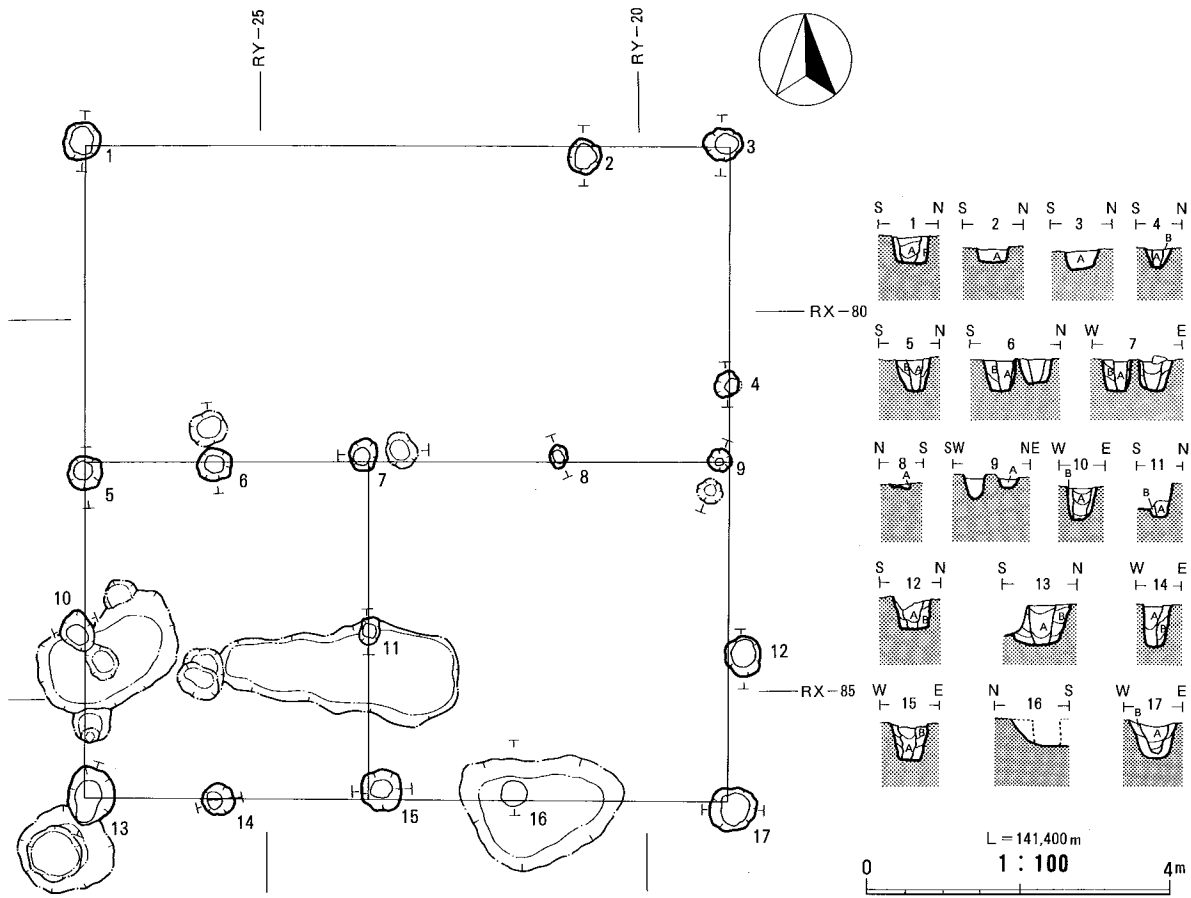
柱間寸法 桁行柱間は平均2.13m（7尺）である。西側柱筋はP5・10間-2.21m（7尺3寸）、P10・13間-2.21m（7尺3寸）である。東側柱筋はP3・4間-3.09m（10尺2寸）、P4・9間-1.00m（3尺3寸）、P9・12間-2.52m（8尺3寸）、P12・16-1.91m（6尺3寸）である。

梁間柱間は平均2.09m（6尺9寸）である。北側柱筋はP2・3間-1.91m（6尺3寸）である。南側柱筋はP13・14間-1.70m（5尺6寸）、P14・15間-2.21m（7尺3寸）である。間仕切はP5・6間-1.70m（5尺6寸）、P6・7間-2.00m（6尺6寸）、P7・8間-2.52m（8尺3寸）、P8・9間-2.12m（7尺）である。

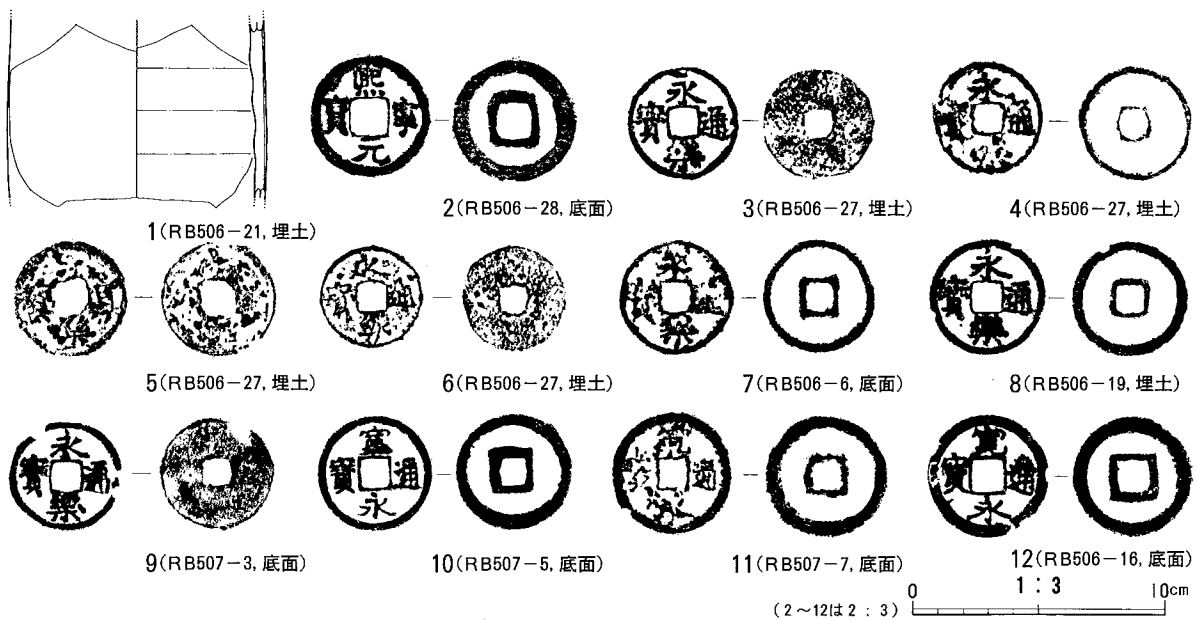
柱 穴 P1・4～7・10～16の柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.20～0.30m、掘方径は0.35～0.80mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡（A層）は暗褐色土を主体としており、カーボンを多量に含む。掘方（B層）は告褐色土を主体とする。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P1-0.35m・P2-0.19m・P3-0.23m・P4-0.25m・P5-0.43m・P6-0.39m・P7-
0.38m・P8-0.06m・P9-0.11m・P10-0.42m・P11-0.45m・P12-0.40m・P13-0.52m・
P14-0.56m・P15-0.52m・P16-0.42m

出土遺物（第78図9～12） 9は永楽通寶である。10～12は古寛永通寶である。



第77図 RB507 掘立柱建物跡



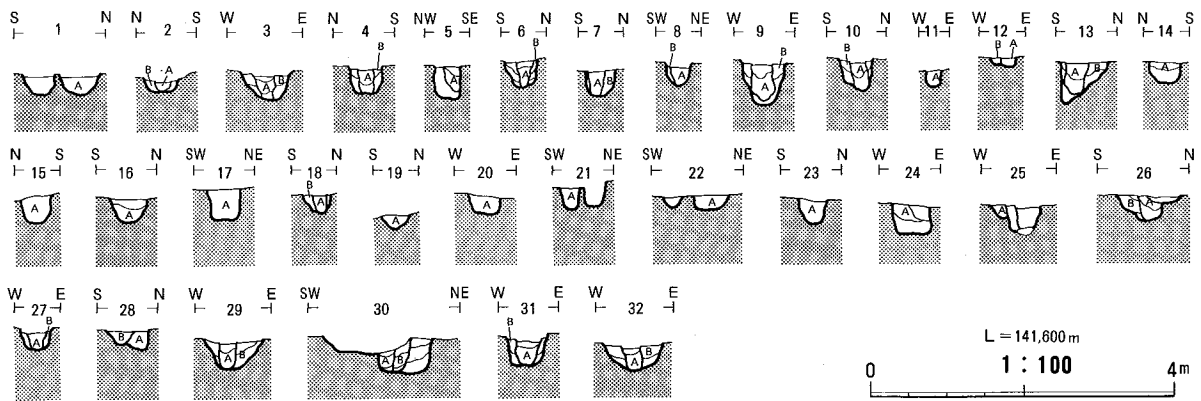
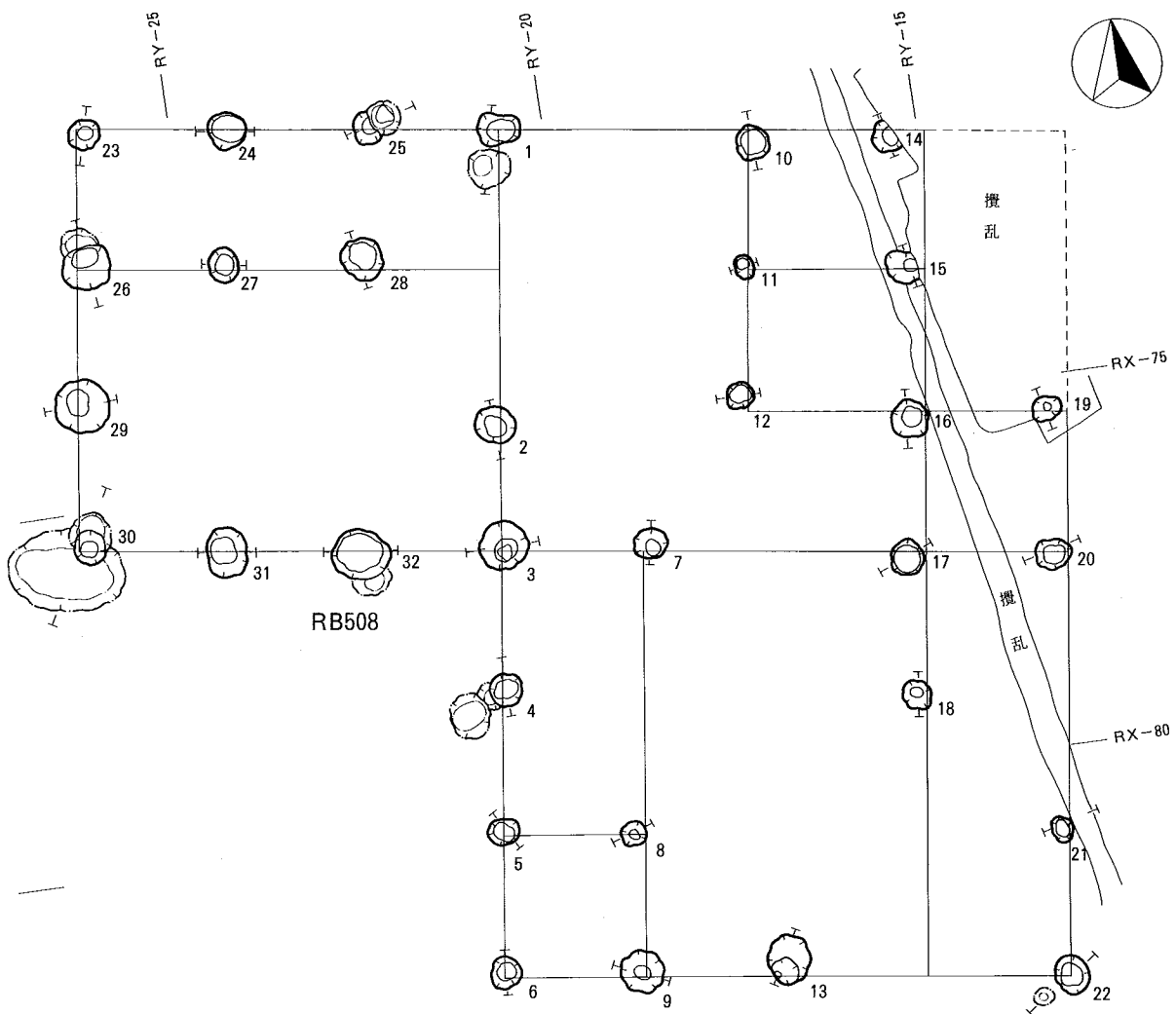
第78図 RB506・507 掘立柱建物跡、出土遺物

R B 5 0 8 掘立柱建物跡 (第79・80図)

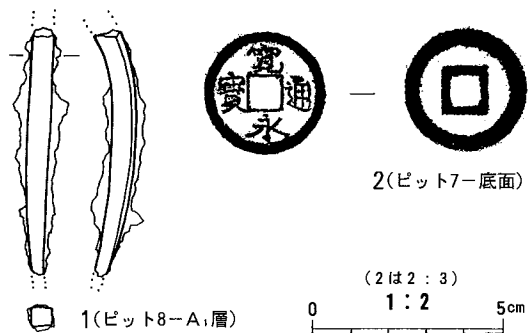
- 位 置** 6次調査区の西半
- 平 面 形** 母屋桁行6間・梁間4間の南北棟に角屋桁行3間・梁間3間が母屋の北西側に突出したL字型
- 規 模** 母屋南北6間 (11.25m・37尺1寸)・東西4間 (7.52m・24尺8寸)
角屋南北3間 (5.70m・18尺8寸)・東西3間 (5.70m・18尺8寸)
- 重 複 関 係** RD524土坑に切られる。R B 506・507・510掘立柱建物跡と重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。
- 棟 方 向** P 1とP 6を通る柱筋でN 8° E
- 柱 間 寸 法** 母屋桁行柱間は平均1.88m (6尺2寸)である。西側柱筋はP 2・3間-1.64m (5尺4寸)、P 3・4間-1.85m (6尺1寸)、P 4・5間-1.85m (6尺1寸)、P 5・6間-1.85m (6尺1寸)である。東側柱筋はP 19・20間-2.00m (6尺6寸)、P 21・22間-2.00m (6尺6寸)である。間仕切はP 14・15間-1.91m (6尺3寸)、P 15・16-2.00m (6尺6寸)、P 16・17間-1.85m (6尺1寸)、P 17・18-1.85m (6尺1寸)である。
母屋梁間柱間は平均1.88m (6尺2寸)である。北妻柱筋はP 10・14間-1.85m (6尺1寸)である。南妻柱筋はP 6・9間-1.85m (6尺1寸)、P 9・13間-1.85m (6尺1寸)である。間仕切はP 3・7間-2.00m (6尺6寸)、P 17・20間-1.91m (6尺3寸)である。
角屋桁行柱間は平均1.90m (6尺3寸)である。北側柱筋はP 23・24間-1.85m (6尺1寸)、P 24・25間-2.00m (6尺6寸)、P 25・1間-1.85m (6尺1寸)である。南側柱筋はP 30・31間-1.85m (6尺1寸)、P 31・32間-1.85m (6尺1寸)、P 32・3間-1.91m (6尺3寸)である。間仕切はP 26・27間-1.85m (6尺1寸)、P 27・28間-1.91m (6尺3寸)である。
角屋梁間柱間は平均1.90m (6尺3寸)である。西妻柱筋はP 23・26間-1.85m (6尺1寸)、P 26・29間-1.85m (6尺1寸)、P 29・30間-2.00m (6尺6寸)である。
- 柱 穴** P 2～4・6～10・13・18・25～27・29～32の柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.20～0.35m、掘方径は0.30～0.80mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡(A層)は黄褐色土が充填しており、木質部が残存するものある。掘方(B層)はグライ化した黒褐色土に塊状の黄褐色土を含む。各柱穴の深さは以下のとおりである。
P 1-0.31m・P 2-0.18m・P 3-0.39m・P 4-0.38m・P 5-0.45m・P 6-0.38m・
P 7-0.32m・P 8-0.34m・P 9-0.57m・P 10-0.42m・P 11-0.21m・P 12-0.12m・
P 13-0.56m・P 14-0.28m・P 15-0.34m・P 16-0.31m・P 17-0.40m・P 18-0.25m・
P 19-0.18m・P 20-0.24m・P 21-0.28m・P 22-0.20m・P 23-0.29m・P 24-0.38m・
P 25-0.18m・P 26-0.34m・P 27-0.29m・P 28-0.28m・P 29-0.40m・P 30-0.45m・
P 31-0.47m・P 32-0.36m
- 出土遺物 (第80図)** 1は頭部、先端部ともに欠損した釘である。2は古寛永通寶である。

R B 5 0 9 掘立柱建物跡 (第81図)

- 位 置** 6次調査区の西半
- 平 面 形** 桁行3間・梁間1間の南北棟
- 規 模** 南北3間 (9.15m・30尺2寸)・東西1間 (1.70m・5尺6寸)



第79図 RB508 掘立柱建物跡



第80図 RB508 掘立柱建物跡出土遺物

重複関係 RD530土坑に切られる。RB506・507掘立柱建物跡と重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。

棟方向 P1とP4を通る柱筋でN7°W

柱間寸法 桁行柱間は平均3.05m（10尺1寸）である。西側柱筋はP1・2間-2.92m（9尺6寸）、P2・3間-3.32m（11尺）、P3・4間-2.92m（9尺6寸）である。東側柱筋はP5・6間-2.72m（9尺）、P6・7間-3.11m（10尺3寸）、P7・8間-3.32m（11尺）である。
梁間柱間は1.70m（5尺6寸）である。

柱穴 P1・6を除く柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.20~0.35m、掘方径は0.25~0.50mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡（A層）及び掘方（B層）ともに黒~暗褐色土を主体とする。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P1-0.29m・P2-0.22m・P3-0.34m・P4-0.21m・P5-0.22m・P6-0.18m・
P7-0.38m・P8-0.32m

RB510 掘立柱建物跡（第81図）

位置 6次調査区の西半

平面形 桁行3間・梁間2間の南北棟

規模 南北3間（4.74m・15尺6寸）・東西2間（3.94m・13尺）

重複関係 RB506・507・508掘立柱建物跡と重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。

棟方向 P1とP4を通る柱筋でN4°E

柱間寸法 桁行柱間は平均1.58m（5尺2寸）である。西側柱筋はP1・2間-1.52m（5尺）、P2・3間-1.61m（5尺3寸）、P3・4間-1.61m（5尺3寸）である。東側柱筋はP8・9間-1.52m（5尺）、P9・10間-1.82m（6尺）である。

梁間柱間は平均1.97m（6尺5寸）である。北妻柱筋はP1・5間-1.91m（6尺3寸）である。南妻柱筋はP4・7間-1.52m（5尺）、P7・10間-2.42m（8尺）である。

柱穴 P1・4・8・9・10の柱穴より柱痕跡が確認された。掘方径は0.25~0.50m、柱痕跡径は0.20~0.35mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡（A層）は黄褐色土が充填しており、木質部が残存するものがある。掘方（B層）はグライ化した黒褐色土に塊状の黄褐色土を含む。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P1-0.52m・P2-0.32m・P3-0.34m・P4-0.38m・P5-0.19m・P6-0.45m・
P7-0.40m・P8-0.35m・P9-0.32m・P10-0.21m

RB511 掘立柱建物跡（第82図）

位置 3次調査区の北半

平面形 桁行6間・梁間4間の東西棟の南西角に下屋が張り出す建物か？

規模 南北4間（6.92m・22尺8寸）、東西6間（11.09m・36尺6寸）

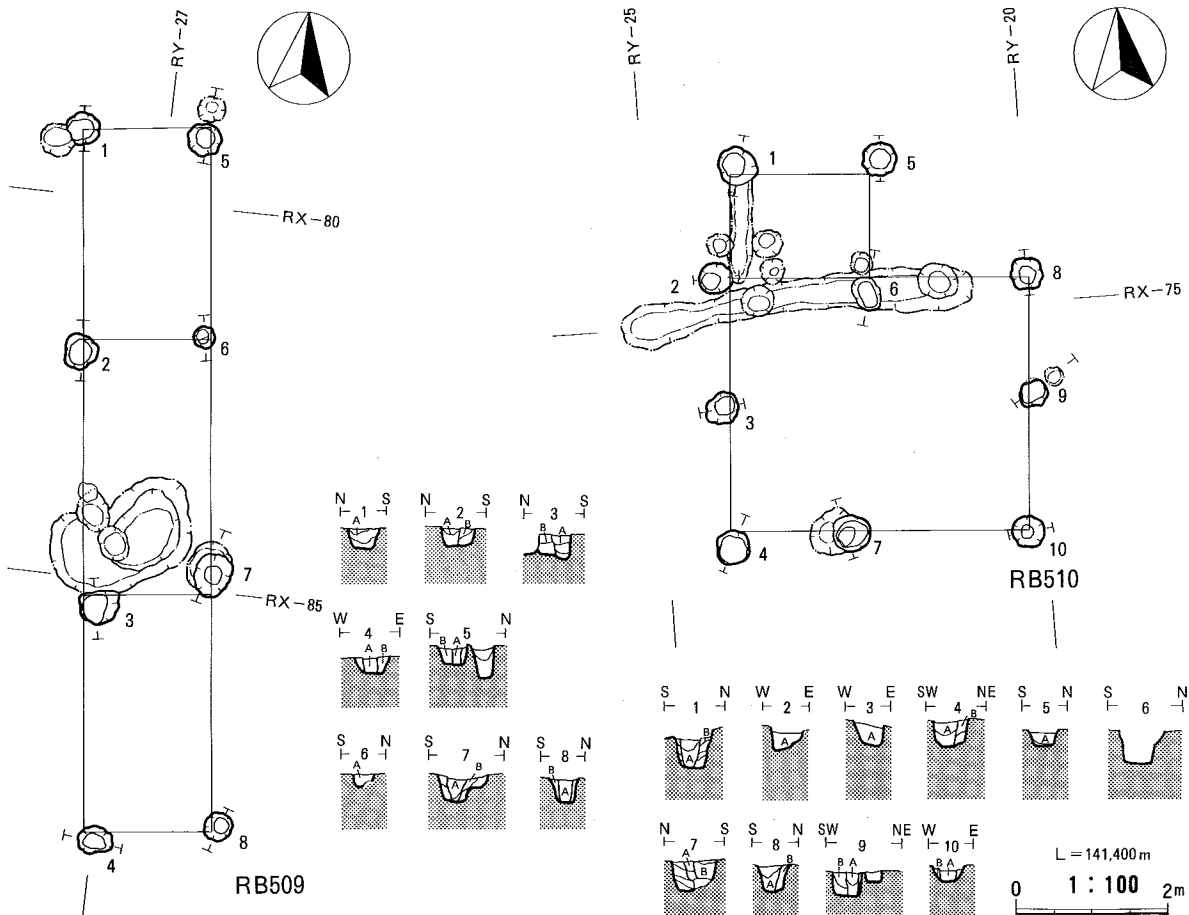
重複関係 RB512掘立柱建物跡、RC502・503柱列跡と重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。

棟 方 向 P10とP16を通る柱筋でE10° N

柱 間 寸 法 桁行柱間は平均1.83m (6尺) である。北側柱筋はP 2・3間-1.82m (6尺)、P 3・4間-1.82m (6尺) である。南側柱筋はP28・29間-2.00m (6尺6寸)、P29・30間-2.00m (6尺6寸) である。北側の間仕切はP10・11間-1.82m (6尺)、P11・12間-1.91m (6尺3寸)、P12・13間-1.91m (6尺3寸)、P13・14間-1.70m (5尺6寸)、P14・15間-2.12m (7尺)、P15・16間-1.52m (5尺) である。中央部の間仕切はP18・19間-2.00m (6尺6寸)、P19・20間-1.82m (6尺)、P20・21間-1.91m (6尺3寸)、P21・22間-1.52m (5尺) である。

梁間柱間は平均1.73m (5尺7寸) である。西妻柱筋はP 6・10間-0.90m (3尺)、P 10・17間-1.82m (6尺)、P17・23間-1.91m (6尺3寸)、P23・27間-1.27m (4尺2寸) である。東妻柱筋はP16・22間-2.00m (6尺6寸)、P22・26間-1.82m (6尺) である。間仕切はP 2・7間-0.90m (3尺)、P 7・12間-1.00m (3尺3寸)、P12・18間-1.82m (6尺)。P 3・8間-0.90m (3尺)、P 8・13間-1.00m (3尺3寸)、P13・19間-1.91m (6尺3寸)、P19・25間-1.82m (6尺)、P25・29間-1.27m (4尺2寸) である。下屋の幅は0.9m (3尺) である。

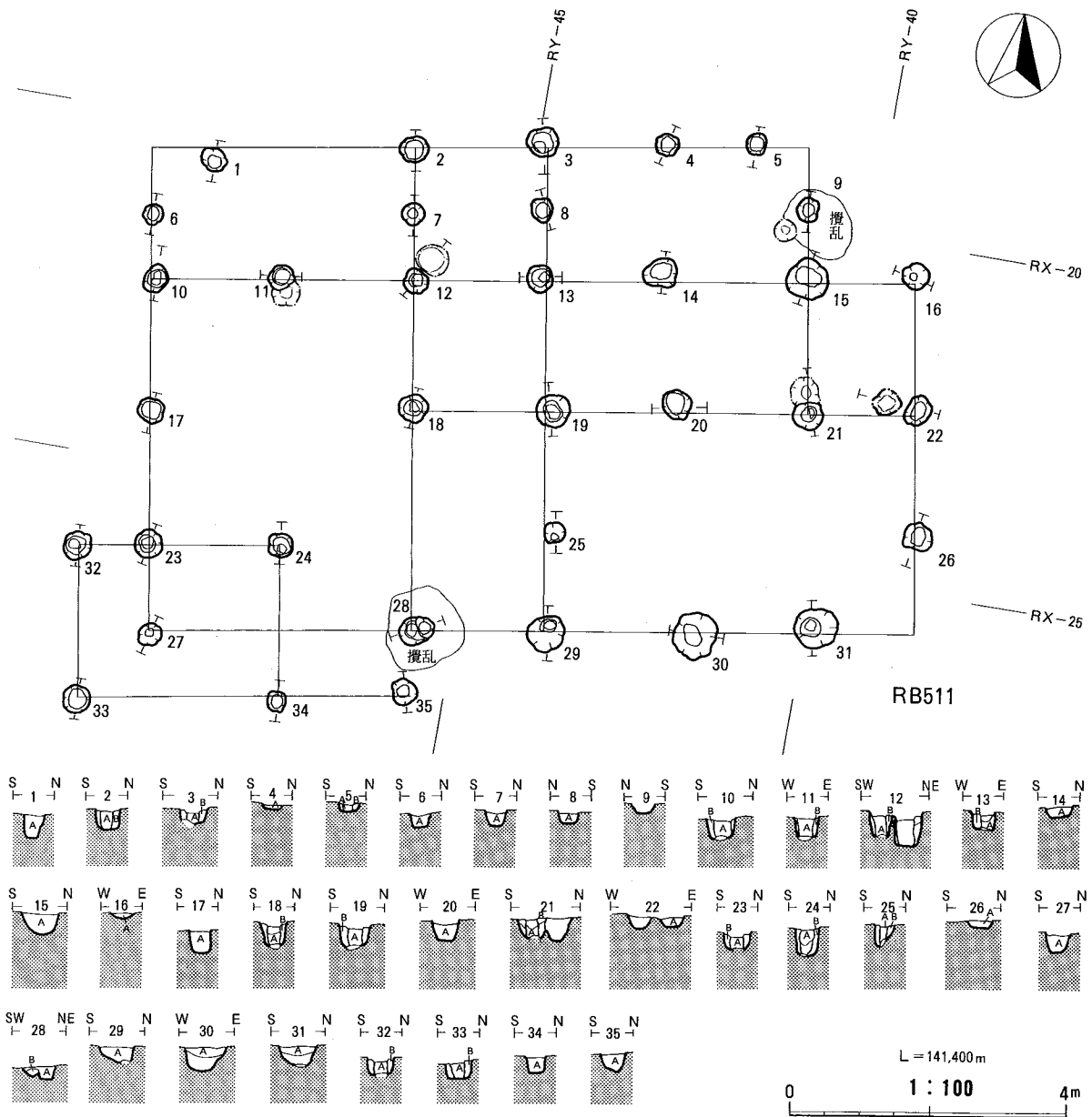
上述した柱間寸法から建物北側の間仕切が半間ごとに配置、南側P23~26とP27~37柱筋の間隔が他より狭い。また、東妻P9~37とP16~26柱筋の間隔も若干狭くなっており、P16~22・26は極端に浅い。そのため、建物の平面形は桁行5間×梁間2間の東西棟に、南北両面と東面に庇あるいは下屋的なものが付く形の可能性もあるが、柱数が足りなく、かなりの検討の余地を残す。



第81図 RB509・510 掘立柱建物跡

柱 穴 P 2・3・10~13・18・19・21・23~25・32・33の柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.15~0.20m、掘方径は0.25~0.60mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡（A層）は黒褐色土、掘方（B層）は暗褐色土を主体としている。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P 1 - 0.34m ・ P 2 - 0.30m ・ P 3 - 0.22m ・ P 4 - 0.09m ・ P 5 - 0.14m ・ P 6 - 0.21m ・
 P 7 - 0.24m ・ P 8 - 0.16m ・ P 9 - 0.13m ・ P 10 - 0.34m ・ P 11 - 0.37m ・ P 12 - 0.36m ・
 P 13 - 0.32m ・ P 14 - 0.14m ・ P 15 - 0.25m ・ P 16 - 0.09m ・ P 17 - 0.34m ・ P 18 - 0.40m ・
 P 19 - 0.39m ・ P 20 - 0.32m ・ P 21 - 0.33m ・ P 22 - 0.15m ・ P 23 - 0.26m ・ P 24 - 0.40m ・
 P 25 - 0.34m ・ P 26 - 0.11m ・ P 27 - 0.30m ・ P 28 - 0.19m ・ P 29 - 0.22m ・ P 30 - 0.35m ・
 P 31 - 0.32m ・ P 32 - 0.34m ・ P 33 - 0.25m ・ P 34 - 0.23m ・ P 35 - 0.27m



第82図 RB511掘立柱建物跡

R B 5 1 2 掘立柱建物跡 (第83・84図)

位 置 3次調査区の北半

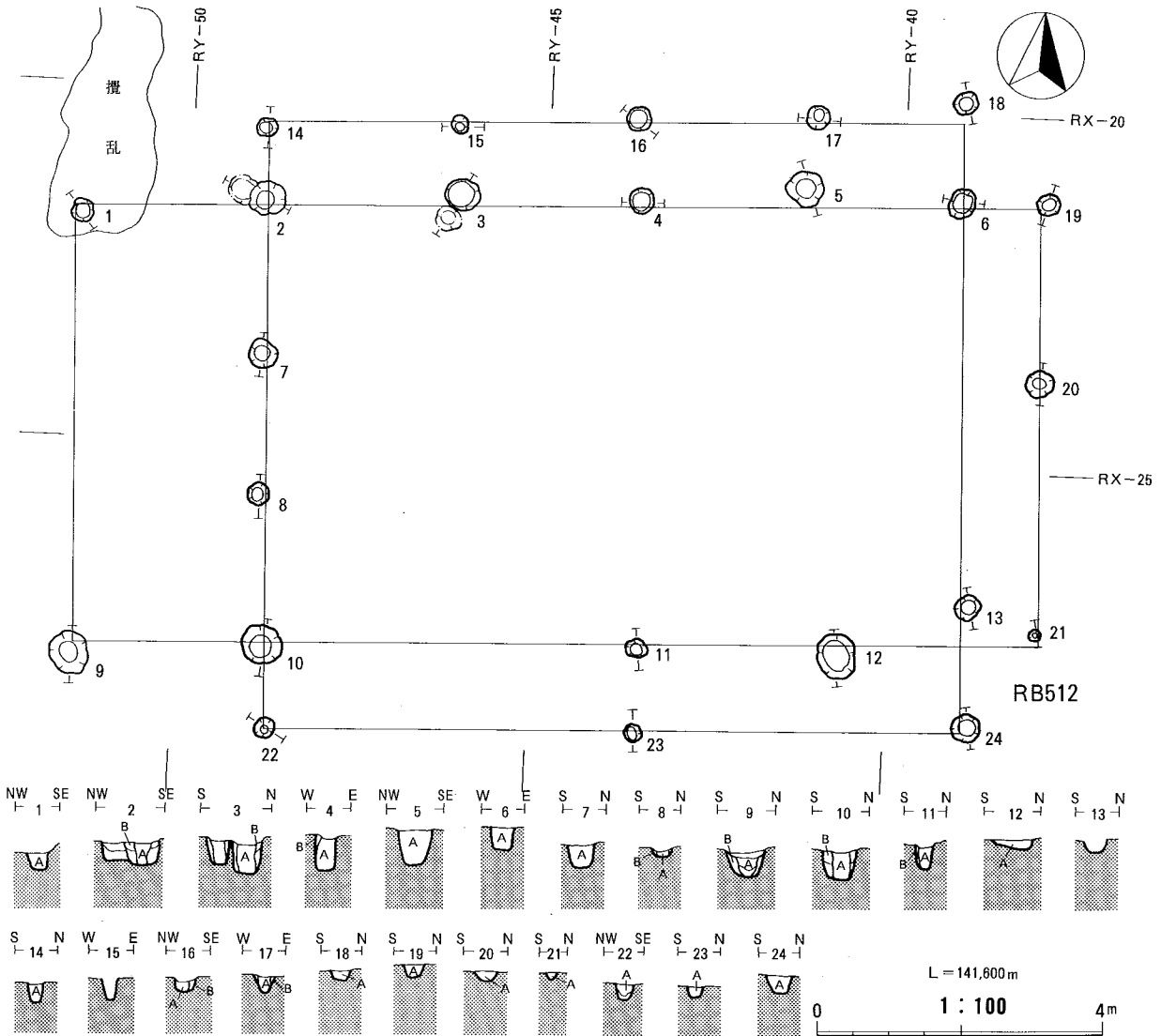
平 面 形 母屋桁行5間・梁間3間の東西棟に西面を除く3面に庇が付く。

規 模 南北3間 (6.18m・20尺4寸)、東西5間 (12.36m・40尺8寸)

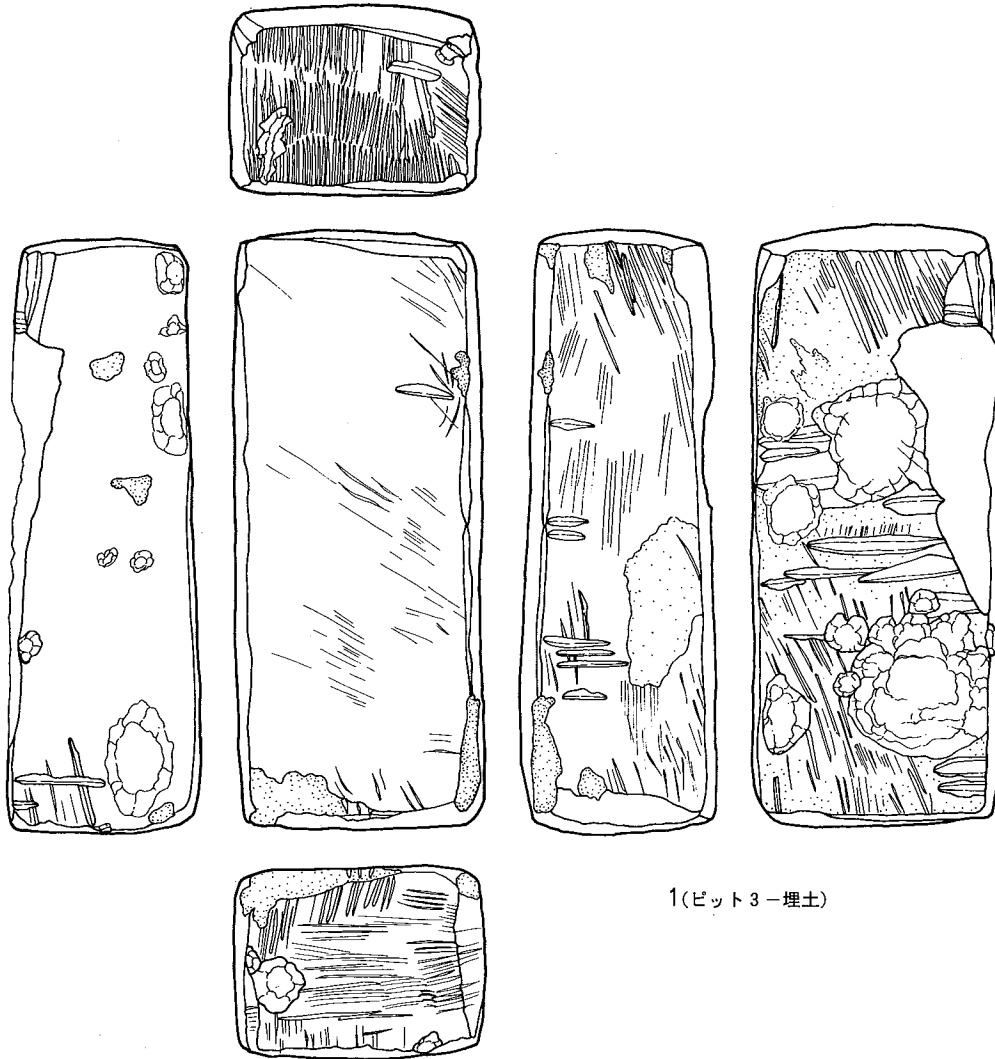
重 複 関 係 R B 5 1 1 掘立柱建物跡、R C 5 0 2・5 0 3 柱列跡と重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。

棟 方 向 P 1 と P 6 を通る柱筋で W 3 ° S

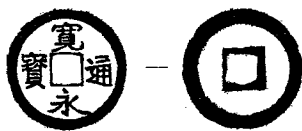
柱 間 寸 法 桁行柱間は平均2.47m (8尺2寸) である。北側柱筋は P 1・2間-2.61m (8尺5寸)、P 2・3間-2.72m (9尺)、P 3・4間-2.52m (8尺3寸)、P 4・5間-2.30m (7尺6寸)、P 5・6間-2.21m (7尺3寸) である。南側柱筋は P 9・10間-2.61m (8尺5寸)、P 11・12間-2.72m (9尺) である。



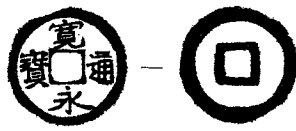
第83図 R B 5 1 2 掘立柱建物跡



1(ピット3-埋土)



2(ピット2-埋土)



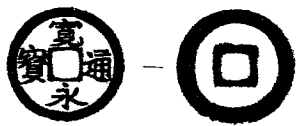
3(ピット2-埋土)



4(ピット2-埋土)



5(ピット2-埋土)



6(ピット2-埋土)



7(ピット2-埋土)

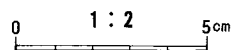


8(ピット3-埋土)



9(ピット10-埋土)

(2~9は2:3)



第84図 RB 5 1 2 掘立柱建物跡・出土遺物

梁間柱間は平均2.06m（6尺8寸）である。P2・7間-2.12m（7尺）、P7・8間-1.94m（6尺4寸）、P8・10間-2.12m（7尺）である。

母屋と庇の幅は、1.00~1.20m（3尺3寸~4尺）である。

柱 穴 P2・3・9~11の柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.20~0.30m、掘方径は0.25~0.60mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡（A層）は黒褐色土、掘方（B層）は暗褐色土を主体としている。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P1-0.25m・P2-0.35m・P3-0.48m・P4-0.52m・P5-0.50m・P6-0.32m・
P7-0.31m・P8-0.14m・P9-0.41m・P10-0.43m・P11-0.38m・P12-0.14m・
P13-0.20m・P14-0.29m・P15-0.30m・P16-0.19m・P17-0.24m・P18-0.12m・
P19-0.18m・P20-0.14m・P21-0.10m・P22-0.22m・P23-0.14m・P24-0.26m

出土遺物（第84図） 1は砥石である。石質は凝灰岩である。2~7は古寛永通寶である。8・9は判読不能。

R B 5 1 3 掘立柱建物跡（第85・86図）

位 置 3次調査区の北半

平 面 形 桁行2間・梁間2間の南北棟

規 模 南北2間（3.88m・12尺8寸）、東西2間（3.64m・12尺）

重複関係 なし

棟 方 向 P1とP3を通る柱筋でN1°E

柱間寸法 桁行柱間は1.94m（6尺4寸）等間である。

梁間柱間はP1・5間に柱がないが、1.82m（6尺）等間であろう。

柱 穴 建物を構成するすべての柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.15~0.25m、掘方径は0.50m前後をはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡（A層）は黒褐色土、掘方（B層）は暗褐色土を主体としている。各柱穴の深さは以下のとおりである。

P1-0.32m・P2-0.35m・P3-0.42m・P4-0.45m・P5-0.38m・P6-0.40m・
P7-0.39m

出土遺物（第86図） 1は治平元寶である。

R B 5 1 4 掘立柱建物跡（第85図）

平 面 形 桁行2間・梁間1間の東西棟に北面を除く3面に張出を持つ

規 模 南北1間（2.27m・7尺5寸）、東西1間（4.54m・15尺）

重複関係 なし

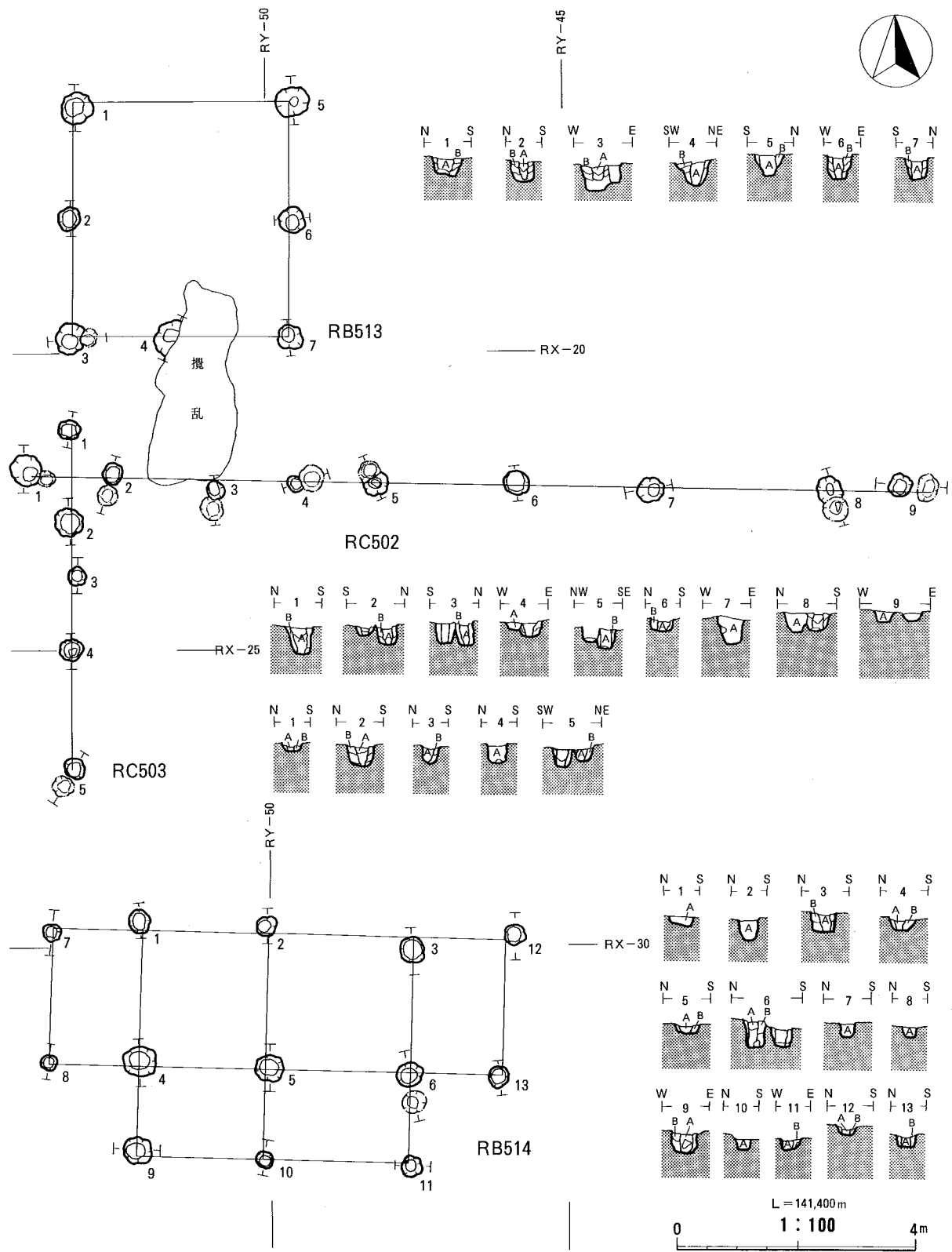
棟 方 向 P1とP3を通る柱筋でW2°N

柱間寸法 桁行柱間は2.27m（7尺5寸）等間である。

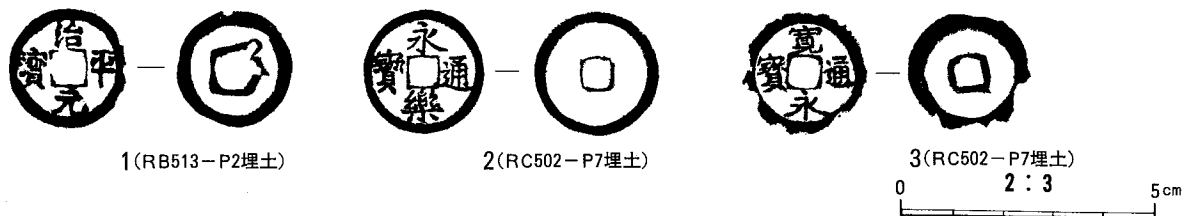
梁間柱間も2.27m（7尺5寸）である。

母屋からの張出の幅は3面とも1.51m（5尺）である。

柱 穴 P3~6・9・11~13の柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.20m前後、掘方径は0.20~0.50mをはかる。柱穴の埋土は、柱痕跡（A層）は黒褐色土、掘方（B層）は暗褐色土を主体としている。各柱穴の深さは以下のとおりである。



第85图 RB513・514 掘立柱建物跡、RC502・503 柱列跡



第86图 RB513 掘立柱建物跡、RC502 柱列跡出土遺物

P 1 -0.15m・P 2 -0.38m・P 3 -0.29m・P 4 -0.22m・P 5 -0.14m・P 6 -0.46m・
P 7 -0.25m・P 8 -0.18m・P 9 -0.42m・P 10 -0.22m・P 11 -0.21m・P 12 -0.11m・
P 13 -0.20m

RC 5 0 2 柱列跡 (第85・86図)

位 置 3次調査区の北半

規 模 西-東8間 (14.99m・49尺7寸)。

重複関係 RC 503柱列跡と直交する形で重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。

柱間寸法 P 1・2間-1.82m (6尺)、P 2・3間-1.73m (5尺7寸)、P 3・4間-1.30m (4尺3寸)、P 4・5間-1.30m (4尺3寸)、P 5・6間-2.36m (7尺8寸)、P 6・7間-2.36m (7尺8寸)、P 7・8間-2.91m (9尺6寸)、P 8・9間-1.21m (4尺) である。

柱 穴 P 1～6の柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.15～0.30m、掘方径は0.35～0.48mをはかる。埋土は、柱痕跡からは多量の炭化物が検出され、掘方埋土は円礫を多量に含む黒褐色土である。各柱穴の深さは次のとおりである。

P 1 -0.44m・P 2 -0.35m・P 3 -0.41m・P 4 -0.23m・P 5 -0.34m・P 6 -0.21m・P 7 -0.44m・P 8 -0.29m・P 9 -0.20m。

出土遺物 (第86図) 2は永楽通寶である。3は古寛永通寶である。ともにP 7埋土から出土している。

RC 5 0 3 柱列跡 (第85図)

位 置 3次調査区の北半

規 模 北-南4間 (4.05m・13尺5寸)。

重複関係 RC 502柱列跡と直交する形で重複するが、柱穴相互の切合いがなく、新旧関係は明確でない。

柱間寸法 P 1・2間-1.52m (5尺)、P 2・3間-0.90m (3尺)、P 3・4間-1.30m (4尺3寸)、P 4・5間-2.00m (6尺6寸) である。

柱 穴 P 2・3・5の柱穴より柱痕跡が確認された。柱痕跡径は0.15～0.20m、掘方径は0.25～0.35mをはかる。埋土は、柱痕跡からは多量の炭化物が検出され、掘方埋土は円礫を多量に含む黒褐色土である。各柱穴の深さは次のとおりである。

P 1 -0.14m・P 2 -0.36m・P 3 -0.32m・P 4 -0.31m・P 5 -0.22m

RD 5 1 9 土坑跡 (第87図)

位 置 第3次調査区北 平面形 不整楕円形 長軸方向 E 5° N

規 模 長軸上端2.25m・下端1.72m、短軸上端1.94m・下端1.56m

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋 土 炭化物を含む暗褐色土

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.10～0.18mをはかる。壁は緩やかに外傾する。

底面の状態 平坦

遺 物 なし

R D 5 2 0 土坑跡 (第87図)

位 置 第3次調査区中央 平面形 不整楕円形 長軸方向 N4° W
規 模 長軸上端2.37m・下端1.28m、短軸上端1.87m・下端1.22m
重複関係 P76・77・78を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A層は3層に細別される。A層は暗褐色土を主体とし、塊状の黄褐色土を含む。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.55mをはかる。壁は直立ぎみに外傾する。
底面の状態 平坦 遺物 なし

R D 5 2 1 土坑跡 (第87図)

位 置 第6次調査区北 平面形 不整楕円形 長軸方向 N16° W
規 模 長軸上端1.74m・下端1.12m、短軸上端1.33m・下端1.02m
重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A・B層の2層に大別され、B層は4層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.88mをはかる。壁はほぼ直壁である。
底面の状態 平坦 遺物 なし

R D 5 2 2 土坑跡 (第87図)

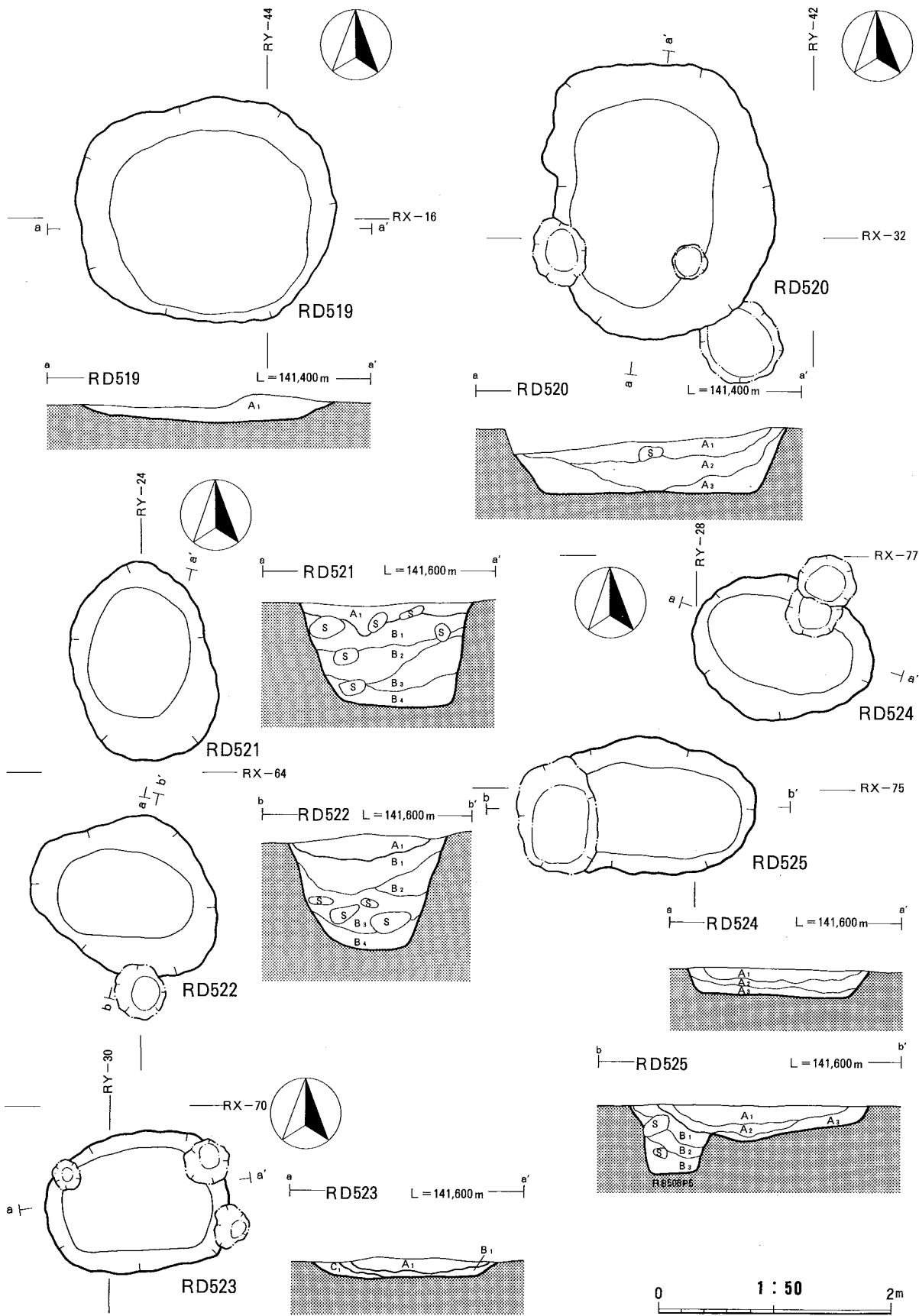
位 置 第6次調査区北 平面形 不整楕円形 長軸方向 W6° N
規 模 長軸上端1.79m・下端1.33m、短軸上端1.38m・下端0.74m
重複関係 R B 5 0 6 掘立柱建物跡を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A・B層の2層に大別され、B層は4層に細別されB3層には円礫が混入する。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.91mをはかる。壁はほぼ直壁である。
底面の状態 緩く湾曲する。 遺物 なし

R D 5 2 3 土坑跡 (第87図・第92図1)

位 置 第6次調査区北東 平面形 楕円形 長軸方向 E3° N
規 模 長軸上端1.80m・下端1.47m、短軸上端1.20m・下端0.88m
重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A～C層の3層に大別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.14mをはかる。壁は緩やかに立ち上がる。
底面の状態 ほぼ平坦
遺物 (第92図1) 1は土坑底面より出土した釘である。

R D 5 2 4 土坑跡 (第87図)

位 置 第6次調査区中央西 平面形 不整楕円形 長軸方向 E22° S
規 模 長軸上端1.58m・下端1.31m、短軸上端1.27m・下端0.75m
重複関係 R B 5 0 8 掘立柱建物跡を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A層は3層に細別される。



第87图 RD519·520·521·522·523·524·525土坑

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.26mをはかる。壁はほぼ直壁である。

底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし

R D 5 2 5 土坑跡 (第87図)

位置 第6次調査区中央西 平面形 不整楕円形 長軸方向 W 2° S

規模 長軸上端1.36m・下端1.25m、短軸上端1.18m・下端0.85m

重複関係 R B 5 0 6 掘立柱建物跡を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 A層は3層に細別される。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.32mをはかる。壁は底部から壁にかけてゆるやかに立ち上がる。

遺物 なし

R D 5 2 6 土坑跡 (第88・92図)

位置 第6次調査区中央西 平面形 円形

規模 東-西上端1.48m・下端1.24m、南-北上端1.44m・下端1.15m

重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 A・B層に大別され、Bは2層に細別される。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.16mをはかる。壁は底部から壁にかけてゆるやかに立ち上がる。

遺物 (第92図2) 2はA₁層より出土した角釘である。

R D 5 2 7 土坑跡 (第88・92図)

位置 第6次調査区中央 平面形 不整形

規模 東-西上端2.55m・下端2.38m、南-北上端2.60m・下端2.44m

重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 A層は2層に細別される。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.15mをはかる。壁は底部から壁にかけてゆるやかに立ち上がる。

遺物 (第92図3) 3はA₁層より出土した角釘である。

R D 5 2 8 土坑跡 (第88図)

位置 第6次調査区中央 平面形 円形

規模 東-西上端0.85m・下端0.52m、南-北上端0.82m・下端0.58m

重複関係 R D 5 2 9 土坑を切る 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 A層は3層に細別される。

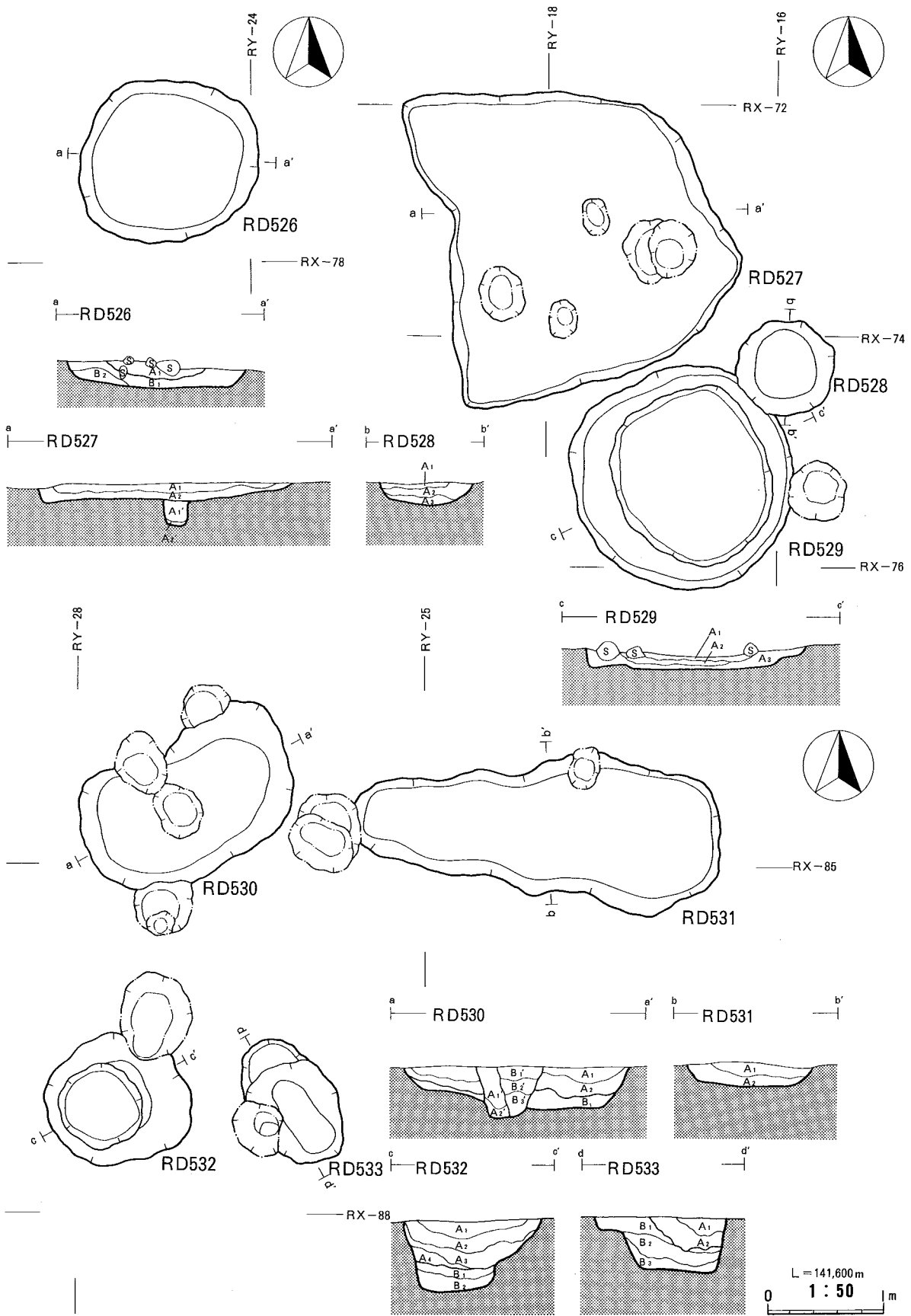
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.20mをはかる。壁は底部から壁にかけてゆるやかに立ち上がる。

遺物 なし

R D 5 2 9 土坑跡 (第88図)

位置 第6次調査区中央 平面形 円形

規模 東-西上端1.88m・下端1.79m、南-北上端1.90m・下端1.72m



第88图 RD526·527·528·529·530·531·532·533土坑

重複関係 RD528土坑に切られる。 掘込面 削平
検出面 褐色シルト層上面 埋土 A層は3層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.16mをはかる。壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 平坦 遺物 なし

RD530土坑跡(第88図)

位置 第6次調査区南 平面形 不整楕円形 長軸方向 E24° N
規模 長軸上端1.89m・下端1.53m、短軸上端1.06m・下端0.80m
重複関係 P285に切られる 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 A・B層に大別され、A層は2層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.30mをはかる。壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 平坦 遺物 なし

RD531土坑跡(第88図)

位置 第6次調査区南 平面形 不整長方形 長軸方向 W2° N
規模 長軸上端3.08m以上・下端2.98m、短軸上端1.29m～0.68m・下端1.02m～0.45m
重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 A層は2層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.18mをはかる。壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 平坦 遺物 なし

RD532土坑跡(第88図)

位置 第6次調査区南 平面形 円形
規模 東-西上端1.18m・下端0.58m、南-北上端1.12m・下端0.62m
重複関係 RB507掘立柱建物跡を切る 掘込面 削平
検出面 褐色シルト層上面
埋土 A・B層に大別され、A層は4層、B層は2層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.60mをはかる。壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 平坦 遺物 なし

RD533土坑跡(第88図)

位置 第6次調査区南 平面形 楕円形 長軸方向 N35° W
規模 長軸上端1.18m・下端0.72m、短軸上端0.57m・下端0.28m
重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋土 A・B層に大別され、A層は2層、B層は3層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.48mをはかる。壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 平坦 遺物 なし

R D 5 3 4 土坑跡 (第89図)

位 置 第6次調査区南 平面形 不整楕円形 長軸方向 E19° N
規 模 長軸上端1.98m・下端1.65m、短軸上端1.26m・下端0.89m
重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A・B層に大別され、A層は2層、B層は3層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.38mをはかる。壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 平坦 遺物 なし

R D 5 3 5 土坑跡 (第89図)

位 置 第6次調査区南 平面形 不整楕円形 長軸方向 N41° E
規 模 長軸上端1.52m・下端1.26m、短軸上端1.48m・下端1.25m
重複関係 不明 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
埋 土 A・B層に大別され、各層は2層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.42mをはかる。底面からゆるやかに上面に立ち上がる。
遺 物 なし

R D 5 3 6 土坑跡 (第89図)

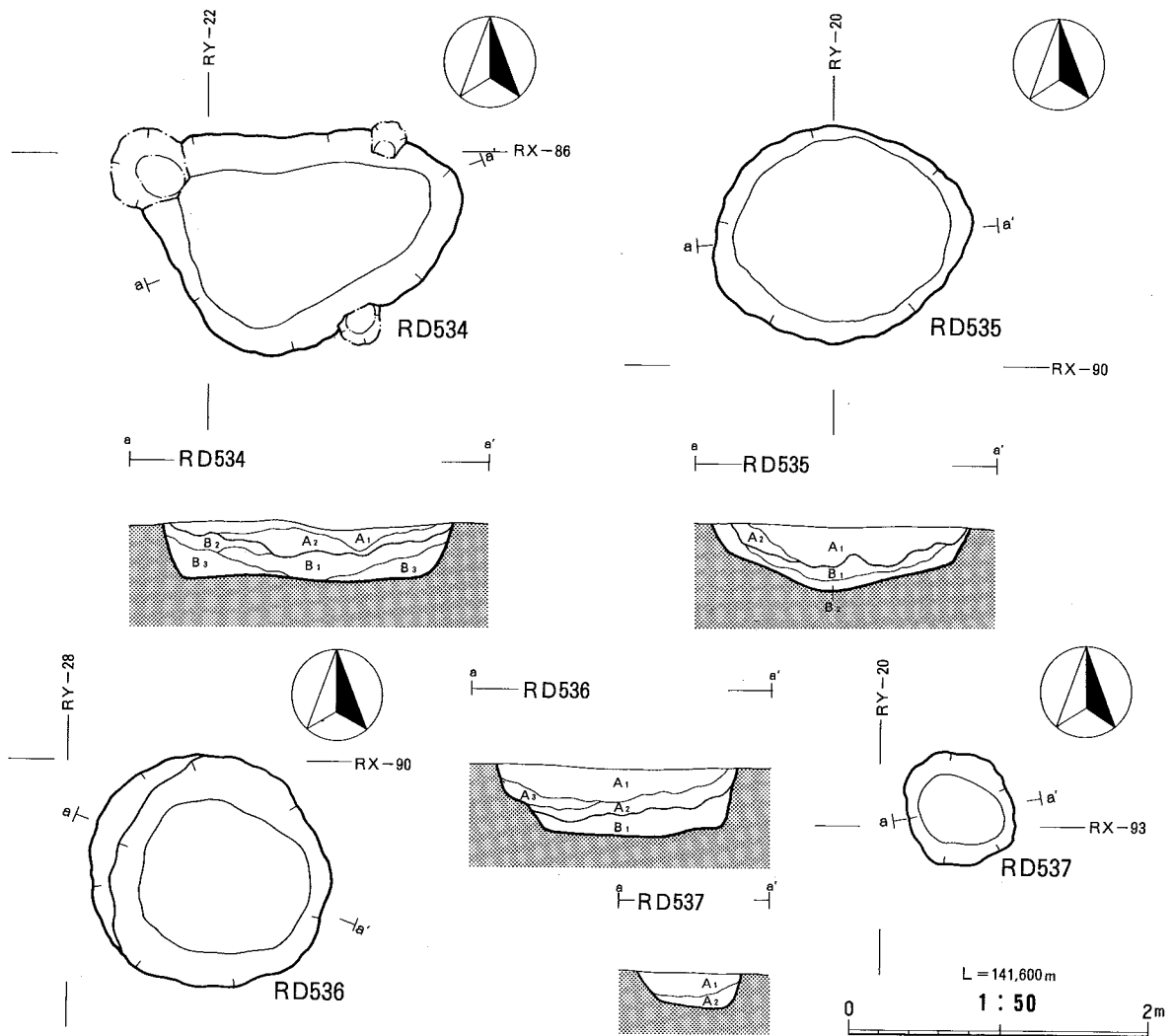
位 置 第6次調査区南西 平面形 不整楕円形 長軸方向 E25° S
規 模 長軸上端1.62m・下端1.13m、短軸上端1.48m・下端0.98m
重複関係 不明 掘込面 削平
検 出 面 褐色シルト層上面 埋土 A・B層に大別され、A層は3層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.44mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 平坦 遺物 なし

R D 5 3 7 土坑跡 (第89図)

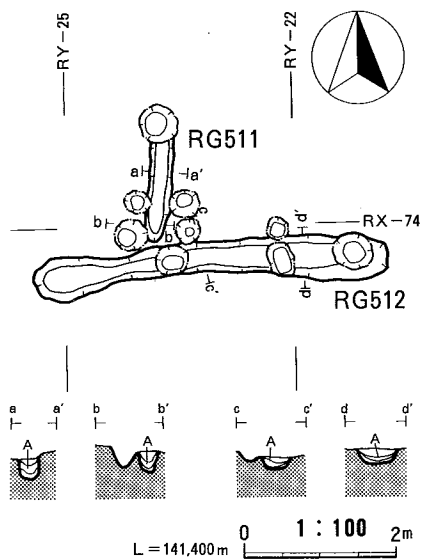
位 置 第6次調査区南 平面形 不整円形
規 模 東-西上端0.72m・下端0.49m、南-北上端0.76m・下端0.48m
重複関係 不明 掘込面 削平
検 出 面 褐色シルト層上面 埋土 A層は2層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.22mをはかり、壁は外傾して立ち上がる。
底面の状態 ほぼ平坦 遺物 なし

R G 5 1 1 溝跡 (第90図)

位 置 第6次調査区南東 平面形 南北に延び、北端はピットにより不明。
規 模 長さは1.25m以上をはかり、幅は上端0.31m・下端0.18mをはかる。
掘 込 面 削平 検出面 褐色シルト層上面 埋土 A層は3層に細別される。
壁の状態 検出面から底面までの深さは0.14mをはかる。壁は底面からゆるやかに立ち上がる。
遺 物 なし



第89図 RD534・535・536・537土坑



第90図 RG511・512溝跡

RG512溝跡 (第90図)

位置 第6次調査区南東

平面形 東西に延びる。

規模 長さは4.60mをはかり、幅は上端0.16m~0.69m・
下端0.13m~0.34mをはかる。

掘込面 削平

検出面 褐色シルト層上面

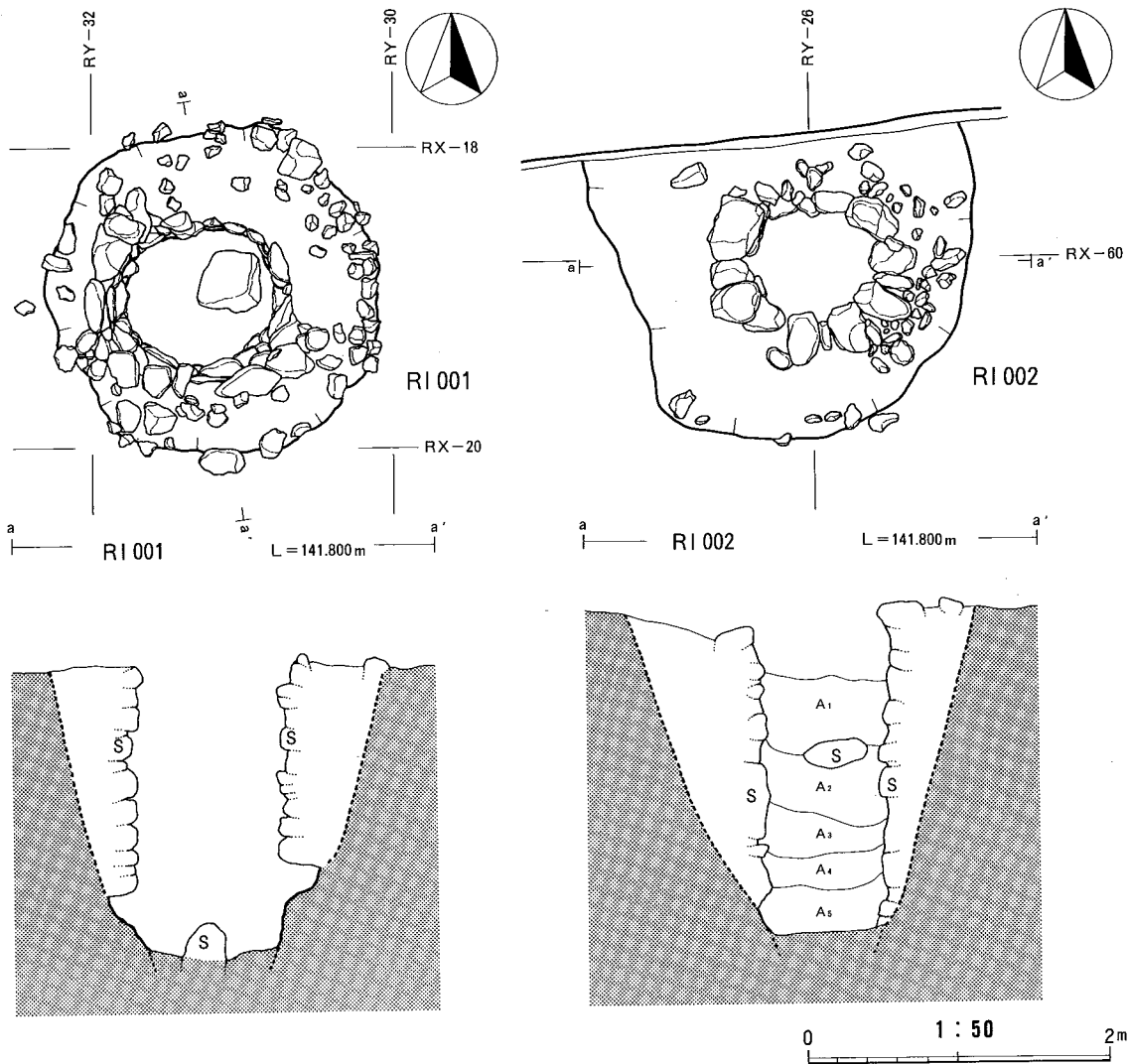
埋土 A層は3層に細別される。

壁の状態 検出面から底面までの深さは0.11mをはかる。壁
は底面からゆるやかに立ち上がる。

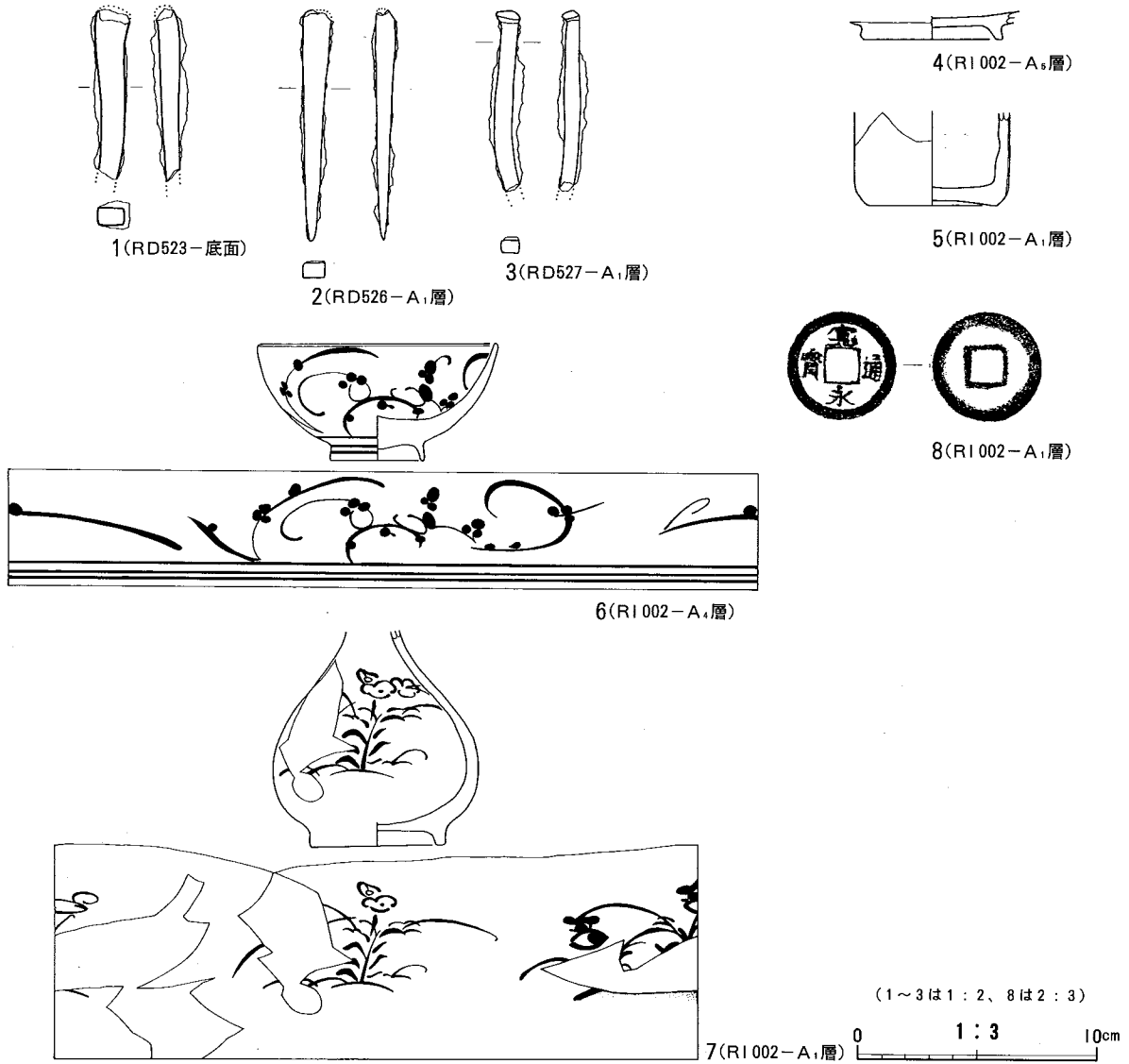
遺物 なし

R I 5 0 1 井戸跡 (第91図)

位 置 第3次調査区北東 平面形 円形
 規 模 石組部東-西上端1.05m・下端不明、北-南上端0.95m・下端不明
 重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面
 埋 土 内部には多量の礫が充填され、礫間は砂質土が流入する。
 壁の状態 検出面から1.50m付近まで石が組まれ、以下は粗掘りの状態である。
 底面の状態 深さは不明であるが、1.90m付近では湧水が認められ、多量の植物遺存体が出土した。
 遺 物 図示していないが、埋土中より印判染付の陶磁器片が出土している。



第91図 R I 5 0 1 ・ 5 0 2 井戸跡



第92図 RD523・526・527土坑、R1501井戸跡出土遺物

R1502井戸跡 (第91・92図)

位置 第6次調査区北 平面形 円形

規模 石組部東-西上端0.85m・下端不明、北-南上端0.70m・下端不明

重複関係 なし 掘込面 削平 検出面 褐色シルト層上面

埋土 内部には多量の礫・褐色土が堆積し、5層に細別される。

壁の状態 検出面から2.10m付近まで石が組まれ、以下は不明である。

底面の状態 不明

遺物 (第92図4~7) 4・5は国産陶器で、4は皿、5は瓶子?である。6・7は国産陶磁器で、6は草花が描かれる染付碗、7は瓶子である。8は寛永通寶である。

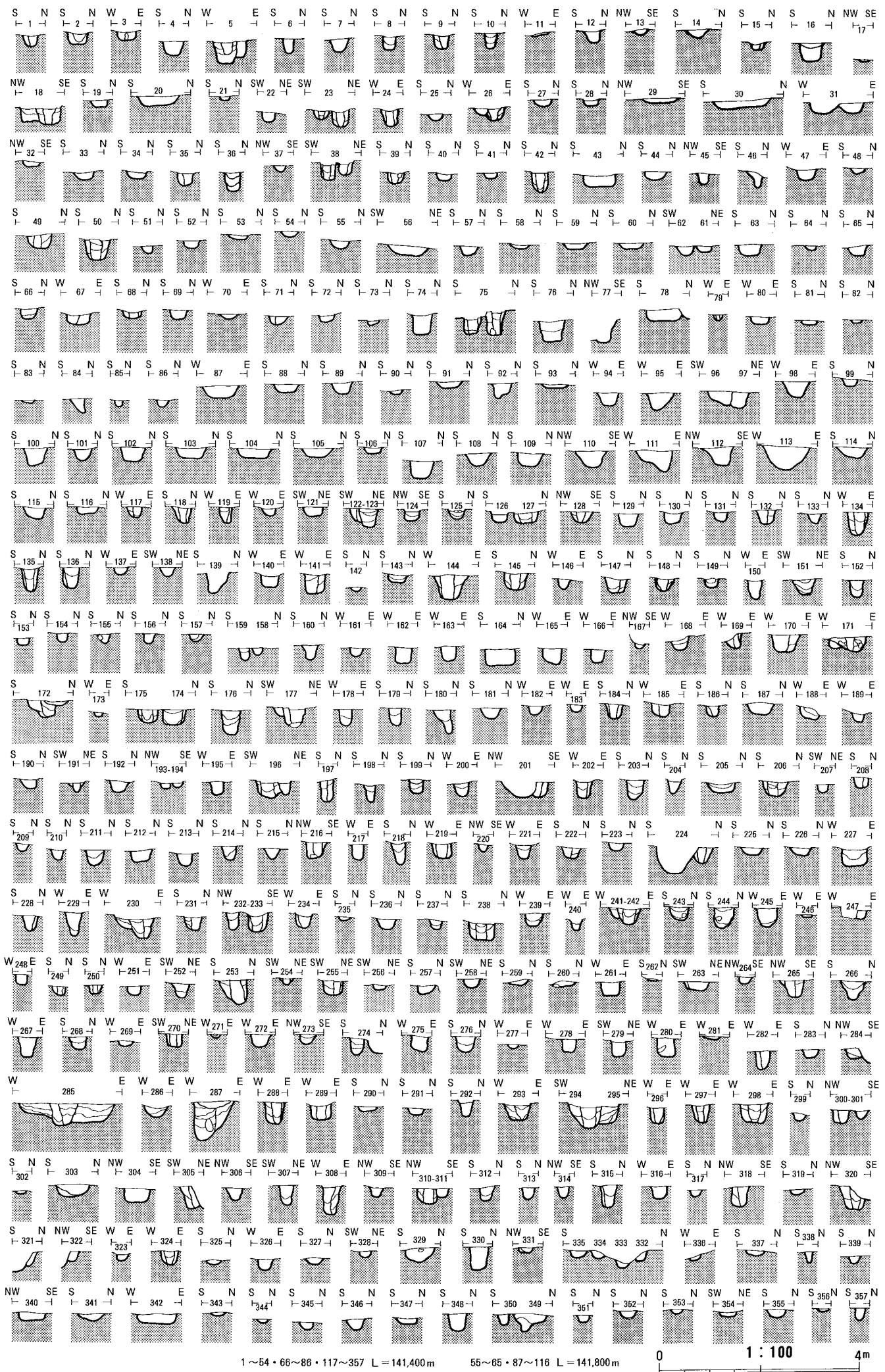
ピット群 (第93図)

第3次 (P 1~116)・4次 (P 338~357)・6次 (P 117~337) 調査区において、計357口のピットが検出されている。埋土は暗褐色土・黒褐色土が主体となるものが多い。以下は、各ピットの深さである。

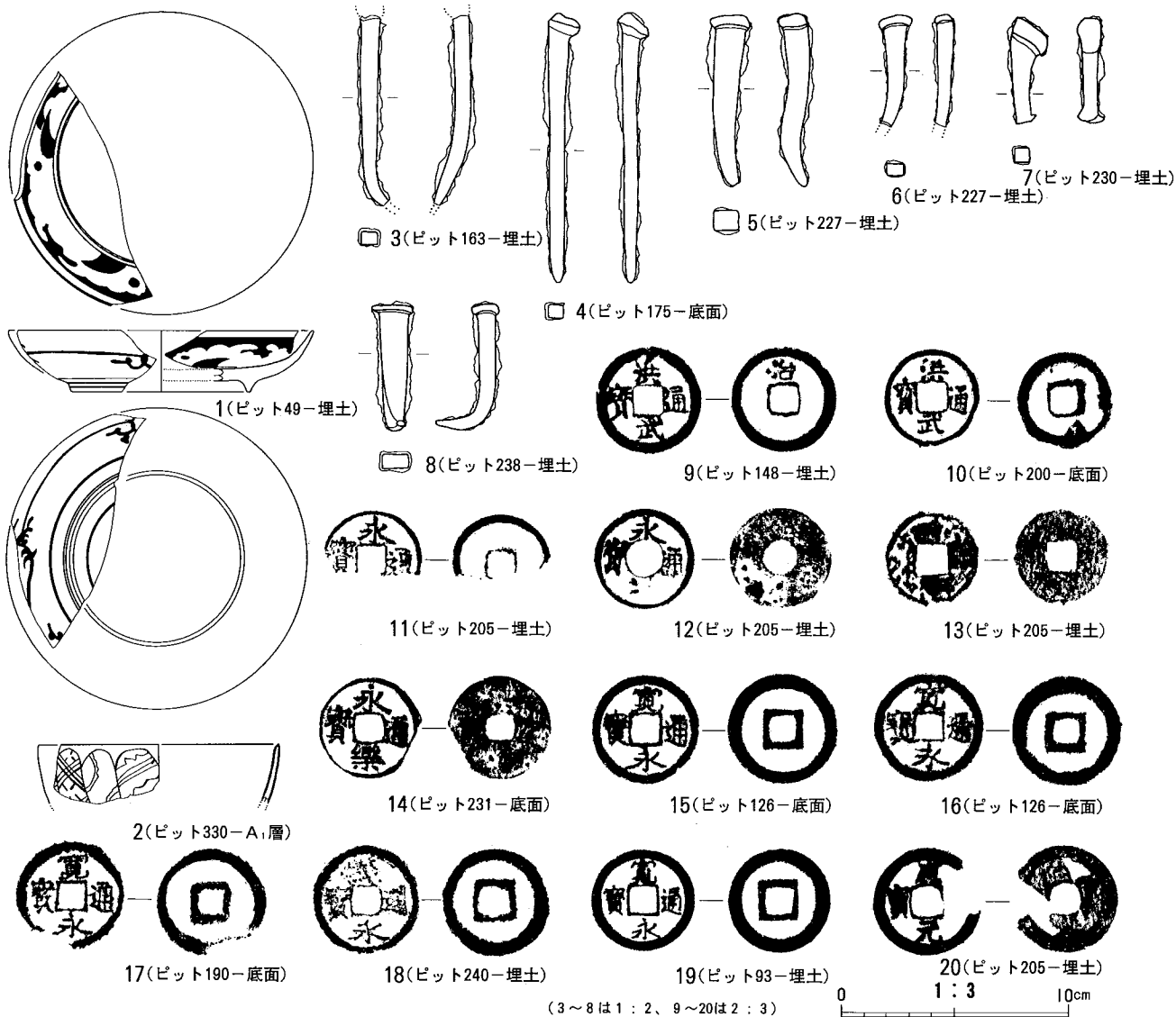
P 1 -0.22m・P 2 -0.20m・P 3 -0.18m・P 4 -0.29m・P 5 -0.42m・P 6 -0.30m・
P 7 -0.29m・P 8 -0.27m・P 9 -0.28m・P 10 -0.31m・P 11 -0.05m・P 12 -0.19m・
P 13 -0.12m・P 14 -0.16m・P 15 -0.12m・P 16 -0.34m・P 17 -0.06m・P 18 -0.32m・
P 19 -0.12m・P 20 -0.22m・P 21 -0.18m・P 22 -0.21m・P 23 -0.16m・P 24 -0.32m・
P 25 -0.12m・P 26 -0.22m・P 27 -0.13m・P 28 -0.10m・P 29 -0.11m・P 30 -0.14m・
P 31 -0.22m・P 32 -0.12m・P 33 -0.13m・P 34 -0.13m・P 35 -0.21m・P 36 -0.38m・
P 37 -0.12m・P 38 -0.31m・P 39 -0.22m・P 40 -0.14m・P 41 -0.10m・P 42 -0.44m・
P 43 -0.25m・P 44 -0.18m・P 45 -0.22m・P 46 -0.29m・P 47 -0.20m・P 48 -0.10m・
P 49 -0.28m・P 50 -0.38m・P 51 -0.14m・P 52 -0.15m・P 53 -0.09m・P 54 -0.13m・
P 55 -0.17m・P 56 -0.19m・P 57 -0.20m・P 58 -0.08m・P 59 -0.22m・P 60 -0.10m・
P 61 -0.12m・P 62 -0.18m・P 63 -0.22m・P 64 -0.09m・P 65 -0.20m・P 66 -0.21m・
P 67 -0.23m・P 68 -0.15m・P 69 -0.18m・P 70 -0.10m・P 71 -0.15m・P 72 -0.12m・
P 73 -0.10m・P 74 -0.38m・P 75 -0.36m・P 76 -0.49m・P 77 -0.40m・P 78 -0.37m・
P 79 -0.22m・P 80 -0.14m・P 81 -0.15m・P 82 -0.09m・P 83 -0.07m・P 84 -0.06m・
P 85 -0.28m・P 86 -0.12m・P 87 -0.13m・P 88 -0.24m・P 89 -0.22m・P 90 -0.08m・
P 91 -0.10m・P 92 -0.29m・P 93 -0.08m・P 94 -0.24m・P 95 -0.33m・P 96 -0.28m・
P 97 -0.31m・P 98 -0.32m・P 99 -0.14m・P 100 -0.35m・P 101 -0.19m・P 102 -0.28m・
P 103 -0.17m・P 104 -0.16m・P 105 -0.17m・P 106 -0.12m・P 107 -0.34m・P 108 -0.24m・
P 109 -0.25m・P 110 -0.32m・P 111 -0.43m・P 112 -0.36m・P 113 -0.48m・P 114 -0.19m・
P 115 -0.20m・P 116 -0.13m・P 117 -0.22m・P 118 -0.30m・P 119 -0.31m・P 120 -0.14m・
P 121 -0.16m・P 122 -0.25m・P 123 -0.38m・P 124 -0.18m・P 125 -0.20m・P 126 -0.24m・
P 127 -0.20m・P 128 -0.21m・P 129 -0.24m・P 130 -0.18m・P 131 -0.14m・P 132 -0.26m・
P 133 -0.18m・P 134 -0.46m・P 135 -0.47m・P 136 -0.41m・P 137 -0.12m・P 138 -0.16m・
P 139 -0.38m・P 140 -0.23m・P 141 -0.42m・P 142 -0.08m・P 143 -0.13m・P 144 -0.47m・
P 145 -0.32m・P 146 -0.18m・P 147 -0.29m・P 148 -0.22m・P 149 -0.20m・P 150 -0.36m・
P 151 -0.34m・P 152 -0.35m・P 153 -0.14m・P 154 -0.16m・P 155 -0.18m・P 156 -0.20m・
P 157 -0.14m・P 158 -0.23m・P 159 -0.15m・P 160 -0.28m・P 161 -0.16m・P 162 -0.30m・
P 163 -0.29m・P 164 -0.32m・P 165 -0.31m・P 166 -0.25m・P 167 -0.08m・P 168 -0.29m・
P 169 -0.30m・P 170 -0.35m・P 171 -0.28m・P 172 -0.34m・P 173 -0.08m・P 174 -0.33m・
P 175 -0.27m・P 176 -0.47m・P 177 -0.39m・P 178 -0.32m・P 179 -0.34m・P 180 -0.46m・
P 181 -0.20m・P 182 -0.14m・P 183 -0.12m・P 184 -0.30m・P 185 -0.22m・P 186 -0.18m・
P 187 -0.23m・P 188 -0.25m・P 189 -0.16m・P 190 -0.15m・P 191 -0.16m・P 192 -0.24m・
P 193 -0.11m・P 194 -0.09m・P 195 -0.25m・P 196 -0.33m・P 197 -0.45m・P 198 -0.34m・
P 199 -0.28m・P 200 -0.29m・P 201 -0.29m・P 202 -0.32m・P 203 -0.38m・P 204 -0.25m・

P 205-0.18m・P 206-0.30m・P 207-0.17m・P 208-0.21m・P 209-0.12m・P 210-0.18m・
P 211-0.30m・P 212-0.22m・P 213-0.24m・P 214-0.28m・P 215-0.22m・P 216-0.34m・
P 217-0.31m・P 218-0.45m・P 219-0.27m・P 220-0.14m・P 221-0.26m・P 222-0.22m・
P 223-0.15m・P 224-0.33m・P 225-0.14m・P 226-0.15m・P 227-0.35m・P 228-0.32m・
P 229-0.46m・P 230-0.40m・P 231-0.25m・P 232-0.32m・P 233-0.36m・P 234-0.28m・
P 235-0.09m・P 236-0.18m・P 237-0.17m・P 238-0.33m・P 239-0.24m・P 240-0.12m・
P 241-0.18m・P 242-0.28m・P 243-0.27m・P 244-0.42m・P 245-0.36m・P 246-0.06m・
P 247-0.14m・P 248-0.20m・P 249-0.16m・P 250-0.15m・P 251-0.16m・P 252-0.28m・
P 253-0.48m・P 254-0.12m・P 255-0.26m・P 256-0.12m・P 257-0.15m・P 258-0.17m・
P 259-0.11m・P 260-0.12m・P 261-0.25m・P 262-0.05m・P 263-0.16m・P 264-0.12m・
P 265-0.30m・P 266-0.37m・P 267-0.38m・P 268-0.25m・P 269-0.12m・P 270-0.25m・
P 271-0.08m・P 272-0.26m・P 273-0.21m・P 274-0.34m・P 275-0.28m・P 276-0.29m・
P 277-0.08m・P 278-0.25m・P 279-0.30m・P 280-0.36m・P 281-0.07m・P 282-0.37m・
P 283-0.18m・P 284-0.22m・P 285-0.42m・P 286-0.23m・P 287-0.79m・P 288-0.45m・
P 289-0.35m・P 290-0.10m・P 291-0.13m・P 292-0.33m・P 293-0.35m・P 294-0.52m・
P 295-0.40m・P 296-0.32m・P 297-0.34m・P 298-0.40m・P 299-0.14m・P 300-0.25m・
P 301-0.18m・P 302-0.08m・P 303-0.26m・P 304-0.28m・P 305-0.44m・P 306-0.25m・
P 307-0.39m・P 308-0.58m・P 309-0.17m・P 310-0.30m・P 311-0.18m・P 312-0.29m・
P 313-0.22m・P 314-0.20m・P 315-0.44m・P 316-0.23m・P 317-0.13m・P 318-0.40m・
P 319-0.11m・P 320-0.45m・P 321-0.28m・P 322-0.20m・P 323-0.12m・P 324-0.28m・
P 325-0.10m・P 326-0.20m・P 327-0.14m・P 328-0.12m・P 329-0.26m・P 330-0.45m・
P 331-0.12m・P 332-0.19m・P 333-0.17m・P 334-0.14m・P 335-0.15m・P 336-0.12m・
P 337-0.10m・P 338-0.21m・P 339-0.14m・P 340-0.15m・P 341-0.13m・P 342-0.20m・
P 343-0.08m・P 344-0.09m・P 345-0.14m・P 346-0.22m・P 347-0.12m・P 348-0.33m・
P 349-0.36m・P 350-0.20m・P 351-0.14m・P 352-0.16m・P 353-0.09m・P 354-0.10m・
P 355-0.15m・P 356-0.06m・P 357-0.24m。

出土遺物(第94図) 1・2は国産磁器である。1は墨はじき技法による牡丹文を施す皿である。2は花文風の碗である。3～8は角釘である。3は頭部欠損、4～8は巻頭か?。9・10は洪武通寶である。9は「治」の背文字銭である。11～14は永楽通寶である。15～19は古寛永通寶である。20は開元通寶か。



第93図 第3・4・6次調査区ビット土層断面



第94図 ピット出土遺物

(3) ま と め

検出遺構 検出された遺構は、縄文時代?の土坑1基(RD001)、古代の溝跡群(畝状)2基(RG509・510)、中・近世の掘立柱建物跡9棟(RB506~514)、柱列跡2条(RC502・503)、中・近世の土坑22基(RD519~537)、溝跡2条(RG511~512)、井戸跡(RI501・502)、ピット357口(P1~357)である。

第3・4・6次調査において主体となるのは、中世から近世にかけての遺構であった。遺構は第3次調査区北部と第6次調査区中央西部に集中しており、中世から近世に至るまで同所が居住空間として利用されていたことが伺える。また、井戸跡が遺構集中区に隣接して検出されているが、井戸跡検出面や埋土上位から近・現代の磁器・ガラス片が発見され、最近まで井戸が地表面で確認することができた状態であったことが考えられる。そして、上記した2基以外の井戸が発見されなかったことから、井戸については最近まで連綿と使用され続けていたことが考えられる。

建物跡の年代

- I 期 建物の居住期間は不明であるが、柱穴からの出土遺物により大きく3期に分けることができる。I期に相当するのがRB506掘立柱建物跡で、桁行6間(柱間8尺)、梁間3間(柱間7尺)をはかり、柱穴内からは瀬戸の徳利片(第78図1)、「熙寧元寶」・「永樂通寶」(第78図2~8)などの銭貨が出土している。これらの遺物は全て伝世、流通期間が長いものであるため、直接の年代を示す遺物とはならないが、寛永通寶が流通する以前の建築と考え、大雑把ではあるが、下限は17世紀前半の建物跡と推定される。
- II 期 II期に相当するのが、RB507・512掘立柱建物跡で、建物を構成する柱穴を全て確認したものではないが、RB507掘立柱建物跡が桁行4間(柱間7尺)、梁間4間(柱間7尺)をはかり、RB512掘立柱建物跡が桁行5間(柱間8尺)、梁間3間(柱間7尺)をはかる。RB507掘立柱建物跡柱穴からは「永樂通寶」・「古寛永通寶」(第78図9~12)が出土し、RB512掘立柱建物跡柱穴からは「古寛永通寶」(第84図1~9)が出土している。建築年代については、新旧の流通銭貨が共存することから17世紀前半以降の建物と考えたい。
- III 期 III期に相当するのがRB508掘立柱建物跡で、平面のプランはL字型を呈し「曲屋」に近似する。柱間寸法は6尺3寸であることから、I期・II期よりも建築年代が下るものであろう。
- 以上のように主要となる建物を年代別に分けてみたが、建物を構成する柱穴の抽出が不完全であったため、上記の建物跡のプランなどについては課題を残すことになった。しかし、中世から近世にかけての村落のありかたを考えるうえで重要な成果を得ることができた。

Ⅲ. 考 察

1. 古代の遺構・遺物

(1) 竪穴住居跡の検討

集落の構成

8 世紀 前野遺跡は沖積面の微高地に形成された集落である。時期は後述の出土土器の年代から8世紀前半と9世紀中葉の2時期であることが確認される。8世紀前半の明らかな遺構はR D 101土坑が確認されており、R A 117竪穴住居跡は出土遺物が少なく時期不詳であるが、小破片ながら8世紀の土師器片が出土していることから8世紀と考えられる。このほかこの時期の土師器がI 3-E 9 (R G 503溝跡) 周辺にややまとまって出土していることから、竪穴住居跡などは確認されなかったものの何らかの遺構が存在した可能性も考えられる。以上のように8世紀前半には前野遺跡では北部を中心とする数棟で構成される小規模な集落であったとみられる。

9 世紀 9世紀中葉はR A 106・109・112・115・116竪穴住居跡、R E 101・102・103・105・111・113竪穴で構成される。出土遺物がないR E 104・110・114竪穴も同時期とみられる。重複も少ないことから2時期程度の短期に営まれたものであろう。ただし本遺跡だけではなく、隣接する柿ノ木平遺跡でも同時期の竪穴住居跡が検出されており、一体的に考えるべきであるが、本項では前野遺跡だけに限定して記述することとしたい。

7棟の中で規模が大きいR A 106・109・116は5.5~6m前後で大形に属し、支柱穴も4本、かまども石組でしっかりと造られている。この3棟は遺跡のほぼ中央に位置することから、前野地区の中心的な住居であったとみられる。遺物はR A 106で北陸型甕・鞆羽口・土錘・砥石がみられるが、109・116は生産に関係する遺物は残されていない。他の住居は4mを越える中形で、大形のものと顕著な規模の違いになっていない。出土遺物もR A 108・115から砥石や紡錘車、刀子などがみられ、大形の住居に生産遺物が集中する傾向はなく、住居規模からみた階層差は明確なものとはなっていない(註1)。

竪穴9基のうちR E 102が壁際に焼土をもち、床構築土の上に床面をつくっていることから南かまどを有する竪穴住居跡の可能性が考えられる。他の竪穴の中には堅い床面が形成されるものもあるが、炉などの生活痕跡が少なく、作業小屋などの機能があったものであろう。

鞆羽口や大形砥石(粗砥)はR E 102竪穴も含め、8棟中4棟から出土している。北上盆地の集落の中では比較的集中しており、鍛冶などがさかんであったことが示されている。

かまどの構築方法 上記したR A 106・107・108・109・115・116のかまどは、構築材として円礫・角礫などを組み合わせて構築する。石材は芯材として用いられ、粘質土・シルト・黒褐色土などによる構築土によって覆われる。煙道は構築段階当初より縦掘され、煙道の内壁・天井部を石材を組み合わせて煙道を確保させて再び埋め戻される。R A 106・116では煙出部も石材を組み合わせて造られる。R A 116の煙出部は石組部の上部に粘質土を盛り上げ、外部からの浸水等を防ぐような構造に造られている。

分 布 このように、石材を多用してかまどを構築する近隣における例は、隣接する柿ノ木平・大塚遺跡、盛岡市新道Ⅱ遺跡、玉山村芋田Ⅱ遺跡、西根町子飼沢山遺跡・暮坪遺跡など北上川源流域及

び支流、北上川上流東岸など、雫石川南岸、北上川西岸に発達する沖積平野を除く山間部及び丘陵地に多く分布する傾向がみられる。一方で前述した沖積平野においては9世紀後半より集落の増加がみられる。これらの集落遺跡で検出されるかまどの多くは、芯材に粘質土を主体とした混合土を覆いかまどを構築するものが多く、煙道は主に壁面を刳り貫いて煙出部へつなげるものが多い。前野遺跡が9世紀中葉の土器を主体とした集落であるのに対し、後述した沖積平野での集落の多くが9世紀後半であることから時期差として考えることもできる。しかし、県北部では10世紀段階においても前野例に近いかまどを構築することから、在地性の年代幅を持ったかまど形態として考えることができるであろう。

(2) 出土土器の検討

出土土器の年代

8 世紀 出土した土師器はロクロ未使用とロクロ成形に大きくわかれる。ロクロ未使用の土師器は出土する遺構にはR D101土坑がある。第7図2の土師器甕は口唇部が平滑で口縁部と体部の境に明瞭な段を有し、内外面がハケメ調整され、底部内面が平坦となっている。これに類する土器はR A107竪穴住居跡A層(第25図4)にみられる。

また遺物包含層C層を中心にロクロ未使用の坏や甕が出土している(第70・71図5～14)。坏は体部外面下半ヘラミガキやハケメ調整を施し、甕は体部外面にヘラミガキやハケメ調整を施している。7は口縁部に6条の横走沈線がめぐらされる。これらはその特徴から8世紀前半と考えられる。

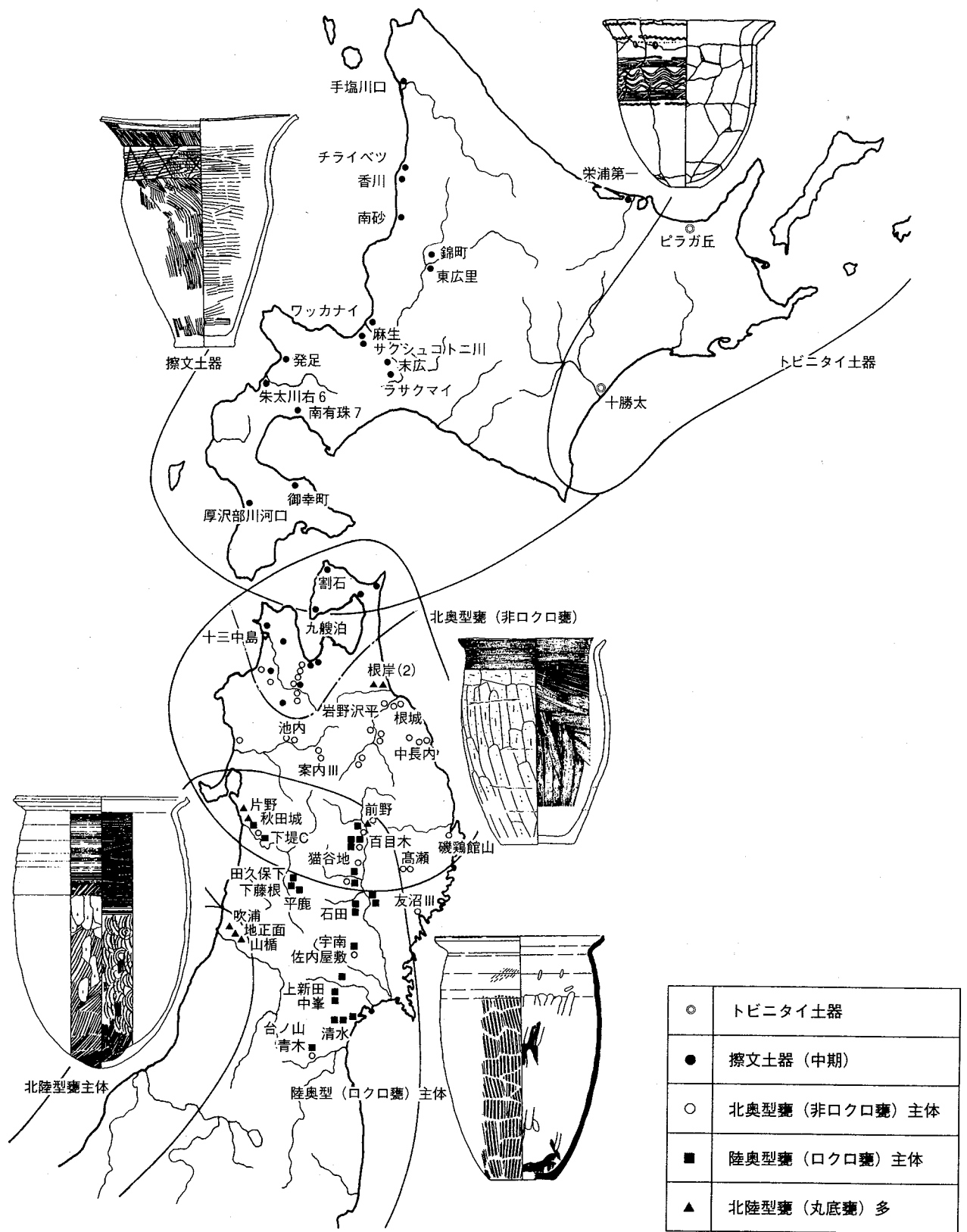
9 世紀

坏 ロクロ成形段階の土師器はR E101・102・103・105・111・113竪穴、R A106～109・112・115・116竪穴住居跡でみられる。坏は底部切り離しが糸切りが主体を占めるが、R A106～109であかやき土器や須恵器のヘラ切りが1～2点共存する。切り離し後の再調整は土師器のほとんどに認められ、体部下端から底面にかけて手持ちヘラケズリが施される。須恵器やあかやき土器は僅かの例外を除き無調整のままである。

甕

陸奥型甕 甕類ではロクロ成形のものとロクロを使用しないものが共存する。前者のうち平底のものは陸奥型甕、丸底で内外面にタタキ・アテ工具痕を残すものは北陸型甕と呼ばれており、また後者を北奥型甕と呼ぶこととする。陸奥型甕は口縁部を外反させ、口唇部を上方に挽き出すが、その度合いは必ずしも一定していない。最大径は口縁部と体部上半にある。ロクロ成形であるが、長胴甕はロクロ前に体部外面をタタキ成形しており、平行タタキ工具痕が残されるものがある。ロクロ成形後体部上半または下半から下端にかけて縦方向のヘラケズリ調整を施している。小形甕はタタキ成形痕が残るモノはなく、また薄手であることからタタキ成形は行われていないとみられる。北陸型甕については後述する。

北奥型甕 ロクロを使用しない北奥型甕は口縁部を短く外反させ、体部外面をヘラケズリ、内面をヘラナデ調整する一群で、長胴形と小形甕とがある。ロクロ未使用段階の長い口縁部やロクロ成形の上方への挽き出しとは形状が明瞭に異なっている。各遺構での陸奥型と北奥型の比率は一定しておらず、R A106・108のように陸奥型が、R A109のように北奥型甕が主体を占める遺構もみられ



第95図 土師器の地域差 (9世紀)

る。全体的には陸奥型が多い。これらの土器の特徴は9世紀中葉のものと考えられる(註1)。

太平洋側出土の北陸型甕

RA106竪穴住居跡出土の丸底の甕(第21図38)は、体部内外面に平行タタキ・アテ工具痕を残し、上半をロクロで器形を整え、一部をヘラケズリ調整するものであり、北陸形甕と呼ばれる。またRA108(第29図29・31)でも破片がみられ、RA115(第43図12・14)もその可能性がある。胎土分析は行っていないが、肉眼観察による胎土は他のロクロ成形の甕と大きく異なるものではない。

分 布 北陸形甕はその名のとおり北陸地方に主体が認められる甕で、出羽においても出土量が多い。その集成および変遷は利部修氏によってなされており、出羽では北陸形甕は8～10世紀前半にかけて存在し、8世紀後半～9世紀前半は内面のアテ工具に青海波と平行の2種があり、9世紀後半に青海波が見られなくなるという(利部1997)。また氏の掲げた図を見ると最大径が秋田県では体部中央にあり、口唇部を薄く上方に挽き出すものが多いが、山形県では体部下半にある下ぶくれ形を呈し、口縁部が厚いものが多く、地域差が認められる。

太平洋側でも青森県奥入瀬川北岸の中野平・根岸遺跡などでも北陸形甕がややまとまって出土している。中野平遺跡では9世紀初頭に土師器杯のロクロ導入と共に陸奥形甕が製作され、前半まで継続するが、9世紀後半(中葉を含む)の9・16・42・43住居跡では陸奥形甕が減少し、かわって北陸形甕が数個体まとまってみられるようになる。この間北奥型甕は一定量を維持している。

9世紀後半の北陸形甕は最大径が口縁部にあり、口縁部は直線的にくの字形に外反し、胎土は在地のものという(青森県教育委員会1991)。津軽地方においても浪岡町山元(3)遺跡第26号住居跡では中野平例のような口縁部形状を示している(青森県教育委員会)。

一般的に他地域で主体をなす土器が各地に存在するあり方には次の三通りが考えられよう。

- ①土器の搬入……胎土は非在地、型式は製作地のもの、出土量は少量
(商業ベースのものは多量)
- ②製作者の移動……胎土は在地、型式も概ね本貫地と共通、出土量は多量
(集団的な長期移住、専門工人による操業など)
- ③型式・技術の伝播……胎土は在地、型式は地域差、出土量は少～中程度
(少人数の一時的移動を含む)

中野平遺跡の例をみると、口縁部形状や最大径が出羽のものと異なり、胎土も在地のものともみられることから③の型式・技術の伝播によるものと考えられる。

岩手県内 岩手県においては、9世紀初頭の盛岡市志波城跡で底部破片みられるが、全体量からみると僅少である。また盛岡市松ノ木遺跡、薬師社脇遺跡、柿ノ木平遺跡、紫波町上平沢新田新田遺跡2号住居跡、土手田遺跡住居跡、北上市八幡野Ⅱ遺跡G29-01住居跡など、9世紀中葉頃の竪穴住居跡から破片が出土している。胎土分析がなく破片であることから胎土や型式からの製作地の特定は困難であるが、中野平遺跡の例から在地で生産された可能性が考えられる。その量は中野平遺跡の数個体の完形品、前野遺跡の1個体の完形品、また上平沢遺跡などのように破片程度で残存する場合があります、その入り方には程度の差が読み取れる。また同時期の集落遺跡で必ずしも出土していないので、その分布は散発的である。

このように太平洋側では北陸形甕は9世紀中葉～後半に非継続的、散発的に分布している。志波城跡例は唯一9世紀初頭にさかのぼるが、志波城造営にあたって北陸から物資等の補給が行われており、それにとってもたらされたとみられる。9世紀中葉～後半は岩手県南部～宮城県にみられないことから、おそらく日本海～青森県西部～青森県東部～岩手県北上盆地、もしくは横手盆地を経由して北上盆地にもたらされたことが考えられる。いずれにしても当時の律令機関を介した大規模な交流ではないものの、北陸地方との交流を示す資料として注目される。

(八木 光則, 神原 雄一郎)

註1 竪穴住居跡の規模分類については八木1998、土器の年代については村田1994、八木1993によった。

青森県教育委員会1991『中野平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第134集

青森県教育委員会1991『山元(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第134集

岩手県教育委員会1982「太田方八丁遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XII

岩手県教育委員会1980「上平沢遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』III

岩手県教育委員会「八幡野II遺跡」『太田方八丁遺跡』第183集

利部 修1997「出羽地方の丸底長胴甕をめぐって」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第12号

紫波町教育委員会1993「土手田遺跡」『紫波町の遺跡』紫波町文化財調査報告書第29集

村田晃一1994「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第3回東日本埋蔵文化財研究会

八木光則1993「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会記録集』

八木光則1998「馬淵川流域の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

2. 中・近世の浅岸地区と遺跡

はじめに

盛岡周辺においての中世遺跡は、これまでは城館や宗教遺跡に限られ、村落遺跡はほとんど解明されていなかった。近年、中津川、米内川合流点の両岸で、12世紀村落の遺構が検出され、中世初期の地方村落の様子を知る手がかりが得られた。ここでは、本書の前野遺跡と、対岸の落合遺跡の村落遺構をはじめ、周辺の城館跡等中世遺跡を検討し、中世から近世にかけての浅岸地区を概観したい。

(1) 周辺の中世遺跡

落合遺跡(5)と前野遺跡(1)

落合遺跡は、中津川と米内川の合流点北側の低位段丘に存在する遺跡で、これまでに遺跡中央部を東西に開削される大溝、その北側に掘立柱建物群、南側に前野遺跡と同様の方形周溝をもつ建物跡が調査されている。掘立柱建物のなかには桁行7間×梁間2間の身舎に二面廂の付く建物や、桁行3間×梁間2間の四面廂建物があり、周辺に3間×1間、2間×1間の小規模建物が伴う。大溝や方形周溝からは12世紀のロクロ整形のかわらけが出土し、柱穴や遺構外からは12世紀～13世紀の常滑甕や須恵器系の甕破片が出土している。また、微量ではあるが、14世紀～15世紀頃の瀬戸窯窯の灰釉盤や、中国青磁碗の破片も出土し、中世後半期にも村落の存続が考えられる。この12世紀の大溝は、現在も使用されている用水堰と半ば重複している。この用水堰は約1km上流の地点で米内川から取水され、下米内、山岸、下小路方面に流れている。大型建物は開発領主屋敷の主屋であろう。

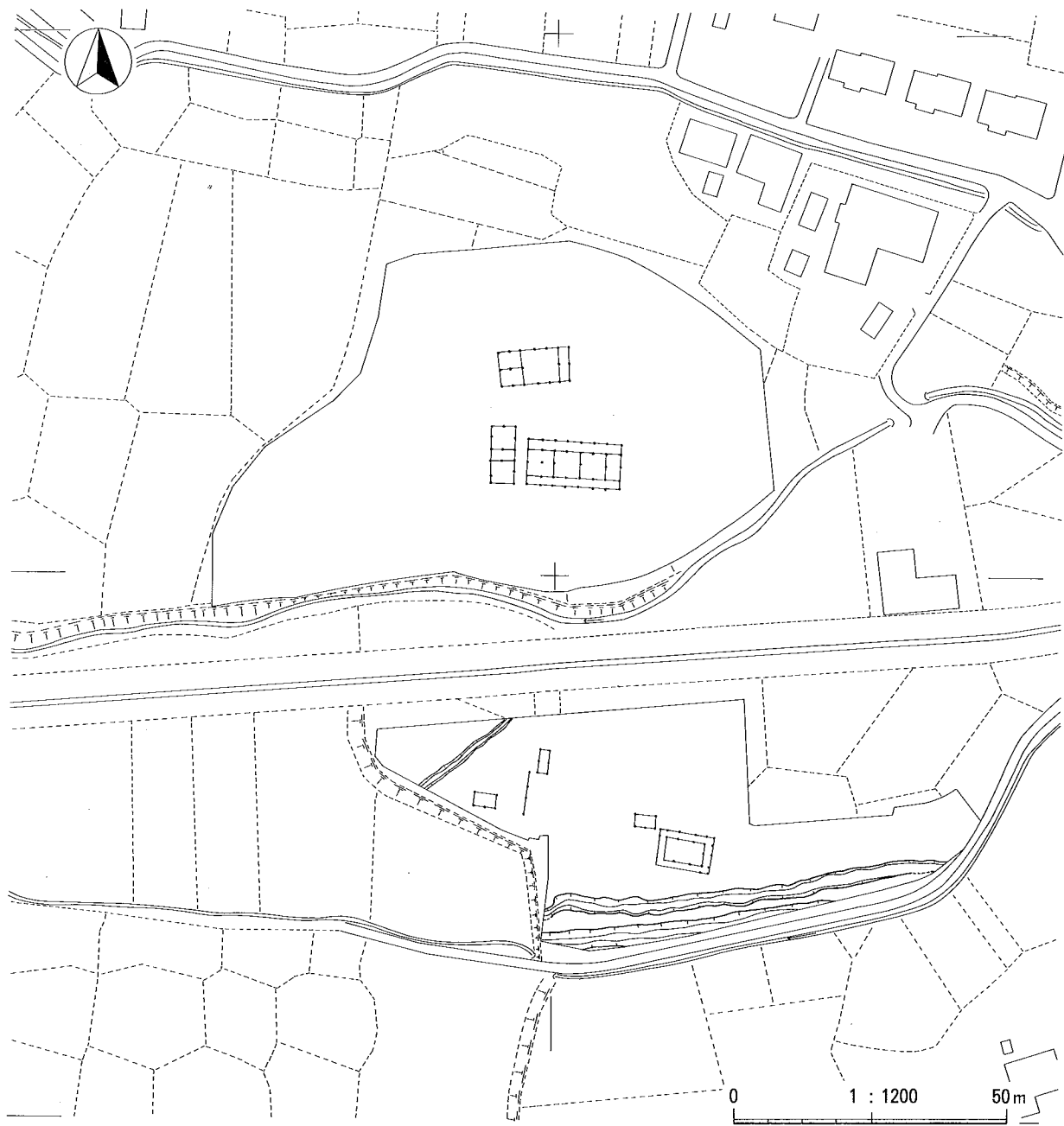
前野遺跡の村落遺構については、本書に詳細に記述しているのでここでは繰り返さないが、方形周溝のある宗教的建物や小規模な建物群など、落合遺跡の村落の建物群と内容は類似する。ただし、大規模な用水堰や桁行の長い大きな建物跡は見られない。遺跡の立地が中州状の微高地であり、周囲の旧河道での水田耕作が推定される。東方の一段高い段丘上にある柿木平遺跡、上村屋敷遺跡、堰根遺跡の存在する台地上には、12世紀ごろからの陶磁器の出土があり、開発領主層の拠点の存在が想定される。

薬師山遺跡(6)と薬師神社(7)

柿ノ木平対岸の浅岸橋場にある薬師神社(薬師堂)は、嘉祥3年(850)の開創と伝承され、かつては背後の薬師山遺跡に存在した。山頂や山腹には、堂社跡らしい平坦地や、削平地が存在する。この薬師堂は三戸南部晴政の代、不来方淡路が再興したとの伝えがある。

佐々木館跡(8)

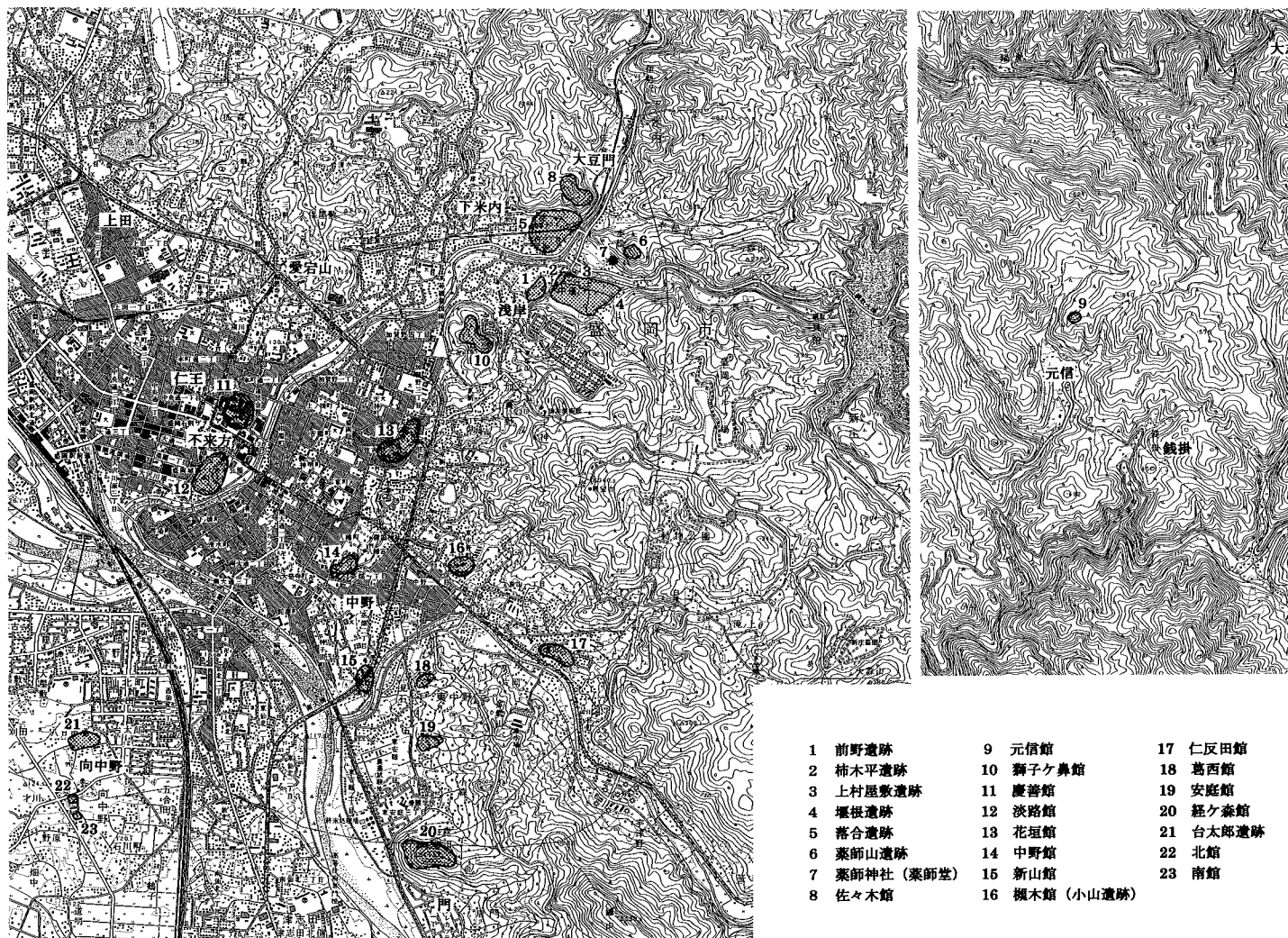
落合遺跡の北側丘陵上に存在する館跡である。佐々木氏の城館と伝えられるが、年代は不詳である。端午の節句の日に外敵(南部氏とも伝えられる)の進入を受けて落城したという伝承がある。館の縄張は、頂部から雛壇状に造成された平場群を、空堀が広く周回する単郭構造を基調とするが、背後に小さな空堀で区画される小郭が付属する。発掘調査はまだおこなわれていない。山麓にあった大豆門大権現が天正11年不来方氏(福士氏)の再興であり、浅岸地区には天正期頃には福士系の浅岸氏・元信氏が村落領主となっていることから、佐々木氏の居住は天正年間より古く、16世紀中葉以前と推察される。



第96図 落合遺跡の中世村落（中心部分）

獅子ヶ鼻館跡（10）

藩政時代、早池峰山妙泉寺の宿寺が西側中腹に置かれたことから、妙泉寺山とも呼ばれている。江戸時代に山頂には大日堂が存在した。獅子ヶ鼻と呼ばれた山上には、中世館跡の遺構が存在する。山頂部は南北に長い尾根になっているが、頂部直下を幅約6m内外の堀が周回する。堀の外側に土塁を盛っている。尾根の中程のところに細い堀切と堅堀があり、南北2郭に分かれている。南側の曲輪はあまり削平されておらず、山頂部には露岩が多く自然地形を残すが、一部には近世以後に堂社の敷地を造成した跡がある。北側の曲輪



- | | | |
|--------------|---------------|----------|
| 1 前野遺跡 | 9 元信館 | 17 仁反田館 |
| 2 柿木平遺跡 | 10 獅子ヶ鼻館 | 18 葛西館 |
| 3 上村屋敷遺跡 | 11 慶善館 | 19 安庭館 |
| 4 堰根遺跡 | 12 淡路館 | 20 経ヶ森館 |
| 5 落合遺跡 | 13 花垣館 | 21 台太郎遺跡 |
| 6 薬師山遺跡 | 14 中野館 | 22 北館 |
| 7 薬師神社 (薬師堂) | 15 新山館 | 23 南館 |
| 8 佐々木館 | 16 榎木館 (小山遺跡) | |

第97図 浅岸周辺の中世遺跡

は広い平坦地で、西辺の一部に土塁が見られる。一部に自然地形を残すものの、北東部に階段状の造成がみられる。北側の堀の末端部は斜面を降っており、現在の桜山住宅団地の区域を包括するような縄張りをもっていた可能性もある。館主の伝承はなく、発掘調査もまだおこなわれていない。

上村屋敷遺跡 (3)

柿ノ木平遺跡の東側にあり、中津川南岸の比高4mの段丘崖に面して東西30m、南北20mの半円形に大溝で囲郭された一郭があり、内部に竪穴建物2棟と柱列、小規模な掘立柱建物が存在する。大溝は単壕から多重壕へと変遷している。16世紀の瀬戸美濃大窯期の灰釉皿や明の染付皿が出土し、16世紀代の小規模城館と考えられる。この北側の地点で中津川から取水され、前野遺跡北側を通じて大塚、加賀野、新庄方面に流れる用水堰があり、この水利権と城館の存立と無関係ではないと考えられる。

この場所は17世紀代には屋敷になっており、南側には方形の環壕屋敷が構築され、初期伊万里や唐津の皿、志野の角皿なども出土している。

元信館跡（9）

中津川と米内川の合流点から約7km東方にある、元信集落の北東山上にある小規模な山城である。南側に侍沢と呼ばれる沢がある。東西約35m、南北約20mの規模で、山頂部が階段状に削平されるが、各平坦地は小さく狭く、小規模で簡素な建物しか想定できない。北東側に未完成らしい空堀がある。天正年間ごろ、福士氏より分知した元信弥六の山城と伝えられるが、発掘調査はまだ行われていない。

（2）中世の浅岸地区

中世初期における中津川流域の開発

浅岸地区の平安期の集落は、9世紀から10世紀前葉あたりのもので、それより新しい時期の集落はまだ確認されていない。10世紀中頃から12世紀前半にかけては空白の時期である。それが12世紀後半にいたって再び集落が出現する。

対岸の落合遺跡では、12世紀後半に開発領主屋敷が存在し、大規模な灌漑用水路が開削された。周辺には村落が営まれ、その一角には宗教施設も存在した。前野遺跡では大規模な屋敷の遺構や用水堰は認められていないが、落合遺跡と同様の堂社が存在し、堅穴建物と掘立柱建物からなる村落遺構が存在する。12世紀後半頃の時期である。

12世紀後半の時期は平泉藤原氏の時期である。このあたりは藤原氏一族の樋爪氏の統治下にあったと推測されるが、比爪館と同様の館は、厨川柵（11世紀）推定地域の西辺部、盛岡市稲荷町遺跡でも確認されている。藤原基衡の弟、樋爪五郎俊衡は地方に子弟を分知しており、12世紀後半の藤原秀衡・泰衡のころには、同族による地方支配がかなり浸透していたとみられる。落合・前野の村落の出現はこうした時期に重なっており、それは平泉藤原氏又は樋爪氏による、岩手郡支配と大いに関係するものであろう。どちらの村落も建物の重複は少なく、比較的短期間の開拓村落の可能性があるが、微細ながら12世紀以後の陶磁器の出土もあり、やや不明確ながら、村落は継承されていると推定される。

落合遺跡の用水堰は現在の水田用水に継続するもので、12世紀の水田開発の成果が現代に継承されたといっても過言ではない。では、中津川左岸の浅岸地区ではどうか、前野遺跡そのものでは用水堰の遺構は確認されていないが、やや上流の上村屋敷遺跡付近から取水される用水堰が遺跡北側をとおり、加賀野方面に流れている。これとは別に、さらに約1km上流から取水される大馬手堰が、稲久保下、妙泉寺下をとおり、中野館や茶畑付近にまで及ぶ。この堰は地元の人々によって、現在でも定期的な補修や管理が行われている。柿ノ木平や上村の台地上では、もともと南東の寺沢や、稲久保台地北麓の若水沢から湧出する沢水を用水としていたらしく、この一部は上村屋敷の大溝や、柿ノ木平の屋敷の区画溝に流れ込んで、台地下の用水堰に流れ落ちている。前野遺跡の周囲は低湿地であり、狭い範囲ではこれを利用した水田耕作や、山からの沢水を利用した水田耕作も可能であるが、より広域的で安定した用水を得るためには、やはり中津川からの本格的な引水が必要とする。前野遺跡の傍を通じる用水堰が、対岸の落合の大溝と呼応するように開削された可能性もあるが、現状ではまだ明らかでない。

12世紀に実施された水田開発により、耕作地が拡がり、流域の農業生産力は飛躍的に向上したと思われる。上村屋敷遺跡や柿ノ木平遺跡などでは、13世紀～14世紀ごろの鎬蓮弁文青磁碗や須恵器系陶器、瓷器系陶器などの破片が散見され、鎌倉時代以後、南北朝・室町時代にも、村落は継続して営まれているようである。文治五年の奥州合戦のおり、樋爪氏は一旦館を自焼して逃亡したが、後に頼朝の本陣に投降し、比爪館に居住を許されている。藤原氏膝下の地方豪族たちも、新たに地頭となった鎌倉御家人に統率されながら、在地

の直接の支配者として存続したのも多かったと思われる。文治5年(1189)の奥州合戦により、岩手郡地頭となったのは、甲斐の国御家人の工藤行光であるが、浅岸・下米内の地域の開発領主も、在地の支配者として存続したのだろうか。工藤氏を含め、鎌倉時代の岩手郡の動向はほとんど記録にのこされていないが、岩手郡地頭職は後に北条氏に移行したらしい(『中世奥羽の世界』ほか)。

南部氏と斯波氏

甲斐の御家人南部氏は、文治5年(1189)の奥州合戦の軍功により、南部光行が糠部を拝領したと伝えられるが、信頼できる史料の裏づけがない。実際には、建武元年(1333)南部師行が、陸奥国司北畠顕家に供奉して奥州入りし、糠部検断奉行(陸奥国代)として北奥に入ったあたりからとする説が有力である。これ以後糠部を拠点に、一戸、三戸、七戸などに支族が分かれた。南北朝期から室町期にかけて、九戸氏、久慈氏、野田氏、浄法寺氏等とともに、国人一揆による糠部の勢力圏を形成し、しだいに津軽、秋田、仙北、岩手方面にも進出した。

また、南の斯波郡には、足利氏一門の斯波氏が入り、南北朝内乱期には北朝勢力の拠点として、室町時代には幕府による北奥支配の要となって行動していた。16世紀に入り、天文年間には岩手郡の雫石川両岸にまで勢力を伸張し、雫石・猪去に一族を配置した。しかし室町幕府の衰退と共に南部氏等の外圧が激しくなり、天正16年(1588)南部信直によって滅亡した。

福士氏と浅岸・下米内

福士氏は甲斐以来の南部氏譜代の被官と伝えられている。南部氏の本領であった甲斐の国南部(山梨県南部町)には福士郷があり、ここが出自の地とされる(『織笠福士氏系図』ほか)。南北朝期或いは応永年間あたりから、不来方に入り、文禄3年(1594)8月に不来方を退去するまで2世紀以上にわたり、この地の領主であった。

応永11年(1404)、南部大膳太夫より、福士左京太夫(親行)、福士治部小輔(秀行)の2名宛に、不来方(城)への粟・米等の備蓄と伝馬に係る庶務を命ぜられている(鶴飼氏系図所載文書)。「八戸福士氏系図」や菩提所の東顕寺による「不来方碑名」によれば、親行より二代前の福士五郎政長から不来方に居住したとされている。政長は隠居後慶善と号し、不来方城の慶善館に居住、明徳2年(1391)に死去している。

伝馬について、時代は下るが文禄年間の南部信直の文書に、北から沼宮内(岩手町)→下田→門前寺(玉山村)→子次方(盛岡市)の伝馬ルートが記されている。川東の丘陵裾付近を通じる幹線道路の存在が判明する。不来方には伝馬の宿駅が置かれていたと考えられ、これは先の応永11年の史料と合わせ、福士氏入部当初からの事とみて差し支えなからう。不来方は軍事上の要衝であると同時に、人馬による物流の拠点としても大きな意味をもっていた。

福士氏の本拠とした不来方は、南部氏の盛岡城下町建設以前は随所に大石が露出し、沼沢地や小丘陵などが入り組む複雑な地形であったという(『盛岡砂子』他)。加えて北上川、中津川、雫石川の合流点であり、不来方の地は軍事的要害であり、交通の要衝であっても、農業生産基盤としてはあまり良好な場所ではなかったかもしれない。地形的にはやはり中津川両岸の沖積地帯の浅岸、下米内地域、それから北山丘陵裾部の湿地帯に面した上田堤(高松の池)から、上田・名須川地域、中津川東南の志家地域が有力な生産基盤であったと見るべきであろう。この地域は城下建設以前の古道に近く、16世紀頃には、東方上米内に米内氏、下米内に佐々木氏、上田には上田氏が存在した。上田氏の居館の場所は不明であるが、米内氏の米内館、佐々木

氏の佐々木館は、堀に囲まれた主郭を中心に小郭が付属する単郭構造に近い縄張りであり、多郭構造の不来方城よりは小規模である。このことから上田、佐々木、米内の各氏は、各村落のみの領主であり、不来方の福士氏に従属していたことが推察できる。また、天正年間あたり、浅岸には福士系の浅岸源五郎、東方山中の元信には、同じく福士系の元信弥六が村落領主となっていた。浅岸氏は浅岸村や近隣平野部の農耕地の経営にあたったと思われるが、元信氏の拠る元信村は7 km東方、標高400m～500mの山間部で、農業生産力は低く、森林資源の管理や林業生産の向上にあたった可能性が高い。中津川が米内川と合流するあたり、春木場の地名があり、藩政時代も山間部から切り出された木材の集積・出荷がおこなわれていた。

佐々木館の麓にあった下米内の大豆門権現社の棟札には、「天正十一年 不来方淡路再興」と記されていたという(『岩手県金石志』)。不来方氏は福士氏の一族で、不来方城の慶善館(11)に福士氏、淡路館(12)に不来方氏が居住していた(『旧記』)。天正11年には下米内の村主が、佐々木氏から不来方氏に交代していたことの証左であろう。浅岸氏と元信氏の村入りとあわせ、天正期の福士氏勢力の伸張がうかがえる。

天正16年(1588)の斯波氏滅亡後には、岩手郡の不来方城のほか、志和郡乙部城も福士氏の持城であった(『南部大膳大夫分国之内諸城破却共書立之事』天正二十年六月二十七日付)。また天正18年(1590)8月12日、不来方の福士彦三郎直経は、南部信直宛の書状を携えてきた伊達政宗の使者に対し、不来方より返書を送っている。使者の用向きは「今度、南部御無事之為御使」で、豊臣政権において南部七郡の本領安堵が決定された旨を南部信直に伝えることであり、志和の築田氏(斯波氏の旧臣)の居館に逗留していた。このとき福士直経が、南部氏家臣団の中で外交の窓口となっている点が注目される。これより先、南部信直の志和郡侵攻の際、不来方・中野周辺において、福士直経は中野館(盛岡市茶畑)の中野康実とともに、斯波勢と交戦したほか、斯波氏家臣の内応工作など、南部信直の志和郡攻略に中野氏と共同で大きく貢献している。福士氏の志和郡乙部の加増と中野氏の志和郡片寄の加増はこのときの功績によるもので、旧斯波氏の高水寺城は南部氏の直轄城とし、北上川東岸地域に福士氏、西岸地域の中野氏による支配が実施されたと考えられる。中野康実の嫡子正康は慶長17年に志和郡代として郡山城に移るが、中野康実存命中は福士氏と中野氏による郡代二人制であった可能性もある。

近世への移行

南北朝期以後、福士氏が不来方を拠点に、岩手郡南部の河東地域で重きをなし、12世紀以来の浅岸、下米内地域の開発を継承し、村落や地域開発を発展させたことは、これまでの断片的な史料と、中世遺跡のありかたから充分推定が可能である。上村屋敷遺跡の小規模な城館についても、柿ノ木平遺跡に存在する中世末から近世初頭の屋敷についても、福士一族の浅岸氏との関連で考えるのが自然であろう。

その後福士氏は、不来方城が南部氏の盛岡築城用地となったため、文禄3年(1594)8月に鶉飼郷(滝沢村)に150石を給されて移転する。城地の召し上げのみならず、禄を大きく減らされている。福士氏菩提寺の東頭寺(盛岡市名須川町)の記録「不来方碑名」の鶉飼(福士)宮内秀純の条には、「慶長七壬寅 有故障身帯御取上」と記されている。九戸一族姉帯氏との姻戚関係などが災いし、盛岡南部家からしだいに疎まれたとも伝えられている。また、文禄3年4月には中野康実が、居城の片寄城において、九戸隠岐(浪人)に殺傷される事件があった。鶉飼転出の4ヶ月前のことであり、この事件も九戸氏との関連から福士氏の処遇に何らかの影響を与えているのかもしれない。いずれにしても、文禄年間に生じた盛岡南部氏と福士氏との間の激しい確執により、福士氏一族は急速に衰亡し、過酷な運命をたどることになったと考えられる。南北朝期以後、南部氏膝下の領主として不来方を守り、三戸南部氏の志和郡侵攻から盛岡藩成立の直前かけ

て大きく尽力したにもかかわらず、福士氏の労苦は全く報われる事はなかった。寛文4年(1664)八戸藩分封の際には、八戸に移転となり、これ以後八戸藩主の南部直房に仕えている。

一方、浅岸氏のその後の消息について、史料の上では明らかでない。ただ、柿ノ木平遺跡、上村屋敷遺跡の屋敷遺構は16世紀末以後も間断なく存続しており、あるいはこの地で土着、帰農したことも考えられる。上村屋敷遺跡の方形環壕屋敷は浅岸村肝入の屋敷と推定される。

おわりに

この地域の中世は文献史料が乏しく、その分、考古学的調査・研究成果に期待が寄せられる。浅岸地区については、今後も区画整理に伴う発掘調査の継続が予定されており、面的な発掘調査により、中世以後の内容も、次第に明らかになってくると予想される。今後の調査例の蓄積を待ち、改めて考察したい。

(室野 秀文)

主な引用参考文献

- | | |
|-----------|-----------------------------------|
| 盛岡市史編纂委員会 | 1951『盛岡市史(中世期)』盛岡市 |
| 岩手県史編纂委員会 | 1961『岩手県史第二巻～第三巻』岩手県 |
| 松峯山東顕寺 | 1970『東顕寺誌』松峯山東顕寺 |
| 岩手県教育委員会 | 1986『岩手県中世城館跡分布調査報告書』 |
| 盛岡市教育委員会 | 1988『盛岡市埋蔵文化財調査年報(昭和62年度)』 |
| 原田 秀文 | 1989「盛岡市米内の中世城館跡」『岩手考古学第1号』岩手考古学会 |
| 盛岡市教育委員会 | 1997『柿ノ木平遺跡第19次調査現地説明会資料』盛岡市教育委員会 |

報告書抄録

ふりがな	まえのいせき									
書名	前野遺跡									
副書名	浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書 I									
巻次										
シリーズ名										
シリーズ番号										
編著者名	神原雄一郎・八木光則・室野秀文・藤村茂克・菊池与志和・黒須靖之 他									
編集機関	盛岡市教育委員会									
所在地	〒020-8532 岩手県盛岡市津志田14地割37-2 TEL 019-651-4111 (内7353)									
発行年月日	1999年3月31日									
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〇'〇"	〇'〇"					
まえのいせき 前野遺跡	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 あきさしあざまえのちない 浅岸字前野地内	03201		39° 42' 37"	141° 11' 50"	平成7年度 19951114～ 19951221 平成8年度 19960408～ 19961221 平成9年度 19970407～ 19970929	10,560㎡	土地区画整 理事業		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
前野遺跡	集落遺跡	奈良時代 ～近世	縄文時代?							
			土坑 1							
			奈良時代							
			竪穴 1				土師器			
			土坑 1							
			遺物包含層							
平安時代										
奈良時代		竪穴住居跡 8		須恵器		北陸型甕出土				
～近世		竪穴 8		あかやき土器						
		溝跡群 2		土師器						
				鉄製品						
中・近世		掘立柱建物跡 14		かわらけ		12世紀と考えられ る、周溝を伴う建物 跡を検出。				
		柱列跡 3		陶器						
		竪穴 7		陶磁器						
		土坑 37		鉄製品						
		溝跡 10		古銭						
		井戸跡 2								
		ピット 306								

写真図版



浅岸遺跡群全景（昭和49年撮影）



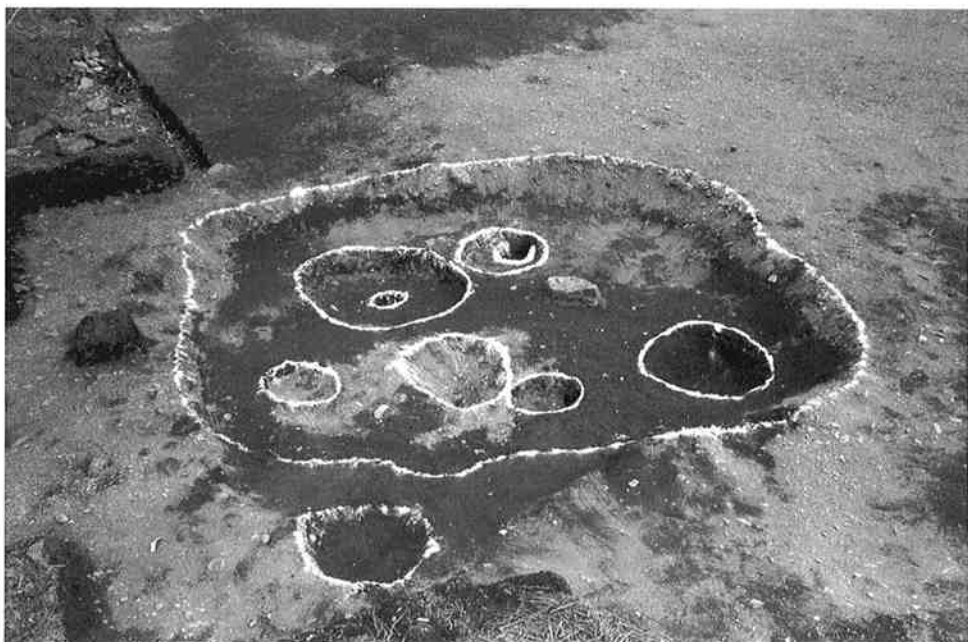
第1・2次
発掘調査区全景



第1・2次
発掘調査区
南西部全景



RE101
竪穴跡全景
(北から)



RE102
竪穴跡全景
(南から)



RE103
竪穴跡全景
(北から)



RE105
竪穴跡全景
(東から)



RA106
竪穴住居跡全景
(北西から)



RA106
竪穴跡住居跡
かまど全景



RA106
竪穴住居跡
かまど煙道全景



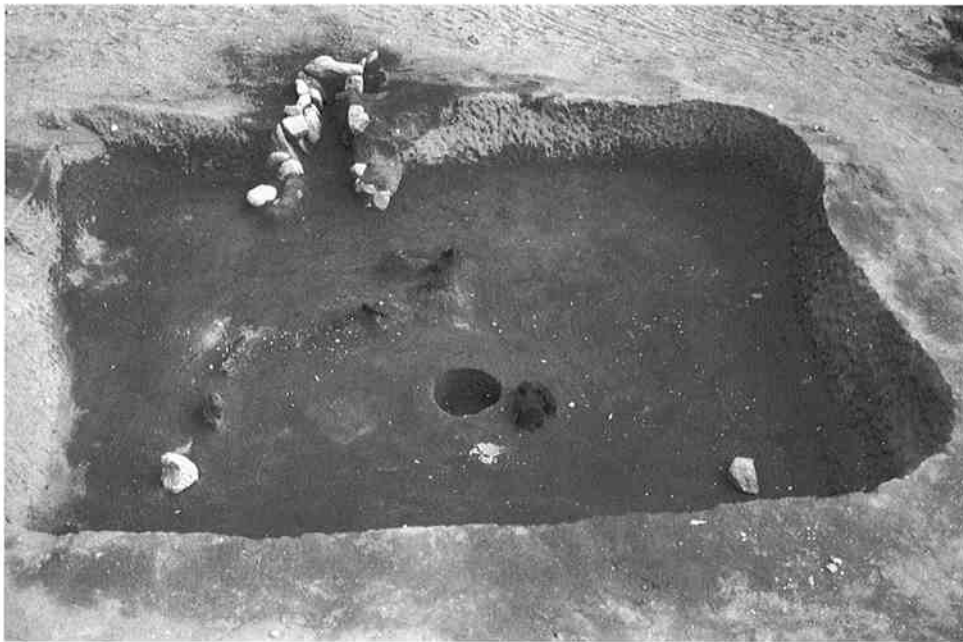
RA106
竪穴住居跡
かまど近景



RA106
竪穴住居跡
かまど煙道
遺物出土状況



RA106
竪穴住居跡
かまど上層断面



RA107
竪穴住居跡全景
(北から)



RA107
竪穴住居跡
かまど近景



RA107
竪穴住居跡
かまど検出状



RA108
竪穴住居跡全景
(北から)



RA108
竪穴住居跡
かまど近景



RA109
竪穴住居跡全景
(西から)



RA109
竪穴住居跡
土層断面



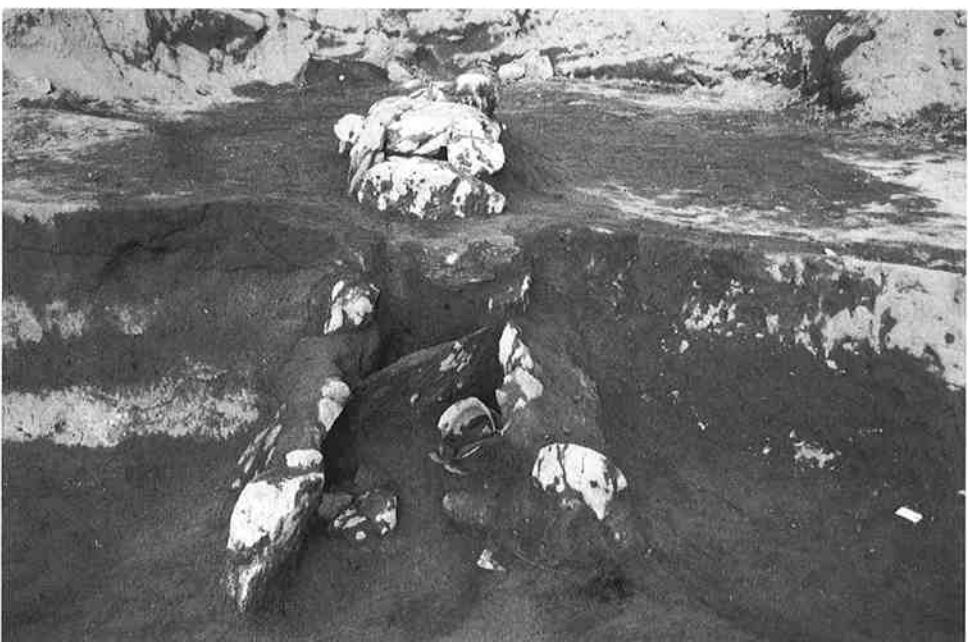
RA109
竪穴住居跡
かまど検出状況



RA109
竪穴住居跡
かまど側面



RA109
竪穴住居跡
かまど近景



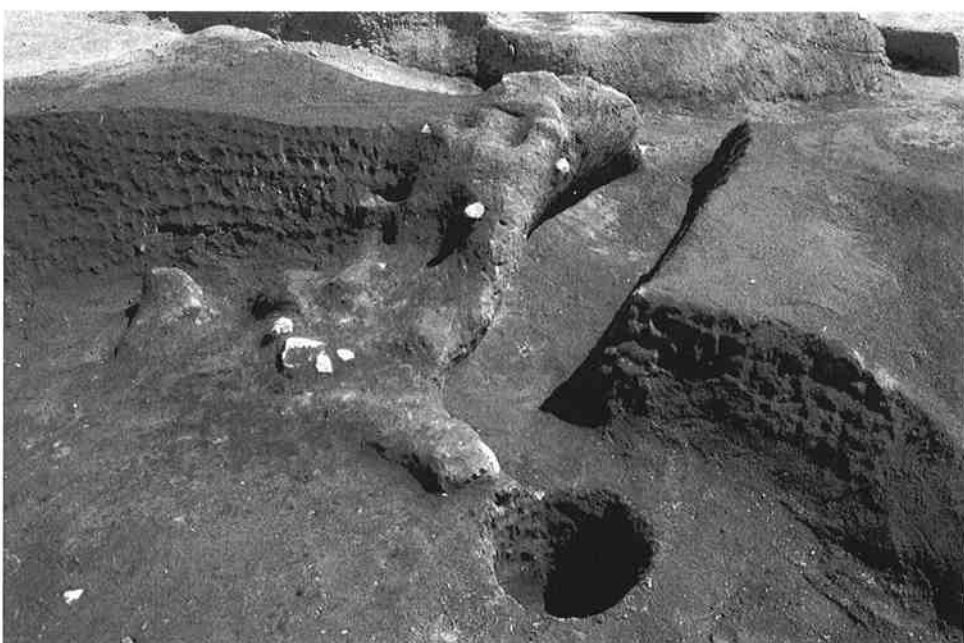
RA109
竪穴住居跡
かまど基底部
検出状況



RA110
竪穴跡全景
(南から)



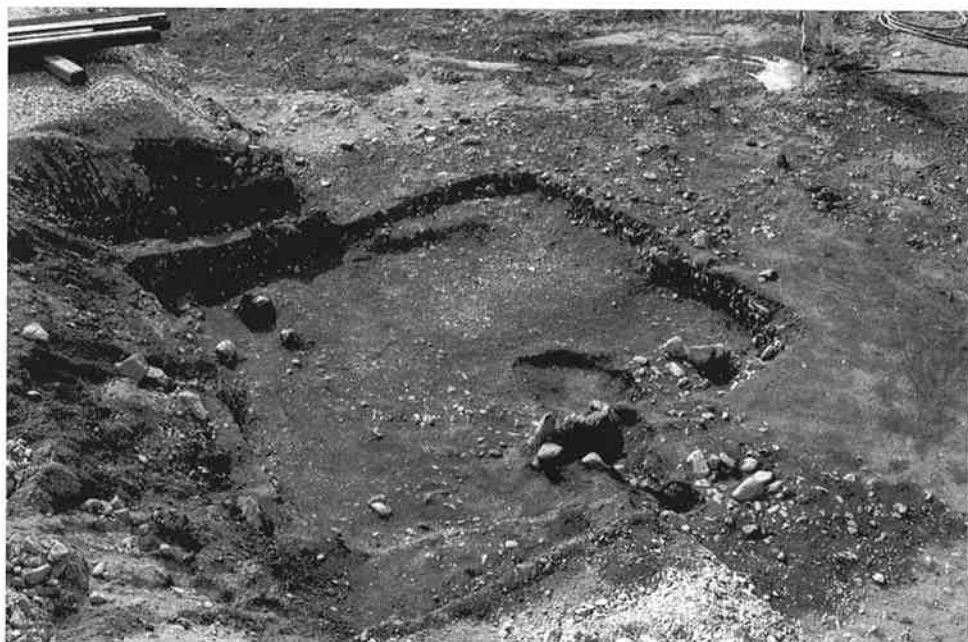
RA112
竪穴住居跡全景
(西から)



RA112
竪穴住居跡
かまど近景



RE113・114
竪穴跡全景
(北から)



RA115
竪穴住居跡全景
(東から)



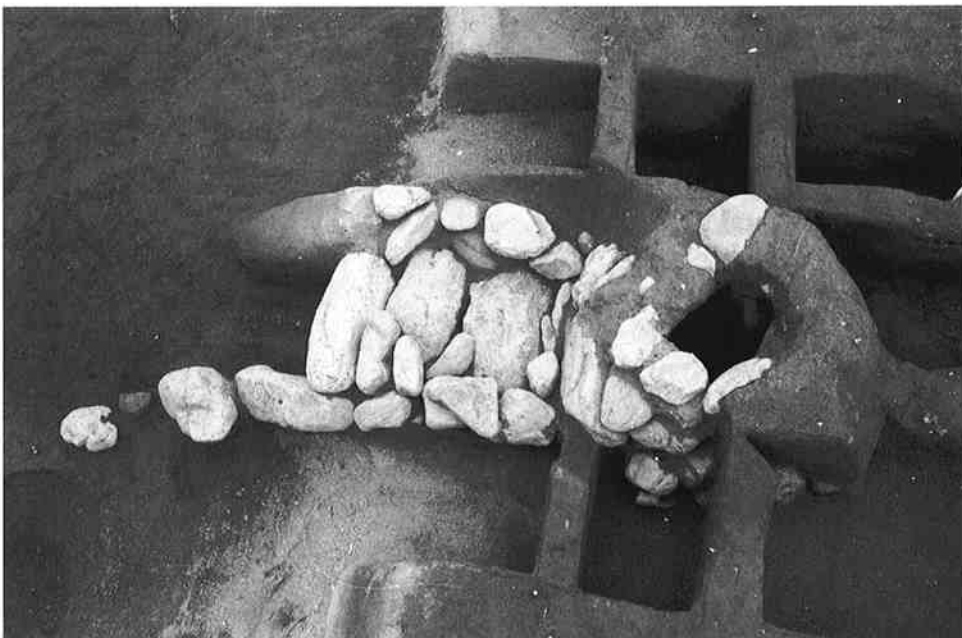
RA115
竪穴住居跡全景
(南から)



RA116
竪穴住居跡全景
(北から)



RA116
竪穴住居跡
かまど近景



RA116
竪穴住居跡
かまど断面



RA116
竪穴住居跡全景
かまど断面-2



RB501
掘立柱建物跡
周溝断面



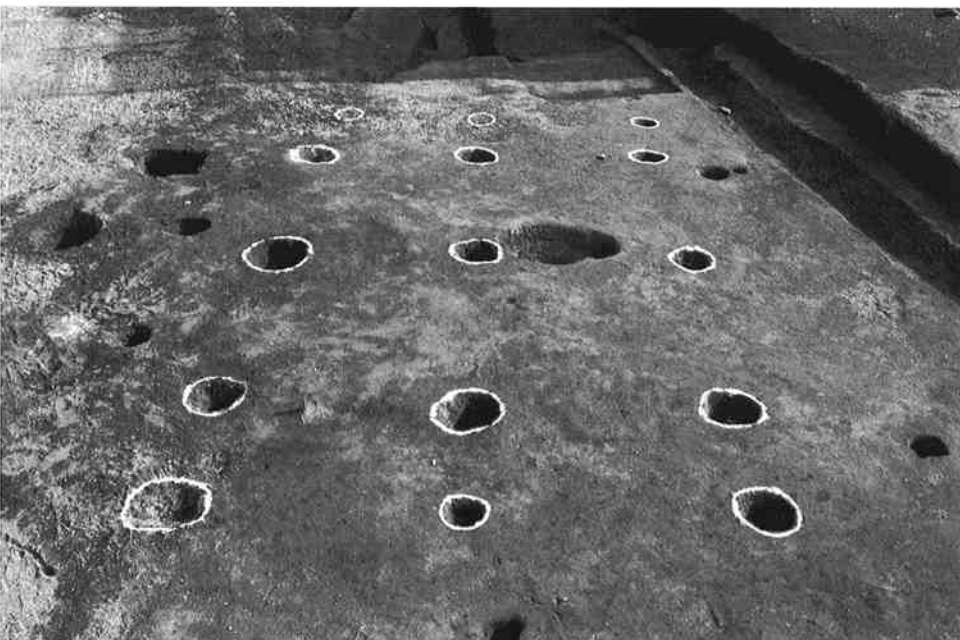
RB501
掘立柱建物跡全景
(西から)



RB501
掘立柱建物跡全景
(南から)



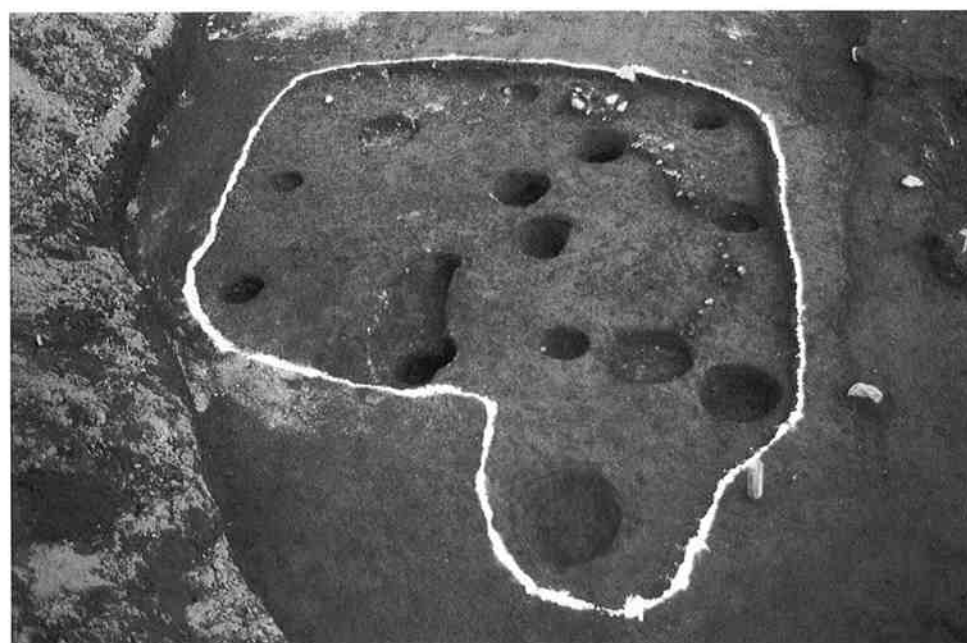
RB502
掘立柱建物跡全景
(北から)



RB503
掘立柱建物跡全景
(北から)



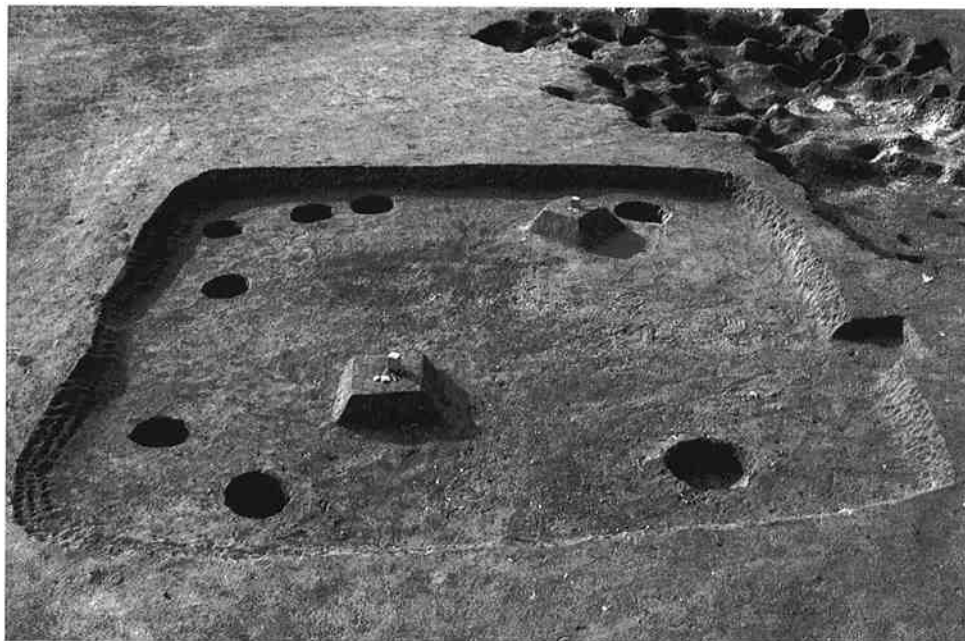
RB504
掘立柱建物跡全景
(西から)



RB501
掘立柱建物跡全景
(西から)



RB502
掘立柱建物跡全景
(南西から)



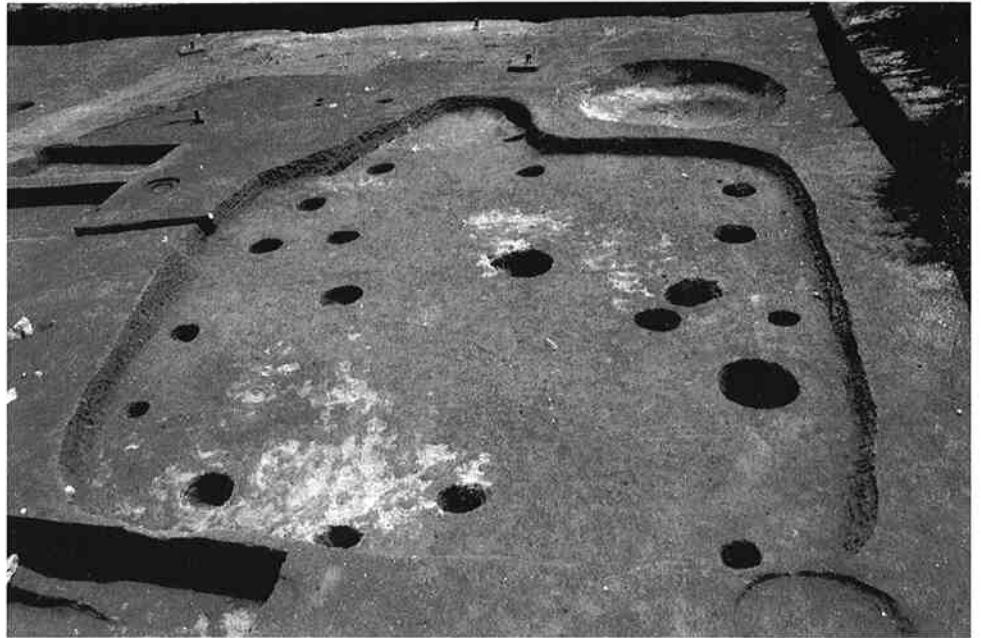
RB503
掘立柱建物跡全景
(南西から)



RB504
竪穴跡全景
(東から)



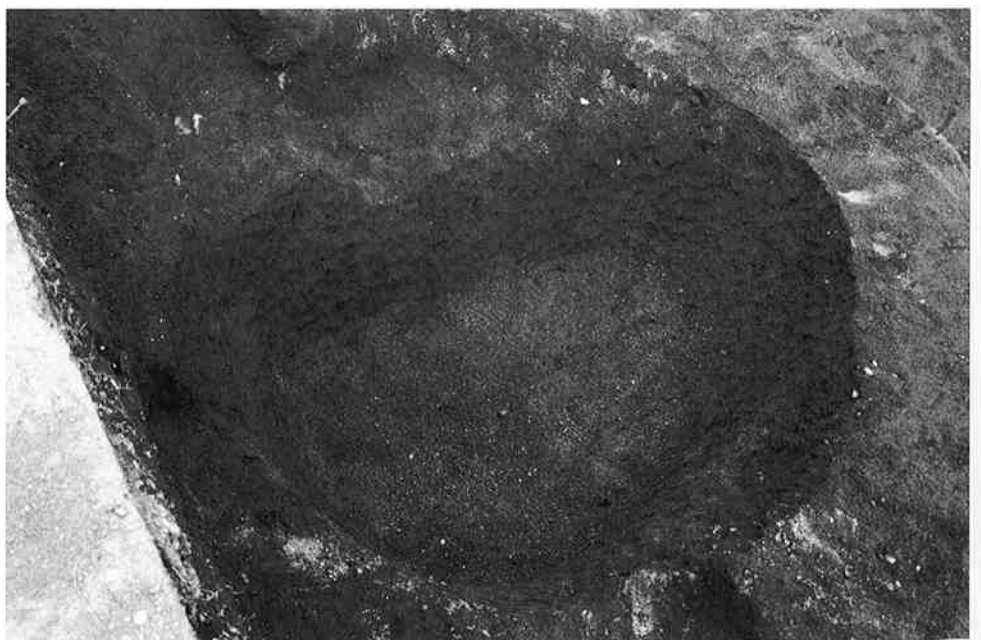
RB506
竪穴跡全景
(北から)



RE507
竪穴跡全景
(北西から)



RE508
竪穴跡全景
(北から)



RE504
土坑全景
(南から)



RD509
土坑全景
(西から)



RD516
土坑全景



RG504・505
溝跡全景
(北から)



RG506
溝跡全景
(北から)



RG506
溝跡南端
河道跡



調査区中央部
ピット群



RA106
竪穴住居跡
出土遺物



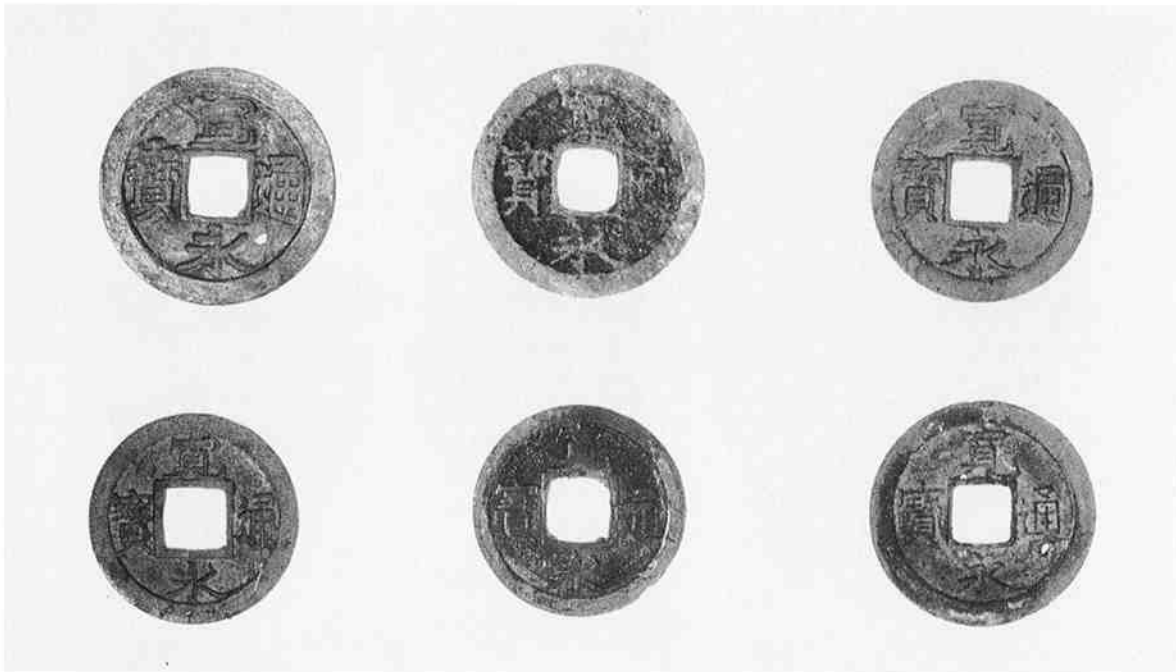
RA108
竪穴住居跡
出土遺物



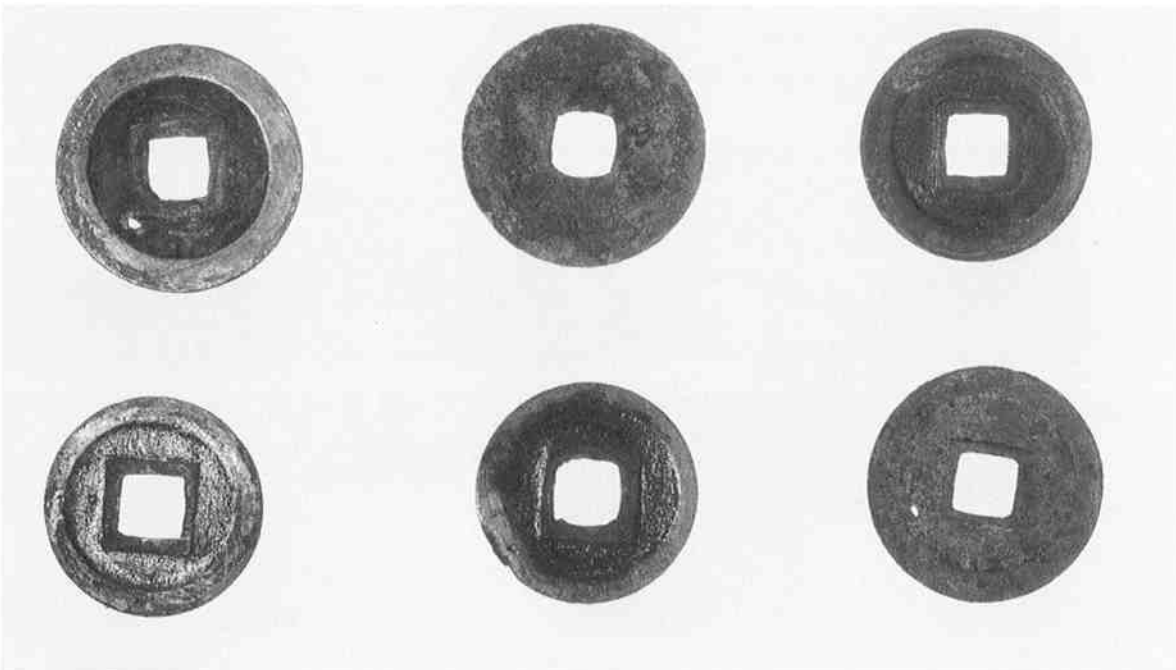
RA109
竪穴住居跡
出土遺物



RA115
竪穴住居跡
出土遺物



RD516
土坑
出土遺物（表面）



RD516
土坑
出土遺物（表面）



第3次発掘調査区
西部全景（南から）



第3次発掘調査区
北部全景（東から）



第3次発掘調査区
全景（南西から）



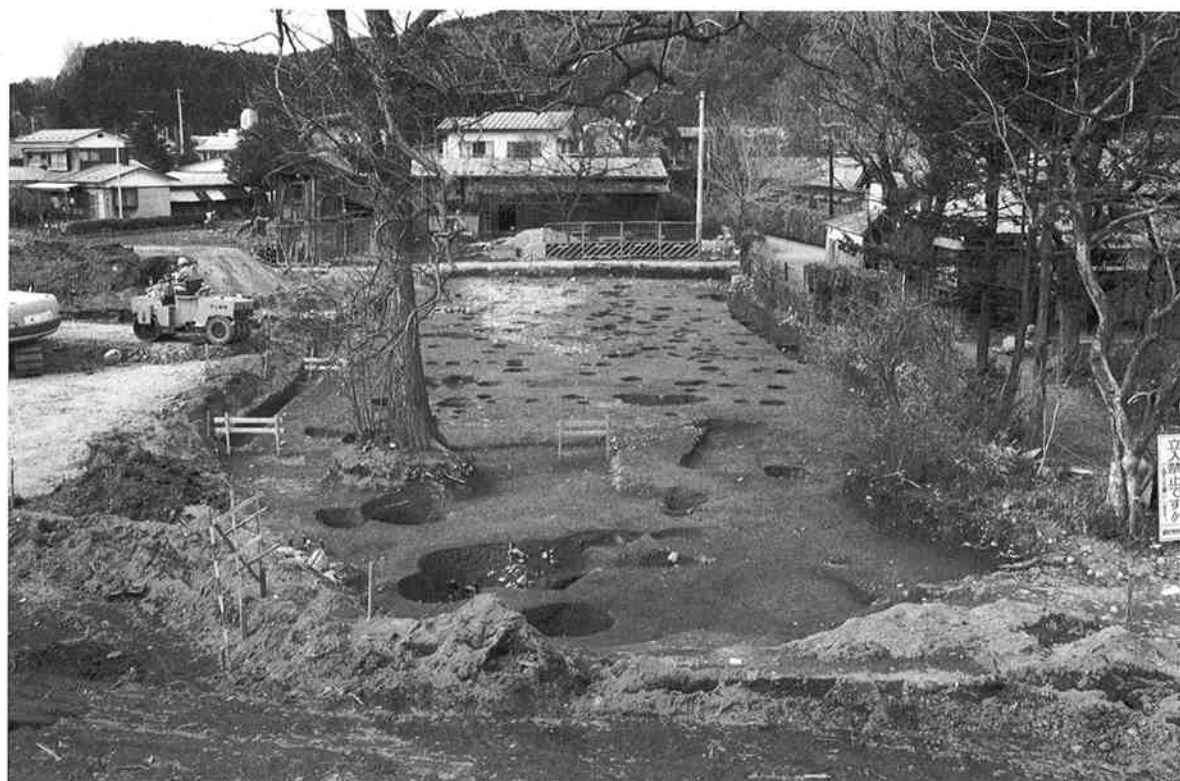
第3次発掘調査区
北西部全景



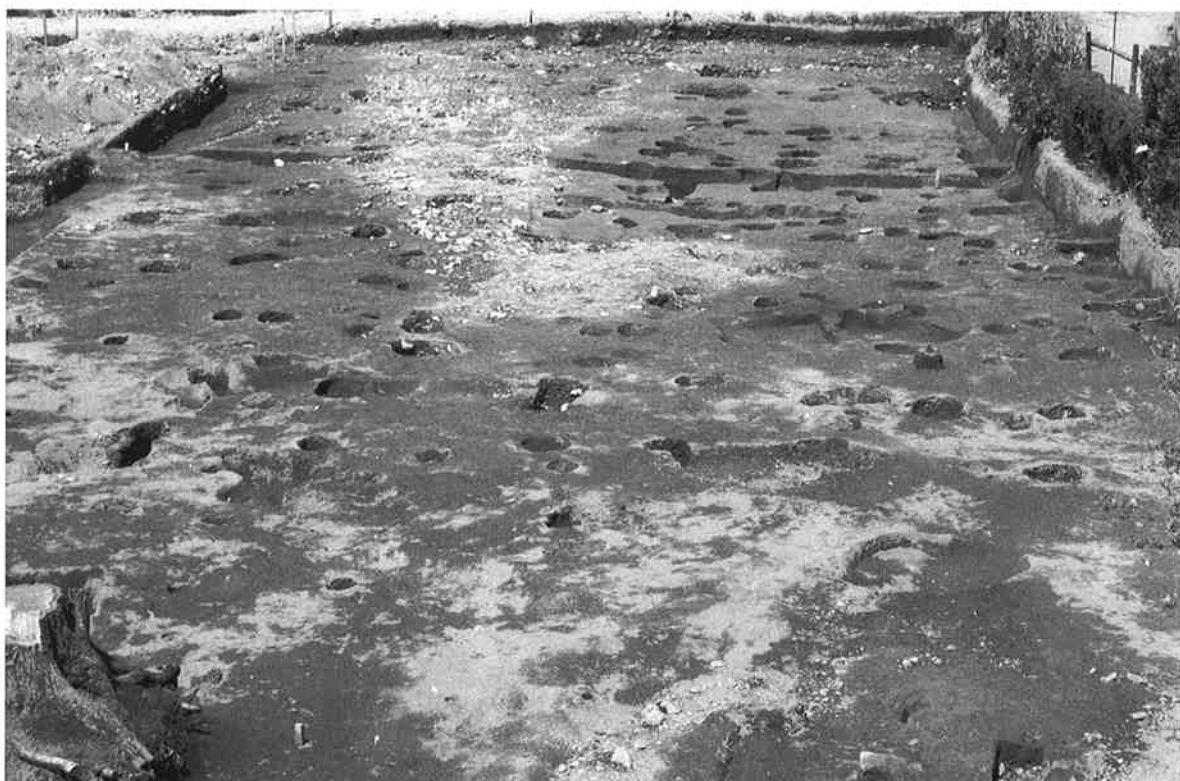
第4次発掘調査区
全景（北から）



第4次発掘調査区
全景2



第6次発掘調査区
全景1



第6次発掘調査区
全景(南から)



第6次発掘調査区
東部（南から）



第6次発掘調査区
東部（東から）



RG509
溝跡全景



RG509
溝跡全景（西から）



R1501
井戸跡全景



R1502
井戸跡全景

前野遺跡

— 浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ —

1999年3月31日 発行

編集 盛岡市教育委員会
〒020-0835 盛岡市津志田14地割37番2
TEL 019-651-4111 内線7353 文化課

発行 盛岡市都市整備部 区画整理課
〒020-8531 盛岡市若園町2-18
TEL 019-651-4111

印刷 河北印刷株式会社
〒020-0015 盛岡市本町通2-8-7
TEL 019-623-4256
